

令和3年度

研究紀要

研究主題

創造性に富んだ、未来を切り拓く生徒の育成
～「主体的な学び」のプロセスモデル実現を目指して～



令和4年3月

山梨大学教育学部附属中学校

はじめに

山梨大学教育学部附属中学校

校長 志村 結美

附属中学校の研究につきまして、先生方には日頃よりご指導とご鞭撻を賜りまして誠にありがとうございます。また、本年11月27日に開催されました「中等教育研究会」においては、コロナ禍におけるオンライン開催ということでしたが、多くの皆さまにご参加いただき、熱心な議論が繰り広げられ、各教科の研究授業に対し様々なご意見や励ましをいただきました。本当にありがとうございました。また、ご来賓の先生方、研究協力員並びに共同研究者の先生方には事前研究会から我が校の研究を温かい目で支えて頂きました。公開研究会を開催するにあたり、このように多くの方々に我々の研究は支えられているのだと実感しております。改めて感謝申し上げます。

さて、ここに本年度の「研究紀要」が完成の運びとなりました。是非、ご高覧頂き、忌憚のないご意見や、次年度以降の研究へのご示唆を頂戴できましたら嬉しく存じます。

昨年度より、私たちは『創造性に富んだ、未来を切り拓く生徒の育成』というテーマのもとに2年計画の研究をスタートさせ、今年度は2年目にあたり、終了年度となります。コロナ禍ということもあり、昨年度は研究紀要をまとめておりませんので、本研究紀要で2年間の研究のまとめを報告させていただきます。

本研究で考える「未来を切り拓く」とは、よりよい人生やより豊かで公正な社会を自分たちの手で創るということです。そして、「未来を切り拓く」ためには、主体的に課題を見出し、その解決に取り組む必要があります。また、本校では、以前より「附属四校園の教育活動を貫く育成を目指す『子ども像』」やスクールプランの実現を目指して、「創造性」の育成に取り組んできました。「創造性」とは、「自ら課題を見出し、その解決に向かって、これまでに学んだことや新たな知、技術革新を結び付けて、新たな価値を創造するための資質・能力」であり、「未来を切り拓く」ために必要な資質・能力と一致するものと考えられます。

そこで目指す生徒の具体的な姿として、本校の教育目標に照らし合わせながら、「自ら課題を見出し、その解決に主体的に取り組もうとする態度」を育成することを目指すこととし、「主体的な学び」をいかにデザインするかについて研究することとしました。本校の考える「主体的な学び」とは、エンゲージメントが高められた姿であり、すなわち、「生徒が粘り強く学習に取り組み、自己調整しながら学ぶ姿」と捉えております。

そこで、チャールズ・M・ライゲルースによる「自己調整学習のための連続変化フレームワーク」を参考に「主体的な学び」のプロセスモデルを考案し、各教科の特性をふまえて実践し、今年は、主体的な学びの評価にも取り組んでいます。

今後は、さらに討議と実践を積み重ね、新たな計画の初年次を迎える来年度に向かって教職員全員で一致協力して研究を進めていく所存です。今後とも、本校の研究のためにご指導とご鞭撻を賜りますよう心よりお願い申し上げます。

目 次

はじめに

全体研究総論

1. 研究主題の設定理由	1
2. 研究主題について	5
3. 研究の内容	6
4. 1年次の研究	9
5. 2年次の研究	12
6. おわりに	16
7. 参考文献	17
（資料1）2年間の研究経過と授業実践	18
（資料2）研究組織	21
（資料3）指導助言者・共同研究者・研究協力員一覧	22

各論 教科の研究

1. 国語科	23
2. 社会科	37
3. 数学科	56
4. 理科	68
5. 音楽科	79
6. 美術科	91
7. 保健体育科	99
8. 技術・家庭科	110
9. 英語科	138

あとがき

令和3年度 研究同人

全体研究総論

1. 研究主題の設定理由
2. 研究主題について
3. 研究の内容
4. 1年次の研究
5. 2年次の研究
6. おわりに
7. 参考文献

(資料1) 2年間の研究経過と授業実践

(資料2) 研究組織

(資料3) 指導助言者・共同研究者・研究協力員一覧

創造性に富んだ、未来を切り拓く生徒の育成（2年次／2年計画）

～「主体的な学び」のプロセスモデル実現を目指して～

研究主任 進藤 秀俊

1. 研究主題の設定理由

（1）生徒たちが生きる未来

創設75周年を迎えた国際連合では、気候変動や地域紛争、人権侵害などの深刻な状況を克服し、持続可能な社会を実現することをめざして、共通目標として「SDGs」を掲げ、各国政府や市民団体が活動を展開している。

AI技術の飛躍的進歩を背景とした第4次産業革命の影響も非常に大きい。産業や労働、生活の在り方が一変する可能性があり、これまでの「当たり前」が「当たり前」ではなくなってきている。

日本では超少子高齢化が進み、経済や社会保障制度、地域社会の在り方が問われている。また、アジア諸国をはじめとした新興国の台頭を受け、日本の国際的地位は変化しつつある。日本企業の国際的地位は相対的に低下し、産業構造も変化している。新型コロナウイルスの感染拡大を受け、新しいビジネスモデルが展開され、企業の国際的競争は激しさを増している。また、人口減少を見据え、外国人労働者の受け入れについても方向転換がなされ、外国にルーツをもつ人々の日本の総人口に占める割合が高くなってきている。今後、多様な文化的背景をもった人々が共生する社会を目指さなければならない。地域の維持や活性化も喫緊の課題であり、新しい社会、とくに次世代の地域社会の担い手を育むことが求められている。そうした大きな変化の中で、日本政府は、「Society5.0」という未来社会像を提唱している。それは、「サイバー空間とフィジカル空間を高度に融合させたシステムにより実現」（内閣府）する社会で、経済発展や社会的課題の解決につながると考えられている。

つまり、生徒たちが生きる未来とは、「予測困難で、大きく変化する社会」であり、「これまで以上に困難な課題に直面する時代」であるといえる。その未来において、より公正で豊かな社会をつくりつつ、一人ひとりが自己実現を果たして幸福な人生を送るためには、これまでの価値観を尊重しつつ、技術革新や新たな知の創出の恩恵を生かしながら、直面する課題の解決に向かい、新たな価値を創造することが求められると考える。

（2）スクールプラン

山梨大学教育学部附属四校園（幼稚園・小学校・中学校・特別支援学校）では、大学とも連携しながら、一貫して育成を目指す資質・能力を右の通り、子ども

附属四校園の教育活動を貫く育成を目指す「子ども像」
個人の尊厳を重んじ、多様な文化や価値観を受け入れ、自ら課題を見いだし、解決に努力する積極性・先見性・創造性に富んだ子ども

もの姿として示した。本校においても、スクールプランを掲げ、その資質・能力の育成を目指して教育活動に取り組んでいる。昨今の、新型コロナウイルス感染症拡大の影響による社会の有り様の大きな変化に見られるように、これからの社会は予測困難であり、そこで生き抜く子どもたちには、多様性を重んじつつ、他者と協同して社会の諸問題の解決に当たったり、よりよい社会を築くために創意工夫したりすることが求められる。

ここ数年は、スクールプランの実現を目指して、四校園のつながりを意識した、総合的な学習の時間（本校ではSELFと呼ぶ）における「探究的な学習のモデル」について研究を進めてきた。（図1参照）



図1 「きりのは」の探究サイクル

とくに、「自ら課題を見いだす」活動やその課題の「解決に努力する」活動の工夫、探究に必要な資質・能力の育成について実践を積み重ねてきた。その成果として、探究的な学習を積み重ねる中で、「課題設定能力」や「情報収集・分析能力」などの課題を解決するために必要な資質・能力は育まれてきている。一方で、それは教師が与えた課題について、教師の指導の下で実現されていることであり、生徒が「積極性」をもって取り組んでいるか、課題に対する自分なりの結論を導き出すという意味での「創造性」を発揮させられているかという点で課題が残る。

(3) これまでの研究の経過

- 【平成23年度～平成25年度】「自ら問う力を育む授業の創造～思考力・判断力・表現力等の育成を目指して～」
- 「知的に自立する」、すなわち生徒が自ら問いを発し、解決に向かおうとする生徒の育成を目指した。
 - 「生徒にもたせたい問い」、「生徒に問いをもたせるための教材」や「教師の役割」の在り方、「問いの見取り」などについて研究を行った。
 - 「指示待ち」の状態から脱却し、自ら課題意識をもって学び続けようとする、学びへの主体性を養うことができた。

【平成26年度～平成28年度】『深く考える』授業の創造

- 課題に対する「自分なりの結論」を吟味し、それを改善・発展させながら、学び続ける生徒の育成を目指した。
- 「視点を変える」ための資料提示や他者との交流、振り返りの工夫などについて研究を行った。
- 授業では、さまざまな要素が相互に関係し合っていること、それらを意識して授業をデザインすることの必要性を再認識することができた。

【平成 29 年度～令和元年度】「新たな世界を主体的に創造する生徒の育成」

- ・昨年度までの 3 年間の研究の中で、学習指導要領（平成 29 年告示）で示される 3 つの資質・能力のうち、「知識及び技能」及び「思考力、判断力、表現力等」を育むための手立てや評価の工夫について明らかになったことが多かった。一方で、「学びに向かう力、人間性等」を育成するための「主体的な学び」の実現と評価については課題が残った。

○1 年次『見方・考え方』を働かせた学びを通して」

- ・本校では、「見方・考え方」を働かせた学びとは、「各教科等の特質に応じた『見方・考え方』にそって、生徒が持つ、スキーマ（経験則）や認識の枠組みをより良いものに修正したり、鍛えたりして、豊かで確かなものとし、その深い認識をもとに資質・能力を育むこと」であると考えた。
- ・「見方・考え方」を働かせた学びを実現するためには、生徒の学習過程に以下の 4 つの要素を位置づける必要があることが明らかになった。
 - ①教材・題材との出会い（生徒が、これまでの自分のスキーマとのずれに疑問をもつ。）
 - ②学習課題の設定（生徒の疑問と教材価値をすり合わせ、学習課題を設定する。）
 - ③学習課題の解決（既有知識や自他の考えを活用しながら、学習課題を解決する。）
 - ④自己の変容への気づき（自分の「学び」に価値を見出し、「学び方」を自覚する。）

○2 年次「資質・能力を見取る評価の在り方」

- ・「見方・考え方を働かせた学び」を充実させ、指導と評価の一体化をめざすべく、特に各教科で「生徒の学習調整を促す形成的評価の工夫」「資質・能力を可視化する工夫」を中心に実践を積み重ねた。
- ・「生徒の学習調整を促す形成的評価の工夫」に関しては、学習における思考の過程を記述させることで、生徒に自らの学びの有り様や到達度を自覚させることができた。また、目標の達成に必要な視点や考え方の広がりや深まり、学習活動などについて、教師のフィードバックを受けながら、自らの学習を調整する姿が見られた。こうした学習過程をとおして、自己のメタ認知能力を高められることが明らかになった。
- ・「資質・能力を可視化する工夫」に関しては、身に付けさせたい資質・能力を具現化した、言語活動やパフォーマンス課題を設定することの有用性が明らかになった。課題を設定する上でポイントとなるのが、学習のまとめ（単元）や毎回の授業を構造化することである。具体的には、指導者が最終的に目指す生徒の姿の具体をイメージし、課題設定のための教材研究や生徒の実態把握を踏まえて、学びのつながりをつくることである。

○3 年次「教科等横断的な教育課程の実現に向けて」

- ・教科研究を深化させ、生徒の「学びの質」を高め、各教科で育成をめざす資質・能力が身に付くよう、指導と評価の在り方についての研究を深めた。
- ・各教科で身に付けた資質・能力を、実社会で生かすことのできる、より汎用性の高い資質・能力へと高めるために、教科等横断的な視点に立つことの必要性があると考えた。そこで、「総合的な学習の時間」で育む資質・能力を軸に、各教科で育む資質・能力との関連性を明らかにし、教科等横断的な教育課程の編成に取り組んだ。

（4）教育に関わる国の動向

①Society5.0 を牽引する人材について

文部科学省は、「技術革新と社会課題をつなげ、プラットフォームを創造する人材」「技術革新や価値創造の源となる飛躍知を発見・創造する人材」及び「様々な分野において AI やデータの力を最大限活用し展開できる人材」であるとしている。プラットフォームとは、あるものを動かす土台となる環境のことで、ここでは社会課題を解決する新たな価値創造を実現する環境やシステムのことを指す。

②学習指導要領（平成 29 年告示）

総則には次のように述べられている。（文部科学省、2017）

「中央教育審議会答申においては、予測困難な社会の変化に主体的に関わり、感性を豊かに働かせながら、どのような未来を創っていくのか、どのように社会や人生をよりよいものにしていくのかという目的を自ら考え、自らの可能性を発揮し、よりよい社会と幸福な人生の創り手となる力を身に付けられるようにすることが重要であること、こうした力は全く新しい力ということではなく学校教育が長年その育成を目指してきた『生きる力』であることを改めて捉え直し、学校教育がしっかりとその強みを発揮できるようにしていくことが必要とされた。」

これからの社会や人生という「未来」を生徒自身が創るための資質・能力を育成することが求められている。その資質・能力の3つの柱は、「生きて働く『知識・技能』」、「未知の状況にも対応できる『思考力・判断力・表現力等』」、「学びを人生や社会に生かそうとする『学びに向かう力・人間性等』」である。これらの資質・能力を育成するためには「主体的・対話的で深い学び」を実現することが必要である。この学びを実現するため、「学習過程を質的に高める」（田村、2018、17）ことが求められる。「主体的・対話的で深い学び」は、そのための授業改善の視点でもある。新学習指導要領総則には次のように述べられている。（文部科学省、2017）

- ア. 学ぶことに興味や関心を持ち、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、見通しをもって粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげる「主体的な学び」が実現できているかという視点。
- イ. 子供同士の協働、教職員や地域の人との対話、先哲の考え方を手掛かりに考えること等を通じ、自己の考えを広げ深める「対話的な学び」が実現できているかという視点。
- ウ. 習得・活用・探究という学びの過程の中で、各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう「深い学び」が実現できているかという視点。

また、「主体的・対話的で深い学び」については、1 単位時間の授業の中だけで実現できるものではなく、単元や題材などの学習のまとまりを見通し、その中に位置づけることが大切であると指摘されている。

（5）生徒の実態

教師や仲間との良好な関係を基礎として、意欲的に学習に取り組む生徒が多い。難しい課題に挑戦したり、粘り強く学習に取り組んだりすることに価値を感じる生徒も多い。また、これまでの授業実践の成果として、与えられた話し合い活動や課題に取り組む中で、自らの考えを深めたり、広げたりしようとする姿や学習成果を生かして学びを深めようとする姿が見られるようになってきた。

一方で、将来の夢や就きたい職業があいまいだったり、日常生活において他者に目を向けようとする意識が弱かったりする様子も見られる。このことは、中学校での学びと実社会での自らの生き方が結びつきにくいことや、自らの学びを生かして、他者や社会全体に貢献しようとする意識の低さ、他者や環境に対する関心の低さからもうかがえる。また、本校の学力学習状況調査等の結果によると、自分から学習に取り組もうとしている生徒の割合はおよそ半分で、主体的に学びに向かう姿勢に課題があるといえる。話し合い活動についても、自分たちから話し合いを始め、物事を解決しようとする姿勢はあまり見られず、教師による場面設定に頼っている現状がある。物事を判断するとき、他者の意見を基準とする生徒も多く、自分なりの視点をもって自らの学習を振り返り、その後の学びに生かすことに課題が残る。

令和2年度末には、本校全体研究の共同研究者である、山梨大学の田中健史朗准教授(カウンセリング心理学)の協力を得て、「生徒の学びの調査」を行った。この調査は、田中准教授に作成・分析を行っていただいたもので、44項目からなるアンケート調査である。これは、生徒の学びを次の3つの観点から調査するものである。

- ア. 学習におけるメタ認知活動（現在の学習状況を考慮し、後の学習の進行を調整する方略）
- イ. 学習に対する動機づけ（文部科学省の掲げる主体的な学びにおける「学ぶことに興味をもつ」、「自己のキャリア形成の方向性と関連づける」と関連する概念）
- ウ. スクールエンゲージメント（学校生活における様々な活動への主体的で積極的な関与や心理状態）

調査結果から、本校生徒の学びの動機づけについては、とくに自律的動機づけが高い水準にあると考えられる。一方で、内発的動機づけについては伸びしろがある。また、学習活動については見通しをもって取り組んだり、見直しをしながら取り組んだりすることができていない場面があると考えられる。さらに、学習活動を他の単元や他教科での学びにつなげようとする側面が弱く、学習内容と実社会とのつながりに対する意識にも改善の余地がある。

2. 研究主題について

(1) 未来を切り拓く生徒

本研究において育成を目指す生徒像は、「創造性に富んだ、未来を切り拓く生徒」である。「未来を切り拓く」とは、よりよい人生やより豊かで公正な社会を自分たちの手で創るということである。上に述べたように、生徒たちが生きる「未来」は、「予測困難で、大きく変化する社会」であり、「これまで以上に困難な課題に直面する時代」である。その中で、「未来を切り拓く」ためには、主体的に課題を見出し、その解決に取り組む必要がある。また、そうした課題は一人で解決することは難しく、他者と積極的に関わり、学び合いながら、協同して取り組まなければならない。さらに Iot やビッグデータの活用、AI 技術などに基づく第4次産業革命の進展（内閣府、2017）により、情報としての知識や技能を「自分の考えとして整理し意味付けたり、それを自覚したり共有したりすること」（田村、2018、24）が大切になってきている。

本校では、「附属四校園の教育活動を貫く育成を目指す『子ども像』」やスクールプランの実現を目指して、「創造性」の育成に取り組んできた。私たちの考える「創造性」とは、「自ら課題を見出し、その解決に向かって、これまでに学んだことや新たな知、技術革新を結び付けて、新たな価値を創造するための資質・能力」である。ここでいう「価値」とは、各自が見出した課題を解決すること、またこれまでの学びに新たな価値を見出すことである。

「創造性」は、上に述べたような、「未来を切り拓く」ために必要な資質・能力と一致するものである。また、「創造性」は学習指導要領（平成29年告示）において、「現代的な諸課題に対応して求められる資質・能力」として例示された「新たな価値を生み出す豊かな創造性」に関わるものである。

「創造性」を資質・能力の3つの柱に沿って整理すると、次のようになる。（表1）

表1 「創造性」の整理

知識及び技能	課題の解決に必要な知識・技能
思考力、判断力、表現力等	課題の解決に向かって考え、意味や価値を創造する力
学びに向かう力、人間性等	自ら課題を見出し、その解決に主体的に取り組もうとする態度。

このうち、「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」については、生徒の実態から、これまでの研究を通じて育まれてきたと考えられる。一方で、「自ら課題を見出し、その解決に主体的に取り組もうとする態度」については、生徒の実態からは育成が不十分であるといえる。

そこで本研究では、「自ら課題を見出し、その解決に主体的に取り組もうとする態度」を育成することを目指すこととした。この態度は、学校の学びでは「主体的に学習に取り組む態度」として現れる。そのため、授業においては、「主体的な学び」をいかにデザインするかを研究したい。

3. 研究の内容

(1) 主体的な学び

本校の考える「主体的な学び」とは、エンゲージメントが高められた姿である。すなわち、「生徒が粘り強く学習に取り組み、自己調整しながら学ぶ姿」である。

「主体的な学び」について、本校では田中准教授に助言をいただきながら、エンゲージメントに着目して、「主体的な学び」を捉え、その実現を目指して工夫を行うこととした。エンゲージメントに着目することで、「生徒の学び」の到達地点だけでなく、生徒の内面で繰り広げられている「学び」そのものの様子を把握できるので、単元や授業のデザインが行いやすくなる。

エンゲージメントには3つの側面があり、それらは密接に関わり合っている。

- | |
|--|
| <ul style="list-style-type: none">① 認知的エンゲージメント＝生徒の頭脳の中で繰り広げられる、学びの質を高めようとする働き、自律性。② 行動的エンゲージメント＝見える形で現れる、没頭する姿で、量的に測れるもの。③ 感情的エンゲージメント＝生徒の内面に見られる、学びに関するポジティブな感情。 |
|--|

文部科学省が、「主体的に学習に取り組む態度」の評価の尺度として示している「粘り強い取組を行おうとする側面」と「自らの学習を調整しようとする側面」は、エンゲージメントの3つの側面すべてで見られる。例えば、認知的エンゲージメントに見られる粘り強さとは、自らの学習方略を修正しながら学習課題に取り組むことであり、行動的エンゲージメントに見られる粘り強さとは、学習課題を解決するために繰り返し演習を行う姿であり、感情的エンゲージメントに見られる粘り強さとは、なかなか解決できない学習課題に挑戦し続けようとする感情であると考えられる。

(2) 本校の考える「主体的な学び」と資質・能力の3つの柱

本校の考える「主体的な学び」とは、学習指導要領（平成29年告示）で示された資質・能力の3つの柱のうち、「学びに向かう力、人間性等」を育成するために実現されるべき学びのあり方である。学習指導要領で示されている通り、資質・能力の3つの柱は相互に深く関わっており、「知識及び技能」の習得・活用を通じて、「思考力、判断力、表現力等」を育む学びを実現する資質・能力こそ、「学びに向かう力、人間性等」であるといえる。つまり、本校の考える「主体的な学び」とは、各教科で目標とする「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」の資質・能力を育成するプロセスになると考える。

(3) 本校の考える「主体的な学び」と「主体的・対話的で深い学び」

本校の考える「主体的な学び」とは、これまでの研究の延長線上にあり、平成29年度から平成31年度までの研究で明らかになった「教材や他者、自分自身との出会い・対話の工夫」によって生徒の学びは深まることを踏まえたものである。また、本校の考える「主体的な学び」を実現の目的の一つは、生徒自身が「自ら学びを深められるようにすること」にある。つまり、本校の考える「主体的な学び」とは、「主体的」であるだけでなく、「対話的で深い学び」でもあると考える。

(4) 主体的な学びを実現するための手立て

本校では、生徒のエンゲージメントを高め、「主体的な学び」を実現するために、「主体的な学び」のプロセスモデルを考案した。(図2参照)これは、「主体的な学び」の具体的な学習過程と、それぞれの学習過程における、生徒のエンゲージメントが高められた姿を示したものである。なお、このプロセスモデルは、チャールズ・M・ライゲルースによる「自己調整学習のための連続変化フレームワーク」を参考に、田中准教授の助言をもとに作成した。

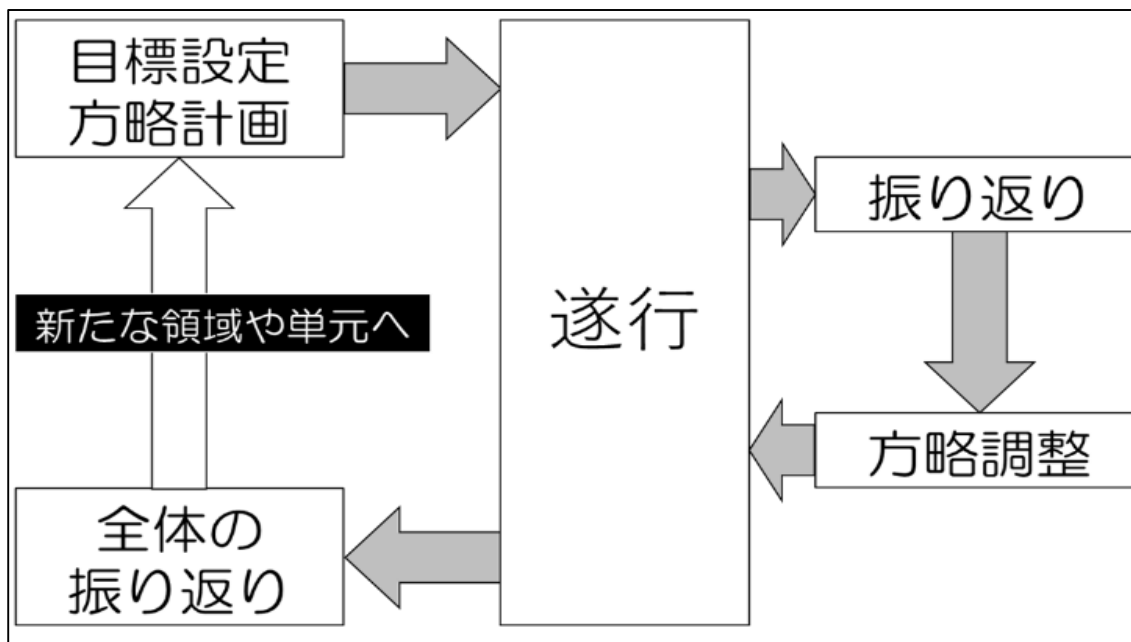
このプロセスモデルにおいて最も重要なのが、「目標設定」の段階である。「学びを生徒のものにできるかどうか」によって「主体的な」学びが実現できるかどうかが決まってしまうからだ。また、目標に対する自らの学びを振り返り、目標の達成に向けて学び方を工夫することで、「主体的な学び」は実現される。ゆえに。生徒が自らの学びを振り返り、次の学びにつなげる段階である「振り返り」「方略調整」「全体の振り返り」も、「主体的な学び」を実現するためには重要な段階であると考えた。

全教科でプロセスモデルをもとに、各教科の特性を踏まえて単元計画や授業の展開を立てる。「主体的な学び」においては、「自らの学びを振り返り、調整すること」が重要な役割を果たす。そのため、すべての単元計画の中に、「振り返り」「方略調整」「全体の振り返り」を組み込むこととした。

このモデルに示されている学びを初めから生徒一人で実現ことは難しい。そのため、初期段階においては教師主導で「主体的な学び」を仕組み、生徒に経験させる。生徒の学びの姿を踏まえながら、学習方略などについて選択肢の中から選ぶ活動などを少しずつ取り入れ、最終的には生徒自身によって「主体的な学び」が実現できるようにしていきたい。

(5) 主体的な学びの評価

「主体的な学び」のプロセスモデルに示されるような学びの姿が実現できたかを評価する。具体的な評価の観点や場面、規準などを示したい。また、この評価は生徒の学びそのものをとらえようとするものであり、学習評価としての「主体的に学習に取り組む態度」の評価の考え方と一致するものである。そのため、ここで行う「主体的な学び」の評価は、観点別評価や評定に用いる評価として扱う。「主体的に学習に取り組む態度」の評価でもあるので、「粘り強い取組を行おうとする側面」と「自らの学習を調整しようとする側面」にも留意しながら評価を行っていきたい。



	エンゲージメントの高まり（生徒の姿）
目標設定	<ul style="list-style-type: none"> ・高いレベルの関心をもつ課題や日常生活で直面する課題、現実世界で解決すべき課題、自らのキャリア形成に関連する課題を選択する。 ・挑戦の感覚、知的好奇心、学習への期待感をもつ。
方略計画	<ul style="list-style-type: none"> ・ゴールを設定し、過去の学習経験を生かしながら、課題解決のための学習方略を考える。
遂行	<ul style="list-style-type: none"> ・計画に基づいて、学習を遂行する。 ・計画した方略や必要に応じて調整した方略に基づいて、個人やグループでの学習活動に熱心に参加する。
振り返り	<ul style="list-style-type: none"> ・自らの学びの効果を振り返る。また、学習の進み具合を把握し、見通しをもつ。
方略調整	<ul style="list-style-type: none"> ・必要に応じて学習方略を修正する。
全体の振り返り	<ul style="list-style-type: none"> ・自らの学びの質や成果を振り返る。 ・学ぶ面白さや楽しさを感じたり、有能感や充実感をもったりする。

図2 「主体的な学び」のプロセスモデル

4. 1年次の研究

1年次は、各教科において「主体的な学び」のプロセスモデルに基づいた単元構成や授業づくりに取り組んだ。また、「主体的な学び」の評価についても、教科ごとに具体的な評価場面と評価規準を設定し、実践を行った。各教科から挙げられた成果と課題は次の表の通りである。(表2)

表2 1年次の成果と課題

	成果	課題
国語	<ul style="list-style-type: none"> ・主体的に学習に取り組む態度の評価について、見取りと振り返りシートを作成し実践的な形で行うことができた。 ・プロセスモデルの実施と方向性について国語科独自の内容を検討することができた。 ・3観点の評価について前倒しで研究したことで、今年度からの実施に向けての課題を見通して研究することができた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・主体的に学習に取り組む態度の評価について、どの単元でも使えるようなものが必要だと感じたので教科で相談したい。 ・振り返りシートの記述の時間をどのように確保するのか。またGワークスペースで行うことができるのか。記述項目の内容についても検討したい。 ・学びのプロセスモデルを当てはめた授業の構想をどのように考えていくのか。 ・語彙の獲得のために全学年共通して行う「ワードバンク」のシートの内容について何をどのような目的で書かせるか。
社会	<ul style="list-style-type: none"> ・プロセスモデルの実施と方向性について検討することができた。 ・学びの記録を活用した振り返りの実施と学習課題の明確化ができるようになった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・形成的評価と総括的評価の場面分けが必要。 ・単元全体の見通しと振り返りの場面設定をどのようにおこなうか。 ・方略調整やまとめに時間がかかるので見通しを持った計画が必要。 ・歴史的分野ではどのように方略調整を実施していくのか、地理や公民的分野よりも設定が難しい。
数学	<ul style="list-style-type: none"> ・「附属中 主体的な学びのプロセスモデル」を、「算数・数学の問題発見・解決の過程」に組み込むことができた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「附属中 主体的な学びのプロセスモデル」を実践した後の、分析や検証が十分にできていなかった。 ・まだまだ限定された単元でしかプロセスモデルを実践できていないので、他の単元ではどのような授業ができるか考えていきたい。
理科	<ul style="list-style-type: none"> ・主体的に学習に取り組む態度の評価について方法を考え、実践例を挙げて様々な方法を考え、意見や助言をいただいた。 ・課題設定、学習調整を考えることにより、主体的な学びのプロセスモデルが少しずつ形になりつつある。 ・振り返りシートの視点を与えて記述することにより、主体的に学習に取り組む態度の評価の見取りにつながった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・振り返りシートの視点を与えても一部の生徒が表現できないでいる。 ・C評価に当たる生徒を減らす支援方法 ・学びのプロセスモデルの確立。 ・ICT 機器を活用して振り返りシートの電子化を目指す。 ・ICT 機器やデジタル教科書の有効活用。

音楽	<ul style="list-style-type: none"> ・「主体的な学びのプロセスモデル」と器楽「箏」の授業において、「学びの過程」を作成し、実践することができた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・今回の過程において、よりよく進める方法と評価方法について、再検討したい。 ・まだ一つの分野のみなので、プロセスモデル更なる分野でも実践し試していきたい。
美術	<ul style="list-style-type: none"> ・プロセスモデルを参考にして、授業の流れを整理することができた。 ・題材同士のつながりに注目して、年間指導計画の見直しを行えた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・毎時間のねらいを明確にもたないと、振り返りが難しい。→ねらいを整理する ・生徒自身がねらいや活動内容を理解していないと方略調整が難しい→わかりやすくねらいや活動内容を提示する。
保健体育	<ul style="list-style-type: none"> ・ねらいや視点の設定が明確になったことで、生徒が主体的に活動に望むことができた ・評価の視点を明確にすることで、OPP シートや観察の見取りがスムーズに行えた 	<ul style="list-style-type: none"> ・評価指標の設定を行ったが、観察での評価の見取りは更なる工夫が必要。 ・主体的に取り組む態度を評価できるような学習カードの工夫 ・学習カードと観察の両方を取り入れた主体的に学習に取り組む態度の評価の工夫 ・タイムやラップの計測が簡易化できる ICT の活用（活動の時間を確保） ・エンゲージメントが高められた姿、生徒の内面で繰り広げられている学びそのものの様子を把握する手立てを明確にする（どのように授業の中でその場面を表出させるか）
技術	<ul style="list-style-type: none"> ・小学校からの連携を意識したプログラミング教育について提案することができた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・評価方法について、どのように評価をしていくべきなのか検討する必要がある。
家庭	<ul style="list-style-type: none"> ・プロセスモデルと家庭科の学習過程を結び付けた、「学びの過程」を作成することができた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・評価方法について、さらによりよい方法を検討したい。
英語	<ul style="list-style-type: none"> ・主体的に学習に取り組む態度の評価について、振り返りシートの活用と見取り方について実践を重ねた。 ・学びのプロセスモデルの具体化をイメージして、単元計画を立てたり授業の構成を組み立てたりして実践を行った。 ・Google Workspace のサービスを活用し、授業での学びと家庭学習、さらには教師の授業計画づくりとを有機的に結びつける工夫を行った。 	<ul style="list-style-type: none"> ・主体的に学習に取り組む態度の適切な評価の在り方について、研究を進める。 ・ICT を有効活用した授業実戦を積み重ねる。 ・学びのプロセスモデルを生徒たちに意識させる工夫を行う。 ・適切なパフォーマンス課題の設定とその評価方法について、研究を深める。

各教科での実践を通して、私たちが実現を目指す「主体的な学び」の具体像がこれまでよりも明確になった。これを田中准教授の助言も踏まえて、「主体的な学び」のプロセスモデルの各学習過程に沿って、「粘り強く学ぶ側面」と「自己調整しながら学ぶ側面」に着目しながら整理した。(表3) ここでいう「粘り強く学ぶ側面」と「自己調整しながら学ぶ側面」とは、文部科学省が観点別評価「主体的に学習に取り組む態度」の側面として挙げている「粘り強い取組を行おうとする側面」と「自らの学習を調整しようとする側面」に一致するものである。

表3 「主体的な学び」の具体像

	エンゲージメントの高まり（実践の中から見えてきた生徒の姿）	
	粘り強く学ぶ	自己調整しながら学ぶ
目標設定	<ul style="list-style-type: none"> 単元の学習内容を、他教科の学習や自らのキャリア、生活、自らが生きる社会と関連づけて学習に取り組もうとしている。 単元の学習内容に興味や価値を見出して取り組もうとしている。 	<ul style="list-style-type: none"> 単元の目標に沿った、自分なりの学習目標を立てている。（発達段階によりレベルは違う）
方略計画	<ul style="list-style-type: none"> 自らの学習目標の達成を目指して、よりよい学習方略を考えようとしている。 	<ul style="list-style-type: none"> 過去の学習経験を生かしながら、目標達成のための学習方略を考えている。
遂行	<ul style="list-style-type: none"> 自らの学習目標の達成を目指して、粘り強く学習に取り組んでいる。 	<ul style="list-style-type: none"> 計画した方略や必要に応じて調整した方略に基づいて、個人やグループでの学習活動に熱心に参加している。
振り返り	<ul style="list-style-type: none"> 自らの学習方略の成果と課題をよりの確にとらえようとしている。 	<ul style="list-style-type: none"> 自らの学習方略をモニタリングし、その成果や課題を挙げている。
方略調整	<ul style="list-style-type: none"> 自らの学習目標の達成を目指して、よりよい学習方略を求めて、必要な修正を続けようとしている。 	<ul style="list-style-type: none"> 必要に応じて学習方略を修正している。
全体の振り返り	<ul style="list-style-type: none"> 単元の学習を通して、自らの目標達成のために努力し続けたことを明確にしている。 	<ul style="list-style-type: none"> 単元の学習を通して、自らの目標達成のために工夫したことやその成果と課題を明確にしている。また、それを次の学習に生かそうとしている。

また、校内研究会で各教科の実践を比較し協議する中で、「主体的な学び」の具体像には教科の本質や教科で育みたい資質・能力などが深く関わっているということも見えてきた。「見方・考え方」を働かせた学びにもつながるもので、各教科で考える「主体的な学び」とは何かについて考えをさらに深める必要がある。

「主体的な学び」の評価については、いくつかの課題が挙げられた。一つ目は、生徒の学びの姿をどのような形で表出させるべきかである。多くの教科ではワークシートを活用し、単元の学び全体を記録しようと試みた。「主体的な学び」は1時間の授業の中だけで育まれるものではないので、有効な方法だと考える。ただし課題として、本人の記述のみで本当に「生徒の学び」を捉えることができるのかという疑問が挙げられた。また、パフォーマンス課題を設定して取り組ませる方法や話し合い活動など具体的な学習活動（主に交流活動）を設定して取り組ませる方法、家庭学習の取り組み状況を生かす方法などを実践している教科もあった。今後どのような形で「生徒の学び」を表出させるべきか、さらに研究を深める必要がある。

二つ目は、表出された生徒の学びをどのように見取り、どのような規準で評価するべきかである。評価規準については、生徒の記述に示されたキーワードの内容や量などに注目して評価する方法をとる教科もあった。生徒の学びへのフィードバックのあり方も含めて実践を重ね、明らかにする必要がある。

5. 2年次の研究

(1) 「主体的な学び」の具体像

2年次は、表3で示した「主体的な学び」の具体像について、各教科の本質や各教科で育みたい資質・能力を踏まえて、さらに具体化することを目指した。また、その具体像を生徒の学びを通して実現するためには、各教科の学習において、「主体的な学び」のプロセスモデルをどのような形で仕組むべきかを明確にすることを目指し、実践を行った。

実践や中等教育研究会などでの協議を通して、各教科における「主体的な学び」の姿をより具体化することができた。まずは教師が「教科ならではの見方・考え方」を働かせることからスタートした。そうすることで、各教科で「育成を目指す生徒像」や「実現したい学びの姿」がより明確になった。その生徒像と「主体的な学び」のプロセスモデルとして表現されている生徒の学びを組み合わせ、各教科における「主体的な学び」の姿を具体化した。例えば、数学科では独自に考案していた「算数・数学のプロセスモデル」と本校全体研究の『主体的な学び』のプロセスモデルを組み合わせることで、目指すべき生徒の学びの姿を具体化していた。

「主体的な学び」のプロセスモデルを実践に移すための手立てとして、多くの教科で共通していたのが、「学習課題を自分事とするための工夫」である。工夫の内容は、教科の特性によって様々であるが、本校生徒の課題でもある「感情的エンゲージメントを高めること」、「学習内容に関心をもったり、面白さを感じたりすること」が実現できるような、教材の開発や教材との出合わせ方の工夫、学習課題をもつための視点を与えることなどであった。そうした工夫を実践することによって、上に述べた「各教科で実現したい学び」を生徒自らが能動的に実現しようとする姿が授業の中で見られるようになった。

(2) 「主体的な学び」の評価

1年次の成果と課題や田中准教授の助言、教育心理学の知見などをもとに、『主体的に学習に取り組む態度』の評価の枠組みを設定した。(表4)「主体的な学び」の具体的な姿をもとに設定するため、「評価の観点」は、プロセスモデルの学習過程をもとに考えた。また、「評価規準」の「B」については、「主体的な学び」が実現された姿として設定されるべきなので、表3で示した「主体的な学び」の具体像をもとに設定した。「評価規準」の「A」については、学習の実現の程度について質的な高まりや深まりをもっていることが見取れる姿として各教科で設定するものとした。

表4 「主体的に学習に取り組む態度」の評価の枠組み

評価の観点	評価規準		Cの生徒をBに高める手立て	
	A	B		
		粘り強く学ぶ		自己調整しながら学ぶ
目標設定	学習の実現の程度について質的な高まりや深まりをもっていることが見取れる姿	<ul style="list-style-type: none"> 単元の学習内容を、他教科の学習や自らのキャリア、生活、自らが生きる社会と関連づけて学習に取り組もうとしている。 単元の学習内容に興味や価値を見出して取り組もうとしている。 	<ul style="list-style-type: none"> 単元の目標に沿った、自分なりの学習目標を立てている。 	<ul style="list-style-type: none"> 目標の立て方の例を示す。 他の生徒が立てた目標を紹介する。 単元間のつながりや他教科とのつながりを説明する。 学習内容を生徒の関心や生活と関連づけて説明する。 学習内容の実践的価値を示す。
方略計画		<ul style="list-style-type: none"> 自らの学習目標の達成を目指して、よりよい学習方略を考えようとしている。 	<ul style="list-style-type: none"> 過去の学習経験を生かしながら、目標達成のための学習方略を考えている。 	<ul style="list-style-type: none"> 類似する内容を学んだ時の学習方略を例として示す。
遂行		<ul style="list-style-type: none"> 自らの学習目標の達成を目指して、粘り強く学習に取り組んでいる。 	<ul style="list-style-type: none"> 計画した方略や必要に応じて調整した方略に基づいて、個人やグループでの学習活動に熱心に参加している。 	<ul style="list-style-type: none"> 生徒の学習活動について、個人や集団など様々な単位で肯定的な声かけを行う。
振り返り		<ul style="list-style-type: none"> 自らの学習方略の成果と課題をよりの確にとらえようとしている。 	<ul style="list-style-type: none"> 自らの学習方略をモニタリングし、その成果や課題を挙げている。 	<ul style="list-style-type: none"> 生徒の振り返りに対してフィードバックを行う。 他の生徒の振り返りや方略調整について紹介する。
方略調整		<ul style="list-style-type: none"> 自らの学習目標の達成を目指して、よりよい学習方略を求めて、必要な修正を続けようとしている。 	<ul style="list-style-type: none"> 必要に応じて学習方略を修正している。 	
全体の振り返り		<ul style="list-style-type: none"> 単元の学習を通して、自らの目標達成のために努力し続けたことを明確にしている。 	<ul style="list-style-type: none"> 単元の学習を通して、自らの目標達成のために工夫したことやその成果と課題を明確にしている。また、それを次の学習に生かそうとしている。 	<ul style="list-style-type: none"> 生徒の具体的な学習活動の様子を挙げるとともに、振り返るための視点を具体的に示す。

2年次は、『主体的に学習に取り組む態度』の評価の枠組みを生かしながら、各教科で次の通り実践を重ね、「主体的な学び」に向けた指導と評価のあり方について深めることを目指した。とくに、「主体的に学習に取り組む態度」の評価規準の設定、生徒の「主体的な学び」を表出させる方法と「C」評価の生徒への支援について重点的に取り組んだ。実践を通して、各教科から挙げられた成果と課題は次の表の通りである。(表5)

表5 2年次の成果と課題（「主体的な学び」の指導と評価のあり方について）

教科名		評価規準の設定	見取りとCの生徒への支援
国語	成果		ロイロノートで、記述に対してすぐに返答することができる。
	課題	B、Cの生徒を決めることに終止してしまう。成果物を元に評価をすることが多くなるが、実際の話し合いや議論の中での見取りを今後は増やしていきたい。	子どもが自分自身で今自分がどの位置に位置しているのか、わかるようにしたい
社会	成果	主体的に学ぶ姿について、形成的評価を積み上げながら総括的評価に導くためにワークシートや話し合いの観点について示すことができた。	生徒の成果物や振り返りシートに毎時間の学習課題に対する自分なりの答えを記入させることによって、教師側が生徒の学びを見とることができたり、生徒自身が単元を貫く問いに対する考え方の変容を見とったりすることができた。
	課題	評価規準について生徒に明示するべきか否かが研究会でも話題になった。より良い評価について向かうことが方略調整ではあるかもしれないが、画一的に偏る恐れもあるので学習支援等を的確に行う必要があると考える。	支援が必要な生徒を話し合い活動でも参加できる配慮や支援が必要。また、形成的評価の段階でより良いもの、自分の表現したものがより改善できるように気づきの視点も必要である。
数学	成果	設定した規準をもとに評価を付けることができた。	具体物を取り入れるとより分かりやすいものになった。（ただし発達段階によるか）
	課題	生徒の実態に合わせたものが必要である。	授業内でCとなる生徒を見つけ出す工夫。前もって対応できるようにしておくこと。
理科	成果	評価規準を考えて、振り返りシートやワークシートの記述内容をもとにして評価を行った。	評価についての見取りは概ね出来ているように思う。Cの生徒への支援としては、個別に声かけをした。
	課題	評価物には現れてこない生徒の発言や気づきをどう見取るか。	実験観察等の授業における見取りは難しい。（その時間における）
音楽	成果	評価規準を設定したので迷いがなかった。	仲間とともに活動することが多かったので、困ったときに相談し、やらないということがなかった。
	課題	毎回の様子を評価し続けることが必要。	実技としての技術の差 様々な表現の形があってよいという自信をもたせること。
美術	成果	評価規準を設定することで生徒の振り返りで考えさせるポイントを明確にすることができた。	知識・技能や思考・判断と関連づけて見取ることができた。 Cの生徒の把握がしやすく、重点的に指導ができた。
	課題	評価規準の妥当性および生徒の自己評価との差異。	技能面の支援。考えをうまく出せない生徒にはより具体的に示す必要がある。

保健体育	成果	評価規準を設定することで生徒に意識させることや教師側のみとりが明確になった。	評価を明確にしたことでCの生徒を把握しやすくなり支援をしやすくなった。
	課題	評価規準の設定が適切かは今後も検討が必要。学習指導要領の例示も活用しながら実践する必要がある。	評価を改善していくためのポイントを整理しておく必要がある。
技術	成果	振り返りシートの記述に対して、3つのポイントを設けて評価することができた。	粘り強く、何度もプログラミングを行うため、授業中の作業の様子で見取りやすかった。また、振り返りシートも使うことで見取りやすくなった。Cへの生徒に対する支援として、評価ポイントを伝えながら、遂行の時間に個別にヒントを与えることができた。
	課題	評価するポイントを示しすぎると、全員が同じような記述になってしまう。Bの基準を設けて評価する方式にする等にも良いと思った。	見とるポイントをもっと細かく設定する工夫が必要だった。また、Cの生徒への支援も更に工夫が必要だと感じた。(個別に助言する方式だと、どうしても全体をカバーできなかった)
家庭	成果	・生徒にループリックを示し、自己評価に寄与できるように工夫できていた。	・ICTの活用により、生徒が自身の成長や変化を見てとれるようになっていた。・ループリックがツールとして生徒の学習意欲を高めていた。・ICTの活用により、フィードバックしやすかった。
	課題	・評価する場面を絞ることも必要。	
英語	成果	客観的な基準を設けることで、評価にブレが少なくなり、生徒にとっても意識すべきポイントが明確になっていくと感じた。	振り返りへの記述や活動に取り組む様子などから生徒の理解度を把握し、フィードバックを適宜入れることができた。教科の得意不得意に関係なく、授業に参加できたり、活躍できたりする場面を作り出すことができた。
	課題	基準を生徒に示すことの妥当性については協議が必要。	言語習得理論に基づく適切な支援のあり方について研究を深める必要性を感じる。「話すこと」、「聞くこと」における支援は十分に行えていない。見取りができる生徒とそうでない生徒がいる。

評価規準の設定については、「主体的に学習に取り組む態度」の評価の枠組みをもとに、単元ごとに目指すべき具体的な主体的な学びの姿を明確にすることで、教師の評価にも客観性が生まれた。また、生徒自身の振り返りや自己評価の指標としても活用でき、生徒自身が「どのように学ぶべきか」を身につけるきっかけとなった。中等教育研究会においても、「あいまいな基準で評価していた部分が明確になった」などの意見が出された。

一方で、「主体的に学習に取り組む態度」の評価の枠組みも含めて、評価規準の妥当性については課題が残った。これについては、内面的なものである「主体性」とは何か、それをどのように評価することが妥当なのか研

究を深める必要がある。また、中等教育研究会では今後の可能性として、他の教科や領域で共通した枠組みの中で評価規準を設定することで、資質・能力の育成を軸とした教科等横断的なカリキュラムの編成が可能なのではないかと意見も出された。本校としても前向きに挑戦したいテーマであると考えている。

生徒の「主体的な学び」を表出させる方法と「C」評価の生徒への支援については、ワークシートなど生徒の成果物による見取りを行う教科が多かった。ICT機器を活用することで、生徒の成果物をポートフォリオとして保存することが可能となり、一人ひとりの生徒の学びの姿を見取ることにつながった。その結果として、「C」評価の生徒を明確化することが可能となった。「C」評価の生徒には、個別にアドバイスや学習課題への取り組み方の例示などのフィードバックを行った。授業の振り返りや単元の総括的評価からは、「C」評価の生徒が「B」評価に上がる例が多々見られた。

一方、見取ること、評価することに終始してしまい、「主体的な学び」の実現につながらないという課題もあった。また、ワークシートなどに現れてこない生徒の学びをどのように見取るか、一斉に学習活動に取り組んでいる生徒一人ひとりの学びを丁寧に見取ることの限界をどのように克服するかという疑問も生まれた。中等教育研究会では、「評価場面を決めることは『主体的な学び』の趣旨を踏まえた評価にならないのではないか」、「『自己調整しているかどうか』ではなく、『自己調整しようとしているか』という点を評価するべきだ」などの意見が出された。主体的な学びの見取りや評価については、フィードバックを通して生徒の学びをより主体的なものにするという目的を見失うことなく、これからも着実に研究を進める必要がある。

6. おわりに

本稿4ページで述べた「生徒の学びの調査」を、令和3年12月に同じ内容で実施した。田中准教授に分析していただいたところ、次のような結果を得ることができた。(以下、抜粋。詳細は本校ホームページを参照)

- ・主体的な学びのプロセスを意識した教育実践を行った結果、取入乐的調整という他律的な動機づけで勉強する生徒が有意に減っているということは大きな成果であると考えられる。
- ・有意差は出ていないため、誤差の範囲内の変化という解釈の域を出ないが、スクールエンゲージメントのすべての平均点が上がっている。特に、学習に関する粘り強さを反映している認知的エンゲージメントの得点が上がっていることから、主体的な学びのプロセスを意識した教育実践の成果により、生徒の主体的な学びの姿が増えていることが推察される。
- ・今後の課題としては、学習すること自体に楽しさを感じたり、学習内容に興味・価値を抱いたりすることで学習に取り組む姿の指標である内的調整の得点が伸びていないことが挙げられる。

以上の結果から、2年間にわたる本研究では、エンゲージメントという概念に着目することで、前研究の成果を生かしながら、生徒の学びの姿という具体像に沿って「主体的な学び」とは何か、それを実現するためにはどのような手立てが有効なのかを少しずつ明らかにすることができたといえる。また、本研究を通じて、本校生徒の課題を少しでも改善できたことに大きな価値を感じる。

一方で、未だ課題として残ること、研究を通してより深く研究することが求められることも明らかとなった。今後も、「生徒の実態から始め、生徒の学びをよりよくすることにつなげる」という本校研究の伝統を大切にしながら、日々の授業実践を通して研究を進めたい。

この2年間は新型コロナウイルス感染症と戦いながらの取り組みであった。全員で1つの授業を見て、ワークシート等には表出されない表情やつぶやきなども含めた「生徒の学びの姿」や同じ教室にいるからこそ感じることのできる「学びの場の雰囲気」を共有し、協議を行って、考えを深めるという研究スタイルを実行することが困難となった。ビデオやWeb会議システム等を活用しながらの授業公開や研究討議を手探りの中で進めた。思うにいけないことも多く、本校の研究に携わってくださった方々には多大なご迷惑をおかけしてしまった。そのよ

うな中であっても、中等教育研究会に参加して下さった方々にいただいたご意見、山梨県教育委員会指導主事ならびに山梨県総合教育センター指導主事の先生方にいただいた指導助言、共同研究者の先生方および研究協力員の先生方の授業開発へのご協力のおかげで、実りのある研究を行うことができた。また、これまでは参加の難しかった遠方の先生方にも中等教育研究会にご参加いただくなど、オンラインだからこそそのメリットを得ることができた。ここで得た経験やノウハウ、知見などを本校の財産とし、今後の研究につなげていきたい。

7. 参考文献

- ・鹿毛雅治『学習意欲の理論』金子書房、2013年
- ・鹿毛雅治『授業という営み——子どもとともに「主体的に学ぶ場」を創る』教育出版、2019年
- ・櫻井茂男『学びのエンゲージメント』
- ・櫻井茂男『自律的な学習意欲の心理学』誠信書房、2017年
- ・櫻井茂男『学習意欲の心理学』誠信書房、1997年
- ・C. M. ライゲルース・B. J. ビーティ・R. D. マイヤーズ著、鈴木克明監訳
『学習者中心の教育を実現するインストラクショナルデザイン理論とモデル』北大路書房、2020年
- ・東海国語教育を学ぶ会「学びのたより」2016年
- ・安宅和人『シン・ニホン』ニューズピックス、2020年
- ・横浜国立大学教育学部附属横浜中学校編『「学びに向かう力」を育む授業事例集』学事出版、2020年
- ・名古屋隆彦『質問する、問い返す——主体的に学ぶということ』岩波書店、2017年
- ・田村学『深い学び』東洋館出版社、2018年
- ・田村学『学習評価』東洋館出版社、2021年
- ・竹村詠美『新・エリート教育——混沌を生き抜くためにつかみたい力とは?』日本経済新聞出版、2020年
- ・本田由紀『教育は何を評価してきたのか』岩波書店、2020年
- ・Society 5.0 に向けた人材育成に係る大臣懇談会新たな時代を豊かに生きる力の育成に関する省内タスクフォース「Society 5.0 に向けた人材育成——社会が変わる、学びが変わる」2018年
- ・北尾倫彦『「深い学び」の科学——精緻化、メタ認知、主体的な学び』図書文化社、2020年
- ・自己調整学習研究会編『自己調整学習——理論と実践の新たな展開へ』北大路書房、2012年

(資料1) 2年間の研究経過と授業実践

◎1年次(令和2年度)

4月15日(水)	第1回校内研	令和2年度の研究計画について
4月28日(火)	第2回校内研	研究の方向性について
5月18日(月)	第3回校内研	研究の目標・内容について
6月30日(月)	第4回校内研	育みたい資質・能力について
7月30日(木)	第5回校内研	主体的な学びについて
8月5日(木)	第6回校内研	主体的な学びとその評価について
8月27日(木)	第7回校内研	主体的な学びを実現するための工夫について
9月30日(水)	第8回校内研	創造性・プロセスモデルについて
10月12日(月)	第9回校内研	第1回事前研究会全体会の提案について
11月10日(火)	第10回校内研	第1回事前研究会の運営について
11月27日(金)	第1回事前研究会	全体総論・教科総論検討
12月2日(水)	第11回校内研	第1回事前研究会の振り返り、スキルアップ講座について
1月5日(火)	第12回校内研	スキルアップ講座の運営、研究の整理について
2月8日(月)	スキルアップ講座	全体会・教科分科会
2月26日(金)	第12回校内研	スキルアップ講座の振り返り、次年度に向けて

*この他にも、教科ごとに、共同研究者との共同研究会を適宜おこなう。

◆第1回事前研究会

日時及び日程：令和2年11月27日(金) 14:10-16:40

14:10-14:40 全体研究会
・全体総論提案・質疑
14:50-16:40 教科分科会
・教科総論検討

内容：全体総論・教科総論について研究協議を行い、検討する。

◆スキルアップ講座

日時及び日程：令和3年2月8日(月) 13:40-15:50

13:40-14:10 全体研究会
14:20-15:50 教科分科会

内容：本研究をもとに、主体的な学びのあり方や評価について研究協議を行う。

◎2年次（令和3年度）

4月14日（水）	第1回校内研	令和3年度の研究計画について、昨年度の振り返り
4月26日（月）	第2回校内研	「学びについての調査」、1年次の成果と課題について
5月10日（月）	第3回校内研	2年次の柱について、第1回事前研究会の運営について
6月1日（火）	第4回校内研	第1回授業研究会に向けた準備
6月21日（月）	第5回校内研	第1回授業研究会
7月2日（金）	第1回事前研究会	全体会・研究授業（ともに動画事前配信）・教科分科会
7月19日（月）	第6回校内研	第1回事前研究会の振り返り
8月3日（火）	第7回校内研	今後の研究の方向性、授業動画の撮影について
8月10日（火）	第8回校内研	中等教育研究会に向けた授業検討
9月24日（金）	第2回事前研究会	*感染症対策等の対応の為、中止
9月28日（火）	第9回校内研	第2回授業研究会に向けた準備
10月11日（月）	第10回校内研	第2回授業研究会
11月9日（水）	第11回校内研	中等教育研究会の確認
11月22日（月）	第12回校内研	中等教育研究会に向けた準備
11月27日（土）	中等教育研究会	全体会・教科別分科会・講演会
12月1日（水）	第13回校内研	スキルアップ講座、紀要について
1月5日（水）	第14回校内研	中等教育研究会の振り返り、2年次の成果と課題について
2月4日（金）	スキルアップ講座	全体会・教科別交流会
3月1日（火）	第15回校内研	スキルアップ講座の振り返り、次年度に向けて

*この他にも、教科ごとに、共同研究者との共同研究会を適宜おこなう。

*校内研究会や授業研究会の詳細は本校ホームページに掲載。

◆第1回授業研究会

日時及び日程：令和3年6月21日（月）14：00－16：45

14：00－14：50 研究授業

15：05－16：45 研究協議

内容：研究授業をもとに、本校研究テーマについて研究協議を行う。

◆第1回事前研究会

日時及び日程：令和3年7月2日（月）14：40－16：40

14：10－14：40 教科分科会

内容：教科総論の検討や研究授業についての研究協議を行う。

◆第2回授業研究会

日時及び日程：令和3年10月11日（月）14：00－16：45

14：00－14：50 研究授業

15：05－16：45 研究協議

内容：研究授業をもとに、本校研究テーマについて研究協議を行う。

◆中等教育研究会

日時及び日程：令和3年11月27日（土）9：00－12：30

9：00－10：30 教科分科会

10：45－12：30 全体会および講演会

「主体的・対話的で深い学びの実現のために

～エンゲージメントに着目して～

（講師：慶応義塾大学教職課程センター 鹿毛 雅治教授）

内容：本研究のこれまでの成果と課題について、全体総論、教科総論および公開授業という形で提案する。また、それらについて研究討議を行う。

◆スキルアップ講座

日時及び日程：令和3年2月4日（金）15：30－16：45

15：30－16：00 全体会

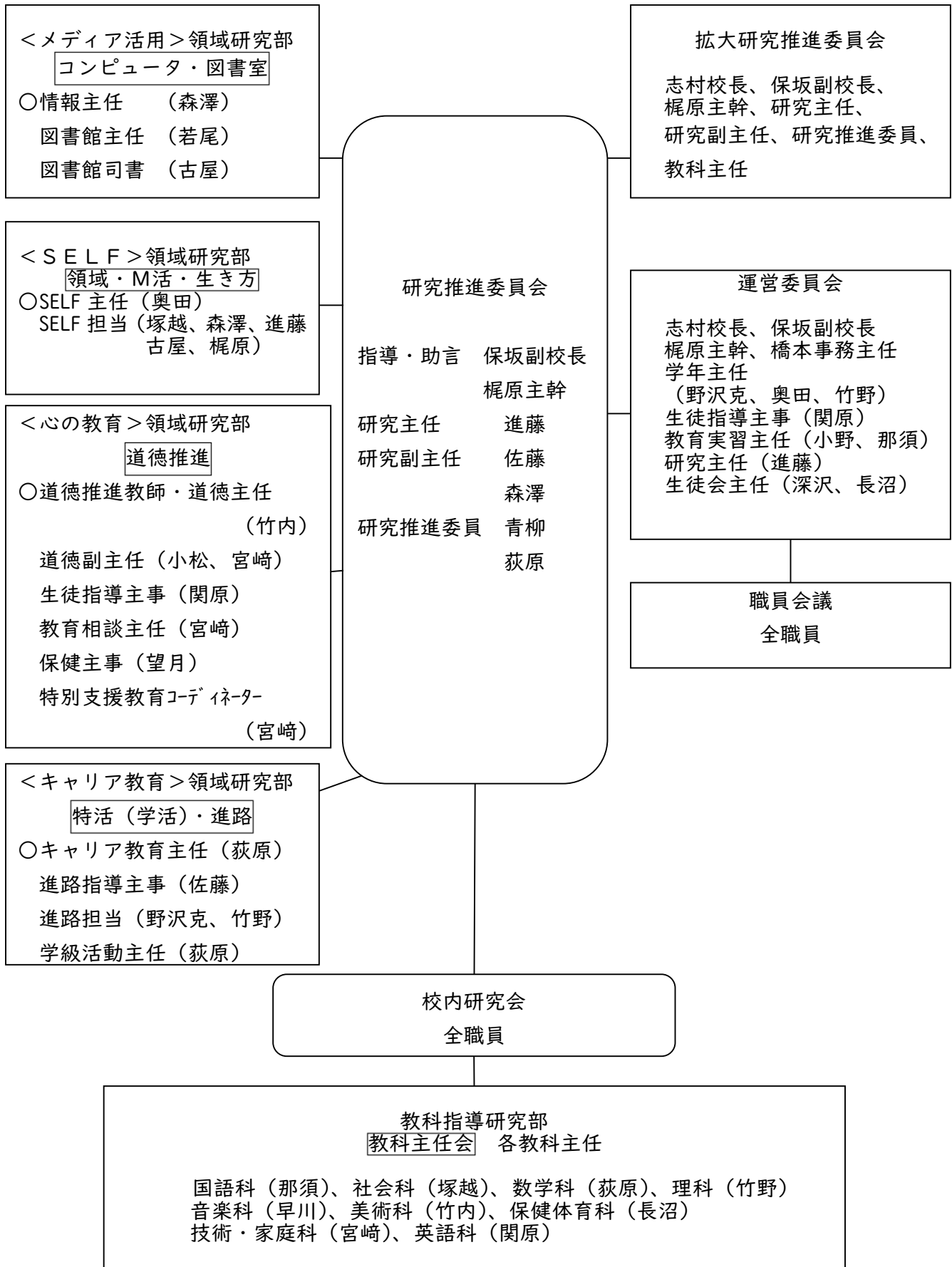
16：00－16：45 教科別交流会

内容：本校の授業実践について紹介する。また、参加者同士で互いの実践について交流を行う。

◎これまでの授業実践

教科	実施時期	授業者	学年	単元・題材
国語	R3事前研	若尾 大樹	3年	後輩に向けて「令和版『論語』を作ろう」
	R3公開研	那須 正和	2年	撰者になって、私たちの歌集を作ろう
社会	R3事前研	進藤 秀俊	3年	日本の近代
	R3公開研	塚越 武史	1年	世界の諸地域 北アメリカ州
数学	R3事前研	佐藤 治彰	3年	平方根
	R3公開研	荻原 崇 小松 健一	2年 1年	平行と合同 平面図形
理科	R3事前研	森澤 貴之	2年	単元1 化学変化と原子・分子 2章いろいろな化学変化 酸素を失う化学変化－還元－
	R3公開研	深沢 拓矢	3年	単元1 運動とエネルギー 2章 水中の物体に加わる力
音楽	R3事前研	早川 みち恵	2年	音楽を形づくっている要素を生かして、自分だけの「星」を創作しよう
	R3公開研	早川 みち恵	2年	箏の奏法や音色、間を生かして、「さくらさくら」の合奏をしよう
美術	R3事前研	竹内 まな	2年	瞬間の美しさを形に ～一瞬に宿る思い～
	R3公開研	竹内 まな	2年	14歳の主張 ～心のイメージを形に～
保体	R3事前研	長沼 裕樹	2年	球技（ゴール型）バスケットボール
	R3公開研	野沢 克美	1年	器械運動 マット運動
技術	R3事前研	青柳 敬大	3年	より便利で、安心・安全なチャットソフトを開発しよう
	R3公開研	青柳 敬大	3年	明るさの変化を利用して、生活に役立つ制御プログラムを作ろう
家庭	R3事前研	宮崎 茜	1年	衣服の選択と手入れ
	R3公開研	宮崎 茜	1年	衣服の選択と手入れ
英語	R3事前研	関原 寛明	1年	Unit3 Club Activities オリジナルスキットを作ろう
	R3公開研	—	—	—

(資料2) 研究組織



(資料3) 令和3年度 指導助言者・共同研究者・研究協力員一覧

教科	指導助言者 (山梨県教育委員会)		共同研究者 (山梨大学)	
	研究協力員			
国語	義務教育課 主査・指導主事	富高 勇樹	山梨大学 教授	齋藤 知也
			山梨大学 准教授	伊崎 孝幸
	東中学校 教諭	榛原 暢子	甲西中学校 教諭	元村 翔
	上条中学校 教諭	平井 規夫	浅川中学校 教諭	田中 強
	北西中学校 教諭	細田 健太	甲府東高等学校 教諭	遠藤 祐也
	山梨大学附属小学校 教諭	石川 和彦		
社会	義務教育課 主幹・指導主事	田邊 靖博	山梨大学 教授	服部 一秀
			山梨大学大学院 准教授	後藤賢次郎
	山梨南中学校 教諭	荻原 佐知	韮崎西中学校 教諭	矢ヶ崎 憲
	白州中学校 教諭	新海 拓也	松里中学校 教諭	猪股 敬
	六郷中学校 教諭	一瀬 咲季	山梨大学附属小学校 教諭	菊島 咲
数学	義務教育課 副主幹・指導主事	櫻井 順矢	山梨大学 教授	清水 宏幸
	市川中学校 教諭	串松 裕貴	北西中学校 教諭	森 秀昭
	双葉中学校 教諭	森實 高毅	明野中学校 教諭	小松 琢朗
	上条中学校 教諭	井上 透	城南中学校 教諭	日向 昭子
	北中学校 教諭	高橋 真人	東中学校 教諭	神尾 岳士
理科	義務教育課 副主査・指導主事	藤原 聡	山梨大学 教授	松森 靖夫
			山梨大学 准教授	杉山 雅俊
			山梨大学 准教授	佐々木 智謙
	南中学校 教諭	大森 顕	若草中学校 教諭	小林 陽太
	南西中学校 教諭	小西 拓磨	秋山中学校 教諭	田部 由佳
	北東中学校 教諭	柳澤 真		
音楽	総合教育センター 副主査・指導主事	小林 美佳	山梨大学 教授	大内 邦靖
	大和中学校 教諭	鶴田 心	玉幡中学校 教諭	雨宮 雄貴
	押原中学校 教諭	古屋 雄人	山梨大学附属小学校 教諭	入月 安奈
美術	義務教育課 主査・指導主事	塚原 英樹	山梨大学大学院 准教授	新野 貴則
	白根巨摩中学校 教諭	鷹野 敦貴	城南中学校 教諭	松岡 あずみ
	河口湖南中学校 教諭	金丸 聖奈	高根中学校 教諭	秋山 菜穂
	山梨大学附属小学校 教諭	加賀美 信行		
保健体育	保健体育課 副主査・指導主事	武藤 拓馬	山梨大学 准教授	安藤 大輔
			山梨大学 准教授	金澤 翔一
	武川中学校 教諭	飯塚 誠吾	八田中学校 教諭	田鹿 欣孝
	北東中学校 教諭	村松 裕太	甲西中学校 教諭	雨宮 哲也
	上条中学校 教諭	川口 照平	櫛形中学校 教諭	遠山 詩乃
技術	総合教育センター 主幹・指導主事	中島 浩三	山梨大学大学院 教授	佐藤 博
	甲府市教育委員会 指導主事	山主 公彦		
	石和中学校 教諭	石原 拓馬	城南中学校 教諭	西川 卓
	河口湖南中学校 教諭	嶋津 英斗	竜王北中学校 教諭	保坂 厚雄
	若草中学校 教諭	飯窪 優	都留第二中学校 教諭	星山 昌諒
家庭	総合教育センター 副主査・指導主事	坂本 久美	山梨大学 准教授	岡松 恵
	北西中学校 教諭	清田 礼子	市川中学校 教諭	吉村 悠希
	御坂中学校 教諭	河野美由紀	南西中学校 教諭	赤池 朝美
	西中学校 教諭	深澤 茉莉	山梨大学附属小学校 教諭	横内 千智
英語	義務教育課 副主査・指導主事	河西 弘之	山梨大学 教授	田中 武夫
			山梨大学 准教授	堀田 誠
	春日居中学校 教諭	廣瀬 翔	敷島中学校 教諭	篠原 大志
	城南中学校 教諭	野木 紹吾	御坂中学校 教諭	伊藤 香織
	南西中学校 教諭	三井 絵里	山梨大学附属小学校 教諭	太田 圭

教科の研究

1. 国 語 科
2. 社 会 科
3. 数 学 科
4. 理 科
5. 音 楽 科
6. 美 術 科
7. 保 健 体 育 科
8. 技 術 ・ 家 庭 科
9. 英 語 科

1 主題設定の理由

(1) 生徒が生きる未来

第3期教育振興基本計画では、2030年以降の社会を展望した教育政策の重点事項として次の点を挙げている。

- ① 個人では自立した人間として、主体的に判断し、多様な人々と協働しながら新たな価値を創造する人材の育成を図る。
- ② 社会では一人一人が活躍し、豊かで安心して暮らせる社会の実現、社会（地域・国・世界）の持続的な成長・発展を目指す。

また、「超スマート社会（society 5.0）」の実現に向けた技術革新が進展する中「人生100年時代」を豊かに生きていくために、若年期の教育、生涯に渡る学習能力向上が必要であると述べている。さらに教育を通じて生涯にわたる一人一人の「可能性」と「チャンス」を最大化することを今後の教育政策の中心に据えて取り組むこととしている。

では、society 5.0を生きることになる現在の中学生に必要な資質・能力どのようなものか。新学習指導要領では、国語において育成することを目指す資質・能力を「国語で正確に理解し適切に表現する資質・能力」とし、国語で理解し表現する言語能力を育成する教科であることを示している。

また、答申別紙において言語能力を構成する資質・能力を「知識及び技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力・人間性等」の三つの柱に沿って整理したものとして、以下のように示している。

（知識・技能）

言葉の働きや役割に関する理解、言葉の特徴やきまりに関する理解と使い分け、言葉の使い方に関する理解と使い分け、言語文化に関する理解、既有知識（教科に関する知識、一般常識、社会的規範等）に関する理解が挙げられる。

特に、「言葉の働きや役割に関する理解」は、自分が用いる言葉に対するメタ認知に関わることであり、言語能力を向上する上で重要な要素である。

（思考力・判断力・表現力等）

テキスト（情報）を理解したり、文章や発話により表現したりするための力として、情報を多面的・多角的に精査し構造化する力、言葉によって感じたり想像したりする力、感情や想像を言葉にする力、言葉を通じて伝え合う力、構成・表現形式を評価する力、考えを形成し深める力が挙げられる。

（学びに向かう力・人間性等）

言葉を通じて、社会や文化を創造しようとする態度、自分のものの見方や考え方を広げ深めようとする態度、集団としての考えを発展・深化させようとする態度、心を豊かにしようとする態度、自己や他者を尊重しようとする態度、自分の感情をコントロールして学びに向かう態度、言語文化の担い手としての自覚が挙げられる。

これらは、新学習指導要領国語科の領域、指導事項の構成に反映されており、未来社会を支える人材として必要な資質・能力が、新たに「知識及び技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力、人間性」として示されている。

中でも、「学びに向かう力」については、従来、国語への関心・意欲・態度とされた部分だが、「積極的」に学習に取り組む態度ではなく、自らの学びを実現していく「主体的な」学び手としての能力を育成する

ことを目指している。

一方、周知のとおり、今年度は4月当初より新型コロナウイルス感染症の世界的な流行に伴い、世界は大きく変化している。人々の心身の健康状態の悪化、経済的損失、人間関係の喪失等、深刻な状況は、依然として継続している。流行は、まだまだ終息する状況ではなく、今後もいつになったら以前のような生活を送れるのか見通しが立たない状況である。

学校においても生徒の安全健康を第一とした運営が進められ、従来のような濃密なコミュニケーションを前提とした学習を行うことはできていない。今後の状況の変化にもよるが、今置かれた状況の中で、従来のコミュニケーション方法を改善したり、新たなコミュニケーション手段を見いだしたりしながら、生徒の学びを保障していくことが求められている。

国語科教育においても、従来のコミュニケーション活動を重視した言語活動の充実に加えて、例えば本校が6月に導入したクラウド型コンピューティングシステム「Google work space」や、双方向会議ソフト「ZOOM」等を導入し、対面しなくても学ぶことができるオンラインを活用した学び等、新しい学びを実現していかなければならない状況である。

(2) 前研究の成果と課題

本校国語科では、昨年度までの3年間、「言葉に対する捉え方を更新していく授業の創造」を主題として研究を行ってきた。

本校生徒は、与えられた課題や活動に対して意欲的に取り組む生徒が多く、国語科においては、特に対話を通して自己の考えを広げたり深めたりすることの有用性を見出し、積極的に話し合いを行おうとしていることから、研究の成果は挙がっていると判断している。具体的には、成果として次のような点を挙げるができる。

○「学習課題設定の工夫」「言語活動設定の工夫」「交流の活性化」の3点について生徒が言葉を捉え直す「更新」が行われていたことに一定の成果が見られた。

○ノート、ポートフォリオを用いた思考等の可視化を実現できた。

○振り返りシートの活用によって思考の深化を進めることができた。

一方、課題については、昨年度研究の集約で、

▲「主体的に学習に取り組む態度」の評価に関し、「粘り強さ」・「学習調整力」をどのように見とり評価に繋げていくか、内容と方法が開発されていない。」

としている。来年度には新学習指導要領が全面実施となることから、その評価の内容や方法の開発については、まさに今年度末までの全国的な課題であると考えられる。

加えて、全国学力・学習状況調査は今年度実施されなかったが、本校独自に行った質問紙調査の結果において、次のように「学校での学び」と「実生活で生かされる力」の結びつきが弱い、という結果も出ている。

・「国語の勉強は大切だと思いますか。」に「当てはまる」と答えた生徒が55.3%であった。

・「国語の授業で学習したことを、普段の生活の中で、話したり聞いたり書いたり読んだりするときに活用しようとしていますか。」に「当てはまる」と答えた生徒の割合は34.9%であった。

これらのことから、

- ① これまで培ってきた言葉によって交流し、自分の考えを更新し、新しい問いを持って学びを進めていこうとすることによって、知を更新していく「知識・技能、思考力等、意欲等」(共有する力)にさらに磨きをかけ、未来を創造する知の産出方法を身に付けさせること。
- ② 国語科における学びに向かう意欲を活性化させ、自己調整を行いながら、粘り強く学び続ける担い手を育てること。

という2点の課題を新研究の出発点に据えることとした。

2 本校国語科が求める方向性と研究内容

前年度までの成果と課題を踏まえ、次のような取組を通して言語能力の定着と充実を図り、もって未来の創造と学びに向かう力の育成につなげたい。

(1) 言葉の捉え方を更新する授業の定着と充実

- ① 言葉によって未来を切り拓く力をつけるため、強い目的意識を持てる課題解決的な単元を開発する。また、その学習過程の中に、知識や技能を自在に駆使し、力を発揮できる場を設定する。

これまでも小グループによる意見交換の有用性は周知されているところであり、生徒達は積極的に交流を行い、言葉を更新していく様子も見られることから、一定の成果が上がってきていると判断している。しかし、これからは、新学習指導要領で育成を目指す資質・能力の観点から、より目的意識を持ち、他者と協働して課題を解決することができる言葉の力や、自らの学びの姿を見直して、学びの質を高めることができる力が求められている。

具体的には、まず、生徒が主体的に考え、動き出したいくなるような、生徒の生活の文脈に近く切実な判断や対応が必要となる課題や、知的好奇心を刺激することができる課題を設定したい。さらに、この課題は、学習者自身と他者が、それぞれに持つ知識や経験を引き出し合うことで解決していく必要があるもの、つまり、協働を通じた解決が必要となるものとし、国語科でこれまでも積極的に取り入れてきたワールド・カフェやジグソー学習などをさらに深い学びにつながるものとした。また、その方法的良さに気づき、課題解決のために自在に用いることにもつなげていきたいと考えている。

加えて、新たに導入するGoogle work spaceのようなテクノロジーの力を活用して、教師と生徒がこれらの学びの過程をともにモニターし、それぞれの「粘り強く取り組む姿」や「学習調整を行う姿」を伸ばしていく「学びの最適化」も図っていききたいと考える。そして、これらを、これまで研究の重点としてきた「学びを通して学習者が、自身の言葉の認識を更新していくこと」にも生かすことで、学びは一層重層的なものとなり、生徒が自身の未来を切り拓くことができる言葉の力を身に付けることにつながると考えている。

- ②Google work space上に語彙を蓄積することによって、豊かで洗練された語彙の獲得を目指す。

言葉の捉え方を更新していくために、豊かで洗練された語彙の獲得は必要不可欠である。

Google work spaceを利用した語彙学習を積極的に活用し、振り返りがすぐに行えるように自分のクラウド上に語彙を書き留めていくようにしていきたい。討論会やビブリオバトルなどを開催し、新たな言葉を積極的に取り入れていく方法を実践し、「Word Bank」として生活の様々な場面で得た新しい言葉を蓄積していくようにしていきたい。

まず蓄積するときに、どのような言葉なのかを辞書で調べ、感情を表す言葉や、動作を表す言葉など意味を分類して保存していくことにより、言葉の意味だけを理解し、蓄積していただくだけではなく、自分の言葉として使えるものにしていきたい。さらに授業や日常の中で単独で獲得していく言葉と、作品の中で出会う言葉を整理し、どのような場面で使うことができる言葉なのかをGoogle work space上で紹介するなど、獲得したもの同士をつなげたり、関連させたりすることにより、日常の授業や生活の中でも使う練習を行っていく。

例；Google work spaceを利用した語彙学習，Word Bankの作成と積み上げ，ビブリオバトル等の実施

(2) 言葉の主體的な学び手育成を目指す学びのデザインの開発

学びのプロセスモデル国語編							
	見通し		学習活動				振り返り
	①目標設定	②方略計画	③遂行	④形成的評価	⑤方略調整	⑥遂行	⑦総括的評価
エンゲージメント	・高いレベルの関心をもつ課題や日常生活で直面する課題、現実世界で解決すべき課題、自らのキャリア形成に関連する課題を選択する。(認知・行動) ・挑戦の感覚、知的好奇心、学習への期待感をもつ。(感情)	・ゴールを設定し、課題解決のための学習方略を考える。(認知) ・過去の学習経験を生かそうとする。(認知)	・計画に基づいて、学習を遂行する。(認知) ・個人やグループでの学習活動に熱心に参加する。(行動)	・自らの学びの効果を振り返る。(認知) ・自らの学習方略を調整する。(行動)	・必要に応じて学習方略を修正する。(認知) ・学習の進み具合を把握し、見通しをもつ。(認知・行動)	・計画に基づいて、学習を遂行する。(認知) ・調整された学習方略に基づき、個人やグループでの学習活動に熱心に参加する。(行動)	・自らの学びの質や成果を振り返る。(認知・行動) ・学ぶ面白さや楽しさを感じる。(感情) ・有能感や充実感をもつ。(感情)

《主體的な学びのプロセスモデル国語編》

① 言葉の主體的な学び手の育成

(1) 自己調整力の育成

生徒が主體的に言葉を探求していくためには、自分の学びがどれくらいうまく進んでいるのかを振り返り、調整する「メタ認知」が必要である。目標設定の場面ではまずどのような目標を設定し、方略計画を立てていくが、そこには課題への興味が第一である。そこで本校国語科では学びのデザインとして、単元やつけさせたい力に応じてどのような言語活動を設定し、上の表に当てはめてどのような見通しを持って学習者に「自らが動き出したい課題」を設定し、教師が「学びのプロセスモデル」を意識して計画と遂行していく必要がある。また学習活動を行っている際に形成的評価と方略調整を行うことによって、遂行のコントロールを行う「自己調整」が必要となる。そこで指導者は学習過程の中に待つ時間を生み出し、生徒自身に再計画の時間を保証することを試みたいと考える。また仲間との交流によって自分の学びの達成度や、現状を把握して、問題点をメタ認知しその方略を修正することによって、見通しからの再計画を行う。さらにその計画を遂行し、最後に自己省察によって目標を達成できたかということを総括的評価するというサイクルを作ることによって、主體的な学びを実現させたい。

(2) 粘り強い取組を行う力の育成

主體的な学びのもう一つの側面は粘り強さである。学習調整と一体となって現れることもあるが、授業内の発言や活動の見とりだけでは不十分である。そこで記述したもの必ず単元の中で毎時間の学習を振り返る時間を作り、「振り返りシート」や「ポートフォリオ」に記述させることを通して、その側面を見とりたい。学習の課題に対し諦めずに何度も取り組もうとしているかどうか、また自己調整を行った後にさらに課題に取り組もうとする姿勢が見られるかどうか。学習後にも、その単元の目標に対して出した自己の課題を次の学習に生かすことができるような記述ができたか、努力の過程とその頻度を見とりたい。

3 研究を支える取り組み

(1) SELF (総合的な学習の時間)との関わり

本校では、「総合的な学習の時間」における探究的な学習についても研究を重ねている。1年生から3年生まで、探究的な学習を系統的に配置し、発達段階に応じたカリキュラムを組み、最終的には生徒個人で探究できるだけの力をもつことを目標に、全職員で指導に当たっている。その過程の中で、総合的な学習の時間において生徒に身に付けさせたい資質・能力として挙げている「課題設定能力」「情報収集能力」「情報選択(分析)能力」「表現力」「自己省察力」を、各教科との連携を図りながら身に付けさせるため、教科横断的な学習を意識した年間指導計画を作成している。国語科においても、国語科で身に付けた資質・能力を総合的な学習の時間で活用できるように、また、総合的な学習の時間で身に付けた力を国語科の授業においても活用できるように、関連性を図りながら授業を展開することを意識している。

(2) ファシリテーションスキルとFUZOKUワークシート

今年度の国語科の研究では、生徒に“言葉で世界を認識する力”，“ファシリテーションスキル”を身に付けさせることを目標としている。まず，“言葉で世界を認識する力”を育むため、「語句・語彙力」の育成を目指す。本校ではこれまで、言語感覚を働かせることの有用性を生徒が感じるため、また意識的に言葉と関わる態度を育てるために、言葉の価値や実生活における有用感に気付かせるところから始めるため、全学年を通し、新聞記事を活用した「FUZOKUワークシート」の作成と活用に取り組んできた。学校における授業のみでなく社会的な事象と自分自身の考えを交差させる場面を作ることで、より豊かな言語感覚を養うことにつながると考える。本年度は特に、「言葉」の力の基盤である語句・語彙力を育むため、生徒が新しい時代に生まれた新しい言葉や、出会ったことのない言葉に注目し使いこなしていくことを目指し、語彙の獲得を意識した問題作成を心がけている。新聞記事の内容については、文学的な内容、社会的な内容、理科学的な内容など幅広く取り上げ、新たな語彙を「Word Bank」に蓄積するなど全学年、全教科での学びを支える土台作りを目指していく。

次に“ファシリテーションスキル”では特に、「対話」の質を向上させていきたい。コミュニケーションの方法が多様化していく社会の中で、新しいファシリテートの力が求められている。ただ意見交流を行うのではなく、交流の目的を意識させること、相手の意見を受容するだけでなく建設的な話し合いとなるように問い返したりすること、目的を果たすために誰のどの意見が有効であったか意識すること、どのようなまとめ方をすれば良いのかを工夫すること等、生徒が意識できるような対話を目指したい。

4 研究経過

本年度の国語科の実践として、事前研究会と中等教育研究会を挙げる。

①事前研究会

授業者 若尾 大樹

【単元名】 後輩に向けて「令和版『論語』」を作ろう ～言葉を粘り強く吟味する活動を通して～

【キーワード】 「粘り強さ」 「自己調整」 「解釈」 「Google Workspace」

【授業の概要】

『論語』は、時代が変わっても変わることのない人間の生き方に関する含蓄ある孔子の考えが収められている。孔子の人間の生き方に対する鋭い観察や深い思索にふれ、現代に生きる自分たちの考え方や生

き方と比べることによって、言葉の本質を捉えさせる。特に、『論語』の言葉を自分で解釈し、自らの学校生活を結びつけることで価値づける活動を試みた。さらに、中学校3年生としての責任感を刺激し、強い課題意識を持てるような言語活動を設定した。

同じ学校に通う後輩やこれから入学してくる未来の後輩に向けて言葉を残すためには、論語の言葉に用いられている一つ一つの言葉について正しく捉えるとともに、自分の解釈を加える必要がある。生徒は自分の解釈の正確性や自作の『論語』で用いた言葉の妥当性を何度も吟味することによって、古典の言葉が自分のものになるという実感をさせることを目指す。

1. 単元目標

- (1) 歴史的背景などに注意して古典を読むことを通して、その世界に親しむことができる。
〔知識及び技能〕(3)ア
- (2) 文章を批判的に読みながら、文章に表れているものの見方や考え方について考えることができる。
〔思考力、判断力、表現力等〕C(1)イ
- (3) 言葉が持つ価値を認識するとともに、読書を通して自己を向上させ、我が国の言語文化に関わり、思いや考えを伝え合おうとする。
「学びに向かう力、人間性等」

2. 本単元における言語活動

論説や報道などの文章を比較するなどして読み、理解したことや考えたことについて討論したり文章にまとめたりする活動。
(関連：〔思考力、判断力、表現力等〕C(2)ア)

3. 教材名 学びて時に之を習ふ―「論語」から (光村図書出版「国語3」)

4. 指導の内容と言語活動，教材の関わり

(1) 言語活動設定の意図

『論語』は多様な解釈が可能な書物である。それは孔子の英知と事象を捉える概念が複雑に絡み合っていること、さらには読み手の経験や感性によって捉え方が変わってくるのが原因だと考えられる。本単元では言葉の使われ方や『論語』の言葉の構成に着目し、孔子の思想に迫り、自分自身のこれまでの生活と照らし合わせることで古典に現れる見方、考え方を広げることを目的に展開していく。今回、生徒は自分の中学校生活の具体的な場面を生徒に想起し、『論語』の世界と結びつける。そして、古典を読む意義を実生活と関連させることで、学びの意欲を高めたいと考える。具体的には、後輩に『論語』の言葉を自分の解釈にあった形に変えた、令和版『論語』として残す活動を行う。先輩としての責任感から、強い課題意識を持ち、活動に取り組むことをねらう。また、令和版『論語』で用いた言葉が自分の体験と合致しているかどうか協働学習の中で何度も吟味することで、主体的に粘り強く学習に取り組む態度を育む。

(2) 主体的・対話的で深い学びの実現に向けて

- ① 学習活動に価値を見出し、自らの生活に関連づける学習活動
- ② 協働的な活動を通して、言葉の使い方を吟味する学習活動

(3) 意識させたい「言語意識」

【5つの言語意識】

- ・目的意識 これからの学校生活で持つ疑問や悩みを解決できるように、

- ・相手意識 附属中学校の後輩に向けて、
- ・場面意識 自分の言葉で「論語」を解釈する場面で、
- ・方法意識 言葉の使い方を吟味することを通して、
- ・評価意識 「論語」に現れるものの見方、考え方を生かして、令和版「論語」を作ることができる。

5. 指導計画と評価計画（C領域「読むこと」5時間）

（1）単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
①歴史的背景などに注意して古典を読むことを通して、その世界に親しむこと。(3)ア)	①文章を批判的に読みながら、文章に表れているものの見方や考え方について考えている。(C(1)イ)	①「論語」の言葉をつかむために何度も吟味し、自らの解釈で「論語」の言葉を捉え直し、まとめようとしている。

（2）学習過程の概要

時	学習活動	指導上の留意点	評価規準・評価の方法
1	<ul style="list-style-type: none"> ・本単元の学習の流れや本単元で身に付ける力についてについて知る。 ・教科書の「論語」の一節を訓読し、基本的な漢文の知識を確認する。 ・教科書P29「学びて時に之を習ふ」以下の言葉を、語注をもとに現代語訳する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「論語」や「孔子」の考えが、人間の生き方について言及されたものであること、2,500年も前から、今も読み継がれていることを確認し、自分たちも、附属中で学ぶ先輩として、後輩たちに言葉を残すため活動であることを伝える。 	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>[知識・技能]① 観察・ワークシートの記述</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「論語」の成立や孔子の考えをもとに、「論語」の本質について理解しているかを確認する。 </div>
2	<ul style="list-style-type: none"> ・自分が解釈を加える言葉を選び、漢和辞典を使いながら、その意味を列挙する。 ・自分が3年間の中学校生活で感じた疑問や持った悩みについて想起し、具体的な体験を書き記す。 	<ul style="list-style-type: none"> ・解釈する言葉の候補をできるだけ多く挙げさせる。 ・解釈の根拠となる部分なので、短くても良いので、できるだけ詳しく書かせる。 	
3	<ul style="list-style-type: none"> ・同じ言葉を解釈する者同士グループに分かれて、孔子の言葉の意図について確認する。 ・自分が解釈を加える言葉を選び、具体的な体験と結びつける。 	<ul style="list-style-type: none"> ・言葉の解釈と構成に着目して大意を捉えさせる。 ・自分の体験を含む文章をできるだけ具体的にワークシートに記入させる。 	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>[主体的に学習に取り組む態度]① 観察・ワークシートの記述</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「論語」での言葉の使い方について、グループで吟味し、自分の体験との関連を確認する。 </div>

4 (本時)	<ul style="list-style-type: none"> ・前時に書いた自分の体験をもとに、令和版『論語』の第一案を考える。 ・グループで第一案を交流し、評価し合う。 ・グループの交流を生かし、第一案を吟味する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・言葉の解釈の観点と構成の観点から複数箇所、変更しても良いことを伝える。 ・アドバイスのポイントを示す。 ・良い部分と改善できる部部の両方をアドバイスさせる。 ・試行錯誤した様子を残すようにさせる。 	<p>[主体的に学習に取り組む態度]①</p> <p><u>観察・ワークシートの記述</u></p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分の体験を元にした令和版「論語」の言葉の整合性を何度も吟味しているかどうかを確認する。
5	<ul style="list-style-type: none"> ・令和版「論語」を発表する。 ・「論語」の言葉と自分が考えた言葉を比較し、考えたことを話し合う。 ・話し合いを参考にして、自分の考えをワークシートに記入する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・第4時までにとまとめたワークシート等を根拠にして、自分の考えた言葉について発表し、相互に評価をさせる。 ・「弟子に向けた人生の指針となるもの」としての『論語』と「附属中の後輩に向けた中学校生活の指針となるようなもの」としての令和版『論語』の違いについて話し合わせる。 	<p>[思考・判断・表現]①</p> <p><u>ワークシートの記述</u></p> <ul style="list-style-type: none"> ・「論語」の言葉に現れる考え方を、自分が解釈した言葉に反映させられたかどうかを確認する。

《本授業における学びのプロセスモデル国語科編》

学びのプロセスモデル国語科編							
	目標設定	方略計画	遂行	振り返り	方略調整	遂行	振り返り
エンゲージメントの高まり	<ul style="list-style-type: none"> ・これまでの古典の学習が生活に役だったかどうか振り返り、古典を学ぶ意味について認識する。 ・先輩として、後輩へ言葉を残すという言語活動をイメージし、学習への期待感を持つ。 	<ul style="list-style-type: none"> ・どのような道筋で令和版「論語」を作っているかを理解し、単元を通して身につける「読むこと」の力を設定する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・教科書の「論語」の言葉を自分の学校生活と結びつけて解釈し、自分の解釈を加えた新たな言葉について考える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・仲間からももらったアドバイスをともに、自分の伝えたい考えが、自分の選んだ言葉で表現できているかどうか検討する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・振り返りでの検討の結果、どの言葉を吟味する必要があるかについて再考する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・方略調整を行った後、自分の体験に基づいた言葉に再び自分の解釈を加え、あらたな言葉について考える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「論語」の言葉に現れる考え方を、自分が解釈した言葉に反映させられたかどうかを確認する。

6. 成果と課題

『「方略調整」や「粘り強く学習に取り組む」とはそもそもどういうことなのか』という疑問が生徒の中にあるため、日常の授業の振り返りや言語活動の見直しの必要性を感じた。また、生徒の振り返りの記述から、生徒の中に「方略調整」＝「意見を変えること」、「意見を変えること」＝「良いこと」というイメージが存在している可能性があることを感じ、方略調整の在り方を検討する必要があることを痛感させられた。

最大の課題は、C領域の「精査」の部分で自己調整を行う必要があったが、B領域に近い部分での自己調整を行わせてしまった点である。読むことの自己調整を働かせるのであれば、最終的に孔子の言葉に戻って精査する必要があった。《事前研究会記録より》

②中等教育研究会

授業者 那須 正和

【単元名】 撰者になって、私たちの歌集を作ろう ～短歌の表現を吟味する交流を通して～

【キーワード】 「私たちの歌集」 「語彙の拡充」 「ワードバンク」 「Googleworkspace」
「効果的な表現」

【授業の概要】

学習指導要領「読むこと」の言語活動例に「詩歌を読んで理解したことを引用して解説すること」が採り上げられている。本単元では、教科書などに出てくる作家の短歌から学び、なぜ名歌と言われるのか、作家が歌に込めた表現を自分なりに解釈し探求させたい。その活動を通して作家の見方や考え方に触れ、優れた表現が短歌全体にどのように生きていて、その主題は何かについても考えを及ぼしたい。さらに既習の知識と関連させ、そこから「自分たちの歌集」を作るために、自分のクラスの学級目標にそって生徒が選んできた短歌が、どのような点で優れた短歌なのかを考え、効果的な表現が短歌のどの部分に表れているのかを説明させたい。さらに選んだ短歌をGoogleworkspaceのジャムボード1枚にまとめさせ、他の仲間が短歌をどのような視点で選んだのかを交流させ、選んだ短歌が本当にクラスの歌集として載せるのにふさわしい歌なのかを生徒の交流から吟味させたい。

1. 単元の目標

【知識及び技能】

- (1)エ 抽象的な概念を表す語句の量を増やすとともに、話や文章の中で使うことを通して語感を磨き語彙を豊かにすること。
[思考力、判断力、表現力等]
- C(1)エ 表現が、文章の内容を伝えたり印象付けたりする上で、どのように働いているかを考えることができる。
- C(1)オ 文章を読んで理解したことや考えたことを知識や経験と結び付け、自分の考えを広げたり深めたりすることができる。
「学びに向かう力、人間性等」
言葉が持つ価値を認識するとともに、読書を通して自己を向上させ、我が国の言語文化に関わり、思いや考えを伝え合おうとする態度を養うことができる。

【言語活動例 中2】

- Cイ 詩歌や小説などを読み、理解したことや考えたことを説明したり文章にまとめたりする活動。

2. 教材名 栗木京子「短歌に親しむ」(光村図書出版「国語2」)

3. 日常の取組

○学びのプロセスモデル国語科編を意識させる

生徒に学習活動を意識させることは、授業に対しての構えをつくらせることができる。

「気づく→目標を設定する→学習する→再考する→深める→振り返る」という小さな学習サイクルを計画的に仕組む。また、「振り返り」ではポートフォリオを使って、学習活動を振り返り、学習を通して自分の考えの変容や身に付いた力を言語化して振り返ることができるようにしている。

○交流を取り入れた授業

ファシリテーションの考え(他者との協働による知的相互作用の促進)を取り入れ、日々の学習の中で、自分一人で学習を完結させるのではなく、自分の考えを深めるために対話(他者との交流)を通して、自分の考えを再構成することができるようにしている。

考えを広げる話し合い、考えをまとめる話しあい、さらに深く探求するための話しあい、など目的に合わせて様々な交流の仕方を行い生徒自身で課題に向かう力をつけていく。

4. 指導の内容と言語活動, 教材の関わり

(1) 言語活動設定の意図

本単元では、短歌に詠み込まれた情景や作者の心情がよりいきいきと伝わってくる表現を「効果的な表現」とし、言葉を根拠に短歌を解釈し、選んだ言葉が作品にどのような影響を与えているかについて感じたことや考えたことをまとめることを中心に指導することとした。言葉の一つひとつから情景や心情を想像したり表現の効果を考えたりする交流を通して、名歌から抽出した表現をもとにして「私たちの歌集」の撰者になってなぜこの歌を選び、歌集に入れるのかを吟味する活動を行いたい。

(2) 主体的・対話的で深い学びの実現に向けて

- ・ 教師による教材研究(伝統的な文芸としての短歌)と生徒の言語感覚とをつなぐ活動の設定。
- ・ 交流の必要性を生徒が感じる学習課題、そして活動を意図的に仕組むことで、生徒の主体性や他者との交流の有用性が高まる活動として、以下の活動を設定した。

① 短歌と学習者との距離を縮められるようにする学習活動。

→ 他者との共有によって自分自身が感じた短歌や言葉の魅力を伝え合う活動。

短歌は31音に作者の思いや様々な魅力が込められている。そこでその魅力を探ることを行い、なぜこの短歌は素晴らしいと感じるのかという魅力を探り、その魅力を仲間を紹介することを通して短歌の面白さや、ひいては言葉の広がりや奥深さに気が付くことができるような活動とした。

② 「ワードバンク」を使い、語彙の拡充と言葉を吟味する学習活動。

→ 本校国語科として年度当初から「ワードバンク」という言葉をクラウド上に蓄積し、自分で作る言葉の辞典として使ってきた。自分自身が名歌にふれた際に新たな言葉と出会い、その言葉の表面的な意味だけではなく、隠れた思いなどについて深く探り、様々な使われ方や方法にも着目して言葉と向き合い、自らふさわしい言葉を選ぶことができるように言葉を吟味する活動を仕組んでいきたい。

(3) 意識させたい「言語意識」

【 5つの言語意識 】

- ・相手意識 仲間や学級担任に対して
- ・目的意識 名歌に込められた表現をもとに短歌を選ぶために
- ・場面意識 自分がどのような意図でその歌を選んだのかを考える場面において
- ・方法意識 自分が選んだ短歌を他者と交流することを通して
- ・評価意識 表現の効果を明確にして短歌を選ぶことができたか。

(4) 全体研究との関わり

①「言葉による見方・考え方」を働かせる学習課題の設定

本校の国語科として捉える「創造性」とは、言葉による見方・考え方を働かせることによって未来を想像する力、である。そのために生徒が主体的に言葉を捉えたり、捉えなおしたりすることが大切になってくる。そこでエンゲージメントの高まりを目指して、言葉を表面的なものとして獲得することだけでなく、作品の中で出会う言葉を大切にし、その言葉の背景にある作者や時代背景、などにも考えを及ぼし捉えていきたい。

②主体的に学習に取り組む態度の評価

そこで主体的に学習に取り組む態度の評価規準を「短歌の表現を深く考えるために、自分たちで課題を決めて交流しようとしている。」とし、「おおむね満足できる」状況のBの生徒の姿を以下のキーワードを示して具体的に想定した。

【キーワード】「主題に迫る効果的な表現」

①課題について考えを持つ。②自分が取り上げている表現は作品の全体にどのような効果を与えているのかを交流し、意見を出し合う。③試行錯誤しながら自分の考えを再考する。

これら①～③の過程を交流の場面とワークシートから見取る。

本時の目標を示し、見通しを持たせる。毎時間の振り返りを記述させ、「この時間に身に付いたこと」「この時間で分からなかったこと」「次の時間の課題」などを書かせ、試行錯誤の回数と考えの変容を書かせる。全体研究との関りとして学びのプロセスモデルを国語科として以下のように設定し、エンゲージメントをどのように系統立てて見とっていくのかを考え、特に「主体的に学習に取り組む態度の評価」を形成的評価、方略調整、総括的評価という3段階で粘り強さと自己調整をする姿を見とりたい。

5. 指導計画と評価計画（ C領域「読むこと」49時間中の6時間 ）

(1) 単元の評価規準

知識・技能	思考力, 判断力, 表現力	主体的に学習に取り組む態度
① 「短歌に親しむ」の学習を通して、抽象的な概念を表す語句の量を増やすとともに、話や文章の中で使うことを通して語感を磨き語彙を豊かにすること。 (C(1)エ)	① 「読むこと」において、「短歌に親しむ」「短歌を味わう」に出てくる作家の短歌を読み、短歌の理解を深く行うために表現に込められた作者の意図や背景などに着目することで読みを深めることができる。(C(1)エ) ② 「読むこと」において、文章を読んで理解したことや考えたことを知識や経験と結び付け、短歌を深く読むことができる。(C(1)オ)	① 「私たちの歌集」を編纂するために、根気強くより良い短歌を選び、なぜその短歌を選んだのかについて課題を決めて交流し、粘り強く課題を解決しようとしている。

(2) 学びのプロセスモデル国語科編

学びのプロセスモデル国語科編

エンゲージメント	見通し	学習活動				振り返り	
	①目標設定	②方略計画	③遂行	④形成的評価	⑤方略調整	⑥遂行	⑦総括的評価
	<p>・今までの文学的文章の読みを参考に、一つの表現の多様性や、言葉に着目することで、見えてくる世界があることを確認する。</p> <p>・文学館館長先生に短歌の読み方と創作についてご講義いただく。</p> <p>(認知・行動)</p> <p>・短歌の読み方を活かして「私たちの歌集」に載せる短歌を選ぶという課題を設定する。(感情)</p>	<p>I, 短歌の読み方を知り、短歌の疑問に思ったことや批判的に読んだ表現に着目して探る。(認知)</p> <p>II, 歌集のテーマを理解し、テーマに合う歌を選ぶ。</p> <p>III, 仲間が選んだ短歌と比較、検討する。(行動・認知)</p>	<p>・短歌の読み方のモデルを示し、観点を明確にして読み、短歌の表現について考える。</p> <p>(認知)</p> <p>・短歌を分担し、短歌を深く探り、短歌の中から自分が選んだ表現の効果を全体で共有する。</p> <p>(行動)</p>	<p>・テーマに則って短歌を選び、なぜその短歌を選んだのか。観点を明確にさせておく。</p> <p>(認知)</p> <p>・選んだ短歌を小グループで交流させ、どの歌を歌集に載せるのかを観点を明確にして話し合う。</p> <p>(行動)</p>	<p>・自分たちが選んだ短歌は本当にクラスのテーマに合っているのか。学んできたことが取り入れられているのかをもう一度考える。</p> <p>(認知)</p> <p>・ジャムボードで他の班の短歌を見てもう一度吟味する。</p> <p>(認知・行動)</p>	<p>・自分たちが選んだ一首を出し合って最後の編集会議を全体で行う。</p> <p>(認知)</p> <p>・全体交流の場面で多くの意見を聞き、考えを深める。</p> <p>(行動)</p>	<p>・「自分たちの歌集」を読み合い、お気に入りの短歌にコメントをする。</p> <p>(認知・行動)</p> <p>・さらに良い短歌を選ぶために大切なことについて考える。</p> <p>・着目した表現が次の読みにつながるという有能感を感じる。</p> <p>(感情)</p>

6. 授業の計画(単元構想表)

		学習活動	評価
事前		<ul style="list-style-type: none"> ○ 単元全体の流れを理解し、本単元の学習の見通しをもつ。 ○ 新出漢字、新出音訓については事前学習。 ○ 山梨県立文学館館長三枝先生より短歌の読み方についてご講義いただく。 <ul style="list-style-type: none"> ・短歌を読む時にどのような点に注意して読むべきかを考えておく 	[知識・技能]
第一次	1時 【精査】	<ul style="list-style-type: none"> ○ 文章を通読する。 <ul style="list-style-type: none"> ・それぞれの歌の読み方を確認する。 ・繰り返し音読をする ○ 「短歌を味わう」に出てくる短歌に関する基礎的な知識について確認する。 <ul style="list-style-type: none"> ・学習班4人で短歌を分担する。 ・それぞれの短歌に対して疑問点などを挙げ問いを立てる。 ・それぞれの短歌の表現について考える。 	[知識・技能] [[思考・判断・表現] ①

		<p>①表現技法（体言止め・区切れ） ②助詞の使い方 ③語句の意味 ④作者について ⑤時代背景</p> <p>・便覧なども参照し理解を深める。 ・図書館の本やインターネットを参考にする。</p>	
第二 次	2・3時 【精査・解 釈】	<p>○ 「短歌を味わう」に出てくる作家の短歌を交流させる。</p> <p>・自分で調べた短歌について交流し、他者の考えを聞いて歌のエッセンスについて考える。（ジグソー交流）</p> <p>・ホームグループで考えたことを共有する。</p> <p>・短歌の読み方についてどのようなことに着目すると短歌良さが見えてくるのかを全体で確認する。</p> <p>○ 「私たちの歌集」編纂のために短歌を集める。</p> <p>・各クラスのテーマ</p> <p>1組「LETS WALK TOGETHER」 〰️共に 歩み 〰️ 2組「星空 ～2組らしく輝け～」 〰️輝き 個性、 3組「百花繚乱」 〰️個性の輝き 花 〰️ 4組「SUNNY」 〰️明るさ 太陽 自然、 のテーマに沿った短歌を集めてくる。</p> <p>・選んだ句（3首）がなぜ自分の心に響いたのかをジャムボードにまとめる。</p> <p>・選んだ歌の解説書を書き、着目した表現を仲間に紹介できるようにする。</p> <p>・解説書を書くためにワードバンクを使い、さらにワードバンクに入れることができるものを書く。</p> <p>○ 小グループでそれぞれの短歌の魅力について発表する。</p> <p>・調べたことを発表するのではなく、選んだ短歌の効果的だと思った表現が、どのように短歌に活かされているのかを発表する。お互いにジャムボードの付箋機能を使って、表現に着目して意見を出し合う。</p>	<p>〔主体的に学習に取り組む態度〕①</p> <p>〔思考・判断・表現〕①</p>
第三 次	4・5時 【考えの 形成・共 有】	<p>○ 「私たちの歌集」の編纂を行う</p> <p>・前時に交流で意見をもらったものを参考にして、3種から1首にしぼり、ジャムボードにまとめる。</p> <p>・どの短歌を「私たちの歌集」に載せるのかを決め、解説書をもう一度読み合う。</p> <p>○ できた歌を全体で読み合い振り返りを行う。</p> <p>・完成した歌集をみんなで読み合い感想を述べ合う。</p>	<p>〔主体的に学習に取り組む態度〕①</p> <p>〔思考・判断・表現〕②</p>

7. 授業のまとめ

今回の授業では事前授業ということで、歌人で山梨県立文学館館長三枝昂之先生をゲストティーチャーにお招きし、「短歌の読み方・創り方」をご講演いただいてから、授業に入った。本単元の振り返りの

中に「一つの表現に着目することで、短歌の作者がこの歌に込めたかった主題を知り、奥深さと31音の奥深さが見えてきた」や「読んだことを生かして自分でも日常生活の感動などを短歌を詠んでみたい」といった意見が多くあった。そこで授業後の発展として生徒たちは短歌を実際に創作し、フォーム上で自分が創った短歌を送り、教師がまとめたものを三枝先生にお願いして見ていただいた。その中で優秀だった短歌を何首か二度目のご講義の中で鑑賞したり、解説して頂いたりするなかで、言葉選びの素晴らしさ、言葉を通して広がる世界の興味深さを実感し、短歌を身近に感じる事ができたのではないかと考える。

さらに今後の課題として短歌の創作の時などにワードバンクを使うことを行ったが、なかなか日常生活の中で得た言葉を使うことができない生徒が多かった。そこでどのような形で言葉を集めるか。また集めたものを日常の活動や必要な場面とどのように関連付けるかということを指導し、積極的に使える語彙の拡充に力を入れる必要を感じた。

【本年度の国語科の実践の成果と課題】

今年度の実践は2つの研究授業をC領域「読むこと」で行った。教科総論にもあるように言葉を通して新たな世界を想像するために、言葉による見方考え方を働かせ生徒自ら、また協働的な交流によって新たな世界を見出すことができた。しかし、公開研究会でも指摘された通り後半の「クラスの歌集を編む」場面においては、ダブルスタンダードとなり、「表現に着目すること」と「クラスのテーマに合わせた歌を選ぶ」という基準になり、やりたいことが拡散してしまった。主体的学習に取り組む態度の評価についても粘り強さと自己調整という2つの側面を単元の中で主に評価する時間を設定し、評価の実際を行ったが、評価の客観性を考えあわせてどのような基準で評価するのか、さらにどのような記述が振り返りや「撰者より」から出てくればAかなどの基準を設けることの難しさや、その評価の客観性や生徒自身がメタ認知できるのかといった課題が出された。

【Word Bank】の取り組み

Google work space を利用した語彙学習を積極的に活用し、振り返りがすぐに行えるように自分のクラウド上に語彙を書き留める取り組みを行っている。新たな言葉を積極的に取り入れていく方法を実践し、「Word Bank」として生活の様々な場面で得た新しい言葉を蓄積していくようにしていきたい。今年度の反省として、言葉の蓄積には附属ワークシートなどの取り組みによって一定の成果が出たが、その使用を念頭に置いた使える言葉の広がりという面が課題となる。そこで単元の中でも振り返りと同時に言葉の振り返りも同時に行い、日常の中で使うことのできる生きた言葉の獲得を目指したい。

まず蓄積するときに、感情を表す言葉や、動作を表す言葉など意味を分類して保存していくことにより、言葉の意味だけを理解し、蓄積していくだけではなく、自分の言葉として使えるものにしていきたい。さらに授業や日常の中で単独で獲得していく言葉と、作品の中で出会う言葉を整理し、どのような場面で使うことができるかなどより良い活用法についてさらにブラッシュアップして考えていきたい。

【参考文献】

文部科学省 中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 国語編 2018
文部科学省 国立教育政策研究所「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料 2020
山梨大学教育学部附属中学校 研究紀要 2017-2019
鹿毛雅治『学習意欲の理論』金子書房 2013
鹿毛雅治『授業という営み——子どもとともに「主体的に学ぶ場」を創る』教育出版 2019
第3期教育振興基本計画 2018

社会における諸課題に向き合い、主体的に解決しようとする生徒の育成

～「主体的な学び」の実現を目指して～

梶原 隆一 奥田 陽介 塚越 武史 進藤 秀俊

1. 研究主題設定の理由

(1) 主題設定の背景

ア. 中学校学習指導要領（平成 29 年告示）

中学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説では、改訂の経緯を、以下のように説明している。

今の子供たちやこれから誕生する子供たちが、成人して社会で活躍する頃には、我が国は厳しい挑戦の時代を迎えていると予想される。生産年齢人口の減少，グローバル化の進展や絶え間ない技術革新等により，社会構造や雇用環境は大きく，また急速に変化しており，予測が困難な時代となっている。

子供たちを取りまく「社会」は決して固定的に捉えられるものではなく，加速度的に，しかも複雑に変化し，予測困難になっている。また，大きく変化する社会が，必ずしも子供たちにとってプラスの影響だけを与えるわけではないことも銘記したい。

そのような社会にあって必要なことは，よりよい社会となるよう一人ひとりが現状に満足することなく，自ら課題を見出し，その解決を目指して考え，行動し続けることである。学校教育の使命の一つは，「よりよい社会の創り手」を育むことにあると考える。

イ. 本校社会科で育みたい資質・能力

中学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説社会編では，社会科の目標を以下のように示している。

「社会的な見方・考え方」を働かせ，課題を追究したり解決したりする活動を通して，広い視野に立ち，グローバル化する国際社会に主体的に生きる平和で民主的な国家及び社会の形成者に必要な公民としての資質・能力の基礎を次のとおり育成することを目指す。

さらに，育成を目指す資質・能力を三つの柱に沿った形で以下のように示している。

知識及び技能	思考力，判断力，表現力等	学びに向かう力，人間性等
我が国の国土と歴史，現代の政治，経済，国際関係等に関して理解するとともに，調査や諸資料から様々な情報を効果的に調べまとめる技能を身に付けるようにする。	社会的事象の意味や意義，特色や相互の関連を多面的・多角的に考察したり，社会に見られる課題の解決に向けて選択・判断したりする力，思考・判断したことを説明したり，それらを基に議論したりする力を養う。	社会的事象について，よりよい社会の実現を視野に課題を主体的に解決しようとする態度を養うとともに，多面的・多角的な考察や深い理解を通して涵養される我が国の国土や歴史に対する愛情，国民主権を担う公民として，自国を愛し，その平和と繁栄を図ることや，他国や他国の文化を尊重することの大切さについての自覚などを深める。

そして、中学校学習指導要領（平成 29 年告示）で示している社会科の目標及び育成を目指す資質・能力に本校生徒の実態や課題点を踏まえて、本校社会科では育成したい資質・能力を以下のように考えてきた。

- ・ 社会で見られる（た）様々な事象や課題等に関することを理解するとともに、課題解決に向けて諸資料から様々な情報を調べ、既知の事象と関連付けたり、まとめたりすることができる。
- ・ 社会における諸課題について、他者の考えに触れながら多面的・多角的に考察し、その解決に向けて考え、新たな価値を創造し、周囲と議論すること。また、様々な方法で表現することができる。
- ・ よりよい社会の実現のために、新たな課題を見出したり、他者の考えも参考にしながら、自分に何ができるのかを判断していこうとしたりすることができる。

ウ. 全体研究

本校全体研究では、「創造性に富んだ、未来を切り拓く生徒の育成」を主題に掲げ、研究を進めている。「創造性」とは、「自ら課題を見出し、その解決に向かって、これまでに学んだことや新たな知、技術革新を結び付けて、新たな価値を創造するための資質・能力」である。社会科の学びを通して育みたい「創造性」とは、大きな時代の変化の中で、「よりよい社会」という新たな価値を創るという視点で、社会課題を見出し、その解決に向かって、学んだことや新たな知、技術革新を結び付けて解決を目指すことであると考えます。

そして、昨年度までの研究の成果と課題を生かして、『主体的な学び』の具体像の深化、『主体的な学び』の評価、「評価規準の設定と生徒への支援」について重点的に取り組む。特に、評価については1年次の成果と課題や昨年度の校内研究会に招聘した山梨大学田中准教授の助言などをもとに、『主体的に学習に取り組む態度』の評価の枠組みを設定し、各教科で次の通り実践を重ね、「主体的な学び」に向けた指導と評価のあり方について研究を深めたい。また、「主体的な学び」を表出させる方法として「振り返りのワークシート」が活用されているが何を記述させれば生徒の学びの姿を捉えることができるのか、具体的にどのような支援が考えられるのか深めたい。そして、一人一台パソコンが実現している学年については、ICTを活用した振り返りを実践したい。

(2) これまでの研究の歩みから

平成 29 年度から昨年度までの3年間は、テーマを「社会の形成者としての資質・能力を育む授業の創造 ～社会科における『見方・考え方』を働かせた学びを通して～」と掲げ、「社会的な見方・考え方」を働かせた学びのあり方や、その学びを通して育まれた資質・能力を見取るための評価の工夫について研究を行った。

① 「見方・考え方」を働かせた学び

本校社会科では、学習指導要領（平成 29 年告示）で示された「現代社会の見方・考え方」、「地理的な見方・考え方」、「歴史的な見方・考え方」の3つの「見方・考え方」を、それぞれの分野の学習でのみ働かせるものではなく、必要に応じて3分野のどの学習においても働かせるべきものであると捉えた。3つの「見方・考え方」をすべて、もしくは一部を働かせることによって、社会的事象を多面的・多角的に捉え、より深い学習が可能となると考えた。図1は、この捉え方を図式化したものである。

また、生徒が自ら「見方・考え方」を働かせられるようにするには、「教材研究の段階で、教師自身が『見方・考え方』を働かせること」、「視点や考察の方法に着目して、毎時間の学習課題の質を高めること」が有効であることが見えてきた。

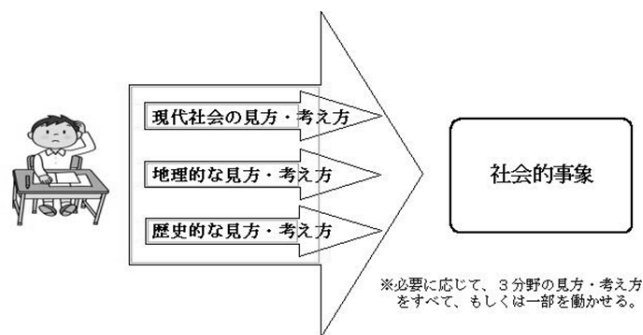


図1 本校社会科の考える「見方・考え方」

② 資質・能力を見取るための評価の工夫

ア. 「学習の記録」

「学習の記録」とは、毎時間の授業の「まとめと振り返り」、単元全体の「まとめと振り返り」を記述させるためのワークシートである。

「学習の記録」のまとめから、生徒に「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」が身についたかを見取ることができた。

また、毎時間の授業後や単元の学習後に、社会科で育みたい資質・能力を育むことをねらって設定された「単元の学習課題」に対して、「その解決にどこまで近づけたか」、「次回からの学習で何を学ぶことが必要か」などを問うことで、学んだことを羅列させるのではなく、資質・能力ベースで自分自身の学びを振り返らせることができた。単元を重ねるごとに、生徒の記述にも深まりが見られ、前の授業や前の単元での学びを活かして、学習課題の解決に取り組もうとする場面が増えた。授業や単元の学習のはじめに、何人かの生徒の記述を共有したり、「学習の記録」に教師がフィードバックを行ったりすることを通して、生徒の学びを軌道修正したり、深めさせたりすることができた。

イ. パフォーマンス課題とルーブリック

すべての単元において、社会科で育みたい資質・能力を育むことができたのかを評価するためのパフォーマンス課題を設定した。パフォーマンス課題に対する生徒の取り組みは、教師が評価し、単元の学習の総括的評価として扱い、評定に用いる評価として活用し、次の単元の学習に生かせるよう生徒へのフィードバックを行った。

また、生徒自身にもルーブリックを用いての自己評価、または生徒同士の相互評価を行わせることを通して、生徒に自らの学びを振り返らせることができた。毎回のパフォーマンス課題の自己評価を終えたところで、ルーブリックそのものの評価や修正も行わせた。ルーブリックを評価したり、修正したりするには、単元の学習においてどのような資質・能力を高めればよいのかを認識する必要がある。そのため、この学習活動を通して、生徒自身に自らの目指すべき目標を自覚させ、自らの学びの振り返りを深めさせることができた。

③残された課題

明確な規準をもって、自らの学びを振り返らせ、次の学びにつなげさせられたという点においては、「学びに向かう力、人間性等」を育むことができたといえるが、「主体的」と問われれば疑問が残る。教師のフィードバックなどの支援を受けながら、生徒自身が学び方や振り返り方、振り返りの活かし方を考え、工夫して学びを進めていくという意味における「主体的な学び」を実現するための取り組みが必要であると考えられる。

2. 主題について

社会における諸課題に向き合い、主体的に解決しようとする生徒の育成 ～「主体的な学び」の実現を目指して～

本校社会科では、「昨年度までの研究の成果と課題」、「生徒の実態」及び「研究の背景」を踏まえて、主題を上記のように設定した。

グローバル化、外国人労働者の受け入れ拡大、第4次産業革命の急速な進展、少子高齢化などを背景に、日本の社会構造や産業構造、雇用環境は大きく、急速に変化している。また、多様なルーツや価値観をもつ人々が混在する社会となっている。その中で、身近な地域や国内、世界全体など様々なレベルで問題が発生している。そうした問題を、自分自身や社会全体との関わりの中で捉えたものが「社会における諸課題」である。

「社会における諸課題」を「自分事」として捉え、その解決に向かって、自らの考えや学びを振り返り、視点や方法を工夫しながら考察したり、構想したりすることができる生徒を育てたい。

そして、本主題は主体的に学ぼうとする態度の育成に重点を置きながらも、3つの資質・能力を一体として育んでいく。そのために、一昨年度までの研究主題であり、本校社会科で培ってきた「見方・考え方」を働かせた学びやパフォーマンス課題等も意識した「主体的な学び」を目指していきたい。また、研究主題実現のために昨年度の研究を生かしたプロセスモデルの活用、特に方略調整の場面での取捨選択や課題に対して根拠の検討など生徒自身が学習調整をおこない、学習課題の解決に取り組む「主体的な学び」を実現するために本年度の研究主題とした。

3. 研究内容

(1) 1年次の研究

1年次は、「主体的な学び」の実現を目指して、研究を行う。具体的には、全体研究で示された「主体的な学び」のプロセスモデルを活用して、「主体的な学び」の有り様を明確にし、その実現のためにどのような手立てが必要か研究を行う。また、「主体的な学び」が実現されたかを見取る「主体的に学習に取り組む態度」の評価について、その評価方法や評価場面、評価規準、フィードバックの方法などについて研究を進めた。

ア. 「主体的な学び」のプロセスモデルを踏まえた単元構想

単元を構想する際に、「主体的な学び」のプロセスモデルをもとに、課題解決型の学習になるようにする。また、毎時間の授業を「主体的な学び」のプロセスモデルの各過程に位置づける。単元の学習内容によっては、すべての過程に位置づけることは難しい場合もあるが、「学びをつなぐ」という意味で重要な「振り返り」、「方略調整」、「全体の振り返り」については、必ず設定したい。以下に、公民的分野の「民主政治と私たち」という単元を例として示した。

《例》公民的分野「民主政治と私たち」

○単元を貫く問い（単元全体の学習課題）

「民主的な政治とはどのような政治か？そしてどのようなしくみが必要か考えよう。」

○単元の目標

- ・ 政党の役割，議会制民主主義の意義，多数決の原理とその運用の在り方について理解することができる。

【知識及び技能】

- ・ 民主政治の推進と，公正な世論の形成や選挙など国民の政治参加との関連について多面的・多角的に考察し，表現することができる。

【思考力，判断力，表現力等】

- ・ 民主政治と政治参加について，現代社会に見られる課題の解決を視野に主体的に社会に関わろうとする。

【学びに向かう力，人間性等】

○単元の指導計画（全8時間）

時	題材名	学習課題	「主体的な学び」のプロセスモデルの過程
1	民主的な政治のあり方①	単元を貫く問いを考えよう。	目標設定 方略計画
2	民主的な政治のあり方②	「民主的な政治」の種類と議決方法の特徴は何か？	遂行 振り返り
3	民主的な選挙のしくみ	「民主的な選挙」の原則と日本の選挙制度は何か？	遂行
4	実際の選挙から見る日本の選挙制度の特徴と課題①	実際の選挙から考えられる日本の選挙制度の特徴は何か？	遂行
5	実際の選挙から見る日本の選挙制度の特徴と課題②	実際の選挙から考えられる日本の選挙制度の課題は何か？	振り返り
6	投票率の推移から考える選挙のあり方①	投票率の推移の特徴と原因は何か？	遂行
7	投票率の推移から考える選挙のあり方②	投票率を上昇させるために必要なことは何か？	振り返り 方略調整
8	民主的な政治を目指すための政治参加	政治参加をするために必要なことは何か？	遂行 全体の振り返り

イ. 「主体的に学習に取り組む態度」の評価の工夫

本校社会科でこれまで取り組んできた「学習の記録」を活用して、「主体的に学習に取り組む態度」の評価を行おうと考えている。「学習の記録」に、「主体的な学び」のプロセスモデルにおける「振り返り」，「方略調整」，「全体の振り返り」について記述する枠を設定する。「振り返り」や「方略調整」については，教師がコメントを行ったり，生徒同士で記述内容を交流させたりして，生徒自身が「自らの学びを調整する」ことにつなげていきたい。また，「全体の振り返り」については，「単元での学びの質や成果を振り返っているか」，「次の単元での学びにつながるような振り返りをしているか」，「単元の学習に粘り強く取り組もうとしていたか」という点に着目して評価したい。

「主体的に学習に取り組む態度」の評価は，生徒の学びそのものを評価するものなので，単元の最後には「知識・技能」や「思考・判断・表現」の観点から資質・能力が育まれたかを見取るための小テストを行い，その小テストの到達度を踏まえて，「主体的に学習に取り組む態度」の評価を行う必要がある。

ウ. 残された課題

令和2年度の実践では地理や公民において「主体的な学び」のプロセスモデルを踏まえた単元構想の作成や評価の工夫を行ってきたが、次の点で課題が出てきた。まず、プロセスモデルを踏まえた実践では単元全体の見通しと振り返りの場面設定を位置づけ、形成的評価と総括的評価を行う単元を見据えた広い単元構想の計画が必要であることが分かった。また、実際に実践を試みると方略調整やまとめの時間に時間がかかるので、従来の単元計画時数では困難な場面も出てきた。そのため、必要に応じて単元計画の見直しや授業で行う場面と次時までの課題として取り組ませる場面も必要であるという意見も出た。そして、令和2年度の実践では地理や公民のように単元全体で一つの主題に取り組む実践を行ったが、歴史の単元についてはまだ実践が進んでいなかった。歴史のように1時間ごとに取り扱う事象が異なる学習では方略調整はどのように取り組んでいくのか、また主題設定も時代を貫くような抽象的な主題になりかねないのではという反省もあった。

(2) 2年次の研究

2年次は、1年次の研究の成果と課題を踏まえ、「主体的な学び」の実現を目指して、研究を行う。具体的には、全体研究で示された『『主体的な学び』の具体像の深化』、『『主体的な学び』の評価』、『評価規準の設定と生徒への支援』について重点的に取り組む。また、社会科としての課題であった形成的評価と総括的評価を行う場面の共有および単元構成の見直しについても研究を深めた。

ア. 「主体的な学び」のプロセスモデルを踏まえた単元構想

単元を構想する際に、「主体的な学び」のプロセスモデルをもとに、課題解決型の学習になるようにする。また、毎時間の授業を「主体的な学び」のプロセスモデルの各過程に位置づける。単元の学習内容によっては、すべての過程に位置づけることは難しい場合もあるが、「学びをつなぐ」という意味で重要な「振り返り」、「方略調整」、「全体の振り返り」については、必ず設定したい。特に、単元を貫く問いを授業者が設定し、生徒は毎時間単元全体の問いについて振り返り、形成的評価や方略調整が意識できる単元、授業づくりを目指す。

イ. 「主体的に学習に取り組む態度」の評価の工夫

本校社会科でこれまで取り組んできた「学習の記録」を活用して、「主体的に学習に取り組む態度」の評価を行おうと考えている。昨年度は、「学習の記録」に、「主体的な学び」のプロセスモデルにおける「振り返り」、「方略調整」、「全体の振り返り」について記述する枠を設定し、「振り返り」や「方略調整」については、教師がコメントを行ったり、生徒同士で記述内容を交流させたりして、生徒自身が「自らの学びを調整する」ことにつなげた。一方で、生徒同士の交流では評価の観点を示すことや生徒同士でどの部分まで評価するのかなど課題も残った。また、「全体の振り返り」については、昨年度は「単元での学びの質や成果を振り返っているか」、「次の単元での学びにつながるような振り返りをしているか」、「単元の学習に粘り強く取り組もうとしていたか」という点に着目して評価を試みた。今年度も振り返りのワークシートを工夫し、相互に自己調整や評価ができるように目指していきたい。

また、GIGAスクール構想の実現として振り返りのワークシートを電子化し、より活用の幅を広げ、生徒の評価や学習の深まりに生かしていきたい。

そして、「主体的に学習に取り組む態度」の評価は、生徒の学びそのものを評価するものなので、単元の最後には「知識・技能」や「思考・判断・表現」の観点から資質・能力が育まれたかを見取るために学習前・学習中の自分との比較をさせる記述から評価を行う必要がある。

5 これまでの実践事例

【実践1】令和3年7月2日（月）第1回事前研究会 〈3学年歴史的分野：進藤 秀俊〉

(1) 単元名「日本の近代」

(2) 指導観

本単元は、大単元「日本の近現代」の一部としての設定されている。日本の近代と現代の歴史はつながりが強く、1つの大単元としてくり、相互に関連させて学習させることで、原因や結果、影響などをより深く理解させることができると考えた。また、大単元を貫く問いとして、「日本の近代とはどのような時代であったか、またそれは現代にどのような影響を与えたのか」を立て、単元の学習を終えるごとに、問いに答えさせることとした。それによって、各単元の位置づけが明確になり、大単元全体で「主体的な学び」のプロセスモデルを実現できると考えた。さらに、近代の歴史を踏まえて、現代の歴史を捉えるだけでなく、現代の歴史を学んだ後で近代の歴史を振り返り、再評価する学習活動を仕組むことができ、生徒のより深い理解につながれると考えた。ちなみに、『指導と評価の一体化』のための学習評価に関する参考資料では、学習指導要領の中項目をいくつかつなげた形で単元を設定し（本実践においては大単元）、「技能」や「思考・判断・表現」、「主体的に学習に取り組む態度」の評価場面を精選することが想定されている。

本単元の指導においては、自分なりの視点をもって日本の近代を捉えられるよう、学級全体として「歴史を学び、自分なりの時代像を考える際の視点」を考案し、「歴史の目」と名付けて共有することとした。これについては、前単元までの学習において、単元終末の授業に生徒たちに学習した歴史を振り返らせ、その時代像を述べさせる活動を仕組んだ。その時代像を捉える際の「考え方」を出し合い、共通する点を整理する中で少しずつ練り上げていった。共有した「歴史の目」を選択して、日本の近代を説明させる形にすることで、生徒観で述べたような課題の改善に近づけたり、生徒同士が互いの意見を理解しやすくしたりすることができると考えた。これは、一昨年度まで本校社会科で取り組んでいた「教科ならではの見方・考え方」についての研究の成果を活かしたものである。本単元までの学習において生徒ともに考案した「歴史の目」は、次の表の通りである。

表「歴史の目＝歴史的分野の学習における『考え方』」

考え方	内容
時系列	「時系列」に並べ、そのつながりを見て考える。
変化と継続	「変化」や「継続」に着目して考える。
比較	2つ以上のものを「比較」して考える。
関連、原因・結果や影響	2つ以上のものを関連づけて考える。
大きな流れを見る	時代の大きな流れに着目して考える。
転換点	各時代の「転換点」となる事象に着目して考える。
複数の立場	複数の立場に着目して考える。
多面的	事象をいくつかの側面に着目して考える。
現代と結びつける	現代の世界や日本と結びつけて考える。

(3) 本単元における「主体的な学び」の姿 ※（ ）内は「主体的な学び」のプロセスモデルの学習過程

本単元では、「主体的な学び」のプロセスモデルをもとに、「日本の近代」像を自分で選択した「歴史の目」に基づいて考えさせる学習を行う。前単元までの学習内容を踏まえて、自分なりに「日本の近代」像を考えさせた上で、その時代像をより高いレベルのものにするという目標を設定させるところから単元の学習を始める。

(目標設定)「日本の近代」像を考える手立てとして、学級で共有したものの中から1つ「歴史の目」を選択させる。(方略計画) 続けて、さまざまな「歴史の目」を活用して、実際に「日本の近代」像を考え、より適切な

「歴史の目」を探る学習を繰り返し行う。(遂行・振り返り) 単元末には、各自で「歴史の目」を選択させ、「日本の近代」像を自分なりに考えさせるとともに、他者との交流などを通して自らの考えを深めさせ、「日本の近代」をより効果的に説明することができる「歴史の目」を改めて選択させる。(振り返り・方略調整) 単元末には、自らの「学び方」を振り返らせ、その成果と課題を次の単元の学習に活かさせる指導を行う。(全体の振り返り)

本校社会科では、「社会における諸課題に向き合い、主体的に解決しようとする生徒の育成」を目指している。「主体的に解決しようとする」とは、「課題」に対して「自分事」として捉え、解決に向かって、自らの考えや学びを振り返り、視点や方法を工夫しながら考察したり、構想したりすることである。これは、「主体的な学び」のプロセスモデルの「振り返り・方略調整」の学習過程に当てはまるものである。また、昨年度までの実践において、教科研究会などで多くいただいたご意見が、「主体的な学び」のプロセスモデルの「方略調整」を生徒自身が行えるようにする工夫がもっと必要なのではないかという点であった。以上のことから、本単元ではとくに「方略調整」に重点を置いて授業を仕組みたい。

(4) 本単元における「主体的に学習に取り組む態度」の評価

全体総論で示された『「主体的に学習に取り組む態度」の評価の枠組み』に基づき、評価規準を定めた。具体的には、単元の「主体的に学習に取り組む態度」の評価規準を「よりよい社会の実現を視野に「歴史の目」を取捨選択しながら「日本の近代」像を追究しようとしている。」を「おおむね満足している」状況(B)とした。また、「十分満足できる」状況(A)については、生徒が実現している学習の状況が質的な高まりや深まりをもっていると判断される時であり、多様な状況が考えられる。また、「努力を要する」状況(C)の生徒に対しては、「考え方」の選択方法などについてフィードバックしたり、学級内の他の生徒の意見を紹介したりしたい。

本単元では、上述の通り「方略調整」に重点を置いているため、「歴史の目」を選択し、「日本の近代」像を自分なりに考える場面における「主体的な学習に取り組む態度」の評価(第7時)を「評定に用いる評価」として扱う。また、『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料 中学校社会』において、「主体的に学習に取り組む態度」の評価については、「自らの学習状況を把握し、学習の進め方について試行錯誤するなど自らの学習を調整しながら、学ぼうとしているかどうかという意思的な側面を評価することが重要である。」と示されていることから、「全体の振り返り」にあたる単元終末の授業における生徒の振り返り場面の評価(第8時)も「評定に用いる評価」として扱う。

「主体的な学び」を表出させる手段としては、ワークシートを活用する。具体的には、生徒が「日本の近代」像を考える過程において、どのように「歴史の目」を取捨選択したのか、またなぜその「歴史の目」を選択したのか記述させる。また、毎時間の振り返りと単元全体の振り返りを記述できるワークシートを用意し、単元終末の授業後に、「粘り強く学習に取り組む」側面と「自己調整しながら学ぶ」側面に関わる学習状況について記述させる。

(5) 本単元における「社会における諸課題」に向き合うこと

本校社会科では、歴史的分野において「社会における諸課題に向き合う」とは、(i)現代の世界や日本、地域に見られる諸課題との関わりの中で歴史的な事象を捉えること、(ii)歴史の授業で学ぶ各時代において課題となっていたことを捉え、学びに向かうことであると考えている。

本単元が含まれる大単元を貫く問いでは、「近代と現代との関わり」について考えることになる。そのため、本単元においては、(i)であると考えている。現代の歴史には、中学校ではまだ学習していない段階であるが、小学校での既習事項や地理的分野の学習を通して、現代の日本についての知識は一定程度もっているはずなので、それらを活かしながら「日本の近代」の歴史を捉えさせたい。

(6) 単元の指導目標

- (i) 欧米における近代社会の成立とアジアの諸国の動き、明治維新と近代国家の形成、議会政治の始まりと国際社会との関わり、近代産業の発展と近代文学の形成、第一次世界大戦前後の国際情勢と大衆の出現などを基に近代の特色を理解することができる。 【知識及び技能】
- (ii) 近代の日本と世界を大観して、「歴史の目」を選択し、時代の特色を多面的・多角的に考察し、表現することができる。 【思考力、判断力、表現力等】
- (iii) よりよい社会の実現を視野に、「歴史の目」を取捨選択しながら、「日本の近代」像を追究することができる。 【学びに向かう力、人間性等】

(7) 単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
欧米における近代社会の成立とアジアの諸国の動き、明治維新と近代国家の形成、議会政治の始まりと国際社会との関わり、近代産業の発展と近代文学の形成、第一次世界大戦前後の国際情勢と大衆の出現などを基に近代の特色を理解している。	近代の日本と世界を大観して、工業化の進展と政治や社会の変化、明治政府の諸改革の目的、議会政治や外交の展開、近代化がもたらした文化への影響、経済の変化の政治への影響、戦争に向かう時期の社会や生活の変化、世界の動きと我が国との関連などに着目して、事象を相互に関連づけるなどして、近代の特色を多面的・多角的に考察し、表現している。	近代の日本像について、よりよい社会の実現を視野に、仲間と交流したり、自己と対話したりしながら、学習課題を解決しようとしている。

(8) 単元の「指導と評価」計画 (全9時間) ●…学習改善につなげる評価 ○…評定に用いる評価

回数	主な学習内容	知	思	態	主体的な学びのプロセスモデル
1	これまで学習した「日本の近代の歴史」をまとめる。	●		●	【目標設定・方略計画】 ・単元の目標に沿った自分なりの目標を立てる。 ・これまでの学習の成果を活かし、「日本の近代の歴史」を説明するのに効果的な「考え方」を選択する。
2	「複数の立場」「多面的」の「歴史の目」を活かして日本の近代を説明する。		●	●	【遂行】【振り返り】 ・様々な「歴史の目」を活用して、日本の近代を説明する。 ・それぞれの「歴史の目」の良さや課題について振り返る。
3	「変化と継続」「比較」「関連、原因・結果や影響」の「歴史の目」を活かして日本の近代を説明する。		●	●	
4	「大きな流れ」「転換点」「現代と結びつける」の「歴史の目」を活かして日本の近代を説明する。		●	●	
5	「考え方」を選択し、「日本の近代の歴史」を説明する。	○	●		【遂行】 ・これまでの学習の成果を活かし、自分が

					効果的だと考える「歴史の目」を選択し、日本の近代を説明する。
6	自分が選択した「歴史の目」を振り返り、改めて選択する。			○	【振り返り】【方略調整】 <ul style="list-style-type: none"> ・仲間との交流を通して、自分が選択した「歴史の目」の効果について振り返る。 ・振り返りを活かし、単元を貫く問いの解決により効果的な「歴史の目」を改めて選択する。
7	自分が選択した「歴史の目」を活用して、「日本の近代の歴史」について説明する。			○ ○	【遂行】【全体の振り返り】 <ul style="list-style-type: none"> ・これまでの学習の成果を活かし、自分が効果的だと考える「歴史の目」を選択し、日本の近代を説明する。 ・単元の学習を通して、自らの目標達成のために努力し続けたことや工夫したことを振り返る。 ・単元の学習の成果と課題を次の学習にどのように活かすか考える。

(9) 成果と課題

「方略調整」に焦点を当て、「歴史の目」についてその良さと課題を検討したり、日本の近代について説明する上で効果的だと考える「歴史の目」を選択したりする学習活動に取り組みさせた。その中で、日本の近代について多面的・多角的に考えさせたり（資料Ⅰ）、「歴史の目」の特徴を理解させたり（資料Ⅱ）することができ、単元の目標のうち、とくに「思考・判断・表現」の達成に近づけさせることができた。

複数の立場	政治家と大衆(雑俎)	労働運動やデモなど強まり力を持った時代。 →大衆文化なども 政党政治が本格的に始まった時代。
変化と継続	外国との関係(外交)	外国と手を組むようになり、帝国主義の動きも拡大していきようになった(特許) 朝鮮半島を日本の支配化に入れようとした時代。
比較	文化(元禄や化政文化と)	欧米の文化がとり入れられた。また、一部の身分の人だけでなく大衆力をもつようになり、大衆文化が広がった時代。
関連原因・結果や影響	戦争	領土を拡大(特に朝鮮半島へ)しようとして、日清、日露戦争を行い、第一次世界大戦にも参戦した。しかし、支配できた領土は少なく、国民は多額の税の負担を負った時代。

資料Ⅰ：表の真ん中の列には「着目点」について記述している。多様な立場・側面に着目している。

歴史の目: 転換点

最終的に選んだ理由
 近代は全体的に見て変化した時代というよりはどの目で見るかと思うけど、「○○が起
 こって○○から変わった」という根拠を見い出せないのでなら転換点が一番
 分かりやすいと知りから。

例えるとして...
 何も変わらない、直った道があったとして、急にまがり角があったら道は曲がって
 別の方向に向かってくる。その曲がり角が転換点。
 → 転換点は変化の理由、根拠。

資料II: 生徒が選択した「歴史の目」について説明している。

また、「歴史の目」と関連性が高い「歴史的な見方・考え方」を鍛えることにもつながり、この後の学習において、生徒が自ら学習方略を取捨選択し、調整しながら学ぶ「主体的な学び」の実現に近づくことができたと思える。(資料III) 生徒とともに、自分たちなりの「目」を練り上げ、それらを活用して学びを進めることは、社会科の学習を通して育みたい資質・能力の育成に効果的であるといえる。

6 それぞれの歴史の目には必ず似ているものがある、その違い、良さを明らかにすることで、よりよい歴史の目が見つけられると思った。

それぞれの歴史の目の良さをみただけでなく、課題点を明らかにして、毎時間 どの歴史の目
が適しているのか考えた。

資料III: 授業の振り返り(上)と単元の振り返り(下)

学習方略について考えを深め、自らの学びにつなげようとしている。

一方で、生徒の記述や活動の様子から、単元を貫く問いの解決への意識が薄れてしまうこと、歴史的な事象そのものへの思考が欠如してしまい、思考力が高まらないことが課題として挙げられる。単元を貫く問いの解決への意識が薄れてしまうと、学んだ知識・技能を結び付けて、思考・判断し、表現するという深い学びが実現できない可能性がある。(資料IV) 「歴史の目」はあくまで手段であり、歴史的な事実をもととして、「何が分かったか」「何を考えたか」を常に生徒に問い、表出させることが重要であるといえる。

転換点	不平等条約改正	欧米諸国に追いつくことか目標だったのが、不平等条約改正を期に領土を広げることが目標になった。
-----	---------	--

資料IV: 表の右側の列には「時代像」について記述している。

根拠が明示されておらず、歴史的な事象について深く考えられていない。

また、歴史を大観する学習において、「歴史の目」を選択させることが有効かどうか疑問も残った。「歴史の目」で捉えさせる時間軸が長すぎたため、生徒の記述した日本の近代像が、全体を網羅したものになっておらず、生徒たちなりの時代観をもたせることにはつながったが、日本の近代を「大観」させることはできなかったのではないかと考える。(資料V)「歴史的な見方・考え方」とそれを使って捉えさせる時代のスケールとの関係性については、今後も授業実践を重ね、研究を深めていきたい。

変化と継続	日本の地位と戦争	3回の戦争を経て、不平等条約改正が、日本の国際地位を上げるこれが目的になった時代
比較	男と女	性別によって、選挙権や自由に制限がされた時代
関連 原因・結果や影響	政治と運動	自由民権運動によって、政府が国民政治を行い、憲法をつくった。

資料V:表の真ん中の列には「着目点」、右側の列には「時代像」について記述している。一部にフォーカスした内容で、日本の近代全体は大観できていない。

【実践2】令和3年11月27日(土)中等教育研究会 〈1学年地理的分野:塚越 武史〉

(1) 単元名 「世界の諸地域 北アメリカ州」

(2) 指導観

学習指導要領 地理的分野 B(2)「世界の諸地域」においては、「次の①から⑥までの各州を取り上げ、空間的相互依存作用や地域などに着目して、主題を設けて課題を追究したり解決したりする活動を通して、以下のア及びイの事項を身に付けることができるよう指導する。ア 次のような知識を身に付けること。(ア)世界各地で顕在化している地球的課題は、それが見られる地域の地域的特色の影響を受けて、現れ方が異なることを理解すること。(イ)①から⑥までの世界の各州に暮らす人々の生活を基に、各州の地域的特色を大観し理解すること。イ 次のような思考力、判断力、表現力等を身に付けること。(ア)①から⑥までの世界の各州において、地域で見られる地球的課題の要因や影響を、州という地域の広がりや地域内の結び付きなどに着目して、それらの地域的特色と関連付けて多面的・多角的に考察し、表現すること。」ことが挙げられている。

本単元では、北アメリカ州を大観する学習を踏まえ、地理的な特徴やそれらを活用した人間の営みを概観させ、地域内の結び付きなどに着目して、地域的特色と関連付けて多面的・多角的に考察し、表現する学習活動を行う。また、本単元では、主にアメリカ合衆国を扱い、様々な統計資料を複合的に考察させ、導かれた振り返りが、単元を貫く問いである「アメリカ合衆国はこれからも同様に世界に影響を与え続けるのか」につながるよう構成し、毎時間の学習を通して問いの解決に結びつけていきたい。そのようにすることで、各自の「北アメリカ州」観があきらかになったり、互いの地域観の違いが明確になったりして、生徒が「地域の大観」を行うことができると考える。その際、地域を構成する特色に着目させ、地形や気候、産業、人々の生活との因果関係があり、社会の形成に大きく関わったり、その地域的特色を象徴したりする事象が重視されていることに気づかせたい。そして、地域の特色をふまえた上で、地域の持つ地球的課題に触れ、課題解決の取り組みに結びつけたい。また、「多面的・多角的」に「北アメリカ州」を捉えさせるために、根拠を説明させる際には、どの側面に着目したのか(多面的)、どの立場から考えたのか(多角的)を明確にさせたい。そして、身に付けた知識を活用することや資料やグラフから読み取ったことをつなげることが苦手であるという生徒実態を踏まえて、複数の資料を提示し、それらをつなげて考察する活動を設定する。その中で出てきた仲間 の意見を自分の考えと関連付けて、思考を整理・統合し、グループの意見として発表させることで、意見を表出すること

への苦手意識の克服につなげる。そして、授業では興味・関心をもたせるために、身近なものの写真などを導入で提示し、主体的な学びを促す。また、授業の目標を明確に示し、終末に目標に対するまとめを行う。また、学習の記録を工夫することにより、単元を貫く問いとの関連性を意識するとともに、毎時間個々が思考したことや気付いたことをキーワード等で書き込んでいくことを継続的に指導する。そうすることで、常に主体的な学びの形が作れ、受け身の授業になるが故の集中力の欠如を防ぎ、絶え間ない自己決定の場面を与えることに繋がると考える。さらに本時では、学習テーマに対して答える材料となる資料を、自ら選ばせることによって、テーマを自分のものとして捉え、自発的に考えようとする姿勢になるようにしたい。また、グループ協議では、ファシリテーターを中心に話し合いを進め、協議が滞っている場合は、より具体的な視点を与えたり、新たな問いを投げかけたりすることで、協議を活性化するように支援する。社会科の授業では4人での小グループ学習を基本とする。これは、生徒の自信の無さによる不安を軽減したり、自分の持っていない視点を補ったりする効果を狙ったものである。授業規律の徹底や、個人でじっくりと考える時間の確保が難しくなることとの兼ね合いがあるが、主体的な学びを維持するために、効果的にこの機能を利用していきたいと考える。本時では通常の小グループ学習に加えて、グループから出てきた意見を参考により良いまとめに辿り着くよう指示を出し、視点を与える。こうすることで、互いの考えを肯定的に聞き、積極的に取り込みながら建設的な話し合いが必然的に行われるものと思われる。さらに、教師と生徒の間で行われる会話においても、生徒の発言やつぶやきが、教師を介して全体に共有されたり、肯定的に取り上げられたりすることで、有用なものとして扱われるように心掛けたい。

(3) 本単元における「主体的な学び」の姿

中学校学習指導要領（平成 29 年告示）で示している社会科の目標及び育成を目指す資質・能力に本校生徒の実態や課題点を踏まえて、本校社会科では育成したい資質・能力を以下のように考えてきた。「よりよい社会の実現のために、新たな課題を見出したり、他者の考えも参考にしながら、自分に何ができるのかを判断していこうとしたりすることができる。」本単元においては「世界の諸地域」の学習を通して、その地域の特徴をとらえるとともに、その地域の抱える地球的課題について考えていく。その中で、他の生徒との意見交換や課題を深めることにより、自身の考えを深め、課題解決に向けて自分なりの意見を持つことを目指していく。

(4) 本単元における「主体的に学習に取り組む態度」の評価

教科研究ではこれまで取り組んできた「学習の記録」を活用して、「主体的に学習に取り組む態度」の評価を行っている。昨年度は、「学習の記録」に、「主体的な学び」のプロセスモデルにおける「振り返り」、「方略調整」、「全体の振り返り」について記述する枠を設定し、「振り返り」や「方略調整」については、教師がコメントを行ったり、生徒同士で記述内容を交流させたりして、生徒自身が「自らの学びを調整する」ことにつながった。また、「全体の振り返り」については、昨年度は「単元での学びの質や成果を振り返っているか」、「次の単元での学びにつながるような振り返りをしているか」、「単元の学習に粘り強く取り組もうとしていたか」という点に着目して評価を試みた。本単元においても振り返りのワークシートを工夫し、相互に自己調整や評価ができるように目指していきたい。

(5) 単元の指導目標

- (i) 世界各地で顕在化している地球的課題は、それが見られる地域の地域的特色の影響を受けて、現れ方が異なることを理解し、北アメリカ州に暮らす人々の生活を基に、北アメリカ州の地域的特色を大観し理解することができる。

【知識及び技能】

(ii)北アメリカ州において、地域で見られる持続可能な開発目標などの地球的課題の要因や影響を、州という地域の広がりや地域内の結びつきなどに着目して、それらの地域的特色と関連付けて多面的・多角的に考察し、表現することができる。【思考力、判断力、表現力等】

(iii)北アメリカ州について、よりよい社会の実現を視野に地域で見られる持続可能な開発目標などの地球的課題の要因や影響を主体的に追究しようとする態度を養うことができる。【学びに向かう力、人間性等】

(6) 単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
<ul style="list-style-type: none"> 世界各地で顕在化している地球的課題は、それが見られる地域の地域的特色の影響を受けて、現れ方が異なることを理解している。 北アメリカ州に暮らす人々の生活を基に、北アメリカ州の地域的特色を大観し理解している。 	<ul style="list-style-type: none"> 北アメリカ州において、地域で見られる持続可能な開発目標などの地球的課題の要因や影響を、州という地域の広がりや地域内の結びつきなどに着目して、それらの地域的特色と関連付けて多面的・多角的に考察し、表現している。 	<ul style="list-style-type: none"> 北アメリカ州について、よりよい社会の実現を視野に地域で見られる持続可能な開発目標などの地球的課題の要因や影響を主体的に追究しようとしている。

(7) 単元の「指導と評価」計画 (全8時間) ●…学習改善につなげる評価 ○…評定に用いる評価

時数	主な学習内容	知	思	態	評価規準 (評価方法)	主体的な学びのプロセスモデル
1	○北アメリカ州とアメリカ合衆国の課題設定			●	<ul style="list-style-type: none"> 生徒によるワークシートへの記述 話し合いの様子 	【目標設定・遂行】 <ul style="list-style-type: none"> 単元の目標に沿った自分なりの課題を立てる。 アメリカに対して知っていることを共有し、既習事項の確認をする。
2	○学習項目①「北アメリカ州の自然環境」	●			<ul style="list-style-type: none"> 生徒によるワークシートへの記述 発言の様子 	【遂行】 <ul style="list-style-type: none"> 地図を見ながら自然環境の特徴と災害について知る。
3	○学習項目②「移民の歴史と多様な民族構成」	●			<ul style="list-style-type: none"> 生徒によるワークシートへの記述 発言の様子 	【遂行】 <ul style="list-style-type: none"> アメリカの人種と移民の歴史や問題について調べる。
4	○学習項目③「大規模な農業と多様な農産物」	●	技		<ul style="list-style-type: none"> 生徒によるワークシートへの記述 発言の様子 	【遂行】 <ul style="list-style-type: none"> アメリカの農業の特色と世界との関わりについて知る。
5	○学習項目④「世界をリードする工業」	●			<ul style="list-style-type: none"> 生徒によるワークシートへの記述 発言の様子 	【遂行】 <ul style="list-style-type: none"> 地図を用いてアメリカの工業の変移と他国との関わりについて知る。
6	○学習項目⑤「アメリカ合衆国にみる生			●	<ul style="list-style-type: none"> 生徒によるワークシートへの記述 発言の様子 	【遂行】 <ul style="list-style-type: none"> アメリカ人の生活からどのような地球的課題につながるか考える。

	産と消費の問題」			・話し合いの様子	
7	○単元の目標の振り返りと再考		●	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒によるワークシートへの記述 ・発言の様子 ・発表の姿 ・話し合いの様子 ・話し合いをふまえた方略調整の姿 	【振り返り】【方略調整】 <ul style="list-style-type: none"> ・仲間との交流を通して、「アメリカ合衆国はこれからも同様に世界に影響を与え続けるのか」について振り返る。 ・振り返りを活かし、単元を貫く問いの答えとしてふさわしいアメリカの影響について改めて考える。
8	○単元の振り返りと課題発見		●	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒によるワークシートへの記述 ・発言の様子 ・方略調整を通じた全体を振り返る様子 	【全体の振り返り】 <ul style="list-style-type: none"> ・これまでの学習の成果を活かし、単元を貫く問いの答えとしてふさわしいアメリカの影響について交流を通してまとめる。 ・単元の学習を通して、自らの目標達成のために努力し続けたことや工夫したことを振り返る。 ・単元の学習の成果と課題を次の学習にどのように活かすか考える。

(8) 成果と課題

本単元では、単元を貫く問いを設定し、「主体的な学び」のプロセスモデルを踏まえた単元構想を行い、問いの解決に向けて学習活動に取り組みさせた。まず、成果では「単元全体を意識したグループ内外との交流の充実」が図られたこと、「まとめの視点の焦点化による振り返り方法の具体化」ができたことである。具体的には、単元の学習内容を課題提示、仮説、単元の学習、個人での振り返り、小グループでの意見交流、発表・全体との意見交流、個人の振り返り、という流れで行ったことで生徒を主体的に学習に取り組みさせることができた。また、小グループ活動ではファシリテーターを中心に話し合い活動が進められ、それぞれの意見を発表し互いに影響を与え合うことができた。生徒には①仮説、②単元の学習を終えた時点での自分の結論、③全体での振り返りを通じた最終的な結論、と3段階の学習過程でのまとめを提出させた。他の生徒との意見交換を通して互いの意見から学ぶものも多く、結論が変わらない生徒でも自分の立場の問題点や疑問点について触れることができた生徒がいた。多くの生徒が多面的・多角的にとらえ、まとめの内容も「方略調整」がなされたと感じられるものが多かったと考えられる（資料I）。

今回の授業実践より:学習の記録

目指す目標と内容理解の修正ができる。

中国の特徴と産業についてまとめよう。
教科書を使いながら中国の特徴をまとめる。

中国について、中国は面積が広い分、様々な気候があるから、沢山の産物などが取れるから、世界の工場と言われていると思いました。

沿岸部の特徴はどうだろう？

アジアについて、アジアはどの州よりも面積が広くて、沢山の産業があり、沢山の国や宗教がある国がある。だけどその分沢山の課題や問題がある。

課題と産業のつながりがはっきりできると良いね。

これから授業で、アジア州は面積が広い州と似ているから沢山の課題や気候を知ることが出来るか。(問題や産業について)知りたいです。

単元を貫く問いとの関わり、次時の単元へのつながり

新しい疑問や興味関心が広がる

韓国における産業と課題についてまとめよう。

韓国・東南アジアの産業・課題についてまとめよう。
ASEAN会議の言葉を探すと良いかも

東南アジアについても、東南アジアは多様な宗教を持つ国々があるから、どうやって会話・交流をしているのだろうと思いました。

中国・韓国について知り、まとめよう。

影響を及ぼすのは良いね

韓国の文化を日本が真似ていると同じように、日本の文化を他の国が真似ているのが、素晴らしいです。

まとめの変化の様子

単元のはじめ(既存知識のみの中での考え)

【あなたの仮説】(11/4)

アメリカは同様に影響を、
与え続ける。与え続けたい

その理由
アメリカは日本と貿易関係などがあるからそのつながりが消えることはないと思う。そのため影響を与えると思う。

単元の学習を終えて

【授業を改めて考えたこと】(11/9)

アメリカは同様に影響を、
与え続ける。与え続けたい

上記でも述べているがほんとにアメリカは貿易関係にありその中心の車やファーストフードなどの関わりがあるまたアメリカの課題のCO2排出は日本にも関係のあることだから。

方略調整

【最終的な結論】(11/9)

アメリカは同様に影響を、
与え続ける。与え続けたい

その理由
アメリカは他の国にはない広大な農地や有名会社の本社(AppleやMicrosoft、Google)などがあるから世界には影響を与え続けると思う。また上記のことに矛盾するようで悪いが50年、100年レベルで考えるとアメリカはそう持たないかもしれない。その理由としては中華人民共和国や大韓民国などが最近若者に人気なものが流行したりして世界的にみてレベルがどんどん上がってきていると考える。そのため近い未来ではないが50~100年という大きい規模で見るとアメリカは進出してきた中華人民共和国や大韓民国ましてや日本などにも勝てないかもしれない。そのようになるとアメリカの必要性がなくなってしまうかもしれない。でもアメリカは昔から他国と関わったり、していたこともあるためそう近い未来には影響を与えつづけると思う。

グループ交流や他グループの考えをふまえて

資料1:「学習の記録」や「単元全体を通した学習の活動」により生徒の学びが深まっている。

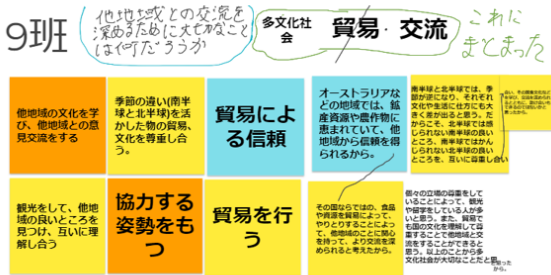
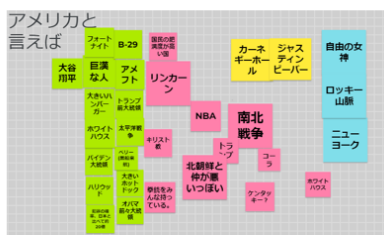
一方、課題点としては小グループでのあとにジャムボードを用いて発表を行ったが、異なった意見を持った生徒の意見が多数の意見にまとめられてしまう恐れがあった。また、今回の学習では「アメリカはこれからも影響を及ぼし続けるのか」という単元を貫く問いが「そうなる」と考える生徒が多数になり、生徒間での再検討が弱く感じられる部分となった。改善点として、次の単元ではより意見が分かれる問いを設定し(「EUの在

り方、統合はこれからも進むのか)、単元の学習においても長所と短所を明確に、より立場を明らかにして学習させる工夫を行った。また、有効な話し合い活動の推進では、ファシリテーターの育成を目指し、本校の総合的な学習の時間で行っている「ファシリテーターの心得」を社会科の授業においても活用し、異なる意見や同じ意見でも様々な視点があることを踏まえ、話し合い活動を通して様々な意見や考え方に触れる機会として進めている。

ICTによる表現の多様化では、「ジャムボードの活用」と「ロイロノートによる主体的な学びの見とり」が挙げられる。「ジャムボードの活用」では、単元の導入時に様々な既存知識を確認する方法として有用であった。また、この方法は KJ 法やベン図の活用など思考ツールとしての活用の工夫も考えられた。また、同時に複数で作業を行える点から単元のまとめを可視化することもできた(資料Ⅱ)。

ICT機器の活用による主体的な学びの姿①

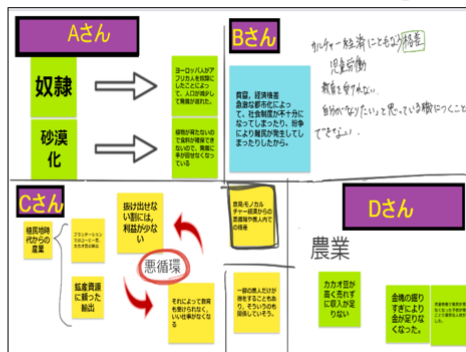
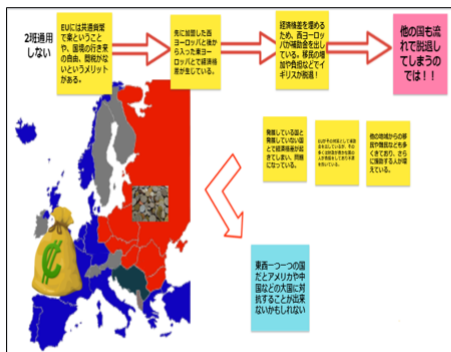
・ジャムボードの活用



(1) 単元の導入
: 地域に対するイメージとして

(2) 単元のまとめ(グループ協議)
: 意見交流やグループのまとめとして
↑上記はコロナ休校時にzoomのブレイクアウトルームを併用して。

ICT機器の活用による主体的な学びの姿①



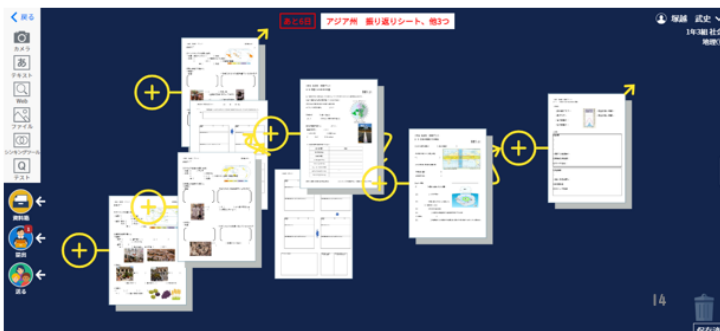
資料Ⅱ: ジャムボードを活用してグループ協議や単元のまとめの可視化に繋げる。

一方、課題点としては意見の違う考えをどのように一枚のジャムボードで表現するのか、ジャムボードの取り組みをどのように評価していくのか、作業を有用なものとするための調整役の育成などが挙げられた。ただし、生徒の考えを表現する方法としては有効な方法の1つであるので今後も活用方法を模索していきたい。

次に、「ロイロノートによる主体的な学びの見とり」では従来紙媒体で行われてきた提出や他の生徒との比較、今までの取り組みなどの確認などが容易にできるようになった。また、授業者による指導や全体との共有なども有用であった(資料Ⅲ)。本校では新型コロナウイルス感染症の広がりによってオンライン授業も行われたが、授業者と生徒、生徒と生徒を繋げる方法として活用することができた。今後も活用方法を模索し、生徒の主体的な学びの育成に繋げるとともに、評価の観点からも活用していきたい。

ICT機器の活用による主体的な学びの姿② ロイロノート

- ・生徒へのワークシートや振り返りシートの配布が容易
(9月の自宅オンライン学習中には特に活躍)
- ・提出、見とりがオンライン上であれば可能
(返却もできるのでより詳しい支援や評価に役立つ)



資料Ⅲ:ロイロノートを活用して生徒の学習の見とりや評価,指導に繋げる。

6 研究のまとめ

(1)「主体的な学び」のプロセスモデルを踏まえた単元構想

本研究においては「主体的な学び」を実現するためにプロセスモデルを用いて単元全体で学習目標を達成する実践を行ってきた。そして、プロセスモデルによる「主体的な学び」の実現には単元にプロセスモデルを当てはめるだけではなく、単元全体をとらえる視点を生徒に持たせ、課題解決型の学習にすることで生徒が意識的に自ら学ぶ姿勢を自覚できるような手だてが必要であった。その視点とは、3学年の実践における「歴史の目」や1学年の実践における「単元を貫く問い」である。また、単元全体をとらえる学習により、振り返りや方略調整を行う場面を設け、生徒が単元の学びを実感することができた。そして、プロセスモデルを用いた学習は特定の単元に留まらず、社会科の学習において各単元の学習で継続的に行うことで生徒は学習に向かう姿勢や学び方も身に付けることができた。例えば、1学年の実践では世界の諸地域の学習において6つの地域区分の学習全てで単元を貫く問いを設定し、プロセスモデルに基づいた学習をおこなったところ、最初の単元では仮説の設定や話し合い活動、最終的な振り返りで十分な理解や活動ができなかった生徒も後の単元の学習では徐々にまとめ方や話し合いの参加など変化が見られたことも大きな成果であった。引き続き各単元において課題解決型の単元構成を設定することや、話し合い活動、振り返りの方法などについて継続して取り組んでいきたい。

(2)「主体的に学習に取り組む態度」の評価の工夫

評価の工夫では各学年ともに「学習の記録」を活用して評価を行うことができた。また、単元によっては毎時間の振り返りとともに、単元の課題となる主発問を単元の学習の経過とともに振り返りながら変容を確認し

つつ評価することも行った。1つの問いを学習前、学習の途中（新たな知識や立場、他者との対話など）、学習のまとめで授業者が何度も振り返り方略調整することは生徒の学びの深まりにも繋がった。

また、ICT 機器の活用は授業者による指導や評価の比較にも有用であった。さらに、互いの感想や考え方を確認し合うことについても活用することができた。今後も機器の活用は様々な学習活動に求められる部分があるが、授業者による活用の深まりとともに主体的な学びに繋がる実践を増やしていくことが肝要である。

最後に、「学習の記録」や ICT 機器の活用はあくまで評価を見取るための方法の1つに過ぎず、引き続き、生徒間の協議の様子や学習課題に対する姿勢、成果物から判断する教師からの支援、そして成果物の達成度や変容をもとに総括的評価を行う必要がある。そのためにも学習課題の検討やプロセスモデルに基づいた単元構想、教材の研究や評価の視点などの検討と再構築が改めて大切になった。

7. 参考文献・引用文献

- ・文部科学省（2018）『中学校学習指導要領解説 社会編』東洋館出版社
- ・中央教育審議会「中央教育審議会 幼稚園，小学校，中学校，高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」（2016年12月21日）
- ・中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会「次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめについて」（2016年8月26日）
- ・「学習評価の在り方ハンドブック」, 国立教育政策研究所教育課程研究センター, 2019
- ・松尾知明（2016）『未来を拓く資質・能力と新しい教育課程～求められる学びのカリキュラム・マネジメント～』学事出版
- ・山梨大学教育学部附属中学校（2020）「山梨大学教育学部附属中学校研究紀要」
- ・国立教育政策研究所（2020）『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料』東洋館出版社
- ・田村学（2018）『深い学び』東洋館出版社
- ・鹿毛雅治『パフォーマンスが分かる12の理論』金剛出版, 2017年
- ・国立教育政策研究所（2020）『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料 中学校社会』東洋館出版社
- ・澤井陽介, 唐木清志（2021）『小中社会科の授業づくり』東洋館出版社
- ・地理教育システムアプローチ研究会（2021）『システム思考で地理を学ぶ』古今書院

考えさせる授業の創造

～ 「作業」を重視して ～ (2年次/2年計画)

小松 健一 荻原 崇 佐藤 治彰

1. テーマ設定の理由

本校数学科で目指す生徒像は、「問題の解決に向けて粘り強く、誠実に取り組もうとする生徒」「対話を通し、自他の考えを認め合いながら、考えを深めたり発展・統合したりできる生徒」である。問題に対してあきらめずに、個人としても集団としても、前向きに挑戦する生徒を育てたい。そのためには、日々の授業において、教師が積極的に関わって生徒が考える場を設定し、問題に対して誠実に向き合い、何とか解決しようと粘り強く取り組む経験を数多くさせることが大切である。そのような授業を行うために、教師は教材研究をし、授業における課題提示を工夫するなどして、生徒が主体性をもって考えたいような場をつくる必要がある。また、学習の過程において、あたかも生徒が自分で学習を深化・発展させたと感じるように、教師がうまく働きかけをしなければならない。松原(1987)は、「考えさせる授業とは、子どもに活発な自己活動をさせることである。そのとき子どもは授業に夢中になる。数学を学ぶ中に、自我の自覚があり、必然的に数学を学ぶことの必要性を直観することになるのである。」と述べており、授業の在り方として「考えさせる授業」の重要性について言及している。そこで本校数学科では、生徒に主体性をもたせながらも、生徒が考える場を教師が設定するという意味で「考えさせる授業の創造」を研究主題として設定した。また、杉山(2012)は「考える力を育てるには、考えさせる場を作り、実際に考えさせることが大切である」と述べている。ただし、教師が場を設定しただけでは「考える姿勢」や「考える過程」を教えるということは難しい。したがって、具体的な方策として、作業を重視した授業作りを推進していく。「作業」によって具体的に事象を捉えることができ、観察を続けることで、先の見通しややり直しなど、絶えず思考を継続させることができる。また、生徒が作業を通して課題に集中することができるという利点も考えられる。よって、副題を『作業』を重視して」とし、生徒の「考える力」の育成に努めたい。(本校数学科でいう「作業」は、模型をつくったり、図をかいたり、計算を繰り返したり、念頭操作をしたりなど、広い意味で捉えている。)

2. 本校数学科における「考えさせる授業」について

そもそも、「考える」とはどういうことか。杉山(2012)は、「もし、「考える」ということが「意識の流れ」をいうとすれば、人は誰でも、いつでも考えている。そのようなことを「考える」範疇にいれるとすると、考えないことなどできないことになるであろう。」と述べた上で、「考える」とは「ただなんとなく考えることを言うのではなく、そこから適切な行動が生まれ、何か価値あるものが生まれるような「考える力」を言っている」と述べている。したがって、本校数学科で「考えさせる授業」というときの、生徒が「考える」状態というのは、「意識の流れ」のような無目的なものは含めず、生徒の活発な自己活動があり、数学を学ぶことの必要性を感じたり、数学のおもしろさを感じたりできる状態である。このような状態を授業の中に創りだすことを「考えさせる授業」と捉えている。

さて、このような授業を創造するに当たり、もっとも重視しているのは、その授業で扱う題材である。松原(1987)は、「考えさせる授業は、子ども自身が考える授業であり、それには、考える時間を子どもに保証する必要がある。そして、対象なしで一般的な考え方を指導するような授業ではない。」「考えさせるとは、子どもを課題に当面させてその課題に集中させることである。そして、その課題とは各人にとっての課題なのである。その課題解決の過程で、直観も論理も働く。そして、いわゆる数学的な考え方も使われるのである。その結果、関連する既習事項が思い出され解決に至るのである。」と述べている。どのような題材を用いるかによって、その授業の展開が大きく変わる。そして、その題材を用いた授業における工夫も重要である。ここではまず、授業で扱う題材について述べ、次に授業の構成について、考えさせる授業を創造するための工夫を述べる。

(1) 授業で扱う題材について

「考えさせる授業」における題材については、次の2つの側面が考えられる。

1つ目は、生徒がたてた予想と知識の間にズレや矛盾が生じるような題材である。杉山(2012)は、生徒にとって解決が迫られる切実な現実問題を含む題材や、日常生活や社会の中にある数学が活用されている題材は「考えさせる授業」の題材として望ましいが、そのような題材はそうそう見つからない。そこで、「人は、知識のズレや矛盾に気がついたときには、そのままでは放っておけないという心理的傾向を持っている」という考えから、「生徒を知識のズレや矛盾に気づかせるような状況におくことができれば、その生徒はそれを解消しようと考え始める」と述べている。そのような問題場面に生徒を立たせることで、「その矛盾を何とか解消したい」「その原因を探りたい」という強い思いをもたせたい。

2つ目は、多様な解決方法があるような問題を設定できる題材である。考えさせる授業の題材は、単にその問題だけを解決することにねらいがあるわけではない。その問題に含まれる数学的な構造をつかむことに真のねらいがある。数学的な構造をつかむことができれば、数値が変わったり、問題場面が変わったりしても、数学を使って問題を解決することができるからである。時には、構造をつかむなかで、数学の美しさに気付き感動するような文化的な価値を感じさせたい。

どちらの題材であっても、「考えさせる授業」をするために、教師は、その題材の数学的な背景まで含めた全体構造について研究しておく必要がある。その上で、生徒の考え方の傾向や生徒のもつ常識などを踏まえて予想される生徒の反応について丁寧に分析しておかなければならない。すなわち、教材研究こそが「考えさせる授業」をつくる上で最も重要だといえる。このような入念な教材研究の上に立って、初めて授業の中で生徒に考えさせることができるのである。

(2) 授業の構成について

導入の過程においては、生徒がその問題を何とかして解決したくなるように、生徒をその問題場面に引き込むような工夫が重要となる。具体的には、生徒に与える情報を、映像や写真で与えるのか、数値データで与えるのか、実際に図をかいいたり、模型を作らせたりするのかなど、さまざまな要素が考えられる。さらに、数値を扱う場合には、その数値についても後の活動を想定して、吟味を重ねて設定する必要もあろう。いずれにしても、授業の導入の過程がうまくいけば、生徒はその活動にのめり込み、教師が指示をしなくとも考え始めるであろう。

展開の過程においては、生徒が問題に取り組み、試行錯誤をしている場面が想定される。生徒が夢中になって問題に取り組んでいるときには、十分な時間を確保して生徒の思考に委ねることが大切である。生徒が誤った方向に向かっていたり、行き詰まっていたりしている様子がみられても安易にヒントを与えて誘導するようなことはせず、じっくりと粘り強く考えさせるのである。生徒の誤りや行き詰まりは必ずしも悪いものばかりではなく、それを客観的に見直すことによって正しい考えや向かうべき解決へと思考が進むこともある。この解決の過程が「考える」ことであり、生徒に活動させることが「考えさせる授業」である。また、本校数学科でこれまで研究してきた「作業」は、自分の思考を客観的に見直す上での手立てとなった。また、教師が生徒の「作業」の様子をつぶさに観察し、他の生徒にとってよい刺激となる生徒の考えを全体で取り上げて、共有させることも有効である。それによって、生徒は教材について別の視点から見たり、自分の考えを改めて見直したりすることができる。教師は、どのようなタイミングで生徒に自分の思考を客観視させるかを見極めることが大切である。杉山(2012)は、授業は、個人内で行われる思考が外に現れたものであり、そこで行われる外的な問答、対話が内的な思考を育てると述べている。このことから、授業内で、生徒がメタ認知できるような工夫をしたり、グループやペアを活用して、他の生徒との相互作用を促すような工夫をしたり、さまざまな方法を用い、生徒の「考える力」を育てたい。

まとめの過程においては、生徒一人ひとりの考えや小グループごとの考えなどを全体で共有したり、共通点や相違点を見いだしたりして、学習内容を統合的にとらえてまとめたり、そこからさらに発展的にとらえて別の課題につなげたり、いわゆる練り上げの過程を大切にしたい。その中で、生徒が「なるほど」と感情に納得を与えられる授業が「考えさせる授業」である。

3. 本校数学科の研究について

(1) 研究の目的と手立て

本研究の目的は、「考えさせる授業」を構成・実践することを通して、生徒に数学を学ぶことのよさを実感させることと、生徒の考える力を育成することである。そこで、次の2つの手立てを取り入れた授業づくりを行う。

①生徒が自然と考えたいような問題（題材）を設定する

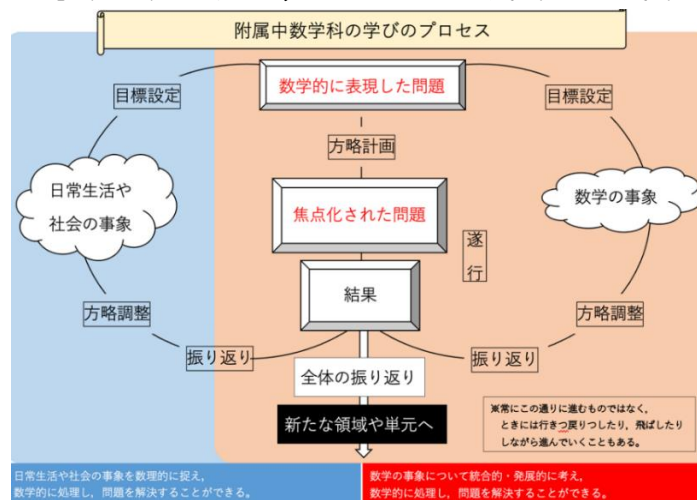
先述したように、数学の授業において、生徒に考えさせる授業を構成する場合、「問題解決型」の授業を構成する。その際、教師は、その題材の数学的な背景まで含めた全体構造や、生徒の実態を踏まえた予想反応例について、緻密に教材研究を深めておく必要がある。

②作業を重視する

作業を重視することの利点は以下の3つが考えられる。

- ・ものをつくったり、手にとって観察したりすることで、生徒の思考が促される。また、別々に身に付いていた知識や性質の関係が結びついたり、既習の知識が新たな課題解決の手掛かりとなったりする手立ての1つとなる。
- ・作業を通して、生徒の既存の知識や知恵を総動員して考える場面を設けることで、考える楽しさや解決できたときの喜び味わうことができる。それが、課題に対しあきらめずに粘り強く取り組む姿勢を育てることにつながる。
- ・数学科の教科の特性上、抽象的な思考の場面が多くかつ生徒の思考の様相は多種多様で、一人一人の考えを教師が把握することが困難である。しかし、作業を重視することで、活動中の経過やノートの記述などに表れやすくなり、教師が把握しやすくなる。これを生徒にフィードバックすることで、生徒も思考過程を振り返ることにつながる。

この利点をふまえ、自分の持っている力を総動員して問題解決をすることにより、一層考えることに重きを置いた指導ができると考えた。具体的な手立てとしては、エンゲージメントが高められた姿として全体研究で提示されている「附属中『主体的な学び』のプロセスモデル」を、中央教育審議会初等中等教育課程部会算数・数学ワーキンググループ「配付資料」に示された「算数・数学の問題発見・解決のプロセス」に組み込んで「附属中数学科の学びのプロセス」（図1）を作成し、それをもとに指導計画や指導案を作成する。



(図1)

4. 全体研究をふまえた本年度の数学科の研究について

先述した本校数学科の研究を引き続き行っていきながら、全体研究で示された以下の取り組みを行っていく。

(1) 「主体的な学び」の具体像を深化させる

全体研究では、生徒が学ぶ目的を意識しながら、意欲的に粘り強く、自己調整しながら学ぶ姿を主体的な学びとしている。本校数学科では前述の通り、「考えさせる授業」を通して、粘り強く考えることのできる生徒の育成を目指していく。そして、作業を行うことが自分の思考を客観的に見直す上での手立てとなることから、自己調整も期待できると思われる。本年度の研究では、「附属中数学科の学びのプロセス」を、教師・生徒双方が意識して授業を進めていく中で、数学的活動の楽しさや数学のよさを実感して粘り強く考え、数学を生活や学習に生かそうとしたり、問題解決の過程を振り返って評価・改善しようとしたりする生徒の育成を目指していく。

(2) 「主体的な学び」の評価の枠組みを設定する

前述した通り「考えさせる授業」を構成・実践することを通して、生徒の考える力を育成する。その際、生徒が実際に課題を解決するために活発な自己活動を行ったり、他者の考えを受け入れながら自身の考えを振り返ったりする中で主体的に学ぶ姿が表出すると考える。そのため、それを見取る工夫や評価を以下の通り行う。

①作業中の生徒の様子を記録

授業中の様子をつぶさに記録し、その記録から生徒の思考を追えるように情報を蓄積していく。

②振り返りをさせる

問題解決型の授業を行う際、授業の終わりに振り返りを生徒に書かせる。また、授業中に記述したノートや作品等も集めて、振り返りとともにチェックする。それによって、授業後にも「主体的に学習に取り組む態度」を評価することができるようにする。

③評価規準の設定

計画した「考えさせる授業」を通して育てたい資質・能力がどのようなものかを明確にし、その資質・能力が育成されたか客観的に見取ることができるよう評価規準を設定する。具体的には、「おおむね満足できる」状況(B)の評価規準を設定し、「おおむね満足できる」状況(B)の評価規準を満たしているものの中で、統合的・発展的に、または複眼的に考察しているものについては「十分満足できる」状況(A)の評価とする。「おおむね満足できる」状況(B)の評価規準を満たしていないものを「努力を要する」状況(C)とし、「努力を要する」状況(C)になりそうな生徒には直接問いかけ、振り返りを促すなどの適切な指導をしていく。

5. 研究経過

本年度中等教育研究会で行った授業実践は、以下の2本である。

【実践事例①】R3 中等教育研究会 「伝統文様を作成しよう」

授業者 小松 健一

(1) 本時のねらい

2つの合同な図形の関係を移動の見方で捉え、説明することができる。

(2) 本時で育てたい資質・能力(全体研究との関わり)

- ・考えたり選んだりした文様を再現するために、どのようなプロセスを踏めば折り紙で再現できるか考える力 【思考・判断・表現】
- ・選んだり考えたりした文様をデザイン通りに作成しようとする粘り強さや失敗からどこをどう変えれば良いか考え実現できる 【主体的に学習に取り組む態度】

(3) 資質・能力を見取るための工夫(全体研究との関わり)

- ・学習シート(レポート ver)を提出させることで、再現された折り紙の文様や考えた事柄からその思考過程を見取る

- ・考えたり選んだりした文様と再現できなかった折り紙との差から次に何をすべきかを見いだしているか学習シートで見取る

(4) 本時の評価規準（全体研究との関わり）

	Aの例	Bの姿	Cの生徒への手立て
思考・判断・表現	・考えたり選んだりした文様と再現した折り紙を比較して違いを考え、再現までの道のりやそれに至るまでの考えを説明できる。	・考えたり選んだりした文様と再現した折り紙を比較して違いを考慮することができている。	・格子縞や市松模様を扱った前時の授業を想起させる。 ・考えたり選んだりした文様と折り紙を比較して違いを発見させる。 ・一覧の例の文様をトレーシングペーパーに書かせた後で折って重なりを視覚的に捉えさせる。
主体的に学習に取り組む態度	・考えたり選んだりした文様と似たようになったが、別の文様を再現できないかということや別の折り方や切り方はないかと試行錯誤している。 ・他の文様を折り紙で作成しようとしている。	・何回も折り紙を使用して選んだ文様に近づけるようにしている。	・伝統文様の一覧からより簡単そうなものをピックアップし参考にさせる。 ・折り紙を切ることができない生徒には、折る回数を少なくしたり、切る回数を決めたりせずに作業を行うことを伝える。

(5) 展開

	指導内容及び学習活動 ○は教師の指導内容 ●は生徒の学習活動	予想される生徒の反応	指導上の留意点
導入 5分	○伝統文様の例を提示する ・生徒の作品をみせる ・実際にある伝統文様の一覧に話を発展させる ○学習シートを配布する ○学習目標を提示する [目標設定]	・家庭科でかいた文様だ ・数多くの伝統文様がある	・自分の作品にとらわれないようにその他の作品にも目を向けさせる。 ・ただ切るだけでなくなるべく少ない回数ではさみをいれて文様を完成させることを目標に加える。 ・本時の学習レポートを学年で掲示し、展覧会を開くということを伝える。
学習目標 折り紙をより少ない回数で切って伝統文様を作成しよう。			
展開 前半 10分	○前時の振り返りの中で石畳における伝統文様として成立するものの確認を行う。 [方略計画]	・もっと多くのユニットを再現したい ・図と地の交換（原案の色がついてある方が残るか、白色の方が残るか） ・増殖（1つの折り紙の中にユニットの数が増える） ・区切りの変更（文様の区切り方でユニットが変更する）	・石畳を利用して、その文様の一部に表れるユニットを見せることで伝統文様として成立するかどうかの基準を確認する。 ・連続して同じ形ができているものが一つ答えられたら、別の見方として“図と地の交換”，“増殖”，“区切りの変更”など

<p>展開 後半 25分 (この 部分で サイクル を行 う)</p>	<p>●どの伝統文様を作成しよう か考える・・・①</p> <p>●折り紙を配り、①で考えたデ ザインと同じような形になる ように折り紙を折ったり切っ たりする・・・② [遂行]</p> <p>●②をレポート用紙に貼り付 けて①と比較したり・検討した りする [振り返り]・[方略調整]</p> <p>●折り紙の枚数は問わずに実 際に試してみる[遂行]</p>	<p>・家庭科の時に書いたものと同 じデザインでも良いか ・例の中にある物以外ではダメ か ・iPadを利用して調べること も可能か</p> <p>・ユニットに注目して線対称や 点対称である図形を模索する ・折り紙に印を付ける ・逆算して折り紙を作成する方 法(デザインを変更しながら折 り紙の折り方・切り方を決め る) ・折り紙に文様を書き入れる</p> <p><比較しそうな点> ・折り方 ・折り目の付け方 ・折った回数 ・切り方や切る場所 ・切った回数 ・切る長さ (うまくいかなかった生徒が) ・もう一回やりたい (うまくいった生徒が) ・別の方法や文様も試してみ たい</p> <p>・〇〇を変更したからうまくい った ・もう少し〇〇をかえればいい のかもしれない</p>	<p>を考えさせる。</p> <p>・オリジナルの伝統文様や例に はない既存の伝統文様でも可 とする。 ・伝統文様がどのようなものか 分からない生徒には前時の内 容(伝統文様に必要な図形)を 確認するように伝える。 ・必要に応じてiPadの使用も 許可する。</p> <p>・配慮が必要な生徒には特別な はさみを使用させ、全員と同じ 作業ができるようにする。 ・10枚程度配布をすることで むやみやたらに切ることを防 ぐ効果と、よく考え遂行するた めに必要な枚数として折り紙 の枚数を10枚に設定する。 ・最初の文様①と実際作成した 文様②で一致していた点とそ うでない点を書き上げ、②が① に近づくためにはどうしたら よいか考える時間を作る。 ・必要に応じてトレーシングペ ーパーやホッチキス、コンパス などの道具を追加する。</p> <p>・「むやみやたらに切ることよ りも考えて切ること」と「使用 した折り紙は裏面に、完成品は 表面に貼ること」を確認する。</p>
<p>まとめ 5分</p>	<p>●達成するまでの道のり(学習 過程)を記入する [全体の振り返り]</p>	<p>・(完成することができた感想 の例) 対称移動を行い、更に対 称移動をすることで180° の回転移動になっていたもの が折り方一つで平行移動した 形になっていることを意識で きた</p>	<p>・最初のデザインとは異なるか もしれないけれど、作成した折 り紙はオリジナルのデザイン であることを伝える。 ・後何をすれば、完成に近づけ たのかを記入するように伝え る。</p>

		・(完成することができなかつた感想の例)後,長さを縦と横の比率を1:2にしておけば良かった	・考えた思考過程を明文化できるようにする。
--	--	---	-----------------------

(6) 成果と課題

○成果

- ・課題の設定が生徒に自然と学習に向かわせるものになった。
他教科との関連も自然と考えたくなる一つの要因になった。そして何よりも,生徒が解けそうで解けない問題の方がねばり強くかつ自然と考たくなるものであった。そういった意味でも折り紙の使用は効果的だったといえた。
- ・今回の実践はどの学校でも誰でもできるものにはあるが年齢に応じたスタイルで実践することが可能だと思う。例えていうならば正方形から中心角 90° の扇形を切り取った形,小学校の問題によくでるシンプルな形だが,この形が正方形の折り紙を1回折り,長方形に,2回折り元の正方形の4つにわけた1つ分だとしたら七宝のユニットとしてみる事が可能になる。また,折った回数を2回としたが,それを4回,8回・・・と折ったものに同様の切り方をしたら数列として捉えることができる。この題材を通してありとあらゆる年齢層に幅広く出題してもおもしろいものだなと感じた。

○課題

- ・もう少しユニットについての説明を教師主導で行っても良かった。
- ・作業時間の確保をもっとしてあげるべきだった。
- ・平行移動や回転移動に関する生徒もいたが平行移動や回転移動に関わる記述は少なく,“対称”を利用した説明が8割~9割程度を占めた。
- ・最初から対称には目がいくと思っていたがやはりその通りで考えの幅が少し狭くなってしまったかと思う。

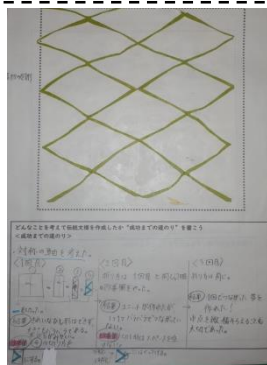
(i)家庭科で制作した伝統文様



(ii)方略計画,遂行,振り返り,方略調整のサイクルによって作り出された1時間目の成果物



(iii)方略計画,遂行,振り返り,方略調整のサイクルの結果作り出された5時間目の成果物



(iv)生徒の成果物の展示風景



(7) 参考文献

- 中学校学習指導要領（平成29年告示）
- 中学校学習指導要領解説（平成29年告示）
- 新しい数学Ⅰ 東京書籍
- 「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料 数学 文部科学省 国立教育政策研究所
- 日本の内装材料辞典 (<https://naisouzairyou-annai.jp/pattern/tradition/index.html>)
- ディズニー切り紙あそび かわいい仲間たち108点 ブティック社（P36～P37道具について）
- 文様の手帖 図版と文献例とてつづる日本の文様 小学館（P150～P153格子/格子縞）
- 日本・中国の文様事典
- 鬼滅の刃公式ポータルサイト (<https://kimetsu.com/>)
- 京屋染物店HP (<https://kyo-ya.net/about/>)
- 日本の伝統文様 (<https://www.nippon.com/ja/japan-data/h00478/>)
- 日本の家紋大辞典

【実践事例②】R3 中等教育研究会 「星形多角形の角の和の規則性を調べよう」

授業者 荻原 崇

(1) 本時で育てたい資質・能力（全体研究との関わり）

- ・学習してきた図形の性質を根拠として星形多角形の角の和を求め、結果から規則性を見いだすことができる。
【思考・判断・表現】
- ・星形多角形の角の和やその規則性を考えようとする態度や、問題解決の過程を振り返って評価・改善しようとする態度を養う。
【主体的に学習に取り組む態度】

(2) 資質・能力を見取るための工夫（全体研究との関わり）

【思考・判断・表現】について

- ・授業では、グループや一斉での発表の内容から見取る。
- ・発表の中で見取れなかった生徒については、授業後に学習シートの記述の内容で見取る。

【主体的に学習に取り組む態度】について

- ・授業では、最後まであきらめずに課題に取り組んでいるか、考えが進まないときにグループで積極的に話し合いに参加しているか、といった視点で生徒の行動を観察する。
- ・本時の自分の活動について評価・改善しているかについては、授業後に学習感想の中で見取る。

(3) 本時の評価規準（全体研究との関わり）

	Aの例	Bの姿	Cの生徒への手立て
思考・判断・表現	・自分で見つけた星形多角形の和から規則性を見だし、右回りにm個飛ばして点を結んだときの星形n角形の内角の和を、文字を使った式で表すことができている。	・自分で見つけた星形多角形の和から規則性を予想し、右回りに点を飛ばして結んでいたときの星形n角形のそれぞれ式を導き出すができている。	・星形多角形の和を求めることができない生徒に対しては、前時に学習した星形五角形の角の和の求め方を参考にさせる。 ・nを使った式で表していない生徒に対しては、求めてある星形多角形の角の和の変化に着目させる。

<p>主体的に学習に取り組む態度</p>	<p>・星形多角形の角の和には規則性があることに関心をもち、既習の図形の性質を利用して粘り強く見出そうとしている。</p> <p>・他者の意見を聞き、自分の考えを振り返り、考えをさらに深めようとしている。</p>	<p>・星形多角形の角の和には規則性があることに関心をもち、既習の図形の性質を利用して粘り強く見出そうとしている。</p>	<p>・右回りに点を飛ばすとどのような星形多角形がかけられるか考えさせ、既習の内容から角の和を求められることを示し、関心をもたせる。</p> <p>・机間巡視し、考えに行き詰まっているようであれば周りの生徒との情報交換を促すようにする。</p>
----------------------	--	---	--

(4) 展開

過程	指導内容及び学習活動	予想される生徒の反応	指導上の留意点
<p>導入 10分</p>	<p>1. 今までの復習 (5分)</p> <p>・今まで学習してきたことをもとに星形五角形や星形七角形の角の和を求めた。</p> <p>・5つの点を飛ばさずに(0個飛ばして)結ぶと五角形ができ、時計回りに1個飛ばして結ぶと星形五角形ができた。</p> <p>・6つの点を飛ばさずに(0個飛ばして)結ぶと六角形ができ、時計回りに1個飛ばして結ぶと星形六角形ができた。三角形2つで360°になった。2個飛ばしては星形六角形は作れなかった。(角の和は0°)</p> <p>・7つの点を飛ばさずに(0個飛ばして)結ぶと七角形ができ、時計回りに1個飛ばして結ぶと星形七角形ができた。角の和は540°になった。また、2個飛ばして結んでも星形七角形ができ、角の和は180°になった。</p> <p>2. 1. でまとめた表を見て、次に考えること(方針)をそれぞれで考える。</p> <p>(5分) 目標設定 方略計画</p>	<p>① 飛ばす点の数を固定して、多角形の頂点の数を増やして規則性を求める。</p> <p>(例) 「1点飛ばし」について、八角形や九角形を考え、n 角形の場合はどのようなかを考える。</p> <p>② 多角形の頂点の数を固</p>	<p>・黒板に表を書いて、五角形、六角形、七角形について、「0点飛ばし」「1点飛ばし」「2点飛ばし」の角の和(角度)をまとめる。</p> <p>・ロイロノートで学習シートと円を配付し、学習シートに方針を書かせる。</p>

	5. 発表（一斉）遂行 （5分）		
ま と め 5分	6. 学習感想を書く。振り返り		評価：【態①】 ・今日わかったことを、レポートにして提出させる。

（5）成果と課題

○成果

- ・単元を通して知識・技能を活用して新たな図形の性質を論理的に確かめる過程を踏むことで、生徒の探究心を高めることができた。
- ・ICT（ロイロノート、Geogebra）を活用することで、図形を動かしたり、図形にかき込んだりするような作業がしやすくなっていた。それにより、主体的に学ぶ姿が多く場面で見られた。
- ・授業の様子や学習シートを見ると、「附属中数学科の学びのプロセス」で示した姿はエンゲージメントが高まっている姿であることがわかった。

○課題

- ・「資質・能力の明確化、評価規準の設定」については、生徒の実態に合わせ、評価規準を適切に設定することが大切である。他者の意見を参考にせずとも、自らの考えを深めている生徒は多くいたので、学習感想だけでなく授業の様子やノートの記述と照らし合わせて評価をすることが大切だと、あらためて感じた。
- ・次時の学習で、生徒から出た考えについて共通点や相違点を扱っていくことが、より深い学びにしていくために必要であった。
- ・ICTは苦勞しなくて全部図形があげられてしまい短絡的になる可能性があるので、気をつけていきたい。
- ・規則性で終わらずに、求め方の一般性が必要であった。ペン回しが何回転かをみることで $360^\circ \times$ 回転数で平角との規則性を見ることができた。

（6）参考文献

- 「数学教育」編集部編（2021）『中学校数学新3観点の学習評価完全ガイドブック』明治図書
- 文部科学省国立教育政策研究所「『指導と評価の一体化』のための学習評価に関する参考資料 中学校数学」東洋館出版社
- 文部科学省『中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 数学編』日本文教出版
- 『新しい数学2 教師用指導書』東京書籍

6. 研究のまとめ

今年度の中等教育研究会では、図形領域で、①日常の事象に関する問題解決、②数学の事象に関する問題解決の2本の授業公開を行った。①の授業では、折り紙をより少ない回数で切って伝統文様を作成し、試行錯誤する中で、2つの合同な図形の関係を移動の見方で捉え、説明できる力の育成を目指した実践を行った。②の授業では、既習事項である星形五角形、星形七角形の考え方をもとにして、星形多角形の角の和の規則性を考える実践を行った。①、②いずれの授業にしても、生徒たちは問題に対して真剣に向き合い、粘り強く解決に向けて取り組んでいた。それは、授業の様子だけでなく、授業ノート、成果物、学習感想などからも見取ることができた。教師、生徒双方が「附属中数学科の学びのプロセス」を念頭に置いて授業を行ったことが、主体的に学ぼうとする生徒の姿勢につながっていたと考える。主体的な学習の評価については、評価規準（とりわけ、Bの姿）を適切に設定することで見取れることがわかった。しかしながら、生徒が出した考えから共通点や相違点をどう扱っていくかなど、より学びが深まるような共有場面の設定については今後の課題である。また、作業をする上で、ICTの効果的な利用場面も考えていく必要がある。

《参考・引用文献 等》

- 半田 進編著(1995)『考えさせる授業 算数・数学 実践編』東京書籍
- 松原元一編著(1987)『考えさせる授業 算数・数学』東京書籍
- 松原元一(1990)『数学的な見方考え方 子どもはどのように考えるか』国土社
- 中島健三(1981)『算数・数学教育と数学的な考え方』東洋館出版社
- 西岡加名恵(2016)『資質・能力を育てるためのパフォーマンス評価 アクティブラーニングをどう充実させるか』明治図書出版株式会社
- 杉山吉茂(2012)『確かな算数・数学教育をもとめて』東洋館出版社
- 岩手県立総合教育センター教育研究(2000), 創造的に考える力を育てる算数・数学科の学習指導に関する研究－自らの課題を追究する活動をとおして－(第2報)
- 中央教育審議会初等中等教育課程部会算数・数学ワーキンググループ(平成28年5月)「配布資料」
- 中学校学習指導要領解説数学編 文部科学省 平成29年7月
- 山梨大学教育人間科学部附属中学校(2005～2015), 研究紀要
- 山梨大学教育学部附属中学校(2016～2019), 研究紀要
- 文部科学省国立教育政策研究所教育課程研究センター「『指導と評価の一体化』のための学習評価に関する参考資料 中学校数学」

1 主題設定の理由

1.1 研究主題と研究仮説

本校では、令和2年度から令和3年度の研究主題を『創造性に富んだ、未来を切り拓く生徒の育成～「主体的な学び」のプロセスモデル実現を目指して～』と設定し、研究を推進している。ここで示される創造性とは、「自ら課題を見出し、その解決に向かって、これまでに学んだことや新たな知、技術革新を結び付けて、新たな価値を創造するための資質・能力」である。このような資質・能力を備えた生徒を育成するために、「**主体的な学び**」の**プロセスモデル**を作成し各教科で実践に取り組んでいる。

理科部会では、『**主体的な学びを実現する理科授業の構築**』を研究主題に設定した。このとき、これまでの研究を踏まえ、「主体的な学び」の具体像として、「**実感をともなった理解**」を目指すこと、また、とりわけ見通しや振り返りを通じた学習調整に注目し、その手立てや評価の在り方を探究することとした。研究仮説は以下の通りである。

主体的な学習調整をすることで、新たな見方・考え方を働かせた実感をともなった理解につながり、創造性が培われるだろう。

1.2 これまでの研究の成果と課題

a. 平成26年度～平成28年度『**実感をともなった理解をさせる授業の創造**』

本研究では、学習過程に「深く考える場面」を設定し、その場面で「視点を変える活動」を取り入れた授業を実践した。「深く考える」とは、予想を自分なりに論理的に精緻化された仮説まで作り上げること、観察・実験の結果の解釈から自分の仮説の検証を行い、自然現象を追究することを意味する。そして、そのような思考を実現するために、話し合い活動の設定、観察・実験の効果的活動、教材・教具の提示を「視点を変える活動」として取り入れた授業を実践した。

研究の結果、実感をともなった理解のためには、「深く考える」「外化」「共有」を授業過程に取り入れる必要があることが見出されたことや、生徒が「なぜどうなるのか」を考えながら自然事象を捉えることができていたことなどの成果が得られた。一方、日常生活や社会、他教科、理科の他分野、既習事項とのつながりを見出すことに課題が見られた。

b. 平成29年度～令和元年度『**生徒が見通し、振り返り、実感をともなった理解を促す理科授業の構築**』

本研究では、学習指導要領の改訂を見据え、理科の見方・考え方に注目して授業を実践した。平成29年度は、理科の見方・考え方を働かせた学びを通して育成を目指す生徒の姿を検討するとともに、理科の見方・考え方を働かせた授業実践を重点課題として研究を行った。平成30年度は、前年度の課題を踏まえ、理科の見方・考え方を働かせた授業における評価・見取りの工夫を重点課題として研究を行った。令和元年度は、前年度の課題に継続して取り組むとともに、本校における総合的な学習の時間「SELF」と関連づけた教科横断的な授業実践を重点課題として研究を行った（図1）。

研究の結果、見通しや振り返りの場面を設定し学習調整を促すことが実感をともなった理解につながる可能性があること、他者との意見交換から得た知識や新しい発見について色を変えて記述するワークシートが自己の変容の可視化につながったことなどの成果が得られた。一方で、前研究と同様に、社会や

日常生活等とのつながりを生徒たちが見いだすことや、既存概念や既習事項と関連付けながら学習の振り返りを行うことに課題が見られた。また、実感をともなった理解をどのように評価するのか、生徒それぞれで想起し関連づける内容のばらつきに対してどのように評価し、授業につなげるのかについても課題が見られた。「SELF」と関連づけた教科横断的な授業は多くの過程において、話し合い活動の充実や他者の考えからの変容などを見取ることへとつながった。

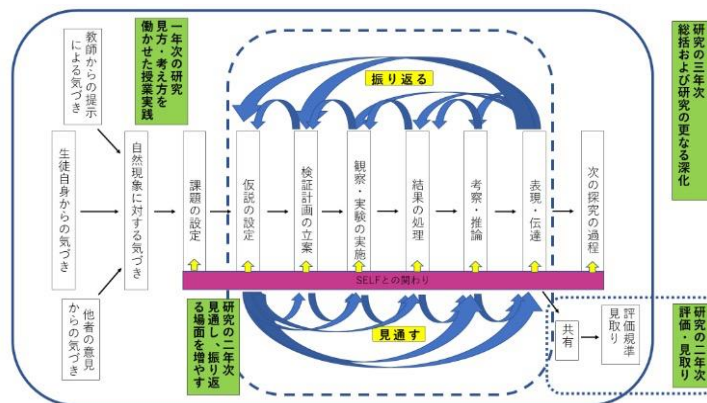


図1 本校理科部会が考える「生徒が見通し，振り返り，実感をともなった理解を促す理科授業」の流れ

c. これまでの研究から捉える重点課題

過去6年の研究を授業者の立場から総括的に捉えると、生徒に「なぜそうなるのか」を考えさせながら自然事象を捉えさせるための工夫については一定の成果が得られた。これは、**実感をともなった理解を促す理科授業**という方向性を中心に据えたことによって積み上げられてきた成果であると捉えている。また、実感をともなった理解のためには「見通し」や「振り返り」の場面を設定し、学習調整を行わせることが効果的であることも、今後の授業を深化させるための方向性を与える成果である。

このような成果をさらに発展させるために取り組むべき課題として、「見通し」や「振り返り」の質的向上が挙げられる。そして、それは、相互に関連する2つの課題に取り組むことが求められる。第1の課題は、学習内容と実生活や実社会、他単元や他教科とのつながりをどのように見出させるかという点である。第2の課題は、生徒の学びをどのように評価し授業につなげるのかという点である。

以上の背景より、令和2年度から2年計画で実施する研究主題を『**主体的な学びを実現する理科授業の構築**』とした。理科部会では、「主体的な学び」を実現した生徒の姿を、実感をともなった理解に到達した姿と捉え、研究を進めることとした。

2 全体研究との関連

本校では、令和2年度から令和3年度の研究主題を『創造性に富んだ、未来を切り拓く生徒の育成～「主体的な学び」のプロセスモデル実現を目指して～』と設定し、研究を推進している。実践に取り組むにあたり、**エンゲージメント**概念に着目して生徒の姿を定め、主体的な学びを実現するための学習モデルとして『**主体的な学び**』の**プロセスモデル**（以下、プロセスモデルと略記）を作成した。ここでは、これらを理科部会としてどのように捉えているのかについて論じる。

a. プロセスモデル

理科は、従来から学習過程を重要視してきた教科である。2017年に告示された学習指導要領においても、資質・能力を育成するための学習過程として「自然の事物・現象に関わり、理科の見方・考え方を働かせ、見通しをもって観察、実験を行うことなどを通して」と明示されている。また、中学校学習指導要領解説理科編（2017）には、「資質・能力を育むために重視する探究の過程のイメージ」が示され、本校での平成29年度から令和元年度までの研究を踏まえ図2のように示す。以下では、この学習過程を「探究の過程」と示す。

さて、全体研究で示されるプロセスモデルと、探究の過程は乖離するものでも矛盾するものでもない。プロセスモデルの「目標設定」（以下、プロセスモデルを指すものは「」で示す）は、探究の過程の【自

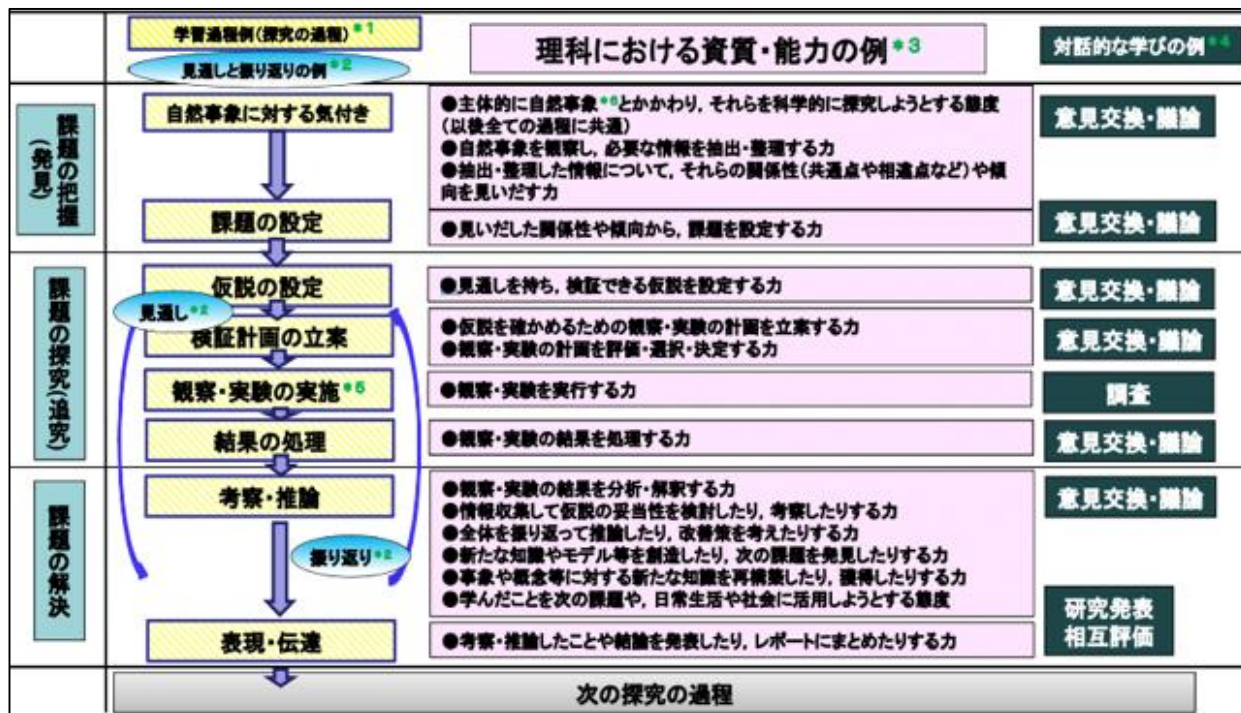


図2 資質・能力の育成のために重視すべき学習過程の例

【自然事象に対する気付き】(以下、探究の過程を指すものは【 】で示す)や【課題の設定】に対応するものであるし、次の探究の過程に向かう段階にも働くものである。「方略計画」は【検証計画の立案】に対応するだけでなく、見通しをもって自然の事物・現象に関わることが求められる教科の特性を踏まえると、それ以前の過程である【自然事象に対する気付き】や【課題の設定】、【仮説の設定】にも対応する。「遂行」は【観察、実験の実施】が中心となりながらも、結論を導出するために必要な【結果の処理】【考察・推論】も対応すると言える。また、探究の過程では、それぞれの過程で見通しと振り返りを行うことが重要となる。例えば、実験が想定通りにならなかった場合に、自身の考えや実験方法の妥当性を振り返ることになるし、結論を導出する場合にも批判的思考を働かせて実験結果を振り返ることになる。このような側面を説明したものがプロセスモデルでいうところの「振り返り」と解釈できる。そして、探究の各過程で振り返ると同時に、課題を解決するためのより良い方法を模索する。このような側面を説明したものが、プロセスモデルでいうところの「方略調整」であろう。加えて、特に中学校第3学年では探究の過程を振り返る活動に重点が置かれるが、探究の過程全体を振り返ることが「全体の振り返り」に対応するものと考えられる。

このように、全体研究で示されるプロセスモデルは、理科の探究の過程と親和性が高いものである。換言すれば、理科では探究の過程を重視した学習活動を展開することが、主体的に学習に取り組む態度の育成につながるものであると言える。

当然のことながら、探究の過程を導入することで直ちに主体的に学習に取り組む態度が培われるわけではない。各過程で育成を目指す資質・能力を明確にし、明確な視点をもった意図的な働きかけを行うことが求められる。そして、その際の指標となるのが、次項に示す生徒の姿である。以下に昨年度に考えた本部会での主体的な学びのプロセスモデルを表1に示す。

b. エンゲージメントが高められた生徒の姿

全体研究では、「主体的な学び」の実現をエンゲージメントが高められた姿と捉え、プロセスモデルの

各過程と国立教育政策研究所教育課程センターによる評価のイメージ（図3）に沿って、「粘り強い取組を行おうとする姿」と「自らの学習を調整しようとする側面」の2つの側面からその具体像を整理している。理科部会では、令和2年度の研究のひとつとして、プロセスモデルから具体像を検討した。理科部会が捉える「主体的な学び」の具体像を表2に示す。

このような生徒像を見据えながらも、「見通し」や「振り返り」の質的向上のためにはさらなる精緻化が求められる。また、生徒の学びの実際を見取り、指導に生かすためには、学習内容や単元の特性に応

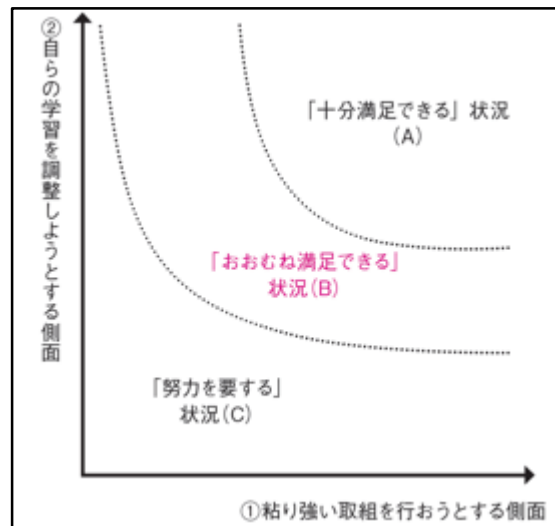


図3 国立教育政策研究所教育課程研究センターによる「主体的に学習に取り組む態度」の評価のイメージ

表1 理科部会が考える主体的な学びのプロセスモデル

主体的な学びのプロセスモデル						
	目標設定	方略計画	遂行	振り返り	方略調整	全体の振り返り
期待する生徒の姿	<ul style="list-style-type: none"> 身近な事物、現象に対する疑問から生まれる課題、高いレベルの関心をもつ課題や日常生活で直面する課題、現実世界で解決すべき課題、自らのキャリア形成に関する課題を選択する。 挑戦の感覚、好奇心、学習への期待感をもつ。 	<ul style="list-style-type: none"> ゴールを設定し問題解決の学習方略を考える。 過去の学習経験や既存知識、既存概念を生かそうとする。 	<ul style="list-style-type: none"> 計画に基づいて、学習を遂行する。個人やグループでの学習活動に熱心に参加する。 	<ul style="list-style-type: none"> 自らの学びの効果を振り返る。 学習の進み具合を把握し、見通しをもつ。 	<ul style="list-style-type: none"> 必要に応じて学習方略を修正する。 自らの学習方略を調整する。 	<ul style="list-style-type: none"> 自らの学びの質や成果を振り返る。 学ぶ面白さを感じる。 有能感や充実感をもつ。 さらなる疑問を感じたり、課題を見つけたり、さらに学び続けようとする。

表2 理科部会が考える各プロセスにおける「主体的な学び」の具体像

各プロセスにおける「主体的な学び」の具体像						
	目標設定	方略計画	遂行	振り返り	方略調整	全体の振り返り
期待する生徒の姿	<ul style="list-style-type: none"> 単元の学習内容を、他教科や自らのキャリア、生活、自らが生きる社会と関連づけて学習に取り組もうとしている。 単元の学習内容に興味や価値を見出して取り組もうとしている。 	<ul style="list-style-type: none"> 自らの学習目標の達成を目指して、より良い学習方略を考えようとしている。 	<ul style="list-style-type: none"> 自らの学習方略の達成を目指して、知識を活かして学習に取り組んでいる。 	<ul style="list-style-type: none"> 自らの学習方略の成果と課題をよりの確に捉えようとしている。 新たな疑問や次の課題に対して取り組もうとしている。 	<ul style="list-style-type: none"> 自らの学習目標の達成を目指して、より良い学習方略を求めて、必要な修正を続けようとしている。 	<ul style="list-style-type: none"> 単元の学習を通して、自らの目標達成のために努力し続けたことを明確にしている。 新たな疑問や課題について、考えを調整しようとしている。
自己調整しながら学ぶ姿	<ul style="list-style-type: none"> 単元の目標に沿った、自分なりの学習目標を立てている。 過去の学習から、見通しをもって学習目標を立てている。 	<ul style="list-style-type: none"> 過去の学習経験を活かしながら、目標達成のための学習方略を考えている。 	<ul style="list-style-type: none"> 計画した方略や必要に応じて調整した方略に基づいて、個人やグループでの学習活動に参加し考えを調整している。 	<ul style="list-style-type: none"> 自らの学習方略をモニタリングし、その成果や課題を挙げている。 	<ul style="list-style-type: none"> 振り返りや他者の考えから、必要に応じて学習方略を修正している。 	<ul style="list-style-type: none"> 単元の学習を通して、自らの目標達成のために工夫したことや、その過程と変容、成果と課題を明確にしている。また、それを次の学習に活かそうとしている。

じて具体化する必要がある。本校が目指す「主体的な学び」の実現に向け、理科部会ではとりわけ「見通し」や「振り返り」を通じた学習調整に注目し、その手立てや評価規準や基準の具体を検討していきたい。

3 研究の内容

3.1 研究の方針

本研究では、「主体的な学び」の具体像として、「**実感をともなった理解**」を促す理科授業の実現を目指す。また、「見通し」や「振り返り」を通じた**学習調整**に注目し、その手立てや評価の在り方を検討する。この「実感をともなった理解」について、理科部会では以下のように捉えている。

実感をともなった理解とは、その授業における課題に対する結論を、根拠をもって他者に理解できるように自分の言葉で説明するだけにとどまらず、これまでの日常的な経験や事象に関わらせながら「なるほど」「わかった」と理解すること

また、学習調整については、以下の3つの側面から捉えている。

I 自己で気づいて行う学習調整

小学校での学習やこれまでの人生での既存概念や既存知識や経験、前後の授業や授業の中で「見通し」「振り返り」を行い、その過程の中で主体的に自らの学習を調整していくこと

II 他者の考えの差異から行う学習調整

学習活動の中で他者との意見交換や発表、話し合い活動の中で、他者との考えから自分の変容に気づき、「見通し」「振り返り」を行い、主体的に自らの学習を調整していくこと

III 教師が生徒へ促す学習調整

生徒の理解している現状から生徒へ正しい知識や学び方を促したり、課題や課題へ取り組む過程を変更したりして、さらに主体的に深い学びができるように教師が「見通し」「振り返り」を行わせ、生徒に学習調整を促していくこと

「実感をともなった理解」を促す理科授業を実現するためには、上記3つの側面を適切に取り入れる必要がある。そして、そのためには、当該単元に関わる生徒の認識の実態や既習事項を捉えることが重要となる。本研究では、授業の構想から省察まで、以下の手続きを進める。なお、授業構想に関する(2)～(4)は一方向のものではなく、往還するものである。

- (1) 当該単元に関わる生徒の理解調査
- (2) 実感をともなった理解に到達した生徒の姿の検討
- (3) 探究の各過程の学習活動と学習調整の場面の検討
- (4) 各過程で目指す生徒の姿と評価方法およびフィードバック方法の検討
- (5) 授業実践
- (6) 生徒の学びを中心とした省察
- (7) 生徒の学びを起点とした「主体的な学び」の具体像の捉え直し

4 授業実践

授業者 深沢 拓矢

4.1 単元名 運動とエネルギー 力のつり合いと合成・分解（水中の物体に働く力）

4.2 単元について

(1) 事前調査の結果

物体の浮き沈みについて、生徒の実態を調査するために事前調査を行った。調査の内容は、質問「鉄も、水に浮く。」について、4つの選択肢（「1. そう思う」「2. そう思わない」「3. 分からない」「4. その他」）から自分の考えに最も近いものを選択し、選択した理由について記述させるものであった（表3）。

回答者34人の集計結果は表4の通りである。質問に対して、正しい選択肢である「1. そう思う」と回答した生徒は34人中10人とどまった。質問に対する理由記述は、その内容によって類型化した（次頁表5）。なお、重力と浮力の関係について触れた生徒は1人のみであった。

科学的に正しい説明に該当する類型1-aの生徒は1人で、浮力について言及した類型1-bの生徒と合わせても3人のみであった。対して、物体の浮き沈みについて密度との関係性を使って判断した生徒は、類型1-dの16人存在した。また、類型1-fに該当する生徒は7人おり、面積、大きさ、質量、形などの条件によって浮き沈みは変化すると考えていることがわかった。

表3 調査内容とその評価

質問文	説明の基準
【質問1】 鉄も、水に浮く。	鉄が水に浮くかどうかは、鉄でできた物体に加わる浮力の大きさと重力の関係で決まる。浮力が重力よりも大きいと、全体として上向きの力を受けるため、物体は水面に浮き上がる。逆の場合は、下に沈む。

表4 回答選択肢の集計結果（人）

	人数
1. そう思う	10
2. そう思わない	15
3. 分からない	4
4. その他	5

(2) 指導観

事前調査の結果から、学級の約半数にあたる生徒が、水への物体の浮き沈みについて密度を基準に判断していることが分かった。また、水中の物体にどのような力が加わっているかという視点を持っている生徒は34人中3人とどまっている。加えて、浮き沈みは、物体の面積や大きさ、質量、形などによって変化すると考える生徒がいることもわかった。これらから、物体の浮き沈みも運動の1つであり、必ずしも密度だけで決まるものではなく、物体に加わる力の関係にもよることを新たな視点として生徒にもたせることが重要だと考える。そして、生徒たちに浮き沈みについての自分自身の考えを自覚させるとともに、実験を通してその不完全さに気付かせ、科学的概念の獲得につなげていきたい。その際、探究的な学習の過程を取り入れた学習活動を仕組むことを重視していきたい。生徒の実態を踏まえ、以下のことを念頭に本単元の学習を計画していく。

- ①図4の同じ鉄でできた船と直方体を用い、直方体の鉄は水に沈むがそれと同質量の鉄の船は浮くことを提示し、単元の課題「同じ密度でも、浮き沈みに違いがあるのはなぜか」を設定して学習前の考えを表出させる。
- ②浮き沈みも物体の運動の1つであることを生徒に捉えさせる。このとき物体にどのような力が加わっているかという視点を持たせ、表現させる。
- ③上記②の学習の中で、水圧、浮力についての生徒の考えを引き出し、浮き沈みとのかかわりを意識させながらそれぞれについての学習課題を設定する。
- ④「物体に加わる水圧の大きさや向きはどのようなになっているだろうか」「浮力の大きさは何と関係するのか」について探究させる。



図4 同じ鉄でできた船と直方体

⑤ 「同じ密度でも，浮き沈みに違いがあるのはなぜか」について学習後の考えをまとめさせる。

表 5 質問 1 の記述内容

	類型	具体的な記述	合計 (人)	
1. そう思う	1-b: 一部が科学的に正しい説明	<ul style="list-style-type: none"> ・水に対して鉄の質量が小さくなることで浮力のようなものが働き、鉄が沈むのに勝つと思うので浮くことができると思う。 ・浮力が働くから、今鉄が入っていたところには元々水があって、その分の水が鉄を押しから(上に)。 	2	10
	1-c: 伝聞・経験による説明	<ul style="list-style-type: none"> ・コンテナ船とかは鉄でできているのに重いものを載せても沈まずに浮いているから。 ・鉄も水に浮くと聞いたことがあるから。水の圧力が関係していたと思う。 ・マンガで鉄は水に浮くということを鉄でできた船で証明していたから。下から圧力が鉄に加わって浮くと思う。 ・船が実際に浮いているから。 ・鉄でできた船は、浮いたりできるから。鉄の中に空気を入れて浮かせる。 	5	
	1-d: 密度との関係による説明	<ul style="list-style-type: none"> ・鉄の方が水より密度が小さいと思うから。 ・水に浮くかどうかは、(水の密度に比べた)物体の密度によるものなので、単に鉄であっても、それぞれの対象によって違いが出ると思う。 	2	
	1-f: 物体の条件による説明	<ul style="list-style-type: none"> ・沈める方向の面積が広ければ広いほど浮くようになるから。船のようなイメージ。しかし、沈める方向の面積が狭ければ狭いほど浮きにくくなる。 	1	
2. そう思わない	1-d: 密度の関係による説明	<ul style="list-style-type: none"> ・鉄の密度は水の密度より高いから。 ・鉄の密度が水の密度より大きいから。コインを投げ入れる池ではコインは浮いていないから。また、光の屈折の学習時の実験で、100円玉が水に沈んでいたから。 ・鉄の密度が水の密度より大きいと思うから。どこかで水銀に鉄球が浮いて、水には沈んでいるのを見た記憶があるから。 ・密度が大きいからと考えた。鉄は水に浮かないと聞いたことがある気がする。 ・水に浮く物体は軽いもの、密度が小さいものだと思うから、鉄のように重くて密度が大きそうなものは沈んでしまうと思う。 ・鉄の方が水より密度が大きいから、沈むと思います。 ・鉄のほうがみずより密度が高いから。 ・鉄の方が水より密度が大きいから。また、プールでスーパーボールを入れたときにも沈んでいた気がするから。 ・水の方が鉄より密度が小さいので、密度が大きい鉄は必ず沈むと思うから。 ・水と鉄には密度の違いがあり、鉄の方が密度が大きいため水に浮くことはないと思う。 ・鉄は水よりも密度が大きいと思うから。 ・鉄の方が水より密度が高いから。 	12	15
	1-f: 物体の条件による説明	<ul style="list-style-type: none"> ・鉄は重いイメージがあるから。 	1	
	1-c: 伝聞・経験による説明	<ul style="list-style-type: none"> ・鉄でできている船は沈没する。 	1	
	1-e: 他の現象との比較による説明	<ul style="list-style-type: none"> ・水に密度の大きい氷を入れたとき浮かんで、水は普通の物質と違うから水と違う鉄は浮かばないと思ったから。 	1	
3. 分からない	1-d: 密度の関係による説明	<ul style="list-style-type: none"> ・水に鉄が浮くか浮かないかは、鉄の密度が水より小さいかどうかが大それたと思うが、鉄の密度を知らないから。また、鉄が水より密度が小さいものに包まれていたり水に何かが溶けていたりすると誤差が生じるから。 	1	4
	1-f: 物体の条件による説明	<ul style="list-style-type: none"> ・大きさや密度、鉄の種類によって沈むものもありそうだから。 	1	
	1-g: わからない	<ul style="list-style-type: none"> ・水とか浮くことについて難しいと感じるから。 ・密度は鉄の方が大きいですが、鉄からできている船は浮いているから。 	2	
4. その他	1-a: 科学的に正しい説明	<ul style="list-style-type: none"> ・浮くためには水よりも密度が小さく、浮力が鉄に働く重力よりも大きくないとできない。水に物質を溶かすことで水の密度を大きくし、浮くことができる場合もあるから。 	1	5
	1-f: 物体の条件による説明	<ul style="list-style-type: none"> ・鉄そのものは水より重いので沈むが、船のように加工すれば浮くから。 ・密度や質量によって変化すると思う。 ・鉄の量によって変わる。重ければ落ちて、軽ければ浮くと思うから。 ・水に浮かせる鉄の量?(例えば鉄球を使うとしたらその鉄球の大きさ)によって変わると考えた。(密度が水より大きければ沈むし、小さければ浮く) 	4	

上記①と②では、現象に対する考えを表出させることを通して物体に加わる力に考えを向けさせるとともに、浮き沈みにかかわる力について記述させて生徒の認識を把握する。そして、以降の単元の学習に生かしていきたい。

本時の学習にかかわる「浮力の大きさは何と関係するのか」を探究する際、複数の要因が挙げることが予想される。事前調査からも、少数ではあったが「面積」「体積」「形」「質量」によって浮き沈みが決まると考える生徒がいることがわかっている。そこで、それぞれの要因について対照実験を行えるような機器を用意することにした。若林・鷺辺・笠（2014）を参考にして、図5の5種類のおもり（条件制御用の実験セット）を作成した。表6は、その詳細を示したものである。若林・鷺辺・笠（2014）が作成したおもりは4Nを基準に条件制御をしていたが、今回は、本校のばねばかりに合わせて2Nに変更した。なお、本実験セットは、「山梨大学工学部附属ものづくり教育実践センター」に作成を依頼した。

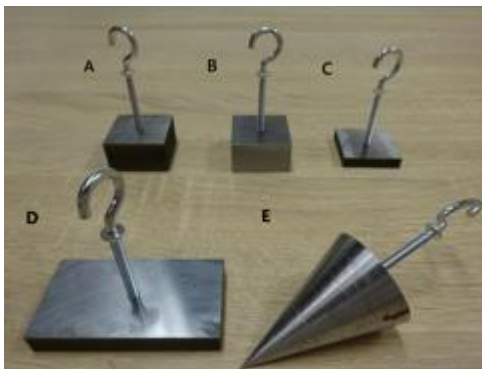


図5 条件制御用の実験セット

表6 条件制御用実験セットの詳細

番号	おもりの形状	寸法：		重さ (N)	体積 (cm ³)
		縦×横×高さ (cm)			
A	直方体	3.5×3.5×2.0		2.0	25.0
B	直方体	3.5×3.5×2.0		0.7	25.0
C	直方体	3.5×3.5×0.7		0.7	9.0
D	直方体	3.5×7.0×1.0		2.0	25.0
E	円錐	直径 4.0 高さ 9.0		2.0	25.0

4.3 本時の学習

(1) 本時の目標

浮力の大きさは何と関係するか、設定した仮説をもとに実験計画を立案し、探究しようとしている。

【主体的に学習に取り組む態度】

(2) 本時の展開

	学習活動	教師の支援・指導	評価 ○主体的な学び ◆学習調整
導入 3分	1. 前時までの振り返りをする。	○章の課題「同じ密度でも、浮き沈みに違いがあるのはなぜか」を確認する。 ○同じ質量でも、浮き沈みに違いがあるのは、浮力の大きさに違いがある点を確認する。	
展開 42分	2. 課題を設定する。 [課題] 浮力の大きさは物体の何と関係するのだろうか。 3. 浮力が変化する要因について考える。 ・物体の質量による。 ・物体の堆積による。 ・底面積による。 ・物体の形による。	○「物体の条件によって浮力の大きさは変化するのではないか」というこれまでの考えを確認する。 ○これまでの学習の中で挙げられた要因も確認する。	○目標設定 ◆学習調整Ⅲ ◆学習調整Ⅰ 【行動観察】

	・深さによる。		
	<p>4. 課題について自分の仮説を立てる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・水に触れる面積は大きいほど、より広い範囲で力を受けられるので、面積が大きい方が浮力は大きくなる。 ・質量が大きいものは沈むので、浮力は小さくなる。 ・物体の体積（高さ）による。高さがある方が、水圧の差が大きくなるので浮力も大きくなる。 <p>5. 3人グループの中で意見を交流する。</p> <p>6. 話し合いを踏まえ、最終的な自分の仮説を設定する。</p> <p>7. 数名の仮説を取り上げ、全体で共有する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・深いほど水圧が大きくなるので、浮力も大きくなる。 <p>8. 3人グループで実験計画を立案する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・おもり A と B を比較して質量について調べる。 ・おもり B と C を比較して体積について調べる。 ・おもり A と D を比較して底面積について調べる。 ・おもりを沈める深さを変えて深さについて調べる。 	<p>○考えの根拠となるものは何か挙げさせる。</p> <p>○グループ内で要因を 1 つに絞るためではなく、根拠を含めて適切か話し合わせる。</p> <p>○他者の意見に疑問があったら、指摘して質問するように伝える。</p> <p>○他者からももらった意見や参考になった考えはメモをするように伝える。</p> <p>○説明に図を使うときはホワイトボードを利用するように伝える。</p> <p>○浮力とそれに関係する要因について、最終的な仮説をまとめさせる。</p> <p>○関係性について具体的に書くように伝える。</p> <p>○机間指導中に生徒の考えを把握し、できるだけ要因が異なる仮説を紹介する。</p> <p>○実験道具の説明をする。</p> <p>○細かな実験手順をまとめさせるのではなく、どのおもりの結果を比較するのか見通しを持たせる。</p>	<p>○方略計画 ◆学習調整 I 【行動観察・記述】</p> <p>○遂行 ◆学習調整 II 【行動観察・記述】</p> <p>○方略調整 ◆学習調整 II 【行動観察・記述】</p> <p>○方略計画 【行動観察・記述】</p>
終末 5分	9. 本時の振り返りを振り返りシートに記入する。	○振り返りの視点を確認し、本日の学習を振り返るように伝える。	○振り返り 【記述】

5 研究の成果と課題

まず、中等教育研究会の研究討議で挙げられた内容を含め、今年度の実践の課題を整理する。今年度の実践では、課題を我が事とした上での仮説の設定に重点を置いた。しかし、自分の仮説と実験結果との間に違いが見られた際に、その理由について深く考えることなく、結果を受け入れている様子が見受けられた。このような姿は、課題を我が事とできていない証左と捉えることができる。原因を推察すると、仮説

設定の際の指示内容が曖昧であったためと考えられる。実際に、生徒が立てた仮説や話し合いの内容を読み取ると、章の課題に対する仮説を立てた生徒と本時の課題に対する仮説を立てた生徒が混在していたことが明らかになった。設定した仮説と実験内容が一致しなければ、生徒達はエンゲージメントを十分に高めることができず、主体的な学習調整や「実感をともなった理解」を得ることが難しくなる。仮説設定の際の指示内容を明確にすることが、今年度の実践に関する第1の課題として挙げられる。また、第2の課題として、生徒が批判的思考を働かせている様子を見取るための手立てを検討することが挙げられる。本実践では、学習過程における生徒の思考の様態を十分に把握することができなかつた。授業改善につなげるため、また、一人ひとりの学びを適切に評価するためにも、その手立ての検討が必要となる。

次に、2年間の研究の成果と課題について、研究仮説「主体的な学習調整をすることで、新たな見方・考え方を働かせた実感をともなった理解につながり、創造性が培われるだろう」に即して整理する。本研究では、エンゲージメント概念の観点からプロセスモデルの各過程における生徒の姿を明らかにした上で、授業実践を積み重ねてきた。生徒の姿を具体化したことで、各授業の目標が明確になったものと考えている。とりわけ、学習調整を細分化し、授業内に積極的に位置付けたことによって、多くの生徒に粘り強く取り組む様子が見られた。また、生徒が課題に没頭することをねらい、教材の内容や提示の方法に工夫を凝らした。その結果、実験計画を立案する場面において、自分はどう考えるという意見を熱心に仲間と議論する姿、いわゆるエンゲージメントが高められた姿を随所に見て取ることができた。これらに加えて、一人一台端末の積極的な利用も成果として位置付けることができる。ロイロノートや Google Work for Education 等を授業に取り入れたことで、生徒にとっては関心意欲の向上や学習履歴の蓄積と関係付け、教師にとっては生徒の思考の可視化といった効果を実感することができた。さらに、ペーパーレス化や業務改善によって、授業を検討する時間の確保が可能になったことも利点として挙げられる。

次年度以降に取り組むべき課題は次の3点である。1点目は、仮説設定における指示内容の明確化である。2点目は、批判的思考を働かせている様子を見取るための手立ての検討である。これらは、上述のように、今年度の実践を通して明らかになった課題である。また、2年間の研究を通して、生徒の創造性を培う上で生徒の姿を具体化することの重要性を再確認できた。今後、さらに実践を積み重ねること、理科授業における創造性概念を絶えず問い直し、その具体化を図ること、そして、創造性の評価の妥当性や信頼性をより高めていくことが重要な課題であると考えている。以上を3点目の課題としたい。

参考文献

- 1) 竹野晶弘・深沢拓矢・森澤貴之(2019)「生徒が見通し、振り返り、実感をともなった理解を促す理科授業の構築」『令和元年度 研究紀要』山梨大学教育学部附属中学校, 53-65.
- 2) 文部科学省(2017)『中学校学習指導要領(平成29年告示)解説 理科編』学校図書.
- 3) 国立教育政策研究所(2020)『『指導と評価の一体化』のための学習評価に関する参考資料【中学校 理科】』文部科学省.
- 4) 櫻井茂男(2017)『自律的な学習意欲の心理学』誠信書房.
- 5) 櫻井茂男(2020)『学びのエンゲージメント』図書文化社.
- 6) 鹿毛雅治(2019)『授業という営み—子どもとともに「主体的に学ぶ場」を創る』教育出版.
- 7) 新里和也・古屋光一(2014)「中学生から大学生までの水中の「浮力」に関する認識調査—「浮力」の概念に関する指導方略への提言—」『理科教育学研究』第54巻, 第3号, 403-417.
- 8) 若林教裕・鷲辺章宏・笠潤平(2014)「変数の制御の観点を生かした浮力についての授業プランの開発」『香川大学教育学部研究報告 第II部』第64巻, 27-38.
- 9) 国立教育政策研究所(2020)『『指導と評価の一体化』のための学習評価に関する参考資料』東洋館出版社.
- 10) 堀哲夫(2003)『学びの意味を育てる理科の教育評価』東洋館出版社.

1. 主題設定の理由

音楽科の学習活動では、聴く活動の中で「知覚・感受する」ことが重要である。「A表現」においては、生徒は自分自身と向き合ったり、仲間と交流したりすることで、様々に試行錯誤しながら、思いや意図をもったり、思いや意図を深めたり広げたり、技能を身に付けたりして音楽表現し、「B鑑賞」においては、仲間と批評するなどの活動を通して、自ら価値判断し、音楽のよさや美しさを味わって聴くことができるようになることがわかった。

このように、音楽の授業では、「A表現」の学習においても聴取活動を行うことが生徒の思考を促したり深めたりし、音楽表現の工夫につながる大切である。曲に対する自分のイメージを膨らませ、他者のイメージに共感しながら表現の工夫を考え、強弱や速度などの要素の働きを基に音楽の特徴を捉え、「こんなふうに表現してみたい。」「こんな表現方法もあるのか。」など、更により表現を求めて工夫するようになる。創作では、身近な楽曲を聴いたり、他の生徒の作品を聴いたりすることで、自分の作品づくりのためのアイデアが生まれたり、自分の作品を見直す視点を見出したりすることができる。聴取活動を授業の中に効果的に位置付けることで、相手が伝えようとしている表現の工夫を知覚・感受する力の向上も期待できる。音楽を表現する技能だけではなく知覚・感受する力も合わせて育むことで、生徒の思いや意図は深まり、さらなる音楽活動の充実を図ることができると考えた。

2. これまでの研究のあゆみ

令和2年度は、「聴取活動による音楽的な感受を基にした、思考,判断,表現力等を育む授業づくり」という主題を設定し、2年計画で研究を行うこととした。1年目である令和2年度は、音楽科で育成する「創造性」について整理するとともに、「主体的な学び」のプロセスモデルの実践及び「主体的に学習に取り組む態度」の評価について研究を進めた。「我が国の伝統音楽」を教材とし、箏の奏法を試したり聴いたりして、知覚・感受を深めながら箏の音色の特徴を捉え、基礎的な奏法を身につけ、弾き方による音色の変化や、平調子による旋律を意識して演奏し箏の響きを味わう授業を行った。ゲストティーチャーを招き、「さくらさくら」の正しい奏法（特に、「押し手（後押し）」、「引き色」,「かき爪」,「割爪」の4種類）を学び、その知識や技能を生かし、前奏や後奏、その他フレーズとフレーズの間、イメージする音を取り入れ「自分だけのさくら」を試行錯誤しながら演奏する姿が見られた。箏の様々な奏法を目と耳で感じ、学ぶことで、音色の違いを知覚し、楽曲の旋律に合わせてどのような音色を響かせたいのかについて思いや意図をもつことができるようになった。基本的な奏法を習得したのち「自分なりのさくら」を一人一人が表現することを試みた。資質・能力を見取るための工夫として、「振り返りシート」を題材ごとに一枚用意し、記入させ、日々の振り返り、積み重ねが目に見える寝形となり、自信につながった生徒も多くいた。しかし、工夫を言葉や楽譜に書き示すことへの課題が残っ

た。思いや意図があっても、方法や技術がなければ難しく、記載されたものだけでは伝わりにくいものを感じた。2年目である令和3年度は、前奏や間をいかした伴奏を考え、自分たちのイメージにあった曲を創る授業に発展させることにより、これまでの課題解決の一つである、音楽を形づくっている要素を学ぶ機会となると考えた。6月には歌詞や旋律、写真から風景をイメージしたり、変奏曲を聴いたり、色々な奏法を試し、また、仲間と音楽を表現することの楽しさを味わい、音楽を深めることで「創造性」「主体性」を育てようと思い、誰もが耳にしたことのある「きらきら星」のメロディーをアレンジしながら、実際にリズム、速さ、強弱などの違いによる変化を感じ取らせ、「自分なりの星を表現しよう」という創作活動を行った。そのことにより、「ゆったりしたいから音符の長さを長くする」や「楽しい感じにしたいので、跳躍やスタッカートで表現する」など、思いを実現するための方法を模索することができ、改めて、様々な聴取活動の必要性を感じた。11月は、二人一組になり、旋律担当と、前奏、後奏、間を工夫する担当の両方を経験させた。音を合わせることや、音色、旋律、リズム（間）などの音楽を形づくっている要素を感じ、音と音とのコミュニケーションである合奏を行った。生徒が主体となり、学習を振り返る中で、自らの変容（感じ方や考え方）や 成長に気がつくことにより、我が国の伝統音楽に親しむ気持ちを育てることにつながるようにしたいと考えた。

3. 全体研究との関わり

全体研究主題『創造性に富んだ、未来を切り拓く生徒の育成～「主体的な学び」のプロセスモデル実現を目指して～』の実現のため、音楽科での研究テーマを「聴取活動による音楽的な感受を基にした、思考、判断、表現力等を育む授業づくり」という主題を設定し、2年計画で研究を行った。

① 音楽科で育成する「創造性」について

全体研究において「創造性」は、①課題の解決に向けて②これまでに学んだことや新たな知識、技術革新を結び付けていかし③新たな価値を創り出すために必要な資質・能力だと述べており、これは、文部科学省が示す「Society5.0を牽引する人材」の資質・能力と一致している。

ここで、「音楽的な見方・考え方」について目を向けてみる。「音楽に対する感性を働かせ、音や音楽を、音楽を形づく要素とその働きの視点で捉え、捉えたことと、自己のイメージや感情、生活や社会、伝統や文化などを関連付けること」「(前略) 音楽的な見方・考え方を働かせた音楽科の学習を積み重ねることによって広がったり、深まったりするなどし、その後の人生においても生きて働くもの」と平成29年告示学習指導要領に解説されている。生徒に、様々な音楽に触れさせ、楽曲の特徴や、その曲想をもたらしている諸要素に焦点をあてながら、生徒が音楽の多様性を感じ取り、理解することを繰り返すことが感性を働かせることにつながり、創造性を育むことにもつながると考える。

② 音楽科における「主体的な学び」のプロセスモデルの実践

授業づくりの要素として、「問いを持つことのできる題材」「題材の導入の工夫」「ワークシートの工夫と生徒への働きかけ」であると考え、生徒の実態を把握し、それに合った題材を検討することで精選

される「問いを持つことができる題材」により、生徒自身が問いを持ち、その解決に向けて主体的に取り組むことができると考える。生徒がより感性を豊かにし、主体的に音楽の学習活動に向き合えるためには、生徒が興味・関心をもてるような題材設定と授業での発問や教材の工夫が求められる。また、生徒が普段あまり接することのない分野の「音や音楽との出会い」も大切にしていきたい。そして、音楽科の研究主題との関連を意識し、聴取活動による音楽的な感受をもとに、感性をより働かせる学習過程を授業において実現することを目指して研究を進めていきたい。

音楽科における「主体的な学び」のプロセスモデルと学習過程

プロセスモデル	学習過程	学習活動
目標設定	課題を見つける	既習の知識および技能を基に、課題を決定する
方略計画	学習を見通す	解決の見通しをもち、計画を立てる
遂行 振り返り	課題解決のために必要な知識や技能を習得する	様々な方法を試し、解決方法を探る 工夫して表現する
方略調整	課題解決に向けた実践	個人・交流活動を通し、知識技能をさらに深める
全体の振り返り	実践活動の評価・改善	気づきや発見を明確にし、次につなげる

4. 今年度の研究について

(1) 研究の目的

表現及び鑑賞の幅広い活動を通して「音楽的な見方・考え方」を働かせ、知識や技能を得たり生かしたりしながら、自分の表現したいことや考えたこと、理解の状況などを自ら把握し、学習調整しながら主体的に学習に取り組むことで、新たな価値を生みだすことができる生徒の育成を目指したいと考えている。

昨年度は、生徒が「我が国の伝統音楽」に親しむことができるよう、生徒の興味関心が高かった器楽（箏）の活動を行った。ゲストティーチャーを招き、「さくらさくら」の正しい奏法（特に、「押し手（後押し）」、「引き色」、「かき爪」、「割爪」の4種類）を学び、その知識や技能を生かし、前奏や後奏、その他フレーズとフレーズの間、イメージする音を取り入れ「自分だけのさくら」を試行錯誤しながら演奏する姿が見られた。箏の様々な奏法を目と耳で感じ、学ぶことで、音色の違いを知覚し、楽曲の旋律に合わせてどのような音色を響かせたいのかについて思いや意図をもつことができるようになった。しかし、「我が国の伝統音楽」そのものに親しみ、愛着をもてるようにするには、1学年の数時間では難しい面がある。今後、2年生、3年生と進級するにあたり、系統立てて「我が国の伝統音楽」を教材とした授業を構成することで、中学校卒業後も興味関心をもって「我が国の伝統音楽」に親しむことのできる生徒を育成できると考えた。本年度は、昨年度の学びを更に発展させ、二人一組になり、旋律担当と、前奏、後奏、間を工夫する担当の両方を経験させる。音を合わせることや、音色・旋律、リズム（間）などの音楽の諸要素を感じ、考えながら、音と音とのコミュニケーションである合奏の楽し

さや喜びを感じられるようにしたいと考えている。そのため、授業においてどのように「主体的な学び」をデザインするかを考え、生徒が思考・判断・表現する力を高めることにつながる効果的な聴取活動の在り方を探ることを通し、歌唱・器楽・鑑賞・創作の各領域や分野を関連付けて取り組むことのできる授業を構成し、聴取活動をどの場面でどのように位置付ければ効果的であるかを明らかにしていきたい。

(2) 研究の内容

- ①それぞれの違いや共通点などを学ぶことを通して、思考力・判断力・表現力をより高めることのできるような題材設定を行う。
 - ・主体的に意欲をもって学習ができるような題材や授業の開発
- ②主体的な学びのプロセスモデルの作成
 - ・ねらいや学習内容が整理できる言語活動やワークシートの工夫
 - ・PDCA サイクルの中で、より主体的に学習ができるような授業づくり
- ① 授業により育まれた資質・能力の見取りについての工夫と実践を重ねる。
 - ・学習カードの記述，仲間との交流による観察，ICT機器を活用し，生徒の表現活動の記録や分析などを活用した評価方法や評価規準の作成。

○音楽科で身につけさせたい資質・能力について

新学習指導要領では、全ての教科・領域等において「知識及び技能」「思考力，判断力，表現力等」「学びに向かう力，人間性等」の三つの柱で資質・能力の育成を目指すことが示された。本校の音楽科では、三つの柱の中でも特に「思考力，判断力，表現力等」を高めることを研究の目的としている。「思考力，判断力，表現力等」は、それ単独で高められるものではなく、他の二つの柱と密接に関わりあっている。生徒が既存の知識や技能を活用して音楽活動を行う中で、さらに新たな知識や技能を得ることや、意欲的に音楽活動に取り組むことで豊かな情操を養ったり、感性を高めたりすることが「思考力，判断力，表現力等」を高めることにもつながっていると考えている。

新学習指導要領解説では、音楽的な見方・考え方を「音楽科の特質に応じた、物事を捉える視点や考え方であり、音楽科を学ぶ本質的な意義の中核をなすもの」として次のように示している。

【中学校音楽科】

音楽に対する感性を働かせ、音や音楽を、音楽を形づくっている要素とその働きの視点で捉え、自己のイメージや感情、生活や社会、伝統や文化などと関連付けること。

このことから本校音楽科では、「音楽的な見方・考え方」を働かせ、「思考力，判断力，表現力等」を高める授業の構成を目指していく。その方策として、聴取活動による音楽的な感受の場面を効果的に取り入れることで、生徒に音楽の多様性を理解させるとともに、自分たちで音楽表現を創意工夫できる力を身につけさせたいと考えた。

○資質・能力を見取るための工夫

具体的な見取り方に関しては、生徒自身が前時までの授業内容や感じたことなどを思い出すことができ、教師も生徒の状況を把握することができる「振り返りシート」を作成した。記述に要する時間

を短縮し、実技にかける時間を増やすことが大切だと考えた。教師は生徒の感想でよかった箇所に線を引いたり、理解していないことについては訂正のコメントを入れたりして返却し、授業内での仲間の発言や色を変えて書き留めるなど、より詳しく生徒の資質・能力の見取りができるように考えた。

また、映像や音声を使った見取りについても、工夫していきたい。振り返りシートやワークシートだけでは見取りきれない生徒のつぶやきや、技能の変化、会話の様子などは、映像や音声で残すことが有効であると考えられる。授業の最後には、今日の振り返りとしてロイロノートを使用し、自分たちの姿を残すことにした。各自で成長の過程を目や耳で確認でき、教師側も指導助言、活動を見取る際にそ活用できると考えた。

5 研究の実際（実践事例）

第2学年音楽科学習指導案

指導者 早川 みち恵

1. 題材名 箏の奏法や音色，間を生かして，「さくらさくら」の合奏をしよう

2. 題材の目標

- (1) 箏の音色や響きと奏法との関わりを理解するとともに，創意工夫を生かした表現で演奏するために必要な奏法，身体の使い方などの技能を身に付ける。（知識及び技能）
- (2) 箏の音色，旋律，リズム（間）を知覚し，それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じながら，知覚したことと感受したこととの関わりについて考え，曲にふさわしい器楽表現を創意工夫する。（思考力・判断力・表現力）
- (3) 箏の音色や奏法，リズム（間）や旋律の変化によって生み出される雰囲気や表現の違いに関心を持ち，音楽活動を楽しみながら主体的・協働的に学習活動に取り組むとともに，「我が国の伝統音楽」に親しむ。（学びに向かう力・人間性）

3. 指導事項との関連

第2学年及び第3学年 「A表現」(2) 器楽 ア，イ(イ)，ウ(ア)

[共通事項] (1) ア（本題材の学習において，生徒の思考・判断のよりどころとなる主な音楽を形づくっている要素：「音色」「リズム（間）」「旋律」）

4. 題材設定の理由

本題材は，中学校学習指導要領(平成 29 年告示)解説音楽編 A 表現 (2)ア，イ(イ)，ウを受けて設定した。昨年度は，生徒が「我が国の伝統音楽」に親しむことができるよう，生徒の興味関心が高かった器楽（箏）の活動を行った。ゲストティーチャーを招き，「さくらさくら」の正しい奏法（特に，

「押し手（後押し）」、「引き色」、「かき爪」、「割爪」の4種類）を学び、その知識や技能を生かし、前奏や後奏、その他フレーズとフレーズの間、イメージする音を取り入れ「自分だけのさくら」を試行錯誤しながら演奏する姿が見られた。箏の様々な奏法を目と耳で感じ、学ぶことで、音色の違いを知覚し、楽曲の旋律に合わせてどのような音色を響かせたいのかについて思いや意図をもつことができるようになった。

しかし、「我が国の伝統音楽」そのものに親しみ、愛着をもてるようにするには、1学年の数時間では難しい面がある。今後、2年生、3年生と進級するにあたり、系統立てて「我が国の伝統音楽」を教材とした授業を構成することで、中学校卒業後も興味関心をもって「我が国の伝統音楽」に親しむことのできる生徒を育成できると考えた。本年度は、昨年度の学びを更に発展させ、二人一組になり、旋律担当と、前奏、後奏、間を工夫する担当の両方を経験させる。音を合わせることや、音色、旋律、リズム（間）などの音楽を形づくっている要素を感じ、音と音とのコミュニケーションである合奏を行う。生徒が主体となり、学習を振り返る中で、自らの変容（感じ方や考え方）や成長に気がつくことにより、我が国の伝統音楽に親しむ気持ちを育てることにつながるようにしたい。

5. 教材について

(1) 教材名

【聴取教材】 雅楽「越天楽」

「六段の調べ」 (八橋 検校)

【器楽教材】 「さくらさくら」(手ほどき教則本 山田流箏譜/邦楽社/中能島欣一)

(授業者による編曲)

(2) 教材選択の理由

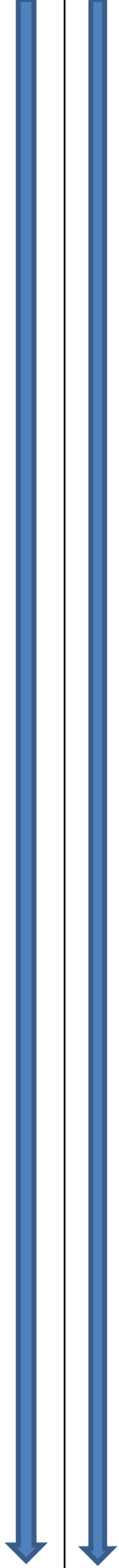
今回の授業では、合奏による音の重なり、音楽の広がりを知覚、感受させ、豊かな情操を養い、感性を高めたいと考えた。昨年度は、一人での演奏だった「さくら」に前奏や後奏、間を生かした音を重ねることによって生まれる新しい響きや、音楽の楽しさを体感させることにより、更に和楽器の特徴である音色や響き、そして、「我が国の伝統音楽」そのものへの興味がさらに深くなると考えた。また、愛着をもてるようにするには、1年生、2年生、3年生と進級するにあたり、系統立てて「我が国の伝統音楽」を教材とした授業を構成することで、中学校卒業後も興味関心をもって「我が国の伝統音楽」に親しむことのできる生徒を育成できると考えている。本年度は、昨年度の学びを更に発展させ、二人一組になり、旋律担当と、間を工夫する担当の両方を経験させる。音を合わせることや、音色・旋律、リズム（間）などの音楽の諸要素を考えながら、音と音とのコミュニケーションである合奏の楽しさや喜びを感じられるようにしたいと考えこの教材題材を選択設定した。


6. 題材の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
<p>① 知 箏の音色や響きと奏法との関りについて理解している。(知識)</p> <p>② 技 創意工夫を生かした表現で演奏するために必要な奏法、身体の使い方などの技能を身に付け、箏の演奏で表している。(技能)</p>	<p>思 箏の音色、旋律、リズム(間)を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じながら、知覚したことと感受したこととの関りについて考え、曲にふさわしい器楽表現としてどのように演奏するかについて思いや意図をもっている。</p>	<p>態 箏の音色や奏法、リズム(間)や旋律の変化によって生み出される雰囲気や表現の違いに関心をもち、音楽活動を楽しみながら主体的・協働的に器楽の学習活動に取り組んでいる。</p>

7. 指導計画と評価計画 (4時間)

時	◎ねらい ○学習内容 ・学習活動 【プロセスモデルとのかかわり】	評価規準 【評価方法】			☆Aと判断する生徒の状況例 ■個別な働きかけを要する生徒への支援
		知・技	思	態	
1 時間 目	◎音を重ね合わせることによって生まれる音の響きや間(ま)を工夫し、自分たちの「日本らしいさくらさくら」を考える。				
	<p>2.日本らしい「さくらさくら」とは何かについて考える。</p> <ul style="list-style-type: none"> 導入で振り返った伝統音楽の特徴にあった「間」を生かした表現で、我が国の伝統音楽を味わえるようにする。 <p>3.自分たちのイメージする日本らしい「さくらさくら」にするためにはどのような工夫が必要かを考える。</p> <ul style="list-style-type: none"> 実際に箏を弾きながら、自分たちのもっている「さくらさくら」のイメージと結び付けていく。 音色や強弱、間の取り方、テンポ感など様々試しながら、どのように演奏していくと思い通りの演奏になるのか方向性を見極めていく。 <p style="text-align: center;">【目標設定】 【遂行】</p> <p>4.本時の活動を振り返る。</p> <ul style="list-style-type: none"> 本日の学びと次回への課題をワークシートに記入し、今後の見通しを持つようにする。 <p style="text-align: center;">【振り返り】</p>	↓	↓	↓	<p>☆それぞれの音楽の特徴や共通点を見つけ、我が国の伝統音楽の良さを味わうことができる。</p> <p>■ 特徴、共通点が見つからない生徒は、仲間の意見を聞く中で自分の考えをもてるようにする。</p>
2 時間 目	◎音を重ね合わせることによって生まれる音の響き、合わせる際の工夫など、試行錯誤しながら演奏活動を行えるよう思いや意図をもつ。(練習①)				

	<p>○日本らしい「さくらさくら」のイメージをもちながら練習する。 （4人グループではあるが、演奏は2人で行う。演奏していないときは、助言をしたり、自分達の演奏を試行錯誤する時間とする。）</p> <p>○合奏をするにあたり、お互い大切だと思うことを確認する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・テンポ感，息遣い，バランスなど【方略】 ・様々な方法があり，それによって感じ方が違うことを改めて理解する。【遂行】 <p>○実際に何度も合わせることにより，一番良い形を探る。 ・イメージ通りの演奏ができているか動画を撮って確認し，修正する。 【遂行】</p> <p>○仲間の演奏を聴き，旋律や音色，奏法等の関わりについて考える。 ・仲間の演奏を聴き，音楽の変化について気付いたことや感じ取ったことを意見交換する。 ・演奏に際して気を付けることや，気に入ったところ，自分自身に足りない部分などについてワークシートに記入する。 【方略・調整】</p> <p>○本時の活動を振り返る。 ・自分の表現したい思いをどのように音楽要素と関りをもたせるかについて，学んだことを記入する。 【振り返り】</p>	<p>① 知</p> <p>【観察・発言】</p>		<p>☆間の取り方だけでなく音色に対しても意識をもち意欲的に取り組んでいる。</p> <p>■方向性を定め，ほかのグループの演奏を聴かせ，特徴を思い出させる。</p>
3時間目	○日本らしい「さくらさくら」になるよう創意工夫しながら演奏することができる。（練習2）			

	<p>○これまでの復習を行う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学級全体で今後の流れを確認した後、ペアでそれぞれの練習をする。【方略計画】 <p>○「さくら」をどのように演奏したいかについて考え、ペアに伝え共有する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・音色、伴奏なども考え加 ・ペアでお互いに演奏し合い、感じたことを伝え合う。【遂行】 <p>○本時の学習を振り返る。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ワークシートに本時に学んだことや次時に向けてのめあてなどを記入する。【振り返り】 		<p>【思】</p>		<p>☆音色や奏法を生かした演奏ができる。仲間と意見交換したり、自分の言葉でまとめたりしている。</p> <p>■工夫できない生徒には、仲間の演奏を参考にさせたり、教師が様々な弾き方を聴かせたりする。</p>
4時間目	<p>◎本題材の学習を振り返りながら学習活動に取り組み、あなたが考える自分だけの「さくらさくら」を表現し、間を意識した演奏を発表することができる。</p>				
	<p>○4人のグループになり、お互いに演奏し合い、聴き合う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「思いが伝わる合奏になっている」という観点で自分の演奏を振り返ったり、仲間の演奏の感想を伝えたりする。【方略調整】 <p>○題材全体を振り返る。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・題材を通して学んだことや感じたことをワークシートに記入する。 ・振り返ったことについて学級全体で意見交換する。【振り返り】 	<p>② 【技】</p> <p>【観察・演奏】</p>		<p>【態】</p> <p>【観察・ワークシート】</p>	<p>☆間を生かした演奏ができる。</p> <p>☆仲間と意見交換したり、自分の言葉でまとめたりしている。</p> <p>■弾けない生徒に対しては、部分的でよいのでできることを演奏させる。</p> <p>■ワークシートへは仲間の意見を参考にして、箇条書きで書き出してから文章を記述させる。</p>

8.本時の授業について (1時間目)

(1) 日時 令和3年11月4日(木) 8:50~9:40

(2) 場所 山梨大学教育学部附属中学校 第1音楽室

(3) 本時の目標

音を重ね合わせることによって生まれる音の響きや間(ま)を工夫し、自分たちの「日本らしいさくらさくら」を考える。

(4) 展開

過程	学習のねらいと学習活動	教師の指導・支援	評価・備考
<p>導入 (10分)</p>	<p>1.我が国の伝統音楽の特徴についての振り返りをする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・雅楽「越天楽」と「六段の調べ」を聴き，共通点を探ることにより特徴に気づく。 ・個人で考え，その後グループ（4人）で意見共有する 	<ul style="list-style-type: none"> ・昨年度学んだことを思い出させる。 ・雅楽「越天楽」と六段の調べを聴きそれぞれの特徴を書き出し，共通点を探る。 <p><予想される生徒の発言></p> <ul style="list-style-type: none"> ・ゆっくり のんびり ・音の重なりがある（ずれがある） ・拍がとれない ・間がある ・余韻がある など 	<ul style="list-style-type: none"> ・学習形態 一斉 <p>付箋に記入</p> <p>個人からグループ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・一斉
<p>展開 (30分)</p>	<div data-bbox="475 846 1485 920" style="border: 1px solid black; text-align: center; padding: 5px;"> <p>日本らしい「さくら さくら」を表現しよう。</p> </div> <p>2.日本らしい「さくらさくら」とは何かについて考える。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・導入で振り返った伝統音楽の特徴にあった「間」を生かした表現で，我が国の伝統音楽を味わえるようにする。 <p>3.自分たちのイメージする日本らしい「さくらさくら」にするためにどのような工夫が必要かを考える。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・実際に箏を弾きながら，自分たちのもっている「さくらさくら」のイメージと結び付けていく。 ・間を工夫しながら合奏することを確認する。 ・音色や強弱，間の取り方，についての違いについて再確認する。 ・まずは，個人で，その後，2人で相談し，箏の音色で試しながらどのように表現していくか考える。 <p style="text-align: center;">【目標設定】 【遂行】</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・各自で考える <予想される生徒の考え> 淡い・穏やか・華やか・はかない等 ・共通点の中でも，今回は，「間」の取り方（音の重なりも含む）について重点を置きながら学習していくことを伝える。 ・「さくらさくら」の初め分を弾き生徒に旋律を弾かせ，教師が音を重ねていく。 ・ゆっくり，速くなど，様々な弾き方，タイミングがあることを感じ取る。 ・2人で1面使用し，実際に音色を確認しながら話し合うようにする。 ・イメージを膨らませられるよう音で自由に確認するよう促す。 ・音の重なりや音色によって響きが変わるとい音楽の変化に気付かせる。 ・ワークシートに自分の考えを記入させる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・学習形態 個人，ペア <p>知 箏の音色や響きと奏法との関りについて理解している。</p>

まとめ (10分)	<p>4. 振り返りシートに自分の考えを記入する。</p> <ul style="list-style-type: none"> 個人で活動を振り返り、全体で意見を共有し、それぞれの反省と課題についてまとめる。 次回の目標もたてて意識づけをする。 <p style="text-align: center;">【振り返り】</p>	<ul style="list-style-type: none"> 個人の活動についてまとめたうえで、仲間の意見に耳を傾けることにより、多様な音楽のよさや美しさに気づくことができる。 <p>・学習形態 個人 一斉</p>
--------------	--	--

(5) 本時の評価

箏の音色や響きと奏法との関りについて理解している。(知識)

6 研究のまとめ

二年間の研究を終え、聴取活動を授業の中に効果的に位置付けることで、相手が伝えようとしている表現の工夫を知覚・感受する力の向上につながることがわかった。曲に対する自分のイメージを膨らませ、他者のイメージに共感しながら表現の工夫を考え、強弱や速度などの要素の働きを基に音楽の特徴を捉え、「こんなふうに表現してみたい。」「こんな表現方法もあるのか。」など、更により表現を求めて工夫する姿があった。音楽を表現する技能だけではなく、知覚・感受する力も合わせて育むことで、生徒の思いや意図は深まり、さらなる音楽活動の充実を図ることができた。また、グループやペア活動をすることにより、他者との意見交換、表現方法、音の伝わり方をより身近に学ぶことができ、生徒の思考を促したり深めたりし、自分自身の音楽表現の工夫や視点を見出したりすることができた。今回の授業は、間を生かした音を重ねることによって生まれる新しい響きや、音楽の楽しさを体感させることにより、更に和楽器の特徴である音色や響き、そして、「我が国の伝統音楽」そのものへの興味がさらに深くなった。箏を2年間継続させて取り入れることにより、演奏することに対する自信と愛着につながったように感じる。雅楽や歌舞伎、能等の鑑賞時に楽器の音色の特徴に意識を向ける生徒も増え「間」や「日本らしさ」「余韻」というものを感じる生徒が増えてきた。今後も、「我が国の伝統音楽」を教材とした授業を構成することで、中学校卒業後も興味関心をもって「我が国の伝統音楽」に親しむことのできる生徒を育成していきたい。



〈引用・参考文献 等〉

- ・中学校学習指導要領 文部科学省 H29
- ・中学校学習指導要領解説 音楽編 文部科学省 H29.6
- ・評価規準の作成，評価方法等の工夫改善のための参考資料（中学校 音楽）
H23 国立教育政策研究所 教育課程研究センター
- ・「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料 音楽編 文部科学省
R2.3 国立教育政策研究所 教育課程研究センター
- ・山梨大学教育人間科学部附属中学校研究紀要 H23~27
- ・山梨大学教育学部附属中学校研究紀要 H28~R1
- ・中央教育審議会 「幼稚園，小学校，中学校，高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」 H28.12 文部科学省
- ・中学校新学習指導要領の展開 音楽編 H29 副島和久編著 明治図書
- ・中学校教育課程実践講座 音楽 H30 宮下俊也編著 ぎょうせい
- ・中央教育審議会 「児童生徒の学習評価の在り方について（報告）」 H31 文部科学省
- ・中学校新学習指導要領「音楽の授業づくり」 H30 加藤徹也・山崎正彦著 明治図書出版
- ・「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料
R2 国立教育政策研究所 教育課程研究センター

美術の資質・能力を育む授業の工夫

竹内 まな

1. 美術科研究主題について

(1) これまでの本校美術科の研究

平成26年度から平成28年度の3か年は、『「深く考える授業」の創造』という全体研究主題の基、「美術の基礎的な力を伸ばす授業の工夫」を研究主題とし、美術の基礎的な力を伸ばすことを目指し、それまでの取組を継続して題材と指導の工夫に取り組んだ。特に2,3年次には、全体研究において深く考えるための手だてとして掲げられた「視点を変える活動」を取り入れた授業を行った。その結果、表現と鑑賞の学習において、友だちと意見を交流したり、資料を用いることで知識と出会ったりするなどして視点を変えることにより、よりよいものを目指して試行錯誤する生徒の姿が見られるようになってきた。

平成29年度から平成31年度の3か年は、『新たな世界を主体的に創造する生徒の育成～「見方・考え方」を働かせた学びを通して～』という全体研究主題の基、「美術の資質・能力を育む授業の工夫」を研究主題とし、造形的な見方・考え方を働かせた学びに着目した題材構成や授業の手立ての検討、実践を行うとともに、それらを通して育まれた資質・能力を見取ることについて研究を行った。その結果、授業構成とワークシートの2点を工夫することにより、生徒自身の学習調整を促してきた。

令和3年度は、全体研究において『創造性に富んだ、未来を切り拓く生徒の育成～「主体的な学び」のプロセスモデル実現を目指して～』という主題の基、未来を切り拓く生徒に必要と考えられる「自ら問い続ける力」と「創造性」に着目し、「主体的な学び」のプロセスモデルやその評価について研究を行っていく。

(2) 生徒の実態

生徒たちは、情報通信技術の発達により豊かな視覚情報のなかで生活している。インターネットを利用し検索することで簡単に情報が入手できる一方で、自分独自のものを生み出すことが難しくなっていると感じる。また、多様な情報が発信されているにもかかわらず、画一的な価値観が主流となっていたり、特定の価値観を絶対的なものと受け止め、捉えなおす機会そのものが失われてしまったりしている様子も見受けられる。

生活面においては、失敗することを恐れたり、また自分で試すことなく正解を求めたりする姿がたびたび見られる。失敗を恐れることで、失敗して学ぶという経験が少なかったり、最短で正解することに重きを置くことで試行錯誤する経験が限られていたりすることが考えられる。

学習活動においては、概して意欲が高く主体的に取り組もうとする。美術科の学習においても、課題の内容や取り組み方がわかると積極的に取り組む。表現の学習では、自ら感じ取ったことや思ったことなどを基に描いたりつくったりする。また、見る人や使う人の立場に立ってデザインや工芸などに表現したりする。鑑賞では、自由に考えを述べる雰囲気をつくることで、作品から豊かに感じ取り、自分が感じたことを言葉にし、友達と意見を交換することができる。また、日常的に美術に触れる機会があり、山梨県立美術館など美術館を訪れた経験のある生徒も比較的多い。一方で、美術の授業を通して身に付けたい力や目指すところなどを理解し、取り組んでいる生徒は少ないように感じている。そのため、学んだことを日常生活で生かす経験も限られているようである。

このような生徒に対して、よりよいものをめざして試行錯誤を続ける態度を育てるとともに、造形的な視点を持ち、生活や社会の中で美術、美術文化などと豊かに関わる資質・能力をさらに伸ばしていきたいと考えている。

(3) 全体研究主題より

①美術科で育成する「創造性」について

全体研究において「創造性」は、①課題の解決に向けて②これまでに学んだことや新たな知、技術革新を結び付けて活かし、③新たな価値を創り出すために必要な資質・能力だと述べており、これは文部科学省が示す「Society5.0を牽引する人材」の資質・能力と一致するとしている。

ここで、「造形的な見方・考え方を働かせた学び」について目を向けてみる。美術科の特質に応じた物事を捉える視点や考え方である造形的な見方・考え方とは、表現及び鑑賞の活動を通して、よさや美しさなど

の価値や心情などを感じ取る力である感性や、想像力を働かせ、対象や事象を造形的な視点で捉え、自分としての意味や価値をつくりだすことであり、これこそ美術科で育成する「創造性」であると考え。

②美術科における「主体的な学び」のプロセスモデルの実践

美術科ではこれまでも、学習指導要領の美術科の目標で示された(1)「知識及び技能」、(2)「思考力、判断力、表現力等」、(3)「学びに向かう力、人間性等」の関連を明確にした授業計画について研究してきた。その中で明らかにしてきた授業づくりの要素を活用することが、プロセスモデルの実践につながり、そして前述した「創造性」を育むことができると考える。授業づくりの要素として、「問いをもつことのできる題材」「題材の導入の工夫」「ワークシートと生徒への働きかけ」の三つを掲げてきた。特に、生徒の実態を把握し、それに合った題材を検討することで精選される「問いをもつことのできる題材」により、生徒自身が問いをもち、その解決に向けて主体的に取り組むことができると考える。

(4) 本年度の研究主題

「1 (1) これまでの本校美術科の研究」でも述べた通り、平成29年度から平成31年度の3か年は、『新たな世界を主体的に創造する生徒の育成～「見方・考え方」を働かせた学びを通して～』という全体研究主題の基、「美術の資質・能力を育む授業の工夫」を研究主題とし、研究を行ってきた。

このとき全体研究においては、見方・考え方を働かせた学びと、それによって育まれた資質・能力を見取るための評価の工夫、そして教科等横断的な教育課程の編成の大きく3つが内容として掲げられた。そこで美術科では、造形的な見方・考え方を働かせた学びに注目し、題材構成や授業の手立ての検討、実践を行うとともに、それらを通して育まれた資質・能力の見取りについて研究を行い、生徒自身による自己調整を促してきた。

昨年度の研究では、「主体的な学び」のプロセスモデルを参考にして題材計画の整理を行い、「主体的な学び」の評価方法について、ワークシートなどの構成の整理や、題材や授業のねらいの明確化によって、生徒自身の主体的な学びに向かう態度が見取れるように研究を進めてきた。また、各学年における題材同士の広がりや深まりに注目して年間指導計画の見直しを行い、教科横断的な教育課程編成を目指してきた。

本年度から完全実施となった学習指導要領では、まず美術科の目標について、美術科において育成を目指す資質・能力をより明確にするため(1)「知識及び技能」、(2)「思考力、判断力、表現力等」、(3)「学びに向かう力、人間性等」に整理して示している。さらに、美術科で目指す資質・能力の育成について、目標で示されている(1)、(2)、(3)が相互に関連し合い、一体となって働くことが重要だとしている。次に、教科の目標と資質・能力の関係については、次の表1のように表されている(「平成29年度版 中学校新学習指導要領の展開 美術編」p.17より抜粋)。この表を基に、これまでの学習のねらいや評価について、新学習指導要領によるものとの対応や整合性を検討しながら取り組んできた。

表1 教科の目標と資質・能力の関連

表現及び鑑賞の幅広い活動を通して、造形的な見方・考え方を働かせ、生活や社会の中の美術や美術文化と豊かに関わる資質・能力を次のとおり育成することを目指す。		
知識及び技能	(1)対象や事象を捉える造形的な視点について理解するとともに、	表現方法を創意工夫し、創造的に表わすことができるようにする。 (創造的に表現する技能)
思考力、判断力、表現力等	(2)造形的なよさや美しさ表現の意図と工夫、美術の働きなどについて考え、(発想や構想と鑑賞の双方に重なる資質・能力)	美術や美術文化に対する見方や感じ方を深めたりすることができるようにする。 (鑑賞に関する資質・能力)
	主題を生み出し豊かに発想し構想を練ったり、 (発想や構想に関する資質・能力)	
学びに向かう力、人間性等	(3)美術の創造活動の喜びを味わい、美術を愛好する心情を育み、感性を豊かにし、心豊かな生活を創造していく態度を養い、豊かな情操を培う。(全ての指導項目)	

このような学習指導要領の改訂と昨年度の研究を踏まえて、課題として考えられることは二つある。

一つ目の課題は、分かりやすい題材の学習目標（ねらい）の設定である。創造的で主体的な学習活動を実現するためには、「問いをもつことができる題材」でなければならない。問いの解決に向かおうとすることが、主体的な学習活動に結びつくと考えられるからである。そのためにはまず、ねらいを明確にし、生徒と共有する。生徒がねらいに向かって主題を生み出し、それを作品に実現するための問いを自身に投げかける場面が生まれるように工夫する。そのことによって、主体的に、知識を活用させるなどしながら構想したり技能を働かせたりすることができ、結果として創造的な学習活動が実現するからである。

二つ目は、「主体的に学習に取り組む態度」の評価である。「主体的に学習に取り組む態度」は「知識及び技能」や「思考力、判断力、表現力等」を發揮し、身につけようとする態度ということができる。したがって、資質・能力の相互の関係を整理しながら、「内容のまとまりごとの評価規準」を作成し、その上で「題材の評価規準」を作成することに取り組み、実際の学習活動からの見取りや評価材を評価した際の成果と課題を明らかにし、さらに研究を深める。

これらのことから、本年度美術科では、研究主題を「美術の資質・能力を育む授業の工夫」とし、教科の目標で示された（１），（２），（３）を相互に関連付けた授業を行うとともに、その中で育まれた資質・能力の見取りについて明らかにする。

2. 研究の目的

生徒が主体的に課題に取り組み、身に付けた知識や技能を活用し、表現及び鑑賞の幅広い活動の中で「造形的な見方・考え方を働かせる」ことをとおして、自分の表現したいことや考えたこと、理解の状況等を、自ら把握し、学習を調整しながら主体的に学習に取り組む態度を養う。

3. 研究の内容

- ① 生徒が「思いや意図」をもち、主体的に課題に取り組めるような題材を設定する。
 - ・主体的に意欲をもって表現や鑑賞の学習ができるような題材や授業の開発
- ② 美術科の目標で示された（１），（２），（３）の関連を明確にした授業計画を立てる。
 - ・ねらいや学習内容などが整理できる、言語活動やワークシートの工夫
 - ・PDCA サイクルの中で、より主体的に学習ができるような授業づくり
- ③ 授業により育まれた資質・能力の見取りについて実践を重ねる。

4. 2か年の研究の見通し

2年目である令和3年度は、1年目の実践を基に、進めてきた美術科で育成する「創造性」について整理するとともに、「主体的な学び」のプロセルモデルの実践及び「主体的に学習に取り組む態度」の評価について研究を進め、授業改善とともにさらなる評価方法の整理を行うこととする。

5. 授業実践事例

(1) 題材名

「14歳の主張 ～心のイメージを形に～」(全8時間)

「A 表現」(1)ア(ア)(2)ア(ア) 「B 鑑賞」(1)ア(ア) [共通事項]

(2) 題材について

① 生徒の実態

2学年は、全体的に明るく活発で、学習や行事に真剣に取り組む生徒が多い。美術科の学習でも、課題の内容や方法を理解して熱心に取り組む姿が見られ、授業の制作を楽しみにしている生徒も多く見られる。

表現の学習では、設定されたテーマを理解し、材料や用具を工夫して使いながら取り組むことができる。これまでの学習では、新聞紙を芯材としてマスコットキャラクターを立体的に制作する活動や、自分の思いを体のプロポーションや一瞬の動きで表現し立体的に制作する活動などを通して、形を単純化したり強調したりして構成することや材料の特徴に注目して、作品に表してきた。

鑑賞では、作品について色や形などの特徴や感じ方を考えながら、自分の言葉で記述したり、仲間の意見に興味を持って聞いたりすることができる。このような実態をふまえ、試行錯誤を繰り返しながらよりよい表現を追究する態度を身につけさせたいと考えている。

②題材観

本題材は、今まで自分が経験してきた出来事を振り返り、その中で得た考えや思いを主題として、形を発想、構想し、抽象形の立体作品として表現するものである。それらの過程を通して、抽象表現に親しみ、抽象表現を行う意義について考えさせる機会としたい。これまで生活してきた社会の中で、生徒自身が考えたり感じたりしたことをテーマとして設定することで、主題について主体的に生み出すことができると考える。素材は画用紙や工作用紙の他に、段ボールやスチロール、アルミホイルなど多様な材質のものを選択できるようにする。これによって主題に迫るための多様な表現が可能となり、試行錯誤しながら自分のイメージにより近づけることができる。

③指導観

題材の導入では、抽象表現の作品を鑑賞し、様々な表現の工夫に触れ、作品に対する見方や感じ方を深める。最初に鑑賞の機会を設定することで、様々な表現の工夫に触れ、イメージを膨らませるきっかけとしたい。次に、自分の経験を振り返り、自分の持つ考えや思いを書き出す。そして、それらを主題とし、色や形、材質などを工夫して表現する。

指導にあたっては、今、自分が取り組んでいることやそのとき感じたり考えたりしていることに注目できるように、ワークシートを工夫する。また、表わしたいイメージを表現できるように、試行錯誤する時間を十分に確保する。さらに、多様な感じ方に触れることができるように、相互鑑賞の機会を設定する。

(3) 全体研究と関わって

全体研究では、昨年度から「創造性に富んだ、未来を切り拓く生徒の育成～『主体的な学び』のプロセスモデル実現を目指して～」という主題の基、研究を進めている。

これを受けて美術科では、次のような生徒を目指したいと考える。ひとつは、身の回りの形や色彩などの働きに気付いたり、よさや美しさを感じ取ったりすることができるような、造形的な視点をもった生徒である。もうひとつは、造形的な視点を基にどのような考え方で思考するかを生徒自身が理解し、学習を調整しながら課題解決に向けて主体的に取り組むことができる生徒である。

そのために、題材の指導計画を見直し、造形的な見方・考え方を軸にして、育む資質・能力を明らかにすることとする。また、造形的な見方・考え方を働かせた学びによって育成された資質・能力を見取ることができる手だてを工夫することとし、今年度は、問いをもつことのできる題材の構成と、それを支えるワークシートと生徒への働きかけに重点を置いて取り組む。

(4) 学習指導要領上の位置づけ

「A 表現」

(1) 表現の活動を通して、次のとおり発想や構想に関する資質・能力を育成する。

ア 感じとったことや考えたことなどを基に、絵や彫刻などに表現する活動を通して、発想や構想に関する次の事項を身に付けることができるよう指導する。

(ア) 対象や事象を深く見詰め感じ取ったことや考えたこと、夢、想像や感情などの心の世界などを基に主題を生み出し、単純化や省略、強調、材料の組み合わせなどを考え、創造的な構成を工夫し、心豊かに表現する構想を練ること。

(2) 表現の活動を通して、次のとおり技能に関する資質・能力を育成する。

ア 発想や構想したことなどを基に、表現する活動を通して、技能に関する次の事項を身に付けることができるよう指導する。

(ア) 材料や用具の特性を生かし、意図に応じて自分の表現方法を追求して創造的に表すこと。

「B 鑑賞」

(1) 鑑賞の活動を通して、次のとおり鑑賞に関する資質・能力を育成する。

ア 美術作品などの見方や感じ方を深める活動を通して、鑑賞に関する次の事項を身に付けることができるよう指導する。

(ア) 造形的なよさや美しさを感じ取り、作者の心情や表現の意図と創造的な工夫などについて考えるなどして、美意識を高め、見方や感じ方を深めること。

イ 生活や社会の中の美術の働きや美術文化についての見方や感じ方を深める活動を通して、鑑賞に関する次の事項を身に付けることができるよう指導する。

(ア) 身近な環境の中に見られる造形的な美しさなどを感じ取り、安らぎと自然との共生などの視点か

ら生活や社会を美しく豊かにする美術の働きについて考えるなどして、見方や感じ方を深めること。

〔共通事項〕

(1) 「A 表現」及び「B 鑑賞」の指導を通して、次の事項を身に付けることができるよう指導する。

ア 形や色彩、材料、光などの性質や、それらが感情にもたらす効果などを理解すること

イ 造形的な特徴などを基に、全体のイメージや作風などで捉えることを理解すること。

(5) 題材の目標及び題材の評価規準

①題材の目標

自分の経験を通して持った考えを基に主題を生み出し、形や色を発想、構想し、抽象表現の立体作品で表現することができる。

②題材の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
<p>知 形や色彩、材料などの性質、それらが感情にもたらす効果、造形的な特徴などを基に、全体のイメージや作風などで捉えることを理解している。</p> <p>技 材料や用具の特性を生かし、意図に応じて自分の表現方法を創意工夫し、制作の順序などを総合的に考えながら、見直しをもって表している。</p>	<p>発 経験を通して感じた思いや考えたことを基に主題を生み出し、単純化や強調、材料の組合せなどを考え、創造的な構成を工夫し、心豊かに表現する構想を練ることができる。</p> <p>鑑 造形的なよさや美しさを感じ取り、作者の心情や表現の意図と創造的な工夫などについて考えるなどして、美意識を高め、見方や感じ方を深めている。</p>	<p>態表 美術の創造活動の喜びを味わい表したいイメージを基にした表現の学習活動に取り組もうとしている。</p> <p>態鑑 美術の創造活動の喜びを味わい主体的に作品や美術文化などの鑑賞の学習活動に取り組もうとしている。</p>

(6) 題材の指導計画 (全8時間)

時間	学習内容	観点別評価		
		知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
1	抽象表現による作品を鑑賞し、表現方法や感じ方に注目する。		鑑 造形的なよさや美しさを感じ取り、作者の表現の意図について考えるなどして、見方や感じ方を深めている。(活動観察・ワークシート)	態鑑 美術の創造活動の喜びを味わい主体的に抽象表現の作品の鑑賞の学習活動に取り組もうとしている。(活動観察・ワークシート)
2 3	自分が表現したいことを基に、抽象表現による作品について構想する。材料の特徴を活かして形や色を工夫し、表現するための形を構想する。		発 経験を通して感じた思いや考えたことを基に主題を生み出し、単純化や強調、材料の組合せなどを考え、創造的な構成を工夫し、心豊かに表現する構想を練ることができる。(ワークシート・活動観察)	態表 美術の創造活動の喜びを味わい表したいイメージを基にした表現の学習活動に取り組もうとしている。(活動観察・ワークシート)
4 5 6	感じ方を考えながら、材料を組み合わせ、表したい思いを構成する。	<p>知 形や色彩、材料などの性質、それらが感情にもたらす効果、造形的な特徴などを基に、全体のイメージや作風などで捉えることを理解している。(活動観察)</p> <p>技 材料や用具の特性を生かし、意図</p>		

7		に応じて自分の表現方法を創意工夫し、制作の順序などを総合的に考えながら、見直しをもって表している。(活動観察)		
8	制作した作品について振り返る。		鑑 仲間の作品を鑑賞し、表現の工夫を感じとるなどして、見方や感じ方を深めている。(鑑賞シート)	鑑 主体的に鑑賞活動に取り組む、よさや工夫を見つけようとしている。(鑑賞シート)

※全8時間中、1時間目を導入、2時間目および3,4,5,6,7時間目を展開、8時間目をまとめとする。

(7) 本時の授業

- ①日 時 令和3年10月20日(水)
- ②対 象 2年2組生徒 男子 18名、女子 17名 計35名
- ③ねらい
 - ・抽象表現による作品の鑑賞の学習活動へ主体的に取り組むことができる。
 - ・作品の鑑賞を通して、抽象的な表現のよさについて見方や感じ方を深めることができる。

④展開 (1/8)

時間	○学習活動 ・活動の内容、指導のポイント	評価			指導上の留意点
		知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度	
導入 5分	○題材の学習内容について知る ・自分の経験から得た考えや思いについて、幾何学的な形や色を用いて表現する。 ○本時のねらいを知る。 ・抽象表現作品を鑑賞し、表現のよさについて考える。			○	・本時の学習内容やねらいについて簡潔に伝え、生徒が理解して取り組むことができるようにする。
展開 40分	○抽象表現のイメージを確認する。(5分) ➢ マーク・ロスコ 《「壁画 No.4」のためのスケッチ》 【発問】抽象美術にどのようなイメージを持っているだろうか。 ○抽象表現による作品を鑑賞する。(25分) ➢ 岡本太郎《樹人》 ➢ フランク・ステラ《リュネヴィル》 【発問】作品を見て、どんなことを感じるだろう。また、そのように感じるのはなぜだろう。 ○ワークシートにまとめた考えを発表させ共有する。(10分) ・色や形から感じたイメージを基に作品について考えたことを確認する。 【発問】抽象で表現することには、どんな意味があるだろう。 ・抽象的な表現では、自分の感覚を通して、形や色、質感などから感じることもそのものが重要であることを伝える。	○	○ ◎	○ ○	・感じたことや考えたことをなるべく具体的に言語化させる。

まとめ 5分	○まとめ ・振り返りシートを用いて学習を振り返る。			○	・鑑賞を通して考えたことや気づいたことなどについて全体で共有できるようにする。
-----------	------------------------------	--	--	---	---

①日 時 令和3年10月27日(水)

②対 象 2年2組生徒 男子 18名, 女子 17名 計 35名

③ねらい

・自分の経験から得た考えや思いを基に、形や色に宿るイメージを用いて抽象表現として構成することができる。

④展開 (2/8)

時間	○学習活動 ・活動の内容, 指導のポイント	評価			指導上の留意点
		知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度	
導入 5分	○本時の学習内容について知る ・自分の経験から得た考えや思いについて、形や色を用いて表現する。 ○本時のねらいを知る。 ・形や色に宿るイメージを用いて、考えや思いを抽象によって表現する。	○			・本時の学習内容やねらいについて簡潔に伝え、生徒が理解して取り組むことができるようにする ・前時の振り返りを行い、表現のポイントを意識させる。
展開 40分	○思いや考えを表現するための形について考える。 ・感情を表すオノマトペを参考に、感情を表すのにふさわしいと感じた形を描き出す。 ○「心の声」をテーマとして、自分の経験を振り返り、表現したい思いや考えの構想を練る。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;">【発問】自分の「心の声」を託すのにふさわしい形や色はどんなものだろう。</div> ・自分の「心の声」にふさわしい形を考え、クロッキー帳に描き出す。	○	○		・表現の幅が狭くならないように、絵文字や記号を用いず表現することを伝える。 ・自分の経験から具体化しながら、表したい思いや考えについて考えることを伝える。 ・形や色などに意味を持たせた表現することを伝える。最終的には立体作品としての配置も考慮することを確認する。 ・机間指導の際に、表現したい思いや工夫したい点についてやりとりを行って思考を深めるようにする。
		○	◎	○	
まとめ 5分	○まとめ ・振り返りシートを用いて学習を振り返る。			○	・表現する中で考えたことや気づいたことなどについて全体で共有できるようにする。

(8) 本実践の成果と課題

成果としては、題材計画を整理したことで、活動の内容が明確になった点である。また、ワークシートの構成を整理したことで、思考が構造化されたと考える。課題として、授業構成については、生徒への主題のめたせ方をわかりやすくするとともに、生徒自身が問いをもって作品制作に向かえるようにしていきたい。また、制作への意欲が途中で完結することなく、試行錯誤の過程を経て、さらによりよく表わしたいという思いを持ち続けられるような構成を目指していきたい。

7. 研究のまとめ

本年度は「美術の資質・能力を育む授業の工夫」という研究主題の基、生徒が主体的に課題に取り組み、身に付けた知識や技能を活用し、表現及び鑑賞の幅広い活動の中で「造形的な見方・考え方を働かせる」ことを通して、自分の表現したいことや考えたこと、理解の状況等を、他者や社会との関係の中で客観的に見つめる態度を養うことを目的として研究を進めてきた。ここでは、「主体的な学び」の評価方法を中心として整理したことを振り返り、本年度の研究のまとめとする。さらに、美術の資質・能力を育む授業づくりの要素を整理することで、2か年の研究のまとめとする。

(1) 評価方法について整理されたこと

「主体的な学び」の評価については、知識・技能や思考・判断と一体的に見取るものであるため、題材を通してつけさせたい力を明確にしなが、生徒の気づきを明らかにしていくことが必要である。そのためにワークシートの構成を整理し、生徒自身による振り返りからの見取りを行った。実践を通して、思考過程を言葉や図などで表出させることで生徒自身の考えが整理されるようになり、継続することで学習調整の能力をつけることに繋がっていくと感じた。また、主体的な学びを育むためには、学びを作る言葉がけが重要であり、創造活動を通して生徒自身が自分としての意味や価値をつくり出すには、題材全体のねらいを基に、各活動のねらいを明確にし、教師と生徒とのやりとりを通して考えを表出させることが大切だと考えられる。

一方で、主体的な学びにつなげるには知識をどのように活用するのかを生徒自身が考える必要がある。知識の活用については、生徒自身が既にもっている知識を取捨選択できるように既習事項を提示することや、体験的に知識を習得する機会が必要だと感じた。主体的な学びにつながる粘り強さをもつためには生徒が試行錯誤する機会も確保できるように、今後題材計画を検討する際に、注目して取り組んでいきたい。

(2) 授業づくりの要素について

本研究では、授業づくりの要素を「問いをもつことのできる題材」「題材の導入の工夫」「ワークシートと生徒への働きかけ」として授業の構成を整理した。「問いをもつことのできる題材」「題材の導入の工夫」については、生徒自身が主題を見つけることが主体的な学びにつながると考えられるため、創造活動に向かう際に表現したくなるような題材の提示方法が大切だと感じた。導入で提示する作品選定に幅を持たせるなど、生徒の関心を引き出す工夫や、生徒自身の思いに向き合わせる場面を作ることが重要だと考えられる。また、「問いをもつことのできる題材」については、生徒の実態を把握し、題材のねらいや目的を生徒自身が理解して活動に向かえるような、投げかけとなる題材選定をしていく必要がある。「ワークシートと生徒への働きかけ」の工夫によって、題材のねらいを確認させることが、主体的な学びにつながっていくと考えられる。今後も、生徒自身がわかって取り組み、そして資質・能力を育んでいけるような授業実践ができるよう、研究を進めていきたい。

5. 参考文献

- 教育課程部会教育課程企画特別部会 (2016) 「各教科等別ワーキンググループ等の議論の取りまとめについて」
国立教育政策研究所 教育課程研究センター (2020) 『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料 (中学校 美術)』
国立教育政策研究所 教育課程研究センター (2011) 「評価規準の作成, 評価方法等の工夫改善のための参考資料 (中学校 美術)』
永関和雄・安藤聖子編著 (2018) 「平成 29 年度改訂 中学校教育課程実践講座 美術」
福本謹一・村上尚徳編著 (2017) 「平成 29 年度版 中学校新学習指導要領の展開 美術編」
文部科学省 (2008) 「中学校学習指導要領解説 美術編」
文部科学省 (2017) 「中学校学習指導要領解説 総則編」
文部科学省 (2017) 「中学校学習指導要領解説 美術編」
山梨大学教育人間科学部附属中学校 (2015) 「平成 26 年度 研究紀要」
山梨大学教育人間科学部附属中学校 (2016) 「平成 27 年度 研究紀要」
山梨大学教育学部附属中学校 (2017) 「平成 28 年度 研究紀要」
山梨大学教育学部附属中学校 (2018) 「平成 29 年度 研究紀要」
山梨大学教育学部附属中学校 (2019) 「平成 30 年度 研究紀要」
山梨大学教育学部附属中学校 (2020) 「令和元年度 研究紀要」

主体的に学び、獲得した力を発揮することができる体育学習の創造

～「仲間と高め合える授業を目指して」～（2年次）

長沼 裕樹 野沢 克美 田形 麻巳子

1 研究主題設定の理由

（1）これまでの研究から

これまで本校の保健体育科では、平成23年度から平成25年度まで「自ら問う力を育む授業の創造」を目標に研究を進めてきた。これは、体育学習において全ての生徒が身に付けるべき「思考力」・「判断力」・「表現力」の内容を明確にし、どのように整理すべきかを目指した研究であり、学習指導要領改訂の要点と合致していた。特に、各単元において、どの場面で生徒が「問い」を強く意識して取り組むのか、またその「問い」を生徒自らが主体的に考えるための指導には、どのような方法が有効かを探ってきた。その結果、教材・教具の工夫や応用的・発展的な練習を効果的に取り入れることによって「問い」を強く意識し、課題解決に向けて取り組むことがわかり、それらを意図的・計画的に授業へ取り入れた。

平成26年度からの3年間は、『深く考える』授業の創造』と全体研究主題が設定された。保健体育科では、授業の中に「考える」場面を多く設定することは難しいと感じていた。これは生徒同士の話し合いやアドバイスを交換する時間を多くとることで「考える」ことは可能であるが、運動量が減少してしまうという問題が出てくると考えたからである。体育学習では個人で活動する場合のほかに、ペアでの補助や教え合い、ICTの活用を含めグループで協働的に学習することも多い。その際、教え合った内容や他者の意見を、個人カードやグループノートに書かせ、自己表出の方法を工夫しながら自分たちの考えを発表するといった活動を実施し、「思考力」・「判断力」・「表現力」等の育成を図り、自分が「理解していること」や「できること」を他者に伝えたり、表現したりすることが「わかる⇔できる」につながる要因と考えた。これを実現するためには、生徒個人が課題に対する自己の見解をもち(Plan)、それを示し合ったり、表現したりすること(Do)によって共有・共感、吟味し(Check)、新たな認識の高みに至る(Action)という過程が大切になってくる。この「共有・共感、吟味」が、授業の中で数多く見られ、互いに高め合うことができるよう「問い」をもたせ、活動しながらも「考え続ける」場面を設定することで練習する(運動量の確保)ことと振り返り(「深く考える」)を効率よく設定することに重点をおいた。

研究の成果として、授業で生徒に提示する「めあて」を工夫し、課題に対して一つの答えを目指すだけでなく、答えにつながるヒントやいくつもある答えの中のどれかを見付けることができるような投げかけをしたり、全体でそれぞれの考え方を共有する場面を継続的に設定したりすることで、吟味(Check)し思考を働かせる(Action)生徒の姿を見ることができるようになった。既習事項から考え出された解決方法が最善であるのかどうかを検討するために仲間と協力してもらったり、表現して伝えたり、意見交流をしたりして、より良い解決方法を仲間と協働的に探ろうとする姿勢や学習方法が身に付いてきたこと、さらに、自分自身の考え方だけで完結するのではなく、自分自身の考え方が正しいのか、それとも他に何か良い方法があるのかと思考錯誤する生徒の姿は、これまで保健体育科が「自ら考え、主体的に取り組む体育学習」について研究してきた成果であり、視点が変わる見方からの課題に対するアプローチによって生徒は「深く考える」状態となって学習に取り組んでいたといえる。

平成29年度からの3年間は、「新たな世界を主体的に創造する生徒の育成」と全体研究主題が設定され、「見方・考え方」を働かせた学びを実現するための手立てを工夫し、指導と評価の一体化を目指して実践を行った。保健体育科の資質・能力を見取る評価の在り方について吟味し、教科横断的な視点に立った教育課程の編成に取り組んだ。

このように保健体育科での「学び」に対する姿勢が、授業などだけでなく日常生活にも発展し、生きる力となって発揮されることがこれからの社会で求められる力であり、保健体育科が目指す生徒の姿である。授業を通して身に付けた学び方や態度、高まった力を学校生活や実社会で発揮できる生徒の育成を目指すことこそが、新学

習指導要領の方向性とも合致する。そこで今年度の研究主題を「主体的に学び、獲得した力を発揮することができる体育学習の創造」と設定した。

(2) 本校の生徒の実態

意欲的に学習に取り組み、与えられた話し合い活動や課題に取り組む中で、授業者が求めているものは何かを考えた発言や記述が多く見られることは、保健体育の授業だけに限られたことではない。自分の意見は主張するが、他者の意見を聞いたり参考にしたりしようと話し合いに取り組もうとする生徒はおよそ半分程度である。課題を見つけたり、解決しようと意見を出したり、仲間の考えを聞こうとしたりする生徒よりも授業者に与えられた場面設定に頼っている生徒が多数存在するのが現状である。自分なりの視点をもって授業に取り組み、課題の解決に向けた学習のプロセスが確立できていないことが課題である。

2 研究の方向性

(1) 教科研究について（全体研究との関わり）

今年度からの2年間の全体研究主題は、「創造性に富んだ、未来を切り拓く生徒の育成～「主体的な学び」のプロセスモデル実現を目指して～」である。令和3年度から完全実施される新学習指導要領には「中央教育審議会答申においては、予測困難な社会の変化に主体的に関わり、感性を豊かに働かせながら、どのような未来を創っていくのか、どのように社会や人生をよりよいものにしていくのかという目的を自ら考え、自らの可能性を発揮し、よりよい社会と幸福な人生の創り手となる力を身に付けられるようにすることが重要であること、こうした力は全く新しい力ということではなく学校教育が長年その育成を目指してきた「生きる力」であることを改めて捉え直し、学校教育がしっかりとその強みを発揮できるようにしていくことが必要とされた。」と述べられている。

保健体育の授業では、「主体的に学び、協働・対話を通じて多角的に考え、学習内容を理解しながらよりよい解決に向かう学習活動を実践していくこと」が求められる。「生きて働く『知識・技能』」とは、授業で学んできた知識や学習した経験を活用しながら課題の解決に向けて実践することであり、「未知の状況にも対応できる『思考力・判断力・表現力』」とは、学習課程の中にある課題を見だし、何が必要かを考え、判断し、周りの仲間と協力するために伝え合っていきながら解決に向かうことだと考え、「学びを人生や社会に生かそうとする『学びに向かう力・人間性等』」については、授業で実践する改題解決だけでなく学校生活全般や仲間とのより良い関係を築いていくために発揮される力や態度であると考え。

見いだされた課題を一人で解決することは難しく、仲間との関わりや学び合いなどの協働活動を通して、よりよい解決に向かう課程の中には、もっている知識や経験などを活用し新たな見方や価値などを「創造」できる力が必要不可欠であり、それこそが「生きる力」であると捉える。その「生きる力」を教科の中で系統的、計画的に育成することを目標に、保健体育科が目指す生徒像を設定した。

(2) 保健体育科の目指す生徒像

保健体育科の研究主題に沿った目指す生徒像を設定した。この目指す生徒像の先には、生徒が生涯にわたって健康の保持増進に努めるために豊かなスポーツライフを実現することができ、身に付け高めた資質・能力を発揮し、仲間と協力しながら新たな課題にもよりよく解決するために実践できるものだと考える。

保健体育科として目指す生徒像

- 自分の課題を見だし、よりよい解決に向けて主体的に取り組める生徒
- 仲間と協働し、高め合うことができる生徒
- 課題解決に向けた取り組みで培った力を生活の中でも発揮できる生徒

3 研究2年目について

(1)「主体的な学び」と実現するための手立てについて（研究1年目の振り返り）

授業のねらいや着目する視点についての設定を生徒に明確に示すことで、生徒は授業の中で何をどのように学ぶのか、何を目指して練習したり取り組んだりするのかをイメージし、主体的に活動に臨むことができた。評価する場面を明確にし、評価指標を作成することで、学習シートや観察での見取りをスムーズに行うことができたことが成果である。しかし、授業中に行う観察での評価の見取りについては、いくつかのグループが同時に行われている様子を授業者が一人で見て回る状況から、更なる工夫が必要である。主体的に取り組む態度を評価できるような学習カードの工夫と観察の両方を取り入れた評価方法を模索することが求められる。スキルアップ講座で実施した長距離走の授業では、周回タイムやラップタイムの計測が簡易化できるようなICTの活用（アプリなどを活用し、活動時間を確保）、生徒のエンゲージメントが高められた姿や内面で繰り広げられている学びそのものを把握する手立て（どのように授業の中でその場面を表出させるか）を研究することが課題となった。

(2)今年度の研究の方向性

授業や単元計画のどの場面で生徒の「主体的な学び」が表出されるのか、またその生徒の「主体的な学び」を具体的な姿をもとにどのように評価していくのか、保健体育科が考える「主体的な学び」とは何かについて研究を深めていく。全体研究で示されている「主体的な学び」のプロセスモデルを単元構成や授業づくりに活用し、「主体的に学習に取り組む態度」の評価の枠組みを活かしながら評価規準、評価場面を設定して指導と評価のあり方について研究を進めていく。運動や体育が嫌いであったり苦手であったりしても、自分自身の体力の向上や健康の保持増進を意識でき、「体や心が育まれ、鍛えられ、成長している」ことが実感できるような保健体育の授業を目指したい。

4 研究の目的

生徒が、予測困難な状況下に直面した時に諦めることなく、既存の知識や経験をもとに自ら粘り強く思考し、よりよい解決方法を模索し、仲間と吟味し合っただけで出たアイデアを試し、振り返るサイクルを実践することで解決に近づける力を身に付け、打開（レジリエンス）し、新たな価値を創り出すことができる生徒の育成を目指す。

5 研究の内容

- (1)「主体的な学び」を実現するための手立て（「主体的な学び」のプロセスモデルの作成）と実践計画
- (2)「主体的に学習に取り組む態度」の評価
- (3)獲得した力を発揮できる機会の設定と評価

6 研究の具体的な内容

ア 「主体的な学び」への手立て

「見通し」「学習活動」「振り返り」を生徒がイメージできる単元計画及び授業計画、学習過程を作成し、ガイダンスを行う。また、保健体育の授業や他の教科とも連携し身に付けた資質・能力が、日常生活でも活用されることのできるような年間指導計画の作成・実施・改善（PDCAサイクル）

イ 「主体的な学び」のプロセスモデルの作成

生徒が運動の楽しさを実感できる授業の工夫。課題解決に向けて仲間と協力しながら行う協働的な取り組み。課題解決に向けて試行錯誤を重ね、没頭しながら取り組むことのできる課題設定。

ウ 「主体的に学習に取り組む態度」の評価方法と基準作成

学習カードの記述、仲間との協働的な学習場面における観察、ICT機器を活用し、生徒の表現活動の記録や成果物の分析、授業への取り組む姿勢や態度などを活用した評価方法や評価規準の作成。

7 参考・引用文献

- 岩田 靖 体育科教育, 大修館書店 「教具・遊具」の工夫と開発 2014年 4月
大後戸 一樹 体育科教育, 大修館書店 子供を揺さぶる発問 2012年 12月
奈須 正裕 体育科教育, 大修館書店 知識基盤社会における学習観の転換 2017年 4月
奈須 正裕 東洋館出版社 「見方・考え方」を軸とした授業改善 2017年
松尾 知明 学事出版「未来を拓く資質・能力と新しい教育課程 求められる学びの加わり
・マネジメント」 2016年 12月
堀 哲夫 東洋館出版社 「一枚ポートフォリオ評価OPPA」 2013年
文部科学省「中学校学習指導要領」 日本文教出版(2008)
文部科学省「中学校学習指導要領解説 保健体育科編」 日本文教出版(2008)
文部科学省「中学校学習指導要領解説 保健体育科編」 日本文教出版(2017)
山梨大学教育学部附属中学校 2018・19年3月 研究紀要

8 実践事例

授業者 野沢 克美

1 単元名 B 器械運動(マット運動)

2 単元の目標

- (1) 次の運動について、技ができる楽しさや喜びを味わい、器械運動の特性や成り立ち、技の名称や行い方、その運動に関連して高まる体力などを理解するとともに、技をよりよく行うことができるようにする。
ア マット運動では、回転系や巧技系の基本的な技を滑らかに行うこと、条件を変えた技や発展技を行うこと及びそれらを組み合わせることができるようにする。
- (2) 技などの自己の課題を発見し、合理的な解決に向けて運動の取り組み方を工夫するとともに、自己の考えたことを他者に伝えることができるようにする。
- (3) 器械運動に積極的に取り組むとともに、よい演技を認めようとする、仲間の学習を援助しようとする、一人一人の違いに応じた課題や挑戦を認めようとするなど、健康・安全に気を配ることができるようにする。

3 運動の特性

器械運動は、逆さになって回転したり、手で支えて跳び越したり、日常生活の中で普段から経験することが少ない非日常的な動きを特徴とする。そのため、生徒にとっては、恐怖心を抱いたり、どこをどのように動かしたり力を入れたりするのか、イメージすることが難しい運動である。また、技の特性から、「できる」「できない」が明確に現れるため、全ての生徒が様々な技に挑戦し、技ができる楽しさや喜びを味わうことができるように、生徒自身の技能に適した技を選んだり、課題に応じた練習方法を工夫したりすることが大切である。

器械運動が苦手な生徒が恐怖心を克服しながら安全に練習を工夫し、仲間と協力しながら技の完成に向けた練習を行えるように授業を進める。自分のイメージしている動きとタブレット端末を使用して実際に撮影した動きとの違いを比較することで、自分が気付かなかったことに気付いたり、仲間と協力しながらより良

い動きになるようにアドバイスし合ったりすることで、体を動かす楽しさや喜びを味わうことができる知識や技能を獲得し、自己に合った技を見つけて練習を工夫し、運動に親しむことで継続して取り組む態度を養うことができる授業を展開していきたい。

4 生徒の実態

1年2組にマット運動の授業前に実施したアンケートでは「運動が好き」80.8%、「嫌い」3.8%、「どちらでもない」15.4%という結果になった。次にマット運動は好きかという質問に対して「嫌い」3.8%と「運動は好きですか」の質問と同じ数値となったが、「好き」と回答した生徒は57.7%に減少し、「どちらでもない」38.5%となった。どの生徒も自己の能力について知り、自分で選んだ技の習得を目指しながら「楽しさ」や「面白さ」を実感することができる授業を展開していきたい。技能に差がある生徒で構成するグループであっても、全ての生徒が主体的であり、見通しをもって授業に取り組むことができる授業にしていきたい。

5 第1学年及び第2学年「器械運動」の全ての「単元の評価規準」

知識・技能		思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
<p>○知識</p> <ul style="list-style-type: none"> 器械運動には多くの「技」があり、これらの技に挑戦し、その技ができる楽しさや喜びを味わうことができることについて、言ったり書き出したりしている。 器械運動は、種目に応じて多くの「技」があり、技の出来映えを競うことを楽しむ運動として多くの人々に親しまれてきた成り立ちがあることを言ったり書き出したりしている。 技の名称は、運動の基本形態を示す名称と、運動の経過における課題を示す名称によって名づけられていることについて、学習した具体例を挙げている。 技の行い方は技の課題を解決するための合理的な動き方のポイントがあることについて、学習した具体例を挙げている。 器械運動は、それぞれの種目や系などにより主として高まる体力要素が異なることについて言ったり書き出したりしている。 発表会には、学習の段階に応じたねらいや行い方があることを言ったり書き出したりしている。 	<p>○技能</p> <ul style="list-style-type: none"> 体をマットに順々に接触させて回転するための動き方や回転力を高めるための動き方で、基本的な技の一連の動きを滑らかにして回ることができる。 開始姿勢や終末姿勢、組合せの動きや手の着き方などの条件を変えて回ることができる。 学習した基本的な技を発展させて、一連の動きで回ることができる。 全身を支えたり突き放したりするための着手の仕方、回転力を高めるための動き方、起き上がりやすくするための動き方で、基本的な技の一連の動きを滑らかにして回転することができる。 開始姿勢や終末姿勢、手の着き方や組合せの動きなどの条件を変えて回転することができる。 学習した基本的な技を発展させて、一連の動きで回転することができる。 バランスよく姿勢を保つための力の入れ方、バランスの崩れを復元させるための動き方で、基本的な技の一連の動きを滑らかにして静止することができる。 姿勢、体の向きなどの条件を変えて静止することができる。 学習した基本的な技を発展させて、バランスをとり静止することができる。 <p>*鉄棒運動、平均台運動、跳び箱運動は省略</p>	<ul style="list-style-type: none"> 提示された動きのポイントやつまりきの事例を参考に、仲間の課題や出来映えを伝えている。 提供された練習方法から、自己の課題に応じて、技の習得に適した練習方法を選んでいる。 学習した安全上の留意点を、他の学習場面に当てはめ、仲間に伝えている。 仲間と協力する場面で、分担した役割に応じた活動の仕方を見つけている。 体力や技能の程度、性別等の違いを踏まえて、仲間とともに楽しむための練習や発表を行う方法を見付け、仲間に伝えている。 	<ul style="list-style-type: none"> 器械運動の学習に積極的に取り組もうとしている。 よい技や演技に称賛の声をかけるなど、仲間の努力を認めようとしている。 練習の補助をしたり仲間に助言したりして、仲間の学習を援助しようとしている。 一人一人の違いに応じた課題や挑戦を認めようとしている。 健康・安全に留意している。

6 第1学年「器械運動（マット運動）」の「単元の評価規準」

知識・技能		思考力, 判断力, 表現力等	学びに向かう力, 人間性等
<p>○知識</p> <p>①器械運動には多くの技があり, これらの技に挑戦し, その技ができる楽しさや喜びを味わうことができることについて, 言ったり書き出したりしている。</p> <p>②技の行い方は技の課題を解決するための合理的な動き方のポイントについて, 学習した具体例を挙げている。</p>	<p>○技能</p> <p>①体をマットに順々に接触させて回転するための動き方や回転力を高めるための動き方で, 基本的な技の一連の動きを滑らかにして回ることができる。</p> <p>②全身を支えたり突き放したりするための着手の仕方, 回転力を高めるための動き方, 起き上がりやすくするための動き方で, 基本的な技の一連の動きを滑らかにして回転することができる。</p> <p>③バランスよく姿勢を保つための力の入れ方, バランスの崩れを復元させるための動き方で, 基本的な技の一連の動きを滑らかにして静止することができる。</p>	<p>①提示された動きのポイントやつまずきの事例を参考に, 仲間の課題や出来映えを伝えている。</p> <p>②提供された練習方法から, 自己の課題に応じて, 技の習得に適した練習方法を選んでいる。</p>	<p>①練習の補助をしたり仲間に助言したりして, 仲間の学習を援助しようとしている。</p> <p>②一人一人の違いに応じた課題や挑戦を認めようとしている。</p> <p>③健康・安全に留意している。</p>

7 具体的な指導内容と「単元の評価規準」

知識及び技能		思考力, 判断力, 表現力等	学びに向かう力, 人間性等
知識	技能		
<p>マット運動には, 回転系や巧技系の技があり, これらの技に挑戦し, その技ができる楽しさや喜びを味わうことができる運動であること。</p> <p>↓</p> <p>①器械運動には多くの技があり, これらの技に挑戦し, その技ができる楽しさや喜びを味わうことができることについて, 言ったり書き出したりしている。</p> <p>↓</p> <p>技の行い方には, 技の課題を解決するための合理的な動き方のポイントがあること。</p> <p>↓</p> <p>②技の行い方は技の課題を解決するための合理的な動き方のポイントについて, 学習した具体例を挙げている。</p>	<p>基本的な技の前転や後転など, 背中をマットに接して回転すること。その技に求められる動きが途切れずに続けてできること。</p> <p>↓</p> <p>①体をマットに順々に接触させて回転するための動き方や回転力を高めるための動き方で, 基本的な技の一連の動きを滑らかにして回ることができる。</p> <p>↓</p> <p>基本的な技の側方倒立回転や頭はねおきなど, 手や足の支えで回転すること。その技に求められる動きが途切れずに続けてできること。</p> <p>↓</p> <p>②全身を支えたり突き放したりするための着手の仕方, 回転力を高めるための動き方, 起き上がりやすくするための動き方で, 基本的な技の一連の動きを滑らかにして回転することができる。</p> <p>↓</p> <p>基本的な技の片足平均立ちなど, バランスをとりながら静止すること。</p> <p>↓</p> <p>③バランスよく姿勢を保つための力の入れ方, バランスの崩れを復元させるための動き方で, 基本的な技の一連の動きを滑らかにして静止することができる。</p>	<p>学習した改善についてのポイントや課題を見つけ出し, 言葉や動作でわかりやすく伝えること。</p> <p>↓</p> <p>①提示された動きのポイントやつまずきの事例を参考に, 仲間の課題や出来映えを伝えている。</p> <p>↓</p> <p>課題解決にはいくつかの方法があり, 効果的な取り組み方を工夫したり, 発見したりすること。</p> <p>↓</p> <p>②提供された練習方法から, 自己の課題に応じて, 技の習得に適した練習方法を選んでいる。</p>	<p>仲間の学習を援助することは, 自己の能力を高めたり, 仲間との連帯感を高めて気持ちよく活動したりすることにつながる。</p> <p>↓</p> <p>①練習の補助をしたり仲間に助言したりして, 仲間の学習を援助しようとしている。</p> <p>↓</p> <p>様々な違いを超えて, 参加者全員が楽しんだり達成感を味わったりするための工夫や調整をすることで, グループの人間関係がよくなることにつながる。</p> <p>↓</p> <p>②一人一人の違いに応じた課題や挑戦を認めようとしている。</p> <p>↓</p> <p>体調の変化などに気を配ること, マットなどの用具の扱い方, 練習する時に接触や衝突しないようお互いに気をつけることが大切であること。</p> <p>↓</p> <p>③健康・安全に留意している。</p>

8 「器械運動（マット運動）」第1学年における指導と評価の計画

単元の目標	知識及び技能	次の運動について、技ができる楽しさや喜びを味わい、器械運動の特性や成り立ち、技の名称や行い方、その運動に関連して高まる体力などを理解するとともに、技をよりよく行うことができるようにする。 ア マット運動では、回転系や巧技系の基本的な技を滑らかに行うこと、条件を変えた技や発展技を行うこと及びそれらを組み合わせることができるようにする。										
	思考力、判断力、表現力等	技などの自己の課題を発見し、合理的な解決に向けて運動の取り組み方を工夫するとともに、自己の考えたことを他者に伝えることができるようにする。										
	学びに向かう力、人間性等	器械運動に積極的に取り組むとともに、よい演技を認めようとする、仲間の学習を援助しようとする、一人一人の違いに応じた課題や挑戦を認めようとするなど、健康・安全に気を配ることができるようにする。										
時	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	授業づくりのポイント	
学習の流れ	0	健康観察・ウォーミングアップ・本時のねらいの確認									<ul style="list-style-type: none"> 自分自身で取り組みたい技、練習したい技に挑戦し、発表できるように設定する。 毎時間、生徒に目標を設定させる。 練習の場面で、アドバイスをし合う機会と自分自身で取り組む場面を設定し、練習の振り返りを次回に活かす。 ICT機器を活用し、授業外でも取り組める環境をつくる。 	
	10	オリエンテーション	基本的な技の練習			映像から振り返り			発表会練習・リハ	発表会		
	20					課題の確認と解決練習（班内で）						
	30	感覚づくり	個人（グループ）練習			個人練習			発表会	単元のまとめ		
	40											
45	学習の振り返り・次時の確認											
50												
評価機会		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	評価方法
	知	①			②					総合的な評価	総合的な評価	学習カード
	技			①	②	③						観察
	思						①		②			学習カード、観察
態		③				②	①		観察、学習カード			
単元の評価規準	知	①器械運動には多くの技があり、これらの技に挑戦し、その技ができる楽しさや喜びを味わうことができることについて、言ったり書き出したりしている。 ②技の行い方は技の課題を解決するための合理的な動き方のポイントがあることを、学習した具体例を挙げている。										
	技	①体をマットに順々に接触させて回転するための動き方や回転力を高めるための動き方で、基本的な技の一連の動きを滑らかにして回ることができる。 ②全身を支えたり突き放したりするための着手の仕方、回転力を高めるための動き方、起き上がりやすくするための動き方で、基本的な技の一連の動きを滑らかにして回転することができる。 ③バランスよく姿勢を保つための力の入れ方、バランスの崩れを復元させるための動き方で、基本的な技の一連の動きを滑らかにして静止することができる。										
	思	①提示された動きのポイントやつまずきの事例を参考に、仲間の課題や出来映えを伝えている。 ②提供された練習方法から、自己の課題に応じて、技の習得に適した練習方法を選んでいる。										
態	①練習の補助をしたり仲間に助言したりして、仲間の学習を援助しようとしている。 ②一人一人の違いに応じた課題や挑戦を認めようとしている。 ③健康・安全に留意している。											

9 全体研究との関わり

(1) 本単元における「主体的に学習に取り組む態度」の評価

全体総論で示された、『主体的に学習に取り組む態度』の評価の枠組みに基づき評価規準を設定した。器械運動の単元全体における「主体的に学習に取り組む態度」の目標「器械運動に積極的に取り組むとともに、よい演技を認めようとする、仲間の学習を援助しようとする、一人一人の違いに応じた課題や挑戦を認めようとするなどや、健康・安全に気を配ることができるようにする。」の中から、本単元では「仲間の学習を援助しようとする」、「一人一人の違いに応じた課題や挑戦を認めようとする」について取り扱うこととしている。本時案では「練習の補助をしたり仲間に助言したりして、仲間の学習を援助しようとしている。」について評価を行う。技の習得や上達に向けた仲間の取り組みに対してどのように助言し援助しようとしているのか、よりよい学習方略を求めて、必要な修正を続けようとする姿を話し合いに参加する様子から観察すること、学習カードへの記述の様子から評価できるようにしたい。仲間への関わり方と仲間との関わり方の両面から生徒の学習に取り組む姿勢を見取っていきたい。

課題に対する評価指標を「粘り強く学習に取り組む」側面と「自己調整しながら学ぶ」側面について設定し、それぞれの側面に関わる学習状況について学習シートを活用させたい。

(2) 図2 「主体的な学び」のプロセスモデル（全体総論 P8）

表3 「主体的な学び」の具体像（全体総論 P11）

表4 「主体的に学習に取り組む態度」の評価の枠組み（全体総論 P13）

10 本時の展開（7／10時間）

(1) 本時の目標

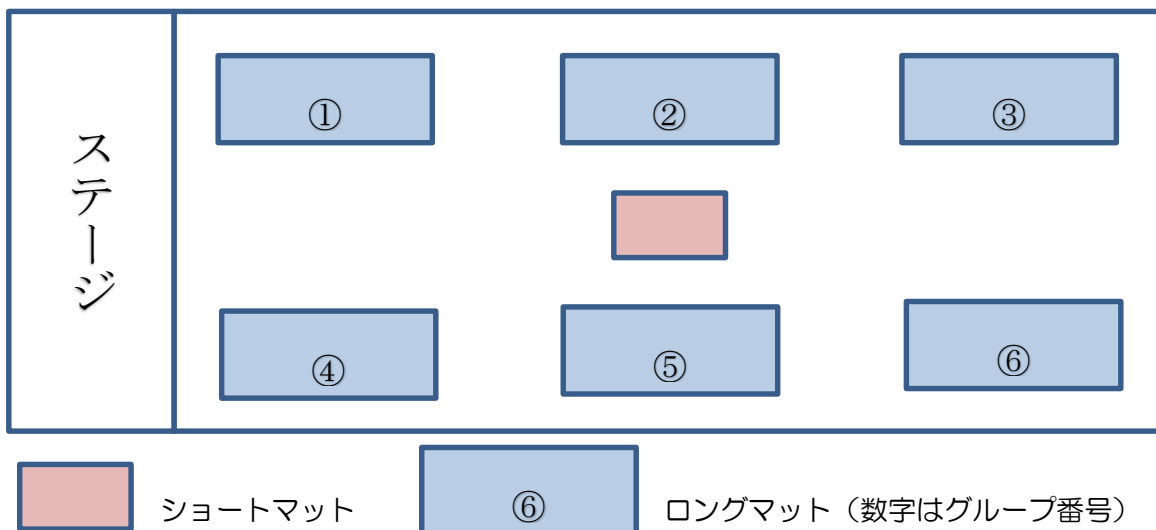
- 課題解決に向けた練習を仲間と協力して行いながら、技能の向上を実感したり、改善に向けたポイントを探求したりする活動を行う。

(2) 本時の学習評価

- 練習の補助をしたり仲間に助言したりして、仲間の学習を援助しようとしている。

（主体的に学習に取り組む態度）

(3) 体育館内のマット配置



(4) 展開

	学習内容・活動	評価方法及び評価規準
はじめ	1 ランニング, 体操 2 あいさつ, 本時の学習の確認 ・本時のねらいと学習の流れを確認する。 ねらい: 仲間と協力して練習し, 選んだ技の習得や上達を目指して取り組もう。 3 W-up (前転系, 後転系, 壁倒立, 側方倒立回転)	・本時の授業の流れ・自分の目標がイメージできるように, 前回までの復習・確認をさせる。 ・マット運動が安全にできるように感覚練習を自分のペースで行わせる。
なか	＊生徒は各グループに1枚のマットを使用して活動する。 4 ICT 機器を活用し, 前回までの課題, 改善ポイントなどを共有する。(グループ内) ・技の出来映えに対してコメントをし合い, 内容を確認して共有する。 5 アドバイスをもとに課題解決に向けた練習や改善ポイントについて動きながら共有する。 ・タブレット端末を使って撮影して出来栄えを確認したり, 前回の映像と比べたりすることで改善するポイントを明確にする。 タブレット端末を使い, グループ内で協力してアドバイスポイントの確認を行う。	○タブレット端末を使ってこれまでの練習で意識してきた技のポイント, 課題を確認し, グループ内に伝えさせる。 ・自分の技に対してのアドバイスコメントを確認し, グループ内で課題解決に向けたポイントの確認や練習する方法などについて確認させる。 ○アドバイスコメントに対して動きながら確認したり, 映像でチェックしたりして, 本時に取り組むべきポイントを明確にさせる。 ・視点の確認を行わせる 「手なのか足なのか」, 「姿勢や向き」, 「配置」, 「タイミング」など 評価: 練習の補助をしたり仲間に助言したりして, 仲間の学習を援助しようとしている。 【主体的に学習に取り組む態度】
	6 自分の技の出来映えについて改善ポイントが共有できたところで個人練習を行う。 7 本時の練習成果の記録と振り返りを行う ・次回への課題(目標)が立てられるように記録・記入する。 ・練習の中で気付いたことや試してみたいアイデアなど, 学習ノートにメモし, グループ内で共有できることは忘れないうちに行う。	●努力を要する状況の生徒への手立て ・どの場面を観察したらいいのか視点を伝え, 焦点化して観察することで, 気付いたことやどこが良いか, どこをどのように直したらいいのか指摘したりできるように支援する。 ○アドバイスされたことから自分なりの改善ポイント, 練習方法を考えて取り組む。 ・安全の確保を徹底し, 撮影等で協力できることはグループ内で取り組ませる。
まとめ	8 本時の練習を振り返り, 成果を共有する。 ・練習で気付いたことや有効だったアドバイスなどを紹介し, どのように成果があったか, 次回に挑戦したいことなどについて発表し, 共有する。(全体) ・次時の学習内容の確認 9 あいさつ	○本時の取り組み状況を振り返り, グループ内でのアドバイスや練習, 仲間の発表を聞きながら次回への授業のイメージをもたせる。 ○生徒の健康状態を把握する。

1 1 課題に対する評価指標(身に付けさせたい資質・能力を可視化する手立て・規準)

【主体的に学習に取り組む態度】

・練習の補助をしたり仲間に助言したりして、仲間の学習を援助しようとしている。

(観察・学習カード) 振り返り・方略調整

実現状況	判断の目安	想定される様相
「十分満足できる」状況 (A)	○教師が指導した動きのポイントを参考に練習し、その出来映えや結果など、課題の解決に向けた話合いに積極的に参加したり、その内容を具体的に記入したりしている。	①、②の視点で学習の実現の程度について質的な高まりや深まりをもっていることが見とれる姿。
「おおむね満足できる」状況 (B)	○教師が指導した動きのポイントを参考に練習し、その出来映えや結果など、課題の解決に向けた話合いに参加したり、その内容を記入したりしている。	①練習に取り組んだ成果を振り返り、課題の改善に向けて練習方法を試行錯誤したり、改善ポイントを探したり、よりよい学習方略を求めて必要な修正を続けようと言話合いに参加したりする様子が見られたり、カードに記入したりしている。(粘り強さ) ②練習に取り組んだ成果をモニタリングし、その成果や課題を見つけ、改善を図るための学習方略の修正を行う。自分自身だけで実施するのではなく、仲間と協力しながらアドバイスをしたりされたりする活動を通して、練習を調整したり、話合いに参加したりする様子が見られ、カードに記入したりしている。(自己調整)
「努力を要する」状況 (C)	○教師が指導した動きのポイントの理解が不十分で、その出来映えや結果など、課題の解決に向けた話合いに参加できず、内容を記入できない。	①、②の視点に対して、仲間に助言したり、その内容を記入したりしていない。 ※グループごとに指導する中で、教師がつなぎ役になるようなアドバイスをするなどして、学習を支援する。 ・生徒の振り返りに対してフィードバックを行う。 ・他の生徒の振り返りや方略調整について紹介し、共有する。

1 2 研究授業を終えて

これまでの本校の器械運動の授業では、生徒の安全管理を第一に考えながら授業を進めていた。学習形態では、ICT 機器を6～7人グループで1台使用するなど、十分な台数を確保できていないのが現状であった。しかし、今年度からは一人一台PCのタブレット端末が準備され、自分自身の練習している様子(フォーム)を撮影して動画映像をデータとして記録することが可能になり、その映像と教科書の見本とを見比べたり、上手にできる仲間の様子と比べてみたり、過去の自分自身の映像と比較することができた。映像から相違点や共通点を確認しながら「より美しくきれいに技を表現する」ために、課題を見つけて改善方法を考え、意識しながら練習していくことを授業の中に取り入れることができた。比較した結果から自分自身の課題について思考する様子が見られたり、練習前にグループ内で課題や練習する内容、目標について確認したりすることで、グループ内の教え合いやアドバイスをし合うために友だちをよく観察する様子が見られた。

器械運動が苦手であったり運動に消極的であったりする生徒でも、自分自身の課題の改善に向けた練習に積極的に取り組むことができない生徒であっても、グループ内の仲間の課題解決のために観察を一生懸命し

たり、上達できるようにアドバイスをしたりするなど、技能の向上に向けて協力する生徒の様子が見られた。

このように「より美しくきれいに技を表現する」という課題について自身の映像データをもとに仲間と比較したり、共に分析したりすることにより、自分では気づけなかったことや自分の課題は何であるかを探求する主体的・対話的で深い学びのサイクルが回り始めたことは成果である。ICT 機器を活用して自身の運動を客観視することにより、獲得した技能の習得状況を確認することができ、仲間と情報を共有したり、意見交流をしたりすることで課題は何であるかについて探求することができた。

13 研究のまとめ

昨年度と今年度の2年間は、生徒が保健体育の授業の中で「主体的に学ぶ」姿を目指して研究に取り組んできました。単元計画及び授業計画、学習過程を生徒がイメージできるようにガイダンスを工夫したり、得意不得意、好き嫌いなど、様々な状況の生徒が自分自身の課題に向かって練習したり、仲間の課題解決に向けた取り組みに協力したりできるような授業の目標や単元のゴールを設定したり、GIGA スクール構想における一人一台 PC の端末を活用し、動画撮影を授業の中に計画的に組み込み、記録や比較、分析、考察に活用することを模索してきました。学習カードを紙ベースから電子化し、生徒が持っている端末から記録したり提出したりすることが可能になったことで、従来の学習カードの提出方法が授業中、あるいは下校前に係が回収していたが、授業中であっても帰宅後の宿題であっても記入後にネット環境さえ整っていればいつでも提出ができるようになり、授業者もいつでも確認、チェック、返却ができるようになりました。効率化が図れるだけでなく、授業者が行う評価における参考資料となったり、生徒の学習（習得）した記録を残したり、どのように変化（変容）したのかを映像を基に確認したりすることができるので、電子化した効果を確認することができました。

評価方法（評価指標の作成）については、単元や授業を進めていく中で今後も検討が必要であり、研究を進めていかなければならない課題となりました。保健体育科の研究主題「主体的に学び、獲得した力を発揮することができる体育学習の創造」にあるように、生徒が授業の中で主体的・対話的で深い学びに向かえるような年間指導計画・単元計画・授業を作成し、実施後の振り返りを繰り返すことで授業改善を図り、他教科とも連携を図れるように研究を進めることが必要となります。保健体育科で育成された資質・能力が、学校生活をはじめとする日常生活で更に活用され、「生徒自身に身についていくような指導」が実施できるように今後も研究を進めていきたいと思えます。

技術・家庭科における主体的な学びを実現した授業（2年次）

Google Workspace for Education を活用して
中学校から高等学校へのプログラミング教育の接続（技術分野）
～プログラムによって問題を解決しよう～

家庭分野における主体的・対話的で深い学びの実現に向けて（家庭分野）

青柳 敬大 宮崎 茜

1. 研究主題設定の理由

これまでの学習指導要領の成果と課題を中央教育審議会答申では次のように明らかにしている。

技術分野においては、社会、環境及び経済といった複数の側面から技術を評価し具体的な活用方法を考え出す力や、目的や条件に応じて設計したり、効率的な情報処理の手順を工夫したりする力の育成について課題があるとの指摘がある。また、社会の変化等に主体的に対応したり、より良い生活や持続可能な社会を構築したりするため、技術の発達を主体的に支え、技術革新を牽引することができるよう技術を評価、選択、管理・運用、改良、応用することが求められる。

家庭分野においては、普段の生活や社会に出て役立つ、将来生きていく上で重要であるなど、児童生徒の学習への関心や有用感が高いなどの成果が見られる。一方、家庭生活や社会環境の変化によって家庭や地域の教育機能の低下等も指摘される中、家族の一員として協力することへの関心が低いこと、家族や地域の人々と関わること、家庭での実践や社会に参画することが十分ではないことなどに課題が見られる。また、家族・家庭生活の多様化や消費生活の変化等に加えて、グローバル化や少子高齢社会の進展、持続可能な社会の構築等、今後の社会の急激な変化に主体的に対応することが求められる。

現在の子供たちやこれから誕生する子供たちが、成人して社会で活躍する頃には、我が国は厳しい挑戦の時代を迎えていると予想される。生産年齢人口の減少、グローバル化の進展や絶え間ない技術革新等により、社会構造や雇用環境は大きく、また急速に変化しており、予測が困難な時代となっている。また、急激な少子高齢化が進む中で成熟社会を迎えた我が国にあっては、一人一人が持続可能な社会の担い手として、その多様性を原動力とし、質的な豊かさを伴った個人と社会の成長につながる新たな価値を生み出していくことが期待される。

今日の学校教育では、時代が大きく変わる中、子供たちがこれから生きていく時代に向けて、そこで求められる資質・能力を明確にすることが重要となる。資質・能力は新学習指導要領では「何を理解しているか、何ができるか」「理解していること・できることをどう使うか」「どのように社会・世界とかわかり、よりよい人生を送るか」という三つの柱に沿って、育てるべき資質・能力を整理し、教育課程の枠組みを考える必要があるとされている。また、学校教育における質の高い学びを実現し、学習内容を深く理解し、資質・能力を身に付け、生涯にわたって能動的に学び続けるようにするために、「主体的・対話的で深い学び」を求めている。この視点は、学びの過程としては一体として実現されるものであり、活動はあるが学びが欠けるような表面的な学びに陥らないように「深い学び」の視点は重要とされている。この深い学びに大きく関わるのは各教科等の特質に応じた「見方・考え方」である。昨年度までの研究では、「見方・考え方」を働かせた学びや資質・能力を見取るための評価の工夫、教科等横断的な教育課程について研究を進めてきた。これまでの研究を生かしながら、本年度は「自ら追究し、未来を切り拓く生徒の育成」を研究主題とし、「主体的に学習に取り組む態度」の見取りについて、検討していきたい。

【技術分野】

2. 研究の目的

今後の社会を担う子供たちは、グローバル化、少子高齢化、持続可能な社会の構築等の現代的な諸課題を適切に解決できる能力が求められる。技術分野においては、生活や社会において様々な技術が融合して利用されている現状を踏まえ、材料可能、生物育成、エネルギー変換、情報等の専門分野における重要な概念等を元にした教育内容としていく必要がある。急速な発展を遂げている情報の技術に関しては、小学校におけるプログラミング教育の成果を活かし発展させるという視点から、また、高等学校における情報の授業へのスムーズな接続を行いプログラミングの技術をより多くの生徒に身に付けさせるという観点から、従前からの計測・制御に加えて、双方向性のあるコンテンツに関するプログラミングや、ネットワークやデータを活用して処理するプログラミングも題材として扱うことが必要とされた。

経済産業省の平成28年6月10日発表の「IT 人材の最新動向と将来推計に関する調査結果」によると2016年時点でIT人材が17万人不足しており、今後はさらに深刻化、2030年には59万人が不足すると予測されている。国としてもIT人材を育成することが喫緊の課題となっている。高等学校で行われてきた情報科における学習を更に充実させ、プログラミングの技術を持って情報化社会に貢献できるような人材を育成する必要がある。また、そのためには小中学校でもプログラミングなどを学び論理的思考力等を身に付けさせる必要がある。小学校・中学校、そして高等学校での学習を経て、情報やコンピュータに抵抗のない子供を育てることが求められている。

プログラミングに対して抵抗を持たれてしまう原因は様々である。開発環境が整わないということや、成果が出し難いなどのことが挙げられる。得に高等学校への接続という視点で考えると、中学校までのプログラミング学習などで、GUIベースのものに慣れてしまっているということが挙げられる。IT人材を育成するためにはCUIベースのものを扱う必要があるため、高等学校の情報でCUIベースのものを扱うが、GUIからCUIへの接続が上手くいかず、結果としてプログラミング離れが進んでしまうと思われる。GUIベースのものではプログラムの思考ができて、CUIベースのもので作成しようとする時操作方法やコマンド等覚えることが多く、上手に扱えないという課題が出て来てしまう。この課題を解決するために、GUIベースのプログラミングソフトウェアでプログラムの設計に関する力を養い、CUIのものについても理解を深めていく必要がある。また、ICT機器を活用し、それらの力が更に深まるようにしていきたい。

本研究では高等学校への接続を意識した研究と授業実践を行い、中学校でのプログラミング教育について検討していく。

また、本校の技術分野における昨年度までの研究の経緯は以下の通りである。

- 平成13年度 「起業家精神育成の視点を取り入れた授業」(技術分野)
- 平成14年度 「知識と技能の総合化をめざした授業」(技術分野)
- 平成15年度 「知識と技能を密接に関わらせていく学習内容の工夫と実践」(技術分野)
- 平成16年度 「学習を生活に活用する学習内容の工夫と実践」(技術分野)
- 平成17.18年度 「生徒一人一人が達成感を感じられる学習内容の工夫と実践」

(技術分野)

- 平成 19 年度 「生徒が達成感を感じられる授業の工夫」(技術分野)
- 平成 20. 21. 22 年度 「かかわりを生かして力をのばす授業」(技術分野)
- 平成 23 年度 「計測・制御の技術を評価する「問い」を求めて」(技術分野)
- 平成 24 年度 「新しいエネルギー変換の技術」有機 EL を活用した教材提案 (技術分野)
- 平成 25 年度 「エネルギー変換に関する技術」～エネルギー変換からみるハイブリッド自動車の授業～ (技術分野)
- 平成 26 年度 「3D プリンタを活用し、材料加工を深く考える授業」(技術分野)
- 平成 27 年度 「3D プリンタで印刷し活用する授業」(技術分野)
- 平成 28 年度 「3D プリンタで印刷し活用する授業」(技術分野)
- 平成 29 年度 「ネットワークを利用した双方向性のあるコンテンツのプログラミング」
～パワーポイントを利用した学校クイズの授業実践～
- 平成 29 年度 「ネットワークを利用した双方向性のあるコンテンツのプログラミング」
～WebAPI を取り入れてデータを活用する授業実践～
- 平成 30 年度 「ネットワークを利用した双方向性のあるコンテンツのプログラミング」
～オーロラロック 2 N 制御ソフトを利用して課題を解決する授業実践～
- 平成 31 年度 「ネットワークを利用した双方向性のあるコンテンツのプログラミング」
～オーロラロック 2 N 制御ソフトを利用して課題を解決する授業実践～
- 令和元年度 「小学校から中学校へのプログラミング教育の接続」(技術分野)
～ネットワークを利用した双方向性のあるコンテンツのプログラミング～
- 令和 2 年度 「Google Workspace for Education を活用して小学校から中学校への
プログラミング教育の接続」(技術分野)
～プログラムによって問題を解決しよう～
- 令和 3 年度 「Google Workspace for Education を活用して中学校から高等学校への
プログラミング教育の接続」(技術分野)
～プログラムによって問題を解決しよう～

3. 全体研究とのかかわり 技術・家庭科(技術分野)で目指す具体的な生徒の姿

本校の考える「主体的な学び」とは、エンゲージメントが高められた姿である。すなわち、生徒が粘り強く学習に取り組み、自己調整しながら学ぶ姿である。「主体的な学び」についての理論としては、3つの考え方が示されている。本校では、山梨大学の田中准教授にも助言をいただきながらエンゲージメントに着目して、主体的な学びを捉え、その実現を目指して工夫して行うこととした。

- ① 認知的エンゲージメント＝生徒の頭脳の中で繰り広げられる、学びの質を高めようとする働き、自律性
- ② 行動的エンゲージメント＝見える形で現れる没頭する姿で、量的に測れるもの。
- ③ 感情的エンゲージメント＝生徒の内面に見られる、学びに関するポジティブな感情

文部科学省が「主体的に学習に取り組む態度」の評価の尺度として示している「粘り強く取組を行おうとする側面」と「自らの学習を調整しようとする側面」は、エンゲージメントの3つの側面全てでみられる。この3つのエンゲージメントを授業の中でいかに配置し、評価の方法を探るのか検討していくこととする。

4. 研究の内容

- (1) 「高等学校・情報への連携について」
- (2) 授業実践と事前調査

(1) 「高等学校・情報への連携について」

中学校から高等学校へのプログラミング教育の接続の要点について、「教育課程の連携」、「教材の連携」の2つの観点から検討する。

① 「教育課程の連携」

教育課程の連携については、中学校段階、高等学校段階それぞれにおいて育てるべき資質能力や教育内容をどのように傾倒的に設定するか、教育課程のスコープとシーケンス（連続・順序）の検討が必要となる。高等学校における情報は従来から行われているものを、必修化に伴いどのように変更して実践していくのか、各地で行われている実践の成果の収集や分析が必要と考える。また教育課程との連携を確かなものにするために、各段階で育成する資質能力や教育内容の妥当性を把握するための評価方法研究も重要である。

② 「教材の連携」

教材の連携については、小学校段階、中学校段階それぞれの段階性や共通性、発展性を見ていく必要がある。学習指導要領では、高等学校の情報Ⅰにおいて、「(3) コンピュータとプログラミング」の「ア (i) アルゴリズムを表現する手段、プログラミングによってコンピュータや情報通信ネットワークを活用する方法について理解し技能を身に付けること」と記されており、解説には「コンピュータを効率よく活用するために、アルゴリズムを文章、フローチャート、アクティビティ図などによって表現する方法、データやデータ構造、プログラムの構造、外部のプログラムとの連携を含めたプログラミングについて理解するとともに、必要な技能を身に付けるようにする。」と記されている。このことから、アルゴリズムを理解しやすい GUI ベースのソフトウェアだけではなく、CUI ベースのソフトウェアも利用し、能力を高めしていく必要があると言える。

(2) 授業実践と事前調査

本研究において、生徒の実態や授業の有効性や妥当性を検討するためにも、プログラミングについての事前調査を行った。

令和3年5月に本校中学3年生に対してプログラミングを学ぶということに関する意識調査を行った。

情報機器や、インターネット関係について、知っていることはありますか？

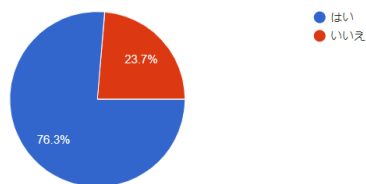


図 1

プログラムについて、あなたは他の人より知っていると思いますか？

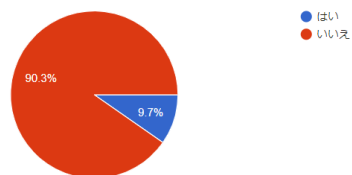


図 2

プログラミングを学ぶことに対して、理解できるかどうか不安ですか？

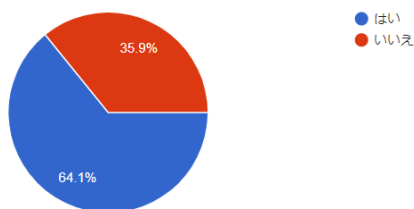


図 3

図 1 の問「情報機器や、インターネット関係について、知っていることはありますか？」に対しては、75%以上の生徒が知っていると答えた。その中で「どんなことを知っていますか？」という問いに対して、ほとんどの生徒が「スマートフォン」やゲーム機等のものを挙げており、生徒の日常生活と情報の技術が強く結びついていることが分かる。しかし、その中から「プログラミング」や、それに関する言葉は挙がらなかった。このことから、その中身について知っている生徒は少ないことが分かった（ただ「0と1の組み合わせでできている、等の回答があったことから、知っている生徒が全くいないという訳ではない」。そのことを裏付けるように、図 2 の問「プログラムについて、あなたは他の人より知っていると思いますか？」に対して 9 割の生徒が「いいえ」と答える結果が得られた。このことから、プログラミングに関する生徒の理解は深く無く、基礎的な内容から学んでいく必要があることが分かる。

図 3 の問「プログラミングを学ぶことに対して、理解できるかどうか不安ですか？」の問に対して 6.5 割の生徒が不安と答えた。残り 3.5 割の生徒は楽しみ、と回答していた。どんなことが不安なのか、という問いに対しては、以下のようなものが上がった。

- ・手順ミスをしてしまわないか
- ・全く分からないものなので不安
- ・専門的な知識が問われそう
- ・プログラム言語をしっかり覚えられるのか不安

以上のことから、簡単なプログラミングから入り、不安を取り除く必要があることが分かった。しかし、高等学校との接続を考えると、CUI ベースのものに触れる必要も出てくると考えられる。

5. 授業実践について

令和3年度 中等教育研究会 技術・家庭科技術分野 学習指導案

山梨大学教育学部附属中学校 教諭・青柳敬大

<p>題材名</p> <p>明るさの変化を利用して、生活に役立つ制御プログラムを作ろう</p>	<p>内容のまとめり</p> <p>内容「D 情報の技術」</p> <ul style="list-style-type: none">(1) 生活や社会を支える情報の技術(3) 計測・制御のプログラミングによる問題の解決(4) 社会の発展と情報の技術
---	--

1. 題材の目標

情報の技術の見方・考え方を働かせ、目的にあったプログラムを作成し、その文字コードを読み取る実践的・体験的な活動を通して、生活や社会で利用されている情報の技術についての基礎的な理解を図り、それらに係る技能を身に付け、情報の技術と生活や社会、環境とのかかわりについて理解を深めるとともに、生活や社会の中から情報の技術に関わる問題を見出して課題を設定し解決する力、よりよい生活や持続可能な社会の構築に向けて、適切かつ誠実に技術を工夫し創造しようとする実践的な態度を身に付ける。

2. 題材について

本題材では、明るさの変化を利用して生活に役立つプログラムの制作を通して、計測・制御に関する理解を図り、技能を身に付けさせるとともに、問題を見だして課題を設定し、技術を工夫してよりよい生活を築こうとする実践的な態度を身に付けさせたいと考えている。

また、本題材で扱う計測・制御プログラミングでは scratch のようなブロック型のプログラミング言語と Python のようなテキスト型のプログラミング言語の両方を扱う。ブロック型の言語によるプログラミングを行い、そのプログラムをコード化してテキスト型のプログラミングに慣れさせ、最終的にテキスト型の言語によるプログラミングを行う。このことにより、実社会で行われているプログラミングについての理解を深めることや新たに高等学校で必修となった情報Ⅰへのスムーズな接続に役立つものと考えている。

3. 題材に関わる生徒の実態

情報の技術におけるプログラミングの学習に入る前、生徒にアンケートを実施した。その中で「面白そう」と答えている生徒もいる一方で「不安だ」という回答を多く目にした。何が不安なのかの記述を見ると「全く分からないものなので、不安。」というものや「専門的な知識が問われそう。」など、未知の世界であるからこそその不安が見られた。一方で「手順ミスをしてしまわないか」というものや「プログラム言語をしっかりと覚えられるのか不安」という記述もあり、プログラミングに対して少しの知識を

持ち合わせているからこそその不安も見られた。

その状況を考え、生徒にはこれまでに、技術分野の授業の中で、情報の技術に関する基礎的な知識を身に付けさせ、SF18 という、フローチャートによるプログラミングソフトウェアを用いて、チャットプログラムの作成や問題解決に取り組むことで、不安を取り除きながら、条件分岐型等の知識や、プログラミング的思考力を身に付けた。

既存の知識を活用しながら、microbit を用いて、計測・制御のプログラミングを行い、更に技術を高めたい。また、自身が作成したプログラムを文字のコードに変換しそれを分析することで、コードに対する苦手意識を無くし、生徒のプログラムに対する関心・意欲を向上させていきたい。

4. 教材について

(1) microbit

Microbit とは、2015 年に英国放送協会によって設計された低消費電力、低コストのシングルボードコンピュータ。デフォルトで明るさセンサーや加速度センサー等が付いているほか、ボタンが 2 つあったり、それらによってボードについている 25 個の LED を自由に制御することができたりする。拡張ボード等を使用すれば、扱えるセンサー等が増える。また、最大の特徴は、エディターがブラウザ上で使用でき、scratch で作成したプログラムを、瞬時に Python や Javascript に変換することができることである。この機能を活用して、ビジュアルベースのプログラムとテキストコーディングのプログラムとを繋げて考えさせたい。

(2) 使用するプログラミング言語

Scratch と同じようなブロック型のプログラミング (Microsoft MakeCode for microbit) を扱う。それに加えて、テキストコーディングのものとしては、Python を扱っていく。

5. 題材の評価規準

観点	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
評価規準	生活や社会で利用されている情報の技術についての科学的な原理・法則や基礎的な技術の仕組み、情報モラルの必要性及び、情報の技術と生活や社会、環境との関わりについて理解しているとともに、安全・適切なプログラムの制作、動作の確認及びデバッグ等ができる技能を身に付けている。	プログラムの作成に関わる問題を見いだして、必要な機能をもつコンテンツのプログラムや計測・制御システムの設計・製作などの課題を設定し、解決策を構想し、実践を評価・改善し、表現するなどして課題を解決する力を身に付けているとともに、よりよい生活の実現や持続可能な社会の構築を目指して情報の技術の評価し、適切に選択、管理・運用、改良、応用する力を身に付けている。	よりよい生活の実現や持続可能な社会の構築に向けて、課題の解決に主体的に取り組んだり、振り返って改善したりして、情報の技術を工夫し創造しようとしている。

5. 指導と評価の計画（第3学年8時間）

時間 指導事 項	・学習活動	○：評価規準 と ◇：評価方法の例		
		知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
1 D (1) ア	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 5px;">温度や明るさ、入力を感知して動作するプログラムを作成しよう</div> ・プログラムについて振り返る。 ・microbitについて、基礎的な操作を覚える。	①順次処理型などの、プログラムの形について説明できる。 ◇ワークシート		
2 3 D (3) ア	・繰り返し型による表示プログラムを作成する。 ・温度を測定し、出力するプログラムを作成する。 ・ボタン入力によって表示を切り替える、条件分岐型のプログラムを作成する。	②順次処理型、条件分岐型、繰り返し型等の知識を活用できている。 ◇ワークシート ◇ペーパーテスト	③既存の知識を基に、プログラムの設計ができる。 ④より良いプログラムとなるように処理の手順を考えることができる。 ◇ワークシート ◇プログラム	④進んで情報の技術と関わり、主体的に理解し、技能を身に付けようとしている。 ◇振り返りカード
4 D (3) ア D (4) ア	・光度によって表示を変化させるプログラムを作成する。 ・作成したプログラムのコードを読み取り、分析する。	⑤課題を解決したプログラムを作成することができる。また、プログラムの動作確認及びデバッグができる。 ◇プログラム	⑥より良いプログラムとなるようプログラムの改善、修正を考慮することができる。 ◇ワークシート	⑦積極的に読み取ろうとすることができたか。 ⑧学習内容が、日常生活に活かされている技術に、どのように影響しているのか考えることができる。 ◇観察 ◇振り返りカード
5 6 7 D (3) イ D	・計測・制御に関わるプログラムを設計し、製作する。 ・製作したプログラムのコードを読み取り、分析する。			

(4) イ	る。 ・自身が製作したプログラムが日常生活でどのように使用されているのか考える。			
----------	---	--	--	--

7. 展開

(1) 本時の目標

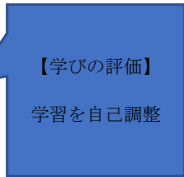
光度によって処理が変わるプログラムを作成し、その文字コードを読み取ろう。

(2) 本時の授業の展開

段階	時間	学習活動	教師の指導・支援	備考
導入	5	<p>○これまでに授業でどんなプログラムを作成してきたのか問う。</p> <p>・前時までの授業を振り返る。</p> <p>○本時の活動について伝える。</p> <p>・本時に取り組む内容をつかむ。</p> <p>・microbit を用意する。</p>	<p>・プログラムには、条件分岐型や繰り返し型等の形があることを振り返らせる。</p> <p>・センサーの値を読み取って動作させる“計測・制御”という言葉も振り返らせる。</p> <p>・本時は「明るくなったら消灯し、暗くなったら点灯させる」という目的を達成できるプログラムを作成し、そのコードを読み取っていく、という一連の流れを説明する。</p>	
展開	35	<p>【プログラムを作成する】…10分</p> <p>○プログラムを作成しよう</p> <p>・「明るさによって変化するプログラム」を作成する。</p>	<p>・「明るさによって変化するプログラム」とは「部屋が暗い時には点灯し、明るい時には消灯する」といったものである。</p> <p>・スマートフォンのバックライト、のように例を挙げ、より身近に感じさせる。</p> <p>・基本的に、生徒に考えさせる。</p>	

【行動的エンゲージメント】
見える形で現れる没頭する姿。量的に測れる。

		<p>ただし、これまで授業で取り組んできた方法で作成できること、条件やセンサー等のコマンドに関してはヒントとして出して良いこととする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・考え、作成する時間も限られてしまうため、光度については「30」と、こちらから指示を出す。 ・活動終了2分前には、正答例を示す。 <p>【コードを読み取る】…20分</p> <p>○プログラムのコードを読み取り、意味を理解しよう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・作成したプログラムのコードを読み取り、どのようになっているのかをワークシートにまとめる。 <p>【共有する】…5分</p> <p>○コードについて読み取ったことを発表しよう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・読み取ったコードについて、どのように読み取れたのかを全体に共有する。 	<p>ただし、これまで授業で取り組んできた方法で作成できること、条件やセンサー等のコマンドに関してはヒントとして出して良いこととする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・考え、作成する時間も限られてしまうため、光度については「30」と、こちらから指示を出す。 ・活動終了2分前には、正答例を示す。 <ul style="list-style-type: none"> ・作成したプログラムをコードで見て、どのコードがどのような役割をしているのか、推測させる。 ・自分が作成したものと見比べて考えるよう促す。 <ul style="list-style-type: none"> ・時間も限られているので2、3人を指名して発表させる。 ・発表を聞いている生徒には、違う意見が出た場合にはワークシートへ記入しておくよう、指示を出す。 	
まとめ	10	<p>○日常生活ではどのように使用されているのか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・本日学んだことが、日常生活ではどのように使用されているのか、先生の話聞いて確認する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「Javascript」は「ログインやカード情報の自動入力・エラーチェック」等、 「Python」は「AIを組み込んだ産業用ロボット製造」等に使用されている、といった使用例を示す。 ・どんなに優れた機械や素材を使用しても、プログラムが無ければ動かない、ということを理解させる。 	

	<p>○本時の学習を振り返る。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・本日の授業を振り返り、ワークシートに記入する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・本日の自身の取り組みはどうだったか、次回はどのように学習を進めていけば良いのかを考え、記入させる。 ・実際にコードを見て、どのように感じたのか、といったことも記入させる。 ・「本日学んだことが、日常生活のどのようなところで使用されているのか」ということについて考え、記入できるように声かけを行う。 	 <p>【学びの評価】 学習を自己調整</p>
--	--	---	--

8. 評価

- ・課題を解決したプログラムを作成することができたか。(プログラム)
- ・作成したプログラムのコードを読み取ることができたか。(ワークシート)
- ・積極的に読み取ろうとすることができたか。また、日常生活のどこに活かされているか考えることができたか(授業中の見取り)

9. ワークシート (次ページに記載)

3年技術プリント～コードを読み取ろう～

3年 組 番 氏名: _____

1. 本時の目標を書きましょう。

2. 以下の表を記入してまとめましょう。

作成したプログラムの コード	自分の読み取り	友達のかえ

3. 振り返りを書きましょう。

6. 成果と課題について

【成果について】

成果には、以下の①～④の点が挙げられる。

- ①生徒が既有知識を使って、粘り強く取り組むことができた。
- ②学習内容と自分の日常生活を関連付けて考えることができた。
- ③microbit を使用することにより、GUI から CUI へ移行できるような流れを作ることができた。
- ④Google workspace for Education を活用したことにより、授業を効率的に進めることができた。

①～③について、microbit の GUI によってプログラミングしたものを CUI にできる機能を使用することによって、どのコードがどんな命令を示しているのかが理解しやすかった。また、英語科で学んで得た知識を利用して分析することで、生徒も粘り強く取り組むことができた。以下の図 4、5 は生徒のワークシートの記述だが、このワークシートからも粘り強く取り組めたことが分かる。このようなプロセスを踏むことで、CUI でのプログラムに対する抵抗感を薄められたことが、社会に出て活躍できるようなプログラミング技術を磨く第一歩であり、大きな成果だと言える。

作成したプログラムのコード	自分の読み取り	友達の考え
<pre>def on_forever(): if input.light_level() > 30: basic.show_leds("...."</pre>	<p>“def”は確か「定義」という意味？分からない。</p> <p>“on forever”というのは「ずっと」という意味がありそうだ。</p> <p>“if”は「もし」という意味 ”input.light level() > 30”は明るさの計測・判断</p> <p>“basic.show leds”はドットを点灯・消灯する行動</p> <p>AA(アスキーアート)みたいな表示？こっちは消灯</p> <p>[.....</p>	<p>“basic”は「基本」</p> <p>#は点灯</p> <p>・は消灯</p> <p>の意見</p>

図 4

3. 振り返りを書きましょう。

コードによるプログラムを学んだ。

英語が単語で並んでいるイメージだったので、簡単なものなら読み取ることができると思った。自動ドアや自動販売機などの”もの”があったとしても、それには必ずコードが組み込まれていて、将来活用するなら、ロボットのできることや可能性を広げられるのではないかと考えた。明るさのセンサー、または暗いときに光るのを利用したプログラムは、工事の電光掲示板や道路標識に活用されていると思った。また何かを感じ取る機能(今回は明るさを感じ取るプログラムだった)は人が使おうとするときにだけ働いたりすることで、省エネにも繋がるのではないかと考えた。

図 5

【課題について】

課題には、以下の①～③の点が挙げられる。

- ①CUI によるプログラミングを実践するところまでは到達できなかった。
- ②高等学校の「情報」に関する分析をもっとするべきだった。
- ③「方略調整」を行う時間があまりなく、満足にできていなかった。

CUI でのプログラムに対する抵抗感を薄められたとはいえ、プログラミングを実践するまでには至らなかった。これを実践するためには、変数や配列等、プログラムにおける考え方を学んだ上で、Python 等のプログラミング環境についても学んでなければならない。CUI でプログラミングを実践することまで考えた際、授業計画を見直さなければならない。

《参考・引用文献》

- ・「中学校学習指導要領解説 技術・家庭科編」 文部科学省（平成20年9月）
- ・「中学校学習指導要領解説 技術・家庭科編」 文部科学省（平成29年6月）
- ・「高等学校学習指導要領解説 情報編」 文部科学省（平成30年7月）
- ・「評価規準の作成評価方法等の工夫改善のための参考資料」 国立教育政策研究所（平成23年11月）
- ・中央教育審議会答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」 文部科学省（平成28年12月21日）
- ・未来を拓く資質・能力と新しい教育課程 学事出版（2016年12月8日）
- ・小・中・高でのプログラミング教育実践 問題解決を目的とした論理的思考力の育成 日本産業技術教育学会（2019年9月）

【家庭分野】

2. これまでの研究経過

平成26年度～平成28年度 「工夫し創造する能力の深化」

1年次 「これからの生活を展望できる学習内容の工夫」(A 家族・家庭と子どもの成長)

2年次 「深く考え、生活をよりよくしようとする能力と態度の育成」(C 衣生活・住生活と自立)

3年次 「深く考え、生活をよりよくしようとする能力と態度の育成」(B 食生活と自立)

平成29年度～令和元年度 「技術・家庭科における「見方・考え方」を働かせた学び」

1年次 「主体的な学びを育成する授業の展開 ～RTDによる批判的思考を取り入れた授業～」

(D 身近な消費生活と環境)

2年次 「家庭科分野における資質・能力を育成する授業の展開

～「見方・考え方」を働かせた学びを通して～」(A 家族・家庭と子どもの成長)

3年次 「家庭科分野における資質・能力を育成する授業の展開

～「見方・考え方」を働かせた学びを通して～」(A 家族・家庭生活)

令和2年度～ 「技術・家庭科における主体的な学びを実現した授業」

1年次 「家庭分野における主体的・対話的で深い学びの実現に向けて」(B 食生活と自立)

昨年度は、「家庭分野における主体的・対話的で深い学びの実現に向けて」というテーマに基づき研究を行った。授業を公開することはできなかったが、研究会の先生方には動画視聴という形で見ていただき、オンラインでの研究会を行った。学びのプロセスモデルを組み込んだ学習過程、主体的な学びを実現する手立てについて検討された。

3. 研究の目的と手立て

本研究の目的は、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を図るための有効な手立てを検討し、工夫することである。また、無理のない指導計画を作成し、3年間を通して家庭科における資質・能力の育成を目指すものである。

手立てとして次の3つを考えている。

①生徒が学ぶ目的を自覚し、主体的に課題に取り組めるような題材を設定し、課題を設定する場面を工夫する <主体的>

生徒の興味関心を引くような題材を考えることだけではなく、生徒が自分の事として捉え、積極的に学びに向かうような、効果的な“題材を貫く課題”の設定の仕方についても検討したい。

②生活の営みに係る見方・考え方を軸とした学習を工夫する <深い学び>

見方・考え方を働かせることで、資質・能力の育成を図り、より深い学びの実現につなげたい。

③問題解決的な学習過程を設定する <主体的><対話的><深い学び>

生活や社会の中から問題を見出し、課題を設定し、解決策を構想し、計画、実践、評価・改善して、新たな課題の解決に向かうという一連の学習過程を重視した学習計画を工夫したい。

4. 技術・家庭科(家庭分野)における「見方・考え方」について

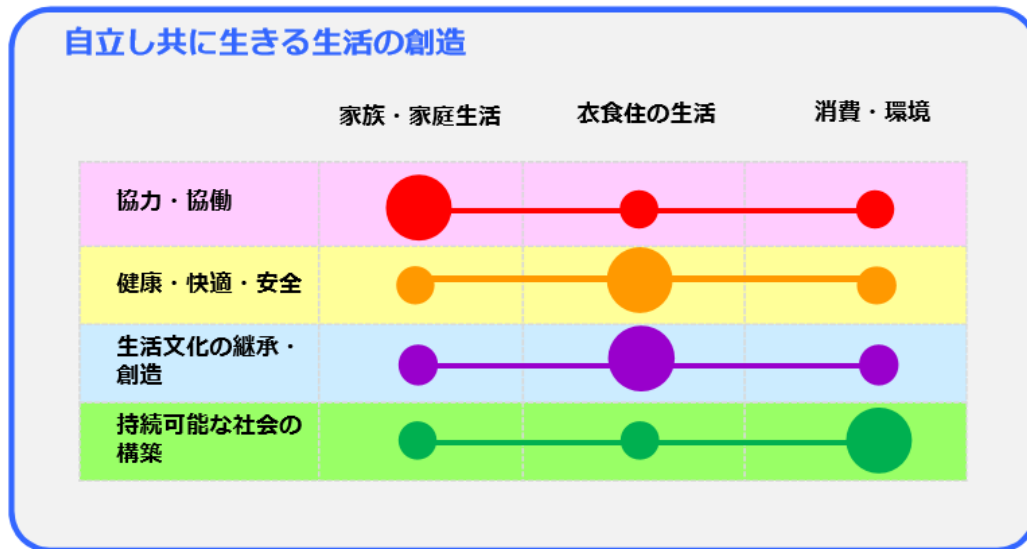
「中学校学習指導要領(平成29年告示)解説 技術・家庭科編」では、技術・家庭科(家庭分野)における「見方・考え方」を以下のように示している。

「生活の営みに係る見方・考え方」

「家族や家庭、衣食住、消費や環境などに係る生活事象を、協力・協働、健康・快適・安全、生活文化の継承・創造、持続可能な社会の構築等の視点で捉え、よりよい生活を営むために工夫すること」

○家族や家庭、衣食住、消費や環境などに係わる生活事象について、協力・協働、健康・快適・安全、生活文化の継承・創造、持続可能な社会の構築等の視点から解決すべき問題を捉え、よりよい生活の実現に向けて考察すること。

自立し共に生きる生活の創造



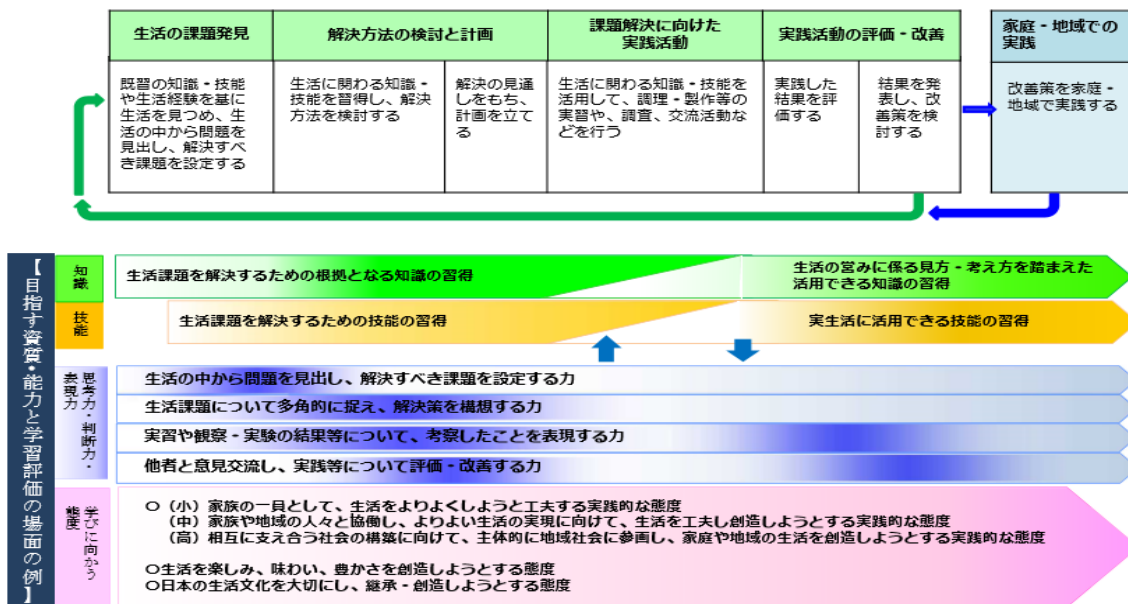
「中学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説 技術・家庭科編」では、技術・家庭科（家庭分野）において育成をめざす資質・能力を以下のように整理し、示している。

- (1) 家族・家庭の機能について理解を深め、家族・家庭、衣食住、消費や環境などについて、生活の自立に必要な基礎的な理解を図るとともに、それらに係る技能を身に付けるようにする。
- (2) 家族・家庭や地域における生活の中から問題を見いだして課題を設定し、解決策を構想し、実践を評価・改善し、考察したことを論理的に表現するなど、これからの生活を展望して課題を解決する力を養う。
- (3) 自分と家族、家庭生活と地域との関わりを考え、家族や地域の人々と協働し、よりよい生活の実現に向けて、生活を工夫し創造しようとする実践的な態度を養う。

さらに、「技術・家庭科（家庭分野）で育成することをめざす資質・能力」は『「生活の営みに係る見方・考え方」を働かせつつ、生活の中の様々な問題の中から課題を設定し、その解決を目指して解決方法を検討し、計画を立てて実践するとともに、その結果を評価・改善するという活動の中で育成できると考えられる。』とある。（以下、技術・家庭科（家庭分野）の学習過程のイメージ）

家庭科、技術・家庭(家庭分野)の学習過程のイメージ

別添 11-5



※上記に示す各学習過程は例示であり、上例に限定される64ではないこと

このように、育成することを目指す資質・能力を育むためには知識や技能を身につけるだけでなく、「生活の営みに係る見方・考え方」を働かせながら、習得した知識や技能を活用して課題の解決を図ることで学習を深めたり、よりよい生活の実現のために工夫し創造したりすることが求められている。

5. 全体研究とのかかわり

全体研究のテーマ『創造性に富んだ、未来を切り拓く生徒の育成～「主体的な学び」のプロセスモデル実現を目指して～』の実現のため、技術・家庭科での研究テーマを『技術・家庭科における主体的な学びを実現した授業』とし、家庭分野での研究テーマを『家庭分野における主体的・対話的で深い学びの実現に向けて』として研究を行っていく。

「自ら追究する」とは、自ら問を重ね、学び方を工夫しながら探究を続けることであり、新たな学習に対して意欲をもち、自己や他者、教材などとの対話を通して、学び考え続けることである。また、見方・考え方を働かせるとともに、既存の知識・技能を活用して、多面的・多角的に考えることである。そして、社会が直面する新たな課題について学び、新たな知や技術革新などを活用してよりよい解決を目指し、「未来を切り拓く」ことにつながっていくと考える。技術・家庭科（家庭分野）が目指す生徒につけたい力として、「これからの生活を展望して、家族・家庭や地域における生活の課題を解決する力を養い、家庭生活を工夫し創造しようとする実践的な態度」を育成することから、全体研究のテーマに迫りたいと考える。

(1) 創造性

生徒の実態をもとに本校で考える「創造性」とは、「自ら課題を見出し、その解決に向かって、これまでに学んだことや新たな知、技術革新を結び付けて、新たな価値を創造する資質・能力」である。

家庭分野の学習において、家族・家庭生活の多様化や消費生活の変化等に加えて、グローバル化や少子高齢社会の進展、持続可能な社会の構築等、今後の社会の急激な変化に主体的に対応する力を育成することが求められている。これらの社会の変化に関わる諸課題を解決したり、生徒自身の生活課題を解決したりするために、見方・考え方を働かせることによって身につけた資質・能力を活用する力を高めることから、創造性の育成を図りたい。

(2) 主体的な学びを実現するための手立て

家庭分野の研究に迫るための手立て①と③を基に、主体的な学びの実現について検討したい。③について、具体的には家庭科の一連の学習過程を「見付ける」「知る・深める」「見通す」「活かす・深める」「まとめる・振り返る」として、さらに附属中「主体的な学び」のプロセスモデルを組み込みたいと考えている。これを「学びの過程」として次に示す。

学習過程	生活の課題発見	解決方法の検討と計画		課題解決に向けた実践活動	実践活動の評価・改善	
学びの過程	「見付ける」	「見通す」	「知る・深める」	「活かす・深める」	「まとめる・振り返る」	
	課題を見付ける	課題解決のための学習を見通す	課題解決のために必要な知識や技能を習得する	習得した知識・技能を活用する中で、さらに深める	実践を振り返り、新たな課題を見つける	
学習活動 (プロセスモデル)	既習の知識及び技能や生活経験を基に生活を見つめ、生活の中から問題を見だし、解決すべき課題を設定する (目標設定)	解決の見通しをもち、計画を立てる (方略計画)	生活に関わる知識及び技能を習得し、解決方法を検討する (遂行・振り返り・方略調整)	生活に関わる知識及び技能を活用して、調理・製作等の実習や、調査、交流活動などを行う (遂行・振り返り・方略調整)	実践した結果を評価する (全体の振り返り)	結果を発表し、改善策を検討する (全体の振り返り)

(3) 主体的に学習に取り組む態度の見取り

附属中家庭分野「学びの過程」を実践する中で現れる「生徒の主体的な学び」を評価する。ここで行う主体的な学びの評価は、観点別評価や評定に用いる評価として扱う「主体的に学習に取り組む態度」の評価でもあるので、「粘り強い取組を行おうとする側面」と「自らの学習を調整しようとする側面」、技術・家庭科ならではの「実践しようとする態度」の3点に着目して評価を行っていく。具体的な評価の場面と評価資料について、次のように考えた。

主体的に学習に取り組む態度	評価の場面と評価資料	「おおむね満足できる」状況（B）の例
粘り強い取組を行おうとする側面	一連の「学びの過程」における生徒の取組状況	学習内容に関心をもち、あきらめずに取り組んでいる
自らの学習を調整しようとする側面	「知る・深める」「見通す」「活かす・深める」の過程での生徒の取組状況及び、ワークシートや振り返りシートの生徒の記述	授業の中でわかったことや他の生徒の意見を参考にして、自分の考えを振り返り、改善しようとしている
実践しようとする態度	「まとめる・振り返る」の過程での生徒の取組状況及び、ワークシートや振り返りシートの生徒の記述	生活を工夫し創造しようとしている

6. 題材について

(1) 題材名「衣服の選択と手入れ」 B(4)ア(ア)(イ)、イ

(2) 題材の目標

- ①衣服と社会生活との関わりが分かり、目的に応じた着用、個性を生かす着用及び衣服の適切な選択、衣服の計画的な活用の必要性、衣服の材料や状態に応じた日常着の手入れについて理解できるとともに、適切にできる。
- ②衣服の選択、材料や状態に応じた日常着の手入れの仕方について問題を見いだして課題を設定し、解決策を構想し、実践を評価・改善し、考察したことを論理的に表現するなどして課題を解決する力を身に付ける。
- ③よりよい生活の実現に向けて、衣服の選択と手入れについて、課題の解決に主体的に取り組んだり、振り返って改善したりして、生活を工夫し創造し、実践しようとする。

(3) 題材について

私たちの衣生活は、社会のグローバル化等の変化に伴い、流行のアイテムを低価格で入手するファストファッションが主流になっており、インターネットなどの通信販売を利用することで、より手軽に購入できるようになった。そのような中で、ファッションへの関心が高まるとともに、販売時には安さが強調され、一つの服を適切に手入れして長く着る、という意識を持ちにくい社会になっている。その一方で、昨今ではSDGsの考えが広がり、丁寧な暮らし方が注目され、衣生活でも着心地を重視し、質の良い物を大切に着る、という生活スタイルが見直されてきている。ワークライフバランスの考え方も様々で、できるだけ家事に時間をかけなくても良いよう、洗濯代行のサービスなども増えているが、より多くの視点から自らの衣生活について考え、実践できる力を身につけさせることは、これからの社会を創っていく生徒を育む上でも意義のあることだと言える。

本題材は学習指導要領の内容B「(4)衣服の選択と手入れ」を基に設定した。自分の衣生活に関心をもたせるとともに、衣服を適切に選択することや、状態に応じた補修などの日常着の手入れについて学習できるようにする。また、これからの衣生活をよりよくしようとする能力と態度を育て、次題材の「(5)生活を豊かにするための布を用いた製作」や日常生活での実践につなげたい。

本校の生徒は、小学校までに衣服の主な働きと快適な着方、ボタン付け及び洗濯の仕方などの衣服の手入れ、生活を豊かにするための布を用いた製作について学習してきている。生徒への事前のアンケートを実施し、気温の変化に応じて衣服を着る工夫をしている 90.1%、ボタン付けができる 62%、靴下やTシャツ、体育着などを手洗いすることができる 67.6%、目的に応じて手縫いやミシン縫いができる 59.2%という結果だった。中学校では、内容A「家族・家庭の生活」の中で、家庭の仕事について聞いたときに「洗濯をする」と答えた生徒はごく少数だった。また、事前のアンケートから、「衣服を計画的に活用し、適切に手入れをする」という項目には、できない/していないと答えた生徒が 4.2%で、大体できる/ときどきしていると答えた生徒が 47.9%であり、できると自信をもって答えた生徒と半々だった。「衣服を選ぶときの視点」についてはサイズや値段、自分に合うか、という回答が多く、手入れと答えたのは 135 人中 5 人であった。

これらのことから、衣服の選択においては、さらに多くの視点を持たせること、衣服の手入れにおいては、知識や技能の習得だけでなく、学んだ知識や技能を実生活で活かせるものにするのが重要だと考えられる。指導に当たっては、生徒に自分の生活を振り返らせながら、自分の生活の中から課題を見いださせ、課題意識をもって学習に取り組めるように工夫する。またパフォーマンス課題を設定することで、学習を生かす場面をより具体的にすることで実生活と結び付けながら学習を進められるようにし、身につけた知識や技能を生徒自身が使えるようにさせたい。学習毎に振り返りを書かせ、課題解決に向けて自らの学びを改善できるようにし、必要に応じてフィードバックをする。

(4) 題材の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
<ul style="list-style-type: none"> ・衣服と社会生活との関わりが分かり、目的に応じた着用、個性を生かす着用及び衣服の適切な選択について理解している。 ・衣服の計画的な活用の必要性、衣服の材料や状態に応じた日常着の手入れについて理解しているとともに、適切にできる。 	<p>衣服の選択、材料や状態に応じた日常着の手入れの仕方について問題を見いだして課題を設定し、解決策を構想し、実践を評価・改善し、考察したことを論理的に表現するなどして課題を解決する力を身に付けている。</p>	<p>よりよい生活の実現に向けて、衣服の選択と手入れについて、課題の解決に主体的に取り組んだり、振り返って改善したりして、生活を工夫し創造し、実践しようとしている。</p>

(5) 全体研究との関わり

ア 「主体的な学び」のプロセスモデルを実現するための手立てについて

本校の考える「主体的な学び」とは、エンゲージメントが高められた姿である。それは、生徒が粘り強く学習に取り組み、自己調整しながら学ぶ姿である。文科省が示す、主体的に学習に取り組む態度の評価の尺度である、「粘り強い取組を行おうとする側面」と「自らの学習を調整しようとする側面」、家庭科独自の「実践しようとする態度」は、エンゲージメントの3つの側面すべてで見られる。これを基に考えられた附属中「主体的な学び」のプロセスモデルと家庭科の一連の学習過程を組み合わせて「学びの過程」として、家庭分野での主体的な学びの実現を目指したい。授業では、パフォーマンス課題を設定して生徒がより自分の生活をイメージして学習に取り組めるようにすることや、ICTを活用して生徒がより主体的に学習に取り組めるようにすることを実践したい。また、学習毎の振り返りシートを活用することで、粘り強く学習に取り組み、自己調整しながら学ぶ生徒の育成をめざしていく。振り返りシートで記入させる項目は次のように設定した。

(ア) よりよい衣生活のために必要だと思うこと（自己調整学習方略を促す問い）

(イ) 課題の解決に向けて（具体的な方略調整を表出させる問い）

①自分の生活と結び付けて考えたこと、②他の人から学んだこと、③新たに知りたかったこと

(ウ) 学習全体のまとめ（主体的な学びを表出させる問い）

振り返りシートのフィードバックは、「十分満足できる」状況(A)と判断できるものには“Good!”、「おおむね満足できる」状況(B)と判断できるものには“OK”とコメントをつけるようにした。また、「努力を要する」状況(C)と判断される生徒やAやBと判断できる生徒へも、必要に応じてコ

メントをフィードバックするようにする。なお、生徒へのフィードバックは、スタンプのみの場合とできていることを認めるようなコメントをする場合とでは、後者の方が生徒の学びに有効な結果が得られる（空尾, 2019）ことから、できる限りコメントでのフィードバックを試みる。

イ 「主体的に学習に取り組む態度」の評価について

本題材では、主体的に学習に取り組む態度の評価の場面について、次のように位置付けた。

学習活動における具体的な評価規準	評価の場面と評価資料
評価規準① 粘り強い取組を行おうとする側面	一連の「学びの過程」における生徒の取組状況及び、ワークシートや振り返りシートの生徒の記述
評価規準② 自らの学習を調整しようとする側面	「知る・活かす・深める」の過程での生徒の取組状況及び、ワークシートや振り返りシートの生徒の記述
評価規準③ 実践しようとする態度	「まとめる・振り返る」の過程での生徒の取組状況及び、ワークシートや振り返りシートの生徒の記述

評価規準①～③のそれぞれの評価を総括して題材の評価とする。

評価規準	「十分満足できる」 状況（A）の例	「おおむね満足できる」 状況（B）の例	「努力を要する」 状況（C）と判断される 生徒への手立て
①衣服の選択と手入れについて、課題の解決に主体的に取り組もうとしている。	衣服の選択と手入れに関心をもち、積極的に他者と関わりながら、課題の解決にあきらめずに取り組んでいる。	衣服の選択と手入れに関心をもち、課題の解決にあきらめずに取り組んでいる。	わからない点などを教科書やワークシートを見せて内容をつかませる等、適切な指導や助言を行う。
②衣服の選択と手入れについて、課題解決に向けた一連の活動を振り返って改善しようとしている。	衣服の選択と手入れについて、授業の中でわかったことや他の生徒の意見を参考にして、課題解決に向けた一連の活動や自分の考えを振り返り、改善しようとしている。	衣服の選択と手入れについて、課題解決に向けた一連の活動や自分の考えを振り返り、改善しようとしている。	わからない点などを教科書やワークシートを見せて内容をつかませる等、適切な指導や助言を行う。
③よりよい生活の実現に向けて、衣服の選択と手入れについて工夫し創造し、実践しようとしている。	衣服の選択と手入れについて、複数の観点から工夫し創造し、実践しようとしている。	衣服の選択と手入れについて、工夫し創造し、実践しようとしている。	わからない点などを教科書やワークシートを見せて内容をつかませる等、適切な指導や助言を行う。

評価規準①②③の評価と題材の評価は次のように設定した。評価規準①②③の評価のA、B、Cを3点、2点、1点で換算し合計点を出す。

観点別評価	評価規準①②③の評価	合計点
A	AAA	9
	AAB	8
B	ABB	7
	ABC	6
	BBB	6
	BBC	5
C	BCC	4
	CCC	3

(6) 指導と評価の計画 (10 時間)

「学びの過程」	プロセスモデル	時	○学習目標 ・学習内容	評価規準・評価方法			小学校との関連
				知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度	
「見付ける」「見通す」	目標設定 方略計画	1	○衣生活について振り返り、自分の課題を見つけよう。 ・自分の衣生活を振り返り、課題を見付ける。 <div style="border: 2px solid black; padding: 5px; display: inline-block;">題材全体を貫く課題『衣服の適切な選択と手入れができるようになろう！』</div>		題材を貫く課題 ①衣服の選択と手入れについて課題を見いだして課題を設定している。 <振り返りシート>	①衣服の選択と手入れについて、課題の解決に主体的に取り組もうとしている。 <行動観察> <振り返りシート>	暖かく快適に過ごす着方，すずしく快適に過ごす着方と手入れ，ソーイングははじめの一步
			○衣服の社会生活上の働きについて理解しよう。 ・衣服の社会生活上の働きについて理解する。	①衣服と社会生活との関わりについて理解している。 <定期テスト> ②目的に応じた着用について理解している。 <定期テスト>			
「知る・深める」	遂行 振り返り						

「知る・活かす・深める」	遂行 振り返り 方略調整	2	○目的に応じた着方を踏まえ、自分らしい着方を工夫しよう。 ・TPO を考えながらも、自分らしい着方を工夫したコーディネートを考える。	③個性を生かす着用について理解している。 ＜ワークシートの記述＞		
		3	○日本の伝統的な衣文化について学び、継承することの大切さに気付こう。 ・和服と洋服の違いを考え、浴衣に触れるなかで、和服の良さについて考える。	④衣服と社会生活との関わり(和服)について理解している。 ＜定期テスト＞ ＜ワークシートの記述＞		
		4 5 6 本時	○既制服の選択と購入のために必要な情報を知り、目的に応じた選択ができるようになるろう。 ・既制服を選ぶときの視点を考える。 ・既制服の表示の種類や意味を理解する。 ・衣服の選択の方法に関する適切なアドバイスを考える。	⑤衣服の適切な選択について理解している。 ＜ワークシートの記述＞ ⑥衣服の計画的な活用の必要性について理解している。 ＜ワークシートの記述＞ ⑦既制服の表示を読み取り、適切に選択している。 ＜ワークシートの記述＞ ＜定期テスト＞	課題1 ②衣服の選択についての課題解決に向けた一連の活動について、考察したことを根拠や理由を明確にして筋道を立てて説明したり、発表したりしている。 ＜行動観察＞ ＜ワークシートの記述＞	②衣服の選択と手入れについて、課題解決に向けた一連の活動を振り返って改善しようとしている。 ＜行動観察＞ ＜振り返りシート＞
		7 8 9 10	○衣服の材料や状態に応じた手入れができるようになるろう。 ・洗濯、アイロン、ブラシかけ、補修などの衣服の手入れの方法を知る。	⑧衣服の材料や状態に応じた日常着の手入れについて理解しているとともに、適切にできる。 ＜実習の様子＞ ＜定期テスト＞	課題2 ③材料や状態に応じた日常着の手入れの仕方について問題を見いだして課題を設定し、解決策を構想し、実践を評価・改善している。 ＜実習の様子＞ ＜ワークシートの記述＞	

「まとめる・振り返る」	全体の振り返り	○衣服の適切な選択と手入れのために必要なことをまとめよう。 ・これまでの学習のまとめをする。		題材を貫く課題 ④衣服の選択と手入れについての課題解決に向けた一連の活動について、考察したことを根拠や理由を明確にして筋道を立てて説明したり、発表したりしている。 <発表内容> <振り返りシート>	③よりよい生活の実現に向けて、衣服の選択と手入れについて工夫し創造し、実践しようとしている。 <振り返りシート>	
「活かす」	家庭実践	・自分や家族の衣服の手入れをする。				

(7) 本題材における身に付けさせたい資質・能力

知識及び技能	思考力、判断力、表現力等	学びに向かう力・人間性等
・衣服と社会生活との関わり 衣服の選択と着用、計画的な活用と手入れについての基礎的な理解と技能	・家族・家庭や地域における生活の中から衣生活について問題を見だし、課題をもって考え、解決する力	・衣生活を工夫し創造しようとする実践的な態度 ・衣生活における日本の生活文化を継承しようとする態度

7. 本時の授業

- (1) 日時 令和3年10月27日(水)
- (2) 場所 家庭科室
- (3) 学習目標 既製服の選択と購入のために必要な情報を知り、目的に応じた選択ができるようになる。
- (4) 評価方法

学習活動	学習活動における具体的な評価規準	評価資料	「十分満足できる」状況(A)の例	「おおむね満足できる」状況(B)の例	「努力を要する」状況(C)と判断される生徒への手立て
衣服の選択の方法に関する適切なアドバイスを考える。	態①衣服の選択と手入れについて、課題の解決に主体的に取り組もうとしている。	観察による見取り	グループの友だちの意見を参考にしながら、課題を解決しようとする意欲的に取り組んでいる。	自分の意見を書き込み、課題解決に意欲的に取り組んでいる。	教科書 P.116, 117 を参考にさせる。
	思②衣服の選択についての課題解決に向けた一連の活動について、考察したことを根拠や理由を	観察による見取り・ワークシート	表示や品質等の選び方の視点を示すだけでなく、その理由や確認方法等をアドバイスすることができる。	表示や品質等の選び方の視点を示すことができる。	教科書 P.116～119 を参考にさせる。

	明確にして筋道を立てて説明したり、発表したりしている。		表示を読み取り、そこからわかる情報を伝えることができる。	表示を読み取り、意味を教えることができる。	教科書 P.116～119 を参考にさせる。
	知⑦既制服の表示を読み取り、適切に選択している。	ワークシート	既制服の表示を読み取り、そこからわかる情報などを判断して適切に選択できている。	既制服の表示を読み取り、適切に選択できている。	教科書 P.116, 117 を参考にさせる。
本時の学習内容のまとめをする。	態②衣服の選択と手入れについて、課題解決に向けた一連の活動を振り返って改善しようとしている。	振り返りシート	わかったこと、改善点などを振り返りシートに記入しているとともに、具体的な生活事例と結び付けて考えられている。	わかったこと、改善点などを振り返りシートに記入している。	他の生徒の良い例を提示したり、課題解決のためのアドバイスを振り返りシートにコメントしたりする。

(5) 展開 (45分) (6/10時間)

時間	学習活動	指導上の留意点	備考
導入 5	○本時の目標を確認する。	・これまでの学習を振り返り、本時の学習内容を確認する。	
展開 23	○衣服の選択の方法に関する適切なアドバイスを考えよう。 ・パフォーマンス課題に個人で取り組む。	パフォーマンス課題 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> 去年着ていた服が小さくなってしまったため、友だちのマコトさんと一緒にこれからの時季に着る日常着の買いに来ました。予算は1着買える金額です。マコトさんは、価格とデザイン、好みを基準に3着まで絞り込んだようですが、その後どう選べば良いかわからず悩んでいます。どのように選べば良いか、わかりやすくアドバイスしてあげましょう。また、表示からわかる情報も伝えてあげましょう。 </div> <ul style="list-style-type: none"> ・前時まで学んだ既制服の選択と購入のために必要な情報を振り返りながら取り組ませる。 ・ループリックを確認し、意識して取り組ませる。 	iPad
7	○衣服を選ぶ視点をもう一度考える。	<ul style="list-style-type: none"> ・4人グループで意見を共有する。 ・書いたものをお互いに共有する。 ・自分にはなかった視点やなるほどと思ったことなど、友だちの意見を取り入れさせる。 ・発表する人の資料を全体で共有する。 ・友だちの発表を聞き、さらに自分の考えを深めさせる。 	iPad
		<ul style="list-style-type: none"> ・以前の考えとどのようなことが変わったか振り返らせる。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> ○衣服を選ぶときに気をつけること。 サイズ 値段 似合うか 素材 季節 品質 着心地 洗濯方法 (多い順) ※学習前のアンケートより </div>	

まとめ 10	○本時の学習内容のまとめをする。 ・既制服を選択するときはどのようなことに注意すれば良いか発表する。 ・個人で振り返りシートを記入する。	・衣服を選ぶときの視点は、学習の始めと終わりでのどのように変わったのかを発表させる。 ・既制服を選択するときはどのようなことに気をつければよいか、まとめる。 ・振り返りシートに今日の振り返りを記入させる。	振り返りシート
-----------	--	--	---------

8. 成果と課題

(1) 「主体的な学び」のプロセスモデルを実現するための手立てについて

本研究では、附属中「主体的な学び」のプロセスモデルと家庭科の一連の学習過程を組み合わせ「学びの過程」として、家庭分野での主体的な学びの実現を目指した。授業では、パフォーマンス課題を設定したことや、ICTを活用したことで、生徒がより自分の生活をイメージして学習に取り組むことができ、既習事項について iPad を使って振り返りながら取り組む姿を見ることができた。ルーブリックを生徒に提示して学習を進めたので、それも生徒の学習意欲を高めるツールとなっていた。また、学習毎の振り返りシートを活用することで、生徒が自身の成長や変化を感じながら学習を進めることができた。

一方、課題としては、さらに適切な場面での ICT の活用について検討すること、その他の題材での「学びの過程」を活用した学習を研究していくことが挙げられる。また、ルーブリックの活用には賛否あるので、主体的な学びを実現する手立てとしてふさわしいのかということについても、今後も検討していきたい。

(2) 主体的に学習に取り組む態度の見取りについて

本研究では、「主体的に学習に取り組む態度」の評価について、「粘り強い取組を行おうとする側面」と「自らの学習を調整しようとする側面」、技術・家庭科ならではの「実践しようとする態度」の3点に着目して評価を行った。それぞれを本題材では、主体的に学習に取り組む態度①②③として位置づけている。これらの評価を合わせて題材全体の主体的に学習に取り組む態度の評価をすることになる。詳しい評価については、実際の生徒の記述を例として示す。

評価についての課題点としては、生徒の観察による見取りで評価する際には、1時間の授業の中では評価しきれないことが考えられるため、数時間の計画の中で評価するようにすることや、毎時間の振り返りシートによる評価については、教員の負担軽減のためにも、より短時間で的確に評価できるような工夫を検討していくことが挙げられる。

<本時の主体的に学習に取り組む態度①の評価>

学習活動	学習活動における具体的な評価規準	評価資料	「十分満足できる」状況(A)の例	「おおむね満足できる」状況(B)の例	「努力を要する」状況(C)と判断される生徒への手立て
衣服の選択の方法に関する適切なアドバイスを考える。	態①衣服の選択と手入れについて、課題の解決に主体的に取り組もうとしている。	観察による見取り	グループの友だちの意見を参考にしながら、課題を解決しようとする意欲的に取り組んでいる。	自分の意見を書き込み、課題解決に意欲的に取り組んでいる。	教科書 P.116,117 を参考にさせる。
<p>態① 授業中に見取りでは、ほぼ全員の生徒が B には該当していると判断した。その中でも A と評価できる生徒については、A 評価の例である「グループの友だちの意見を参考にしながら、課題を解決しようとする意欲的に取り組んでいる。」様子として、次のような記述から判断した。なお、この評価については、この題材を通して評価するように計画しているため、引き続き授業中に見取り、評価したい。</p>					

選び方のアドバイス

表示からわかる情報

試着し、肌触りや暖かさを確かめてみる

動きやすさ

cはアクリル100%だからかわきやすい

取り扱い表示をみて洗濯できるか確認する

Aは綿100%だからしなやかさがある

色落ちがある物か確認する

Bは毛100%だから暖かく蒸れにくい

アイロン可能か確認

cが1番手間がかからない
アイロン可
通常洗濯可能

サイズ確認

毛玉のできやすさを確認する

<本時の主体的に学習に取り組む態度②の評価>

本時の学習内容のまとめをする。	態②衣服の選択と手入れについて、課題解決に向けた一連の活動を振り返って改善しようとしている。	振り返りシート	わかったこと、改善点などを振り返りシートに記入しているとともに、具体的な生活事例と結び付けて考えられている。	わかったこと、改善点などを振り返りシートに記入している。	他の生徒の良い例を提示したり、課題解決のためのアドバイスを振り返りシートにコメントしたりする。
-----------------	--	---------	--	------------------------------	---

態②

Aの評価

10/27	今までの授業内容をもとによい選択をしよう	A B C D ①決めた表示を学びこれから選ぶとき、大活用させて無駄な買い物による資源をなくすようなことをなくしていきたい。	good!
-------	----------------------	---	-------

10/27	表示をききみして、手入れのしやすさで服を選ぶ	A B C D ①ふたつ、自分の服を素材で選んだことがなかったため、素材の特性を知ることができて、おもしろかったです。②また、自分の持っている服の表示もたしかめようと思いました。	good!
-------	------------------------	--	-------

Bの評価

10/27	表示もしかりみて服を決めること	A B C D ①あまり表示を見て服を決めることがなかったが、たがで他の人からたが考えもふまえてこれから生活に生かしていきたいと思えた。	ok.
-------	-----------------	---	-----

10/27	衣服の性質について理解しよう。	A B C D ①服の言色号をしっかりと区別してできた。これからは買う時に熟読したりしていきたいと思いた。具体的には?	ok.
-------	-----------------	--	-----

Cの評価へのコメント

日付	よりよい衣生活のために必要だと思うこと	課題の解決に向けて ①自分の生活と結び付けて考えたこと ②他の人から学んだこと ③新たに知りたと思ったこと 等	先生より
10/12	再利用(洋服)	A ^③ BCD 再利用など他の物にかたぎ	OK. 再利用の方法には どんなものがあるか?
10/26		A ^③ BCD セーターはかき? 家族のセーターは?	OK 今日の授業で印象的 だったことは何か?
10/27	着心地がよい服にしたい 着たいOK どの服にしたいか? 確認すれば よいかな?	A ^③ BCD セーターのデザインを提出する	OK
11/16		A ^③ BCD 自分の生活と結び付けて考えたこと	今日の学習は自分の生活と結び付けて 考えたことか?

BからAへの変化

10/26	この服にしようと思った	A ^③ BCD 「この服のしかたか、おもしろいデザイン 衣服を購入するときは何を気をつけているか?	OK!
10/27	いっしょにしようと思った	A ^③ BCD 「これは、いっしょにしようと思ったら、性格 や品質などをみこま、おもしろい服に なるものがあるか、というふうに思った。」	good!

<主体的に学習に取り組む態度③の評価>

学習のまとめ

学習活動	学習活動における具体的な評価規準	評価資料	「十分満足できる」状況(A)の例	「おおむね満足できる」状況(B)の例	「努力を要する」状況(C)と判断される生徒への手立て
学習のまとめ	態③よりよい生活の実現に向けて、衣服の選択と手入れについて工夫し創造し、実践しようとしている。	振り返りシート	衣服の選択と手入れについて、複数の観点から工夫し創造し、実践しようとしている。	衣服の選択と手入れについて、工夫し創造し、実践しようとしている。	わからない点などを教科書やワークシートを見せて内容をつかませる等、適切な指導や助言を行う。

態③

Aの評価

☆学習のまとめ☆

○課題を解決するために、努力したことは何ですか。 衣服の洗濯は着方や手入れの仕方などを調べたり、 着入たりけに、お、列王の人の意見を書いた。した。	○学びを深めるために、工夫したことは何ですか。 列王の人と対話したり、シムボードなどでまとめた ことにより、より深く学ぶことができた。また他の生徒と の意見などで考えを深めることができた。自分ごとでいふ。
○学習したことを、生活のどのような場面でどのように活かしていきたいですか。理由も書きましょう。 今日の単元で学習したことを洗たくをしたり、買物を生活に活かしたい。洗たくの表示 と気にして洗たくをしようと思える色や素材のことがあつたので、洗たくの意識に 洗たくのボタンがよくなりました。また今日は今日学習したこと活かして洗たくの つたい。	

Bの評価

☆学習のまとめ☆

○課題を解決するために、努力したことは何ですか。 その日の授業でやった衣服の事について家で生かして いたり、ボタン付けを家でやりました。	○学びを深めるために、工夫したことは何ですか。 実際に家でやってみたり、家の人に聞いてみたり した。
○学習したことを、生活のどのような場面でどのように活かしていきたいですか。理由も書きましょう。 衣服については、季節や気温に合った衣服を選んだり、T.P.Oを意識する。また、ボタンやスッパ 付けも今後にはほかにしたい。	

9. 引用・参考文献

- ・文部科学省『中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 技術・家庭科編』開隆堂，2018.
- ・国立教育政策研究所『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料中学校技術・家庭』東洋館出版社，2020.
- ・多々納道子・伊藤圭子『実践的指導力をつける家庭科教育法』大学教育出版，2018.
- ・西岡加名恵『「資質・能力」を育てるパフォーマンス評価』K G Kジャーナル，開隆堂，2019.
- ・馬越幸子『平成27年度教員長期研修（前期）各研修内容』広島県立教育センター，2015.
- ・伊藤崇達『学業達成場面における自己効力感，原因帰属，学習方略の関係』教育心理科学研究，1996.
- ・ニルソン，L.B.（編著）美馬のゆり・伊藤崇達（監訳）『学生を自己調整学習者に育てる—アクティブラーニングのその先へ』北大路書房，2017.
- ・ジョン・ハッティ（著）山森光陽（翻訳）『教育の効果：メタ分析による学力に影響を与える要因の効果の可視化』図書文化社，2018.
- ・柰尾紘太郎『ふりかえりシートが理科の自己調整学習方略に及ぼす影響』高知工科大学，2019.
- ・R元年山梨大学教育学部附属中学校研究紀要，2019.

『伝える力』を育む授業の創造

～主体性を促す対話的な学習活動の工夫～

関原 寛明

小野真理子

野沢喜満子

1 主題設定の理由

◆英語教育の動向から

平成25年12月、文部科学省は、2020年（平成32年）の東京オリンピック・パラリンピックを見据え、初等中等教育段階からグローバル化に対応した教育環境づくりを進めるため、小学校における英語教育の拡充強化、中・高等学校における英語教育の高度化など、小・中・高等学校を通じた英語教育全体の抜本的充実を図る「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」を策定した。そこには、グローバル化に対応した新たな英語教育の在り方として、小学校中学年はコミュニケーション能力の素地を養うことを目標とした活動型の外国語活動を、小学校高学年は初歩的な英語の運用能力を養う教科型の外国語教育を行い、また、中学校では授業を英語で行うことを基本とし、身近な話題についての理解や簡単な情報交換、表現ができる能力を養うこと、高等学校では授業を英語で行うとともに、言語活動を高度化させ、幅広い話題について抽象的な内容を理解できる、英語話者とある程度流暢にやり取りができる能力を養うことが示されている。小・中・高等学校を通じて一貫した学習到達目標を設定することにより、英語によるコミュニケーション能力を確実に養い、生徒の総合的な英語力向上を目指している。

それから後、第二期教育振興基本計画を踏まえ、文部科学省に設置された「英語教育の在り方に関する有識者会議」等を経て、平成27年8月に中央教育審議会教育課程企画特別部会より「論点整理」が示された。そこでは、「言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、4技能を総合的に育成すること」をねらいとした現行学習指導要領の成果と課題が挙げられている。その後、外国語ワーキンググループにおける審議を経て、平成29年3月に新学習指導要領が公示された。中学校の新学習指導要領の外国語科の目標は、「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、外国語による聞くこと、読むこと、話すこと、書くことの言語活動を通して、簡単な情報や考えなどを理解したり表現したり伝え合ったりするコミュニケーションを図る資質・能力を次の通り育成することを目指す。（1）外国語の音声や語彙、表現、文法、言語の働きなどを理解するとともに、これらの知識を、聞くこと、読むこと、話すこと、書くことによる実際のコミュニケーションにおいて活用できる技能を身につけるようにする。（2）コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、日常的な話題や社会的な話題について、外国語で簡単な情報や考えなどを理解したり、これらを活用して表現したり伝え合ったりすることができる力を養う。（3）外国語の背景にある文化に対する理解を深め、聞き手、読み手、話し手、書き手に配慮しながら、主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度を養う。」と示されており、教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせながら、「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」の三つの柱における資質・能力を育成することと整理されている。また、指標形式の目標はCEFRの枠組みを参照し、「聞くこと」、「読むこと」、「話すこと（やりとり）」、「話すこと（発表）」、「書くこと」の5つの領域において示されている。また、それらを達成するために必要となる語彙数は、現行学習指導要領に示されている1200語から、小学校で学習した語に1600～1800語程度の新語を加えた語と示されている。新学習指導要領の実施により、5つの領域をバランスよく指導し、外国語による総合的なコミュニケーション能力を養うことが求められるようになるだろう。ちなみに、現在の第二期教育振興基本計画に掲げられている生徒の英語力の成果指標は、中学校卒業段階でCEFRのA1レベル程度以上を達成した中学生の割合を50%とすることとされており、第3期教育振興基本計画においては、更なる改善・充実が図られることとなっている。以上の動向を踏まえてみるに、今後の中学校英語学習者には、ある程度の語彙力と表現力を持ち、自分の伝えたいことを積極的に相手と英語を使って相互理解を図る力が求められていることが

分かる。つまり、自己のメッセージや意図を相手に的確に「伝える」力を育み、しかも、それが他者との英語によるインタラクションを通じて達成されることが求められ、教師はそれを意図的に仕組んでいくべきであると考えられる。また、外国語によるコミュニケーションを図る資質・能力を身に付ける上で、言語活動に主体的に取り組むことが極めて重要な観点であるという旨が学習指導要領に明記されているように、単元や1単位時間に生徒の主体性を促す指導を計画していくことは、言語習得において、重要な部分を示していることは明白であると考えられる。

ここに本研究主題を決定する意味が存在すると思われるので、「伝える」と「主体性」及び「対話」を意識した「学習活動」を本研究主題のキーワードにした。

◆これまでの研究との関連から

H17～19 研究主題 『伝える力』を高める授業の工夫 ～教科書を発展的・創造的に用いた活動を通して～

本主題で研究をスタートさせてから最初の3年間は、『伝える力』を生徒の実態に合わせて具体的に6つに分類して示し、それぞれの『伝える力』の向上を目指し、研究を行った。

H20～22 研究主題 『伝える力』を高める授業の工夫 ～伝えることへのレディネスづくりを意識して～

H20～22年度までの3年間は、それまで行ってきた授業を生徒の『気づき』という視点から捉え直し、効果的な授業のあり方や指導法を探った。『伝える力』をより豊かなものにするために、伝える表現を思考するためのレディネスづくりに取り組んだ。また、『伝える力』の基礎・基本となるよう、帯プログラム活動も整備した。

H23～25 研究主題 『気づき』を促す授業の工夫

『伝える力』を伸ばすために、生徒の『気づき』という視点で学習活動や課題のあり方や教師の役割等を捉え直した。生徒が自分の伝えたいことを表現のために、伝達に対する課題や目標に対し「問い」をもつことや課題達成のために「既習事項を活用する力」が必要となる。自ら学習する生徒を育成するためには、「問い」の発見と『気づき』の繰り返しが重要であると実感した。

H26～28 研究主題 『伝える力』を育む授業の創造 ～振り返りを生かす学習過程の工夫～

『伝える力』を育む授業の創造について、「自分が表現したものを振り返ること」や「よりよい表現を模索すること」の2点から迫った。他者との交流を意図的に仕組み、深く考える授業実践を重ねたことで、①活用できる言語知識の増加、②言語機能に対する意識向上、③相手意識の高揚が成果として挙げられた。「深く考える」授業を繰り返し行っていくことで、生徒は自分の表現したものを深い思考を通して改善しようとするようになり、「振り返り」を生かした学習過程を工夫することが『伝える力』を育む授業を創ることにつながるということが明らかになった。そうした教師が意図的に仕組んだ授業やその学習過程においては、既習知識を基盤として伝達効果を考えながら自己の表現の質を考える等、本校英語科が期待する生徒の姿が見られた。しかし一方で、生徒自らが言語知識を増やそうとしたり、言いたいことと言えことのギャップを感じたときに、もっている知識を活用して伝えようとする姿勢に課題があると考えられた。

H29～R1 研究主題 『伝える力』を育む授業の創造 ～対話的な学習活動の工夫～

「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方」を働かせた学びを通して『伝える力』を育み、それを見取することを主たるねらいとし、対話的な学習活動を工夫することが効果的に資質・能力を育成することにつながるという仮説のもとに研究を進めた。『伝える力』を育む上で、「見方・考え方」を働かせた深い学びは必要不可欠であり、対話的な学習活動を充実させることが、生徒の深い思考を促し、質の高いアウトプットにつながるということが明らかとなった。指導者が、評価は指導の一環であるという認識をもち、評価を指導計画の中に位置づけて適時組み込むことで、評価を指導に生かすことが可能となり、「指導と評価の一体化」は具現化されることも示された。

◆生徒の実態から

本校には、単語や表現などの知識を豊富にもっており、大きな抵抗を感じることなくまとまった文章を書いたり、質問に対して適切に応じたりする力を備えている生徒が多くいる。また、学習に対して前向きで、授業に真面目に取り組む姿が大半の生徒において見られる。その一方で、「正しい答え」に固執し、失敗や間違えることを恐れ、英語を使って表現することに抵抗を感じている生徒も少なくないと感じられる。自由な発想でものごとを考えたり、自分から積極的に英語を使って情報を発信したりする意欲が低いとも考えられる。外国語教育においてコミュニケーション能力を養うことは目標の中核を成しており、「話すこと」や「書くこと」などの言語活動の充実と技能の育成は現行学習指導要領の課題でもあるため、改善を図る必要があると考える。また、政治や外交、歴史、文化、環境、医療、科学技術など多方面にわたる話題に興味関心を示す生徒が多いが、直面しているまたは直面するであろう課題についてはあまり関心がなく、危機意識も低い。それに伴い、興味関心に基づいて得た多くの知識を活用し、課題を解決する方策等について自ら思いを巡らす姿もあまり見られないと言える。そうした姿は、他者や社会に貢献しようとする意識が低いからであるとも考えられる。以上を踏まえた時、身近で日常的な話題だけでなく社会的な話題も含めて、様々な情報について読んだり聞いたりした上で、課題解決を踏まえた自分の考えや意見、情報等を「伝え合う」学習活動を充実させ、それに主体的に取り組もうとする姿勢を持たせるための仕組みを作ったり、表現できたこととできなかったこと及びその理由について振り返らせる経験を積み重ねたりすることで、自分たちの未来に能動的に関わろうとする姿勢や他者と協働して未来を創っていくために必要とされるコミュニケーション能力が養われていくと考える。

◆『伝える力』の定義について

ここで、本研究主題のキーワードの1つである『伝える力』について、我々にとっての意味を定義しておきたい。新学習指導要領において「簡単な情報や考えなどを理解したり表現したり伝え合ったりするコミュニケーション」が目標に掲げられており、それを支える資質・能力と『伝える力』は重なる部分が多い。コミュニケーションを実現させる際には、その原動力となる「伝えたい」という意欲や積極性、さらには、目的や方略選択につながる「いつ」「どこで」「誰に」「何を」伝えるのかという意識を持つことは重要であると考えられる。本校英語科は『伝える力』を次の通りに定義し、さらに新学習指導要領のねらいに沿う形で今年度以降の研究を進める。

本校英語科が考える『伝える力』の定義とは、「自分の考えや意見、情報等を、聞き手や読み手に配慮し、自ら進んで、目的や場面、状況に応じて身の丈に合った英語を常に更新させながら用いて、伝え合うことができる力」である。

2 研究の目的

『伝える力』を育むために、対話的な学習活動によって「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方」を働かせた学びを実現させ、「主体的な学び」を促す学習活動の在り方と評価の方法を明らかにする。

3 研究内容（全体研究との関わり）

令和2年度から全体研究では「創造性に富んだ、未来を切り拓く生徒の育成～「主体的な学び」のプロセスモデル実現を目指して～」という主題を設定し、2年計画で研究を行う。「追究」の過程に必要なとされる「自ら問い続ける力」と「創造性」の2つをキーワードに据え、それらを十分に発揮させるための「主体的な学び」の在り方と評価の方法について研究を深めていく。

本校英語科においては、『伝える力』を育むためには「見方・考え方」を働かせた学びが必要不可欠であるという、これまでの研究成果における認識のもと、昨年度までの研究で明らかとなった生徒の課題でもある、「主体性」に重きを置いた研究を進める。以下、教科研究のキーワードでもある「見方・考え方」、「対話的な学習活動」、「主体性」、「創造性」などの意味に触れながら、全体研究と教科研究の関わりについて述べる。

(1) 英語科における「見方・考え方」について

「外国語ワーキンググループにおける審議の取りまとめについて」（平成28年8月）では、「社

会や世界との関わりの中で、外国語やその背景にある文化の多様性を尊重し、外国語を聞いたり読んだりすることを通じて様々な事象等を捉え、多様な人との対話の中で、情報や考えなどを外国語で話したり書いたりして表現して伝え合うことで思考していくことが重要である。」としており、また、「このような学習過程を通じて、学ぶことの意味や自分の生活、人生や社会の在り方に主体的に結び付けたりする学びが実現されることによって、学校で学ぶ内容が、生きて働く知識や力として育まれることになる。こうした学びの過程が外国語教育の『主体的・対話的で深い学び』であり、その鍵となるものが、教科等の特質に応じた『見方・考え方』であると考えられる。」としている。さらに、「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」（平成28年12月）（以下、「中教審答申」）では、「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方」を「外国語で表現し伝え合うため、外国語やその背景にある文化を、社会や世界、他者との関わりに着目して捉え、コミュニケーションを行う目的・場面・状況等に応じて、情報や自分の考えなどを形成、整理、再構築すること」と整理している。本校英語科は、生徒に、以上に述べた外国語科としての「見方・考え方」を働かせた学習活動を積み重ねさせていくことによって『伝える力』を育むことができるという考えのもと、「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方」を次のようにとらえる。

本校英語科が考える「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方」とは、「生徒が自ら進んで英語で表現し伝え合うため、言語や文化を、自身の経験則や背景知識と照らし合わせながら、社会や世界、他者との関わりに着目して捉え、コミュニケーションを行う目的・場面・状況等に応じて自分の考えや意見、情報等を形成、整理、再構築すること」である。

我々が育みたい「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方」の具体的なものとしては、例えば、人物を紹介する活動においては、「相手との関係を踏まえ、紹介する目的に応じて人物の情報等を整理及び取舍選択し、相手の興味関心に応じて話題を膨らませるなどして文章を組み立てること」である。また、議論の活動において育みたい「見方・考え方」とは、「議論すべき話題の背景や現状などを踏まえ、さまざまな立場や捉え方があることを認めつつ、自分の考えを伝え、相手を説得するために、集めた情報を整理しながら、伝えたいことが伝わるように、時には他者の目を借りながら、試行錯誤して自分の意見をまとめていくこと」である。

「教科等の特質に応じた『見方・考え方』」は「主体的・対話的で深い学び」の鍵となっており、中教審答申では、「『主体的・対話的で深い学び』の実現」を「学校教育における質の高い学びを実現し、学習内容を深く理解し、資質・能力を身に付け、生涯にわたって能動的（アクティブ）に学び続けるようにすること」と整理している。また、「深い学び」を「習得・活用・探究という学びの過程の中で、各教科等の特質に応じた『見方・考え方』を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に想像したりすることに向かう」と整理している。以上のことから、本校英語科では、「見方・考え方」を働かせた学びを通して、「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」の三つの柱が活用・発揮されて資質・能力が伸ばされたり、新たに育まれたりすることを目指す。

上で述べたように、言語や文化を他者との関わりから捉え、目的・場面・状況等に応じて情報や自分の考えなどを伝え合う言語活動を通して、「コミュニケーションを図る資質・能力」を高める生徒を育成することは、「対話的な学習活動」を通して、『伝える力』を高める生徒を育成することと言い換えることができる。「対話的な学習活動」とは、「学習者」、「他者」、「対象世界」それぞれの間で行われる「対話」を指しており、「学習者」と「他者」、「学習者」と「対象世界」、「他者」と「対象世界」、さらに「学習者」と「学習者自身」とを結びつける授業の場面のすべてを表している。具体的には、課題提示や言語材料の導入場面、教師によるイントロダクションや教師と生徒とのインタラクション、生徒同士の会話ややりとりを含む言語活動、自己評価や他者評価、教師や他の生徒からのフィードバックなど、言語・文化の理解やそれについて自分なりの考えを形成すること、自己内省などが「対話的な学習活動」として挙げられる。言語活動について言えば、教師と生徒または生徒同士の双方向による対話といった「話すこと（やりとり）」だけでなく、聞き手や読み手への相手意識が必要となる「話すこと〔発表〕」、「書くこと」、さらには、言語材料や異文化の理解、まとまりのある英文などの読解を含む「聞くこと」や「読むこと」、5領域に及ぶと考えられる。

(2) 本校英語科における「主体性」について

これまでの研究から、「見方・考え方」を働かせた学びを実現させるための手立てには、生徒の様々な「主体性」を引き出す可能性があることを見出してきた。例えば、目標を確認し授業計画を示して見通しを持たせることで、生徒は自ら進んで活動に取り組み、課題解決に向かうようになる。また、生徒の既有知識を経験則や背景知識と照らし合わせて考えさせる教師の発問づくりによって、生徒は知的好奇心や知的欲求を原動力として未知なるものごとに意味づけをしながら学びを進める。さらに、単元を貫く問いを設定することで、生徒は社会や世界、他者と自分との関わりについて考えるようになる。また、パフォーマンス課題において目的、場面、状況を設定することで、生徒は相手意識を持って表現活動に取り組むようになる。以上のように、本校英語科では、学習に臨む姿勢や表現活動において「何を」「誰に」「どのように」伝えるか等について考えを巡らせる生徒の様子に「主体性」を見出すこととする。具体的には、「興味や関心を持って学習に取り組み、目的や目標の実現に向けて、振り返りなどを通して自己調整をしながら、粘り強く課題に取り組む姿」を「主体性」を持って学ぶ生徒の姿と捉える。

これまで、学習に前向きに取り組む姿勢を「主体性」と述べてきたが、さらに本校英語科では、「何を」伝えるかといったメッセージの部分にも「主体性」を見出したいと考える。新学習指導要領では、「社会における様々な場面で活用できる概念」として学習内容を理解したり、「変化する状況や課題に応じて主体的に活用できる技能」を身に付けたりし、「簡単な情報や考えなどを理解したり、理解したことを活用して表現したり伝えあったりする」ことを求めている。また、「様々な人々との対話の中で、目的や場面、状況等に応じて、既習のものも含めて習得した概念（知識）を相互に関連づけてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、課題を見出して解決策を考えたり、身につけた思考力を発揮させたりすること」が重要だということも示している。まとまりのある英文や生身の人間から得た情報をもとに、自分の意見や考えなどをもち、地域課題や身近な生活上の課題を解決するための最適解を見いだして、相手に伝えるまたは発信する行為に「主体性」は現れてくると考える。この際、「文章や情報を正確に読み解き、対話する力」が発揮され、既有の知識を繋ぎ合わせて地域（あるいは社会の）課題や身近な生活上の課題を自分なりに解決し、自他の人生や生活を豊かなものとしていく工夫がなされていくことが期待される。これこそ、本校英語科が生徒に育みたい「創造性」であり、『伝える力』の育成には欠かせない要素になってくるであろうと考える。

4 研究仮説

「対話的な学習活動」を積み重ねていく過程において、「主体性」を促す指導とその評価を工夫することによって、「主体的な学び」が実現し、効果的に『伝える力』を育むことができるだろうと考える。

5 研究を支える取り組みとして

○全体研究で示す「主体的な学びのプロセスモデル」を意識した単元計画及び授業実践

本校全体研究において、「主体的な学び」とは、生徒が粘り強く学習に取り組み、自己調整しながら学ぶ姿であると捉えている。これは、新学習指導要領で示されている「主体的に学習に取り組む態度」とほぼ重なる。本校英語科の昨年度までの研究においても、『伝える力』を効果的に育むためには「主体的な学び」が必要であることが確認されており、本校生徒のさらに充実させるべき課題の1つでもある。単元などの学習に見通しを持ち、形成的評価や方略調整を重ねながら、自らの学びの振り返りを行うプロセスを、学習者である生徒に経験させることを通して、「主体的な学び」の実現に迫りたい。また、指導者である教師自身が、そうしたプロセスを意識して単元をバックワードデザインし、効果的にかつ効率的に生徒の資質・能力を育成したいと考える。

○「主体性」を評価するためのワークシート開発

本校英語科では、「主体性」を持って学ぶ生徒の姿を、「興味や関心を持って学習に取り組み、目的や目標の実現に向けて、振り返りなどを通して自己調整をしながら、粘り強く課題に取り組む姿」と捉えていることを先に述べた。そうした姿は、目に見える部分とそうでない部分があると考えられる。例えば、パフォーマンス課題に臨む際、粘り強く努力する様子や自身の目標に対するズレを修正しようとする様子は、生徒の学習に取り組む姿から見とることが可能であるように思われる。一方で、学

習内容やトピックに興味関心を持っているかどうか、言語活動を楽しんで取り組んでいるかどうかについては、外見では判断しづらい。そこで、生徒の「主体性」を正しく評価するためには、生徒の内面を言語化させ、可視化する工夫が求められる。学習調整や粘り強さについても同様である。全ての授業で、全ての生徒の「主体性」を把握することは現実的ではなく、パフォーマンス課題に取り組む様子から評価するのでは不十分であるとも言える。そのため、授業ごとに自己評価に取り組みせ、言語化された「主体性」を蓄積していくことで、パフォーマンス課題の成果とともに「主体性」を適切に評価することができるようになると思う。

○「創造性」を発揮させるための学習活動の工夫

本校英語科が生徒に身につけさせたい『伝える力』には、「誰に」「どのように」伝えるかといった相手意識や配慮が重要であると同時に、「何を」伝えるかという内容も重要であることは前述した。情報化やグローバル化が飛躍的に進む未来を生きる生徒たちには、人間ならではの感性を働かせてより豊かな社会や人生を創っていくことが求められている。彼らが直面する社会の課題や問題点等を自分ごととして捉え、自分なりの考えや解決策を持った上で、相手に伝えたり発信したりする経験を重ねていくことによって、多様な人々と協働しながら新たな価値を創っていく「創造性」が育まれていくと考える。まず、生徒たちには身近な生活上の問題や課題に目を向けさせ、よりよい人間関係づくりや円滑なコミュニケーションの取り方などを学ばせたい。さらに、教科書等で取り上げられている社会的な話題について、文章や情報等の正確な読み解きを通じて、自分なりの考えや意見を持って表現活動に取り組ませる。その際、単元を通して考えを深めさせたいトピックなどに関する「単元を貫く問い」を設定したり、教科書以外の資料を提示するなどして、興味を持たせたり多角的なものの見方に触れさせたりしたい。そうすることによって、伝える内容に幅が生まれ、実際の生活や直面するであろう未来に関連したより具体的でリアルな情報の発信が促されると期待される。そこには「創造性」が発揮されるだけでなく、「主体性」も育まれていくだろうと考える。

6 指導の実際

■ 令和3年度事前研究会 授業指導案（第1学年）※令和3年度中等教育研究会において、英語科は、日頃の授業の様子を本校ホームページにて公開とし、公開授業は未実施。

※2, 3については紙面の都合上割愛いたします。

1. 単元名 Unit3 Club Activities (New Horizon English Course 1 (東京書籍))

4. 単元の指導について

(1) 全体研究との関わり（「主体的な学び」のプロセスモデル実現のための手立てについて）

①本単元における「主体的な学び」の姿

本単元において、主たる目標は「話すこと（やりとり）」である。疑問詞を用いた文を使えるようになることで、相手の様々な情報を引き出すことが可能となる。「会話」を学習活動として取り上げ、一定時間、会話を継続させることを目標とすることで、生徒の疑問詞の使用を促したい。目標達成のために「何を」相手に聞くか、「どのような」英語を使って相手に質問するか等と思いを巡らせる姿が見られることを期待する。そうした姿を本単元における「主体的な学び」の姿とする。

②本単元における「主体的に学習に取り組む態度」の評価

本単元では、パフォーマンス課題に向けて「スモールトーク」を帯活動として扱う。毎回の授業で、「スモールトーク」に2回取り組ませるが、1回目の取り組みが終わったところでフィードバックを意図的に仕組む。これは、生徒の発話をヒントに表現の幅を広げたり、会話が円滑に進まない生徒に手立てを講じたりするためである。仲間の発話や教師から与えられた表現を使って、毎回のパフォーマンスを向上させることを狙う。このサイクルは、全体研究で言うところの「遂行」「振り返り」「方略調整」にあたる。生徒はこうした学習のサイクルを経験し、パフォーマンス課題達成のための資質・能力を身につけていくと期待する。そして、2回目の「スモールトーク」を終えたところで、生徒たちには「振り返りシート」への記入をさせる。振り返りの視点を与え、自らのパフォーマンスの改善点を見つけさせたい。課題達成に向けて、何ができているのか、何が足りていないのか等について客観的に自分自身を見つめさせることで、「学習の調整」を促したい。また、記録の蓄積をすることで、課題達成までの過程を「見える化」し、どのように学習を積み重ねてき

たのかということ指導者だけでなく学習者にも把握できるようにする。

(2) 教科研究との関わり（『伝える力』を育むための主体性を促す対話的な学習活動の工夫について）

① 「『主体的な学び』のプロセスモデル」を意識した単元計画及び授業実践

生徒の主体的な学びを促すため、本単元においてもプロセスモデルを意図的に、計画に組み込む。また、一単位時間内においても、「帯活動」でプロセスモデルを意識した授業を展開する。特に、「遂行」後の「振り返り」によって、自己内省を促し、時には他者との交流を経て「方略調整」を行わせたい。具体的には、スモールトークの実践を通して、自身の課題を把握し、教師や他の生徒とのやりとりを通して解決の糸口を見出し、再度、スモールトークを実践するということである。こうしたプロセスを経験することで、課題解決のための見通しをもつことができるようになり、未知の問題にも自ら進んで取り組んでいけるようになると考える。

② 「主体性」を評価するためのワークシート開発

前述の「主体的に学習に取り組む態度」の評価と同様

③ 「創造性」を発揮させるための学習活動の工夫

多様な人々と協働しながら新たな価値を創る「創造性」を育むために、本単元においても、よりよい人間関係づくりや円滑なコミュニケーションの取り方などを学ばせたい。対話においては、相手意識や配慮が大切であるという意識を持たせるだけでなく、相手の発言を促したり、情報を引き出したりする方法について、実際の会話を通して見出せるように授業を展開する。

5. 単元の目標

日常的な話題について、疑問詞を適切に用いて相手に質問したり簡単な語句や文を用いてそれに答えたりして、相手のことをよりよく知ったり自分のことをより詳しく伝えたりすることができる。

山梨大学教育学部附属中学校版 CAN-DO リスト（新学習指導要領対応）との関連

	話すこと（やりとり）
1年生	○自分や相手のこと及び身の回りの物に関する事柄について、簡単な語句や基本的な表現を用いてその場で質問をしたり質問に答えたりして、伝え合うことができる。

6. 単元の評価および指導計画

(1) 評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
<知識> ①疑問詞 where や when, I want to ..., How many ...?を用いた文の形・意味・用法を理解している。 <技能> ②学校生活や部活動について、疑問詞 where や when, I want to ..., How many ...?などを用いて、場所や時間などの詳細な情報を即興で伝え合う技能を身につけている。	日常的な話題についてお互いのことをよりよく知るために、学校生活や部活動について、簡単な語句や文を用いて場所や時間などの詳細な情報を即興で伝え合っている。	日常的な話題についてお互いのことをよりよく知るために、学校生活や部活動について、簡単な語句や文を用いて場所や時間などの詳細な情報を即興で伝え合おうとしている。

※各観点の名称については、記述の便宜上、以下のようにする。

知識・技能：ア 思考・判断・表現：イ 主体的に学習に取り組む態度：ウ

(2) 評価方法

①スモールトークにおける振り返りシート(Google Workspace 上での Google Spreadsheet の活用)

・単元の途中に行うスモールトークの振り返りをさせることにより、パフォーマンス課題に向けて「粘り強く」学習に取り組む姿勢や「自己調整」している様子を指導者だけでなく学習者本人も把握できるようにする。クラウド上のサービスを活用し、振り返りシートをデジタル化することによって生徒教師間のやり取りを簡略化させ、提出状況を容易に確認できるようにした。また、教師から適

宜コメントを返すことにより、振り返りの観点を学習者に気づかせたり振り返りの精度を高めたりすることが可能となる。さらに、他者の振り返りを共有することで、様々な振り返りの視点の気づきを促すことができると考える。

②ルーブリックを用いたパフォーマンス評価

・パフォーマンス課題を評価するための規準として、パフォーマンスの正確さ及び適切さについてルーブリックで示すことにより、単元の学習を通して「何ができるようになる」のかということについて、また、課題をクリアするためには「何を意識して学習活動に取り組めばよい」のかということについて指導者だけでなく学習者にも把握できるようにする。さらに、パフォーマンス評価をすることによって、単元の学びを通して身に付けた資質・能力を見取ることができると考える。

(3) 指導計画 (全 10 時間)

時間	○ねらい ・学習活動	評価規準	主体的な学びのプロセスモデル	評価方法
1	○疑問詞 where の形、意味、形式を理解し、運用することができる。 ・疑問詞 where を用いたコミュニケーション活動	ア① ア②		活動の観察 振り返りスプレッドシート Google Classroom
2	○疑問詞 when の形、意味、形式を理解し、運用することができる。 ・疑問詞 when を用いたコミュニケーション活動 ・ Unit3 part1 の本文内容理解	ア① ア②		
3 本時	○既習表現を用いて、場面に応じた適切な英文を書くことができる。 ・ Unit3 part1 の本文をアレンジし、オリジナルスキットを作成する。	イ	遂行	
4	○want to ...の形、意味、形式を理解し、運用することができる。 ・ want to ...を用いたコミュニケーション活動 ・ Unit3 part2 の本文内容理解	ア① ア②		
5	○既習表現を用いて、場面に応じた適切な英文を書くことができる。 ・ Unit3 part2 の本文をアレンジし、オリジナルスキットを作成する。	イ	振り返り	
6	○How many ...?の形、意味、形式を理解し、運用することができる。 ・ How many ...?を用いたコミュニケーション活動 ・ Unit3 part3 の本文内容理解	ア① ア②		
7	○既習表現を用いて、場面に応じた適切な英文を書くことができる。 ・ Unit3 part3 の本文をアレンジし、オリジナルスキットを作成する。	イ	遂行 振り返り	
8	○場面や状況に合わせて、適切なオリジナルスキットを書くことができる。 ・ ペアで協力して、オリジナルスキットを作成する。	イ ウ	方略計画 遂行	活動の観察 オリジナルスキット
9	○場面や状況に合わせて、適切なオリジナルスキットを書くことができる。 ・ ペアで協力して、オリジナルスキットを作成する。	イ ウ	振り返り 方略調整	
10	○聞き手を意識して、オリジナルスキットを適切に音読することができる。 ・ ペアで作成したオリジナルスキットを発表し合う。	イ ウ	遂行	

後日	○適切な語句や文を用いて、相手のことをよりよく知ったり自分のことを詳しく伝えたりすることができる。 ・生徒同士またはALTとスモールトークを行う。	イ ウ	全体の振り返り	パフォーマンステスト
----	--	--------	---------	------------

オリジナルスキットについて

(1) 内容

ペアで協力し、提示された場面に合うように、2人の対話文を書く。

(2) 課題

次のようなあらすじになるように、最初と最後の文に繋がるような2人の会話を考え、対話文を作りなさい。

「友人2人が食事に行く話をしています。お互いの食べたいものを話し、駅の近くにあるレストランに行くことに決めました。」

(最初の文) It's almost noon.

(最後の文) Let's go!

(3) 評価の基準 (ルーブリック)

	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
a	誤りがなく正しく疑問詞を用いた文が書かれている。	好きな食べ物について話され、自然な流れになるような対話文が書かれている。	課題に取り組む様子を観察し、個人内評価として扱う
b	誤りがあるが、コミュニケーションに支障のない程度で疑問詞を用いた文が書かれている。	自然な流れではないが、好きな食べ物について話されている対話文が書かれている。	
c	「b」を満たしていない	「b」を満たしていない	

パフォーマンステストについて

(1) 内容

生徒同士またはALTとのスモールトークを行い、相手の好きな食べ物やお気に入りのレストランなどについて即興で伝え合う。

(2) 課題

友達またはALTと「好きな食べ物」について話しなさい。自分も相手も共通して好きな食べ物があった場合は、一緒に食事に行く約束をしなさい。

(3) 評価の基準 (ルーブリック)

	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
a	誤りがなく正しく疑問詞を用いて質問したり、食べたいものや行きたい場所について伝えたりしている。	自分の好きな食べ物について話し、相手の好きな食べ物について情報を引き出している。	自分の好きな食べ物について話し、相手の好きな食べ物について情報を引き出そうとしている。
b	誤りがあるが、コミュニケーションに支障のない程度で疑問詞を用いた文を用いて質問したり、食べたいものや行きたい場所について伝えたりしている。	相手の好きな食べ物について情報を引き出していないが、自分の好きな食べ物について話している。	相手の好きな食べ物について情報を引き出そうとしないが、自分の好きな食べ物について話そうとしている。
c	「b」を満たしていない	「b」を満たしていない	「b」を満たしていない

7. 本時の授業について

- (1) 日時： 令和3年6月15日（火）
- (2) 授業学級：第1学年3組
- (3) 場所： 第1学年3組教室
- (4) 本時のねらい： 既習表現を用いて、場面に応じた適切な英文を書くことができる。
- (5) 展開

過程	学習活動	教師による支援	主体的な学びのプロセスモデル
挨拶 (2)	あいさつをする 教師と簡単な会話をする	英語を話す雰囲気づくりをする 生徒と簡単な対話をする	
導入 (3)	本時の学習活動を確認する スモールトークの目標を確認する	スモールトークのトピックを提示する 目標を確認する ・ペアで1分30秒間、会話を継続させる ・相手から多くの情報を引き出す	【目標設定】
活動① (15)	スモールトーク（1回目）に取り組む	計時（1分30秒）をする 机間指導を行いながら、生徒が使っている表現やメジャーエラーを把握する	【遂行】
	目標を達成できたかどうかを振り返る	スモールトーク内で用いた表現について確認をする	【振り返り】
	スモールトークの中で使った表現を確認する	会話を継続させるためのポイントを確認する	【方略調整】
	スモールトーク（2回目）に取り組む	計時（1分30秒）をする 机間指導を行いながら、生徒が使っている表現やメジャーエラーを把握する	【遂行】
	振り返りを行う <Google Classroom>（ICTの活用）	情報端末の操作が円滑に行えていない生徒のサポートをする	【振り返り】
活動② (25)	本時の活動を把握する	本時の活動について説明する	【遂行】
	4人グループで協力して、Unit3 part1 本文に6文を追加して、オリジナルスキットを作る		
	Jamboardを活用し、4人グループでオリジナルスキットを作成する <Google Classroom>（ICTの活用）	情報端末の操作が円滑に行えていない生徒（グループ）のサポートをする	【遂行】
まとめ (5)	完成したオリジナルスキットを提出する	課題の提出方法について確認する 課題が終わっていないグループは、家庭学習で取り組むように伝える	

【 】内の記述は、本校の全体研究における「主体的な学びのプロセスモデル」

8. 研究授業（本単元）のまとめ

今年度の英語科では、「対話的な学習活動」を積み重ねていく過程において、「主体性」を促す指導とその評価を工夫することによって、「主体的な学び」が実現し、効果的に『伝える力』を育むことができるだろうと考え研究を進めてきた。本単元においては、スモールトークを帯活動として授業の冒頭に位置付け、対話的な学習活動として生徒たちに取り組みさせた。毎回のスモールトークの授業展開では、「『主体的な学び』のプロセスモデル」を意図的に組み込み、「遂行」した後に、「振り返り」をさせ、「方略調整」をした上で再度「遂行」させるという流れを生徒たちに経験させることで、生徒の「主体的な学び」を実現させることをねらった。また、生徒たちのスモールトークに取り組む姿（エンゲージメント）から、単元末に実施されるパフォーマンス課題を達成するために粘り強く学習する力を見取るとともに、振り返りシートの記述などから生徒が自らの学習を調整する力を指導者が把握できるようにすることも主たるねらいとした。以下に、「『主体的な学び』のプロセスモデル」を意識した単元計画及び授業展開と「主体性」の評価について、本単元の授業実践を通して考察した内容を記述する。

『主体的な学び』のプロセスモデルには、主に「目標設定・方略計画」「遂行」「振り返り」「方略調整」「全体の振り返り」があることは前に触れた。英語科の授業においては、特に新出の言語材料を使用することによって身につけていく授業展開が言語習得の過程と合致しており、有効に働くと考えられる。このプロセスモデルは、生徒の主体的な学びを実現させるための過程であるが、同時に言語習得を円滑に進めるための過程でもあることが明らかとなった。それぞれのフェーズにおいて、特筆すべきことを挙げる。

①「目標設定・方略計画」

生徒がそれぞれの単元または複数の単元で身につけた資質・能力を見とるため、英語科では単元末または複数単元末にパフォーマンス課題を生徒に課す。生徒は新たに学んだ言語材料や新出語句、連語表現などを駆使しながら、目的・場面・状況に適した英語を選択・使用し、表現活動に取り組むわけだが、本単元でも行ったように、単元の学習に入る段階で、ゴールとなるタスクに必要な表現を具体的にイメージさせたり、モデルとなる教師のパフォーマンスに触れたりすることで、生徒はある程度の見通しを持って学習に取り組むことができるようになる。見通しを持つことによって、生徒は身につけるべき知識及び技能を把握した上で学習に取り組むことができ、膨大な量の単語や表現の中からパフォーマンスに必要なものを取捨選択し、自らの判断で重点的に反復練習を行う。目標とするパフォーマンスとそれを実現させるための学習プロセスが有機的に結びつき、生徒は、ゴールに向かって自分自身を自覚しながら学習を進めることができ、主体的な学びを実現させることができた。

単元の学習のゴールをイメージし、目標設定をする際、理想とするパフォーマンスを把握することに加え、それを達成するための道筋を把握することも重要である。この方略計画を生徒自らが設計できるようになることが、授業を離れた場面でも学びを続けていく、生涯学習に最も重要になる要素であると考えられる。これは本校英語科の目指すところの一つでもある。効果的な方略計画を立てるためには、次の3点について生徒に具体的に考えさせる指導が必要となる。1つ目は、言語面である。これは、パフォーマンスにおいて、「どういう英語を使おうか」と、どのような言語を使って表現するかということについて考えることであり、前述した理想とするパフォーマンス像をイメージすることと重なる。2つ目は、内容面である。これについては、単元のスタートの段階で築くものではなく、学習を深めていく最中に築かれていくものである。単元の学習で様々な価値観や情報に触れ、思考を重ねる過程で、単元の学習を始める前と少なからず変化していく想いや考えを英語というツールを用いて生徒たちは表現していくのである。この「何を表現するか」という内容面について考える指導は非常に重要であり、単元を通して指導者は意識しなければならない点でもある。3つ目は、表現方法である。単元の学習を通じて抱いた想いや考えを伝える際、適切な語彙や表現を選択し、使用する必要がある。授業者は、学習者にこれらを身につけさせるために反復練習や表現活動を繰り返し、言語材料の定着を図る。単元の学習を通して、目的・場面・状況に合わせて、生徒が自らの判断で適切な言語材料を適切に使用できるようにするために、指導方法を常に改良していかなければならない。

目標設定・方略計画をさせる段階で、指導者が意識しなければならないことの1つに、教師の身につけさせたい力と生徒が自ら身につけたいと思う力に不一致はないかどうか、ということが挙げられる。本研究で生徒の主体性を促すことを意図する上で、生徒の学習は、教師の押し付けになってはいけない。生徒の自主的な学びにつなげるためのトレーニングとして、教師主導の学習のプロセスの経験を積ませるこ

とは必要不可欠ではあるが、生徒自らが学びたいと思う意志を後押しできる目標設定を心がけたい。本単元においては、「なぜ会話を継続させるのか?」「適切なあいづちはなぜ必要なのか?」「相手から情報を引き出すことはなぜ大切なのか?」について、指導者が明確な答えを持っていること、生徒に伝えられること、生徒が納得できること、単元の学習(時には単元の学習を越えて)で常に意識させる指導を継続させることが「主体的な学び」に繋がるのではないかと考える。

②「遂行」

これまでの英語科における学習指導では、母語による解説等を通じて新出の言語材料の構造等を十分に理解した上で、ドリル練習を経験し、自信をもって言語活動に取り組むというプロセスが主であるとされてきた。しかしながら、この流れは言語習得のプロセスと異なる部分が多く、短い学習時間で規則性を見出し、より多くの文法事項を理解しようとする、効率を重視した学習方法であった。ただし、理解することにおいては効率的ではあるものの、英語を使うことができない生徒が多く輩出されてしまうということが課題として残されてしまった。こうした学習プロセスを改善し、本校英語科では、「『主体的な学び』のプロセスモデル」と同様の言語活動の流れを実践してきた。特に、スモールトークの展開では、教師のオーラルイントロダクションや生徒とのインタラクションを通じて提示された言語材料を使って、「なんとなく」理解した状態でクラスメイトと話す「遂行」から、自らの発話や会話の内容を「振り返り」、うまくいった部分とそうでなかった部分を個人、または学級全体で確認し、改善方法や手段を獲得する「方略調整」を経て、再度クラスメイトと会話をする「遂行」を繰り返すという流れを意識した。生徒の学習に取り組む様子から、1度目よりも2度目の方が発話の質が向上したり、発声のボリュームが上がったりすることが認められた。また、1単位時間の中だけでなく、複数の授業で繰り返すことにより、自ら言葉を発しようとする積極的に会話をしようとする姿勢や指定された時間以上に会話を継続させようとする姿も見られるようになった。周囲の生徒の様子を気にしながら会話をしていた生徒が、相手の生徒に集中して表情豊かに会話をしている姿を見ることができたことも大きな成果であると感じる。何人かの生徒の振り返りの記述には、「話すことに慣れてくると、(会話の)時間が短く感じるようになった」といった内容が見られた。繰り返しの言語活動が生徒のパフォーマンスの質を向上させ、「『主体的な学び』のプロセスモデル」を踏むことで、自ら進んで話すことに取り組む生徒の様子が見られるようになった。このように、生徒の「主体性」は、生徒のパフォーマンスに取り組む姿の見取りで行われる部分が多い。ただし、パフォーマンス課題には表出しづらい生徒の粘り強さや自己調整力を見とることも忘れてはならない。特に音声でのパフォーマンスは時とともに流れてしまうものであるから、一人の教師が30名以上もの生徒の様子を把握することは不可能である。そのため、ICT機器等を活用し、録音や録画の機能を活用して授業後に評価したり、課題に取り組んだ際の自己評価等を、数値化された尺度の達成度だけでなくCan-Doリストに見られるような行動指標で「できること」「できないこと」などについて言語化して振り返らせたりするなどの工夫が必要である。パフォーマンス課題からは見取れなかった生徒の主体性を、振り返りの記述から見取る方法は、「『指導と評価の一体化』のための学習評価に関する参考資料」に示されている通りである。

③「振り返り」・「方略調整」

自身の学習の成果を振り返り、目標に対してどの程度近づいているのか等について内省させることで、次の言語活動や次時の授業での目標を持ったりするといった自己調整を促すことが主なねらいであるが、多くの生徒が本時や本時の言語活動にのみ振り返っており、単元の目標について振り返りができていないことが認められた。そのことにより、毎回の振り返りが、振り返ることで終わってしまい、単元末のパフォーマンスに向けた振り返りとはなり得なかった。つまり、生徒たちは振り返ること自身に意識が集中し、振り返りを活かして単元末の理想とするパフォーマンス実現を目指そうとすることに意識が向かなかった。これには、振り返りをする際の具体的な観点を生徒に示すことが欠けていたことが原因として考えられる。例えば、言語表現に関わって、「今回のパフォーマンスではどのような表現を使ったのか」について具体的に記述させたり、「単元末のパフォーマンスで使えそうな表現はあったか」どうかについて振り返らせたりすることが考えられる。そうした振り返りを書き溜めていくことにより、単元末のパフォーマンスで振り返りが活かされるはずである。他にも、振り返りの具体的な観点として、機能面での振り返りも考えられる。スモールトークにおいては、今回は継続させることを目標の1つとしたが、「会話を盛り上げるために意識したこと」や「用いた繋ぎ言葉」、「会話が止まってしまうブレイクダウンがあったかどうか」や「それを防ぐために工夫したこと」などを記述させることで、次のパフォーマンスで意識することが明確になるだろう。さらに、それらを共有することで個人の振り返りが学級全体の財産となり、そ

それぞれのスモールトークの質は向上していくことが予測される。自己調整のために振り返りを活用させるためには、こうした具体的な振り返りの観点を生徒に示すことが重要であると考えられる。

以上のように、「『主体的な学び』のプロセスモデル」を意図的に授業展開に位置付けて授業を行うことで、生徒の主体性を促す授業実践は可能となることが明らかとなった。ただし、このプロセスモデルを指導者だけでなく、学習者である生徒自身も意識できていたかどうかと問われると、疑わしい。生徒の主体的な学習は授業の中だけでなく、他教科においても、3年間を通じて、もっと言えば生涯に渡って行われることが期待される。生徒自身がこのプロセスの有用性を認識し、自ら生かそうとする姿勢が見られるようになることが、英語科だけでなく本校全体として目指していくべきことであると考えられる。そのためには、このプロセスを自分のものにするまで、繰り返し経験させ、継続して指導にあたっていく必要があるだろう。

生徒の主体的な学習を促す授業の実現のためには、上記のプロセスモデルだけでなく、ICT機器の活用も欠かせない。政府が進めるGIGAスクール構想の実現化に伴い、整備された一人一端末を活用することにより、生徒の主体的な学びを促進することができる大きな可能性を感じる。例えば、生徒同士の共同編集や成果物の共有などが容易になされ、時間や空間を越えて実現可能となる。日本と外国を繋いでの学習や過去の先輩たちの音声や映像に触れることだって可能である。それらは生徒にとっての良きモデルとなり、英語学習における大きなモチベーションともなり得る。また、これまで自己表現が苦手であった生徒にとっては、文字や映像で自身の英語を使って発信することができるようになることは大きな助けとなる。目立つ生徒によって進められていた授業が、全ての生徒にスポットライトを当てた授業に変革することもできる。これは、授業を進める教師の意識の変容にもつながり、生徒主体の授業展開がなされていく契機にもなるだろうと考える。

一方で、懸念されることもある。例えば、翻訳ソフトやスペルチェック機能などを活用した弊害として、身の丈に合わない英語を使用する生徒が出てしまうことや、生徒の成果物から言語の正確性を見取ることが難しくなってしまうことなどが挙げられる。これら対処としては、情報端末を用いた言語活動と情報端末を持たない言語活動を併用し、再現性を問う場面を設定することなどが考えられるが、指導者の意識改革が求められている部分なのかもしれない。端末を効果的に活用し、個別最適化された学びを実現させるために、指導書の資質・向上が問われている時代となることは間違いない。

7 研究のまとめ

今年度の研究は、2か年の研究のまとめとして意義深いものとなった。学習者、他者、対象世界をつなぐ「対話的な学習活動」を充実させ、教師の適切なフィードバックや「『主体的な学び』のプロセスモデル」を意図的に単元計画や一単位時間内に位置付けて授業実践することにより、生徒の「主体性」を促す指導が可能となり、「主体的な学び」が実現することが明らかとなった。また、ICT端末の活用により、学習指導の幅が広がり、多様化する生徒のニーズに応える授業実現の可能性にも触れることができた。予測困難な時代に生きる生徒たちに、未知なるものに対応できる力を身につけさせるためにも、自ら課題を発見し、自ら考え、自ら解決する経験を積ませる必要性を強く感じる。そうした意味でも「主体的な学び」は重要で、欠かせないものであるということを、本研究を通じて、改めて認識することができたことは大きな成果である。

今後、AIの発展に伴い、私たち人間には、より「人間らしさ」が求められるようになると思われる。規則や法則に従って判断するのではなく、コンテキストを理解し、相手の立場や個性を尊重し、場面や状況に合わせて適切に判断し、行動を起こせる人間らしさである。そうした「人間らしさ」を発揮するための「力」は人間関係の中でしか学ぶことができないものであり、AIは苦手とするものである。人間の強みを最大限に発揮し、豊かに生きる子どもたちの時代を創り上げるためにも、私たち教師は授業や教科の本質を見失うことなく、授業実践を積み重ねていかなければならない。

8 参考文献

- 文部科学省 中学校学習指導要領解説 外国語編（平成20年）
- 文部科学省 グローバル化に対応した英語教育改革実施計画（平成25年）
- 文部科学省 今後の英語教育の改善・充実方策について 報告 ～グローバル化に対応した英語教育改革の五つの提言～（平成26年）
- 文部科学省教育課程企画特別部会 論点整理（平成27年）
- 文部科学省教育課程部会 次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめ（平成28年）
- 文部科学省教育課程部会 外国語ワーキンググループにおける審議の取りまとめ（平成28年）
- 文部科学省中央教育審議会 幼稚園，小学校，中学校，高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）（平成28年）
- 文部科学省 中学校学習指導要領（平成29年）
- 文部科学省 中学校学習指導要領解説 外国語編（平成29年）
- 山梨大学教育人間科学部附属中学校 研究紀要（平成23～27年度）
- 山梨大学教育学部附属中学校 研究紀要（平成28年度～令和元年度）
- 田中博之 「アクティブ・ラーニングの学習評価」（2017，学陽書房）
- 管 正隆「中学校教育課程実践講座 外国語」（2017，ぎょうせい）
- 文部科学省教育課程部会 児童生徒の学習評価の在り方について（報告）（平成31年）
- 文部科学省 Society5.0に向けた人材育成～社会が変わる，学びが変わる～（平成30年）
- OECD THE FUTURE OF EDUCATION AND SKILLS Education2030（2018）
- 国立教育政策研究所 「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料（令和2年）

あ と が き

周知のとおり、この2年間はコロナ禍の下での教育活動を強いられ、本校もその対応に苦心の連続でした。本校が従前から積み上げてきた教育課程は、質の高い課題をとおして深く考える学びを進めながら、一方で協働して新たな知恵を創造する学びも重視してきました。学習活動には、さまざまな交流の場面を取り入れており、その質の高さが本校カリキュラムの特長でもあったわけですが、感染症流行防止のための学習活動制限によって難しくなったとは非常に残念なことでした。

このような状況下でしたが、進藤研究主任をはじめ研究推進委員会のメンバーが中心となり、「学びに向かう力」の育成を目指す「主体的な学びのプロセスモデル」を考案。その実践をとおして資質・能力としての学習意欲を高める方策を提案できたと考えます。

本校研究の特長は次の点にあると考えます。

- 令和2年4月、研究の方向性を固めるため、さまざまな文献調査を行い、櫻井茂男氏、C.M.ライゲルース氏の論文を論拠に研究を構想することができました。
- 心理学の知見を研究内容等に反映するため、山梨大学教育学部幼小発達教育講座田中健史朗准教授に指導助言者として校内研究全体に参画していただくこととしました。田中准教授は、研究の開始（課題分析、取組内容・方針の決定）から検証（アンケート実施、分析）まで、深く関わっていただき、堅実な取組の構想や進め方が実現できました。また、課題として残された点は次期研究に引き継ぐことができました。
- 本校の「学びに向かう力の育成」の研究内容や方向性、結果について助言をいただくため、国内第一人者でおられる慶応大学教職課程センター鹿毛雅治教授に2年次研究についての指導助言を依頼しました。快くお引き受けいただき、2度の授業研究会へご参加いただくとともに、公開研究会でご講演いただくことができました。

これらの成果の詳細については、本研究紀要をご覧くださいと存じます。

結びに、折に触れご指導ご助言をいただいた山梨県教育委員会、甲府市教育委員会、甲府市校長会、甲府市教育研究協議会の皆様、研究協力員をお務めくださった皆様、山梨大学の皆様に衷心より感謝申し上げます。今後とも一層のご指導ご鞭撻をお願い申し上げます。

山梨大学教育学部附属中学校
副校長 保 坂 伸

令和3年度 研究同人

志 村 結 美 学 校 長
保 坂 伸 副 校 長
梶 原 隆 一 主 幹 教 諭

国 語 科	○	木 下 諒 那 須 正 和 若 尾 大 樹	
社 会 科	○	塚 越 武 史 奥 田 陽 介 進 藤 秀 俊	(研 究 主 任)
数 学 科	○	小 松 健 一 荻 原 崇 佐 藤 治 彰	(研 究 推 進 委 員) (研 究 副 主 任)
理 科	○	竹 野 晶 弘 森 澤 貴 之 深 沢 拓 矢	(研 究 副 主 任)
音 楽 科	○	早 川 みち恵	
美 術 科	○	竹 内 ま な	
保 健 体 育 科	○	長 沼 裕 樹 野 沢 克 美 田 形 麻 巳 子	
技 術 ・ 家 庭 科	○	青 柳 敬 大 宮 崎 茜	(研 究 推 進 委 員)
英 語 科	○	関 原 寛 明 野 沢 喜 美 子 小 野 真 理 子	
養 護 教 諭		望 月 志 保 美	
図 書 室 司 書		古 屋 久 美	

※ ○印は教科主任

山梨大学教育学部附属中学校
令和3年度 研究紀要

令和4年3月14日発行

編集・発行 山梨大学教育学部附属中学校
〒400-0005 山梨県甲府市北新一丁目4-2
電話番号 055-220-8310
ファックス 055-220-8784